

京都府遺跡調査概報

第 1 冊

1. 国道 9 号線バイパス関係遺跡
 - (1)千 代 川 遺 跡
 - (2)南 金 岐 遺 跡
2. 篠 窯 跡 群
3. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
 - (1)大 内 城 跡
 - (2)後 青 寺 跡
 - (3)宮 遺 跡
4. 豊 富 谷 丘 陵 遺 跡

1 9 8 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和56年度は34件の調査を受託しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されてはいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

当調査研究センターでは、遺跡の保存のためあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は、正式の調査報告としてまとめる前に年度ごとに調査結果の概要を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎天の下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって、これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和 57 年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、
 1. 国道9号線バイパス関係遺跡
 2. 篠窯跡群
 3. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
 4. 豊富谷丘陵遺跡 を対象としたものである。
2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1 国道9号線バイパス関係遺跡				
(1) 千代川遺跡	亀岡市千代川町	昭56. 5. 14 昭57. 8.	建設省近畿地方建設局	水谷 寿克 村尾 政人 引原 茂治
(2) 南金岐遺跡	亀岡市吉川町	昭56. 9. 17 昭57. 3. 27		
2 篠 窯 跡 群	亀岡市篠町篠西長尾	昭56. 6. 14 昭57. 3. 27	日本道路公団大阪建設局	水谷 寿克 石井 清司
3 近畿自動車道関係遺跡				
(1) 大内城跡	福知山市大内平城	昭56. 5. 14 昭57. 3. 31	日本道路公団大阪建設局	辻本 和美 伊野 近富
(2) 後青寺跡	福知山市大内後青寺	昭56. 8. 18 昭56. 9. 18		
(3) 宮 遺 跡	福知山市宮	昭56. 10. 6 昭56. 12. 21		
4 豊富谷丘陵遺跡	福知山市新庄半田	昭56. 5. 6 昭57. 3. 6	日本国有鉄道大阪工務局	松井 忠春 竹原 一彦 増田 孝彦

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1	国道9号線バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要	1
2	篠窯跡群昭和56年度発掘調査概要	68
3	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要	81
4	豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要	118

挿 図 目 次

国道9号線バイパス関係遺跡

第 1 図	千代川遺跡と周辺の遺跡	4
第 2 図	千代川遺跡地区図	5
第 3 図	A-4, B-7 トレンチ断面図	6
第 4 図	千代川遺跡遺構実測図(1)	7
第 5 図	千代川遺跡遺構実測図(2)	8
第 6 図	S B0201 竪穴式住居跡実測図	9
第 7 図	S B0202, S B0206 竪穴式住居跡実測図	10
第 8 図	S B0203 竪穴式住居跡実測図	11
第 9 図	S B0204 竪穴式住居跡実測図	12
第 10 図	S B0205 掘立柱建物跡実測図	13
第 11 図	S B0207, S B0217 掘立柱建物跡実測図	15
第 12 図	S B0210, S B0212 掘立柱建物跡実測図	16
第 13 図	S B0211 掘立柱建物跡実測図	17
第 14 図	S K0208 遺構実測図	19
第 15 図	包含層出土遺物(1)石器	20
第 16 図	包含層出土遺物(2)縄文式土器	22
第 17 図	B地区包含層出土遺物(3)弥生式土器	24
第 18 図	B地区包含層出土遺物(4) (須恵器)	26
第 19 図	B地区包含層出土遺物(5) (奈良時代以降の土器類)	28
第 20 図	A地区包含層 S B0201, S B0203, S K0208出土遺物	30
第 21 図	須恵器拓影	31
第 22 図	S B0202, S B0206 出土遺物実測図	32
第 23 図	S B0202 出土遺物実測図	33
第 24 図	S B0202 出土遺物実測図	35
第 25 図	S B0202 出土遺物実測図	36
第 26 図	S B0204 出土遺物実測図	38

第 27 図	S B0202, 0204 付近出土遺物実測図	39
第 28 図	南金岐遺跡調査位置図	42
第 29 図	南金岐遺跡地区図	43
第 30 図	A・B・C トレンチ断面図	45
第 31 図	J・H・F・E トレンチ断面図	46
第 32 図	G・I・D トレンチ断面図	47
第 33 図	溝状遺構実測図	49
第 34 図	方形周溝墓	50
第 35 図	土器実測図	52
篠窯跡群		
第 36 図	亀岡盆地主要遺跡分布図	71
第 37 図	篠・西長尾窯跡遺構配置図	73
第 38 図	土器実測図	78
近畿自動車道舞鶴線関係遺跡		
第 39 図	近畿自動車道舞鶴線内遺跡分布図	82
第 40 図	周辺遺跡分布図	84
第 41 図	北部土塁・空堀断面図 (K ライン 2.5m 東)	86
第 42 図	大内城跡周辺図	87
第 43 図	遺構平面図 (略測)	88
第 44 図	出土遺物実測図	92
第 45 図	周辺地形図	95
第 46 図	調査地位置図	96
第 47 図	調査地 (西地区) 土層断面図	97
第 48 図	景德元宝	98
第 49 図	第 1 主体部	99
第 50 図	第 2 主体部	99
第 51 図	後青寺古墳出土遺物	101
第 52 図	宮遺跡調査地位置図	103
第 53 図	1 号住居跡平面図	104
第 54 図	D 地点南部遺構図	105
第 55 図	弥生溝土層断面図	105

第 56 図	調査地地形図	107
第 57 図	1号墓外形図	109
第 58 図	宮遺跡中世墓の各種埋葬施設	111
第 59 図	礎石建物	113
第 60 図	中世墳墓出土遺物	115

豊富谷丘陵遺跡

第 61 図	調査地位置図（中央斜線部）	119
第 62 図	豊富谷丘陵遺跡分布図	121
第 63 図	各古墳の平面測量図及び献納土器群出土状況図	125
第 64 図	大道寺跡平面略測図	126
第 65 図	大道寺跡 6 号墓実測図	127
第 66 図	大道寺跡経塚実測図	128
第 67 図	出土遺物(1)	130
第 68 図	出土遺物(2)	131

付 表 目 次

国道 9 号線バイパス関係遺跡

付 表 1	石器一覧表	21
付 表 2	千代川遺跡出土遺物観察表	55

篠窯跡群

付 表 3	西長尾窯跡窯体一覧表	70
-------	------------	----

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

付 表 4	近畿自動車道舞鶴線関連遺跡一覧	81
付 表 5	中世墳墓出土土器法量表	114

豊富谷丘陵遺跡

付 表 6	調査結果一覧表	123
-------	---------	-----

図 版 目 次

国道9号線バイパス関係遺跡

- 図版第1 (1)千代川遺跡航空写真(南東から) (2)千代川遺跡航空写真(東から)
- 図版第2 千代川遺跡航空写真
- 図版第3 (1)千代川遺跡調査前遠景(南から) (2)千代川遺跡全景(南から)
- 図版第4 (1)千代川遺跡全景(北から) (2)千代川遺跡近景(北から)
- 図版第5 (1)B J 38~B M38地区土器出土状況 (2)B J 38~B M38地区土器出土状況
- 図版第6 (1)B J 38~B M38地区土器出土状況 (2)B J 38~B M38地区土器出土状況
- 図版第7 (1)S B 0201 竪穴式住居跡(南西から)
(2)S B 0201 竪穴式住居跡(北から)
- 図版第8 (1)S B 0201, S B 0205 竪穴式住居跡全景(西から)
(2)S K 0214 土壌, S B 0205 建物跡
- 図版第9 (1)S B 0205 掘立柱建物跡(西から)
(2)S K 0208 土壌土器出土状況(南から)
- 図版第10 (1)S K 0208 土壌近景 (2)S K 0208 土壌土器出土状況
- 図版第11 (1)S B 0202, S B 0206 竪穴式住居跡(南東から)
(2)S B 0202, S B 0206 竪穴式住居跡(北から)
- 図版第12 (1)S B 0202 竪穴式住居跡土器出土状況
(2)S B 0206 竪穴式住居跡土器出土状況
- 図版第13 (1)S B 0206 竪穴式住居跡土器出土状況
(2)S B 0206 竪穴式住居跡土器出土状況
- 図版第14 (1)S B 0202, S B 0206 竪穴式住居跡(西から)
(2)S B 0203 竪穴式住居跡(南西から)
- 図版第15 (1)S B 0203 竪穴式住居跡全景(南から)
(2)S B 0203 竪穴式住居跡全景(北東から)
- 図版第16 (1)S B 0203 竪穴式住居跡(北から) (2)S B 0204 竪穴式住居跡(西から)
- 図版第17 (1)S B 0204 竪穴式住居跡カマド跡付近(南から)
(2)S B 0204 竪穴式住居跡カマド跡(西から)
- 図版第18 (1)S D 0218 溝状遺構(南から) (2)S D 0218 溝状遺構(北から)

- 図版第19 千代川遺跡出土遺物(1)
- 図版第20 (1)千代川遺跡出土遺物(2) (縄文式土器・弥生式土器)
(2)千代川遺跡出土遺物(3) (須恵器)
- 図版第21 千代川遺跡出土遺物(4)
- 図版第22 千代川遺跡出土遺物(5)
- 図版第23 千代川遺跡出土遺物(6)
- 図版第24 (1)南金岐遺跡付近航空写真 (南東から) (2)南金岐遺跡発掘区域航空写真
- 図版第25 (1)亀岡盆地条里制航空写真 (2)南金岐遺跡全景 (北西から)
- 図版第26 (1)4 トレンチ西壁断面 (2)5 トレンチ西壁断面
- 図版第27 (1)南金岐遺跡調査地全景 (2)方形周溝墓3号北側溝 (南から)
- 図版第28 (1)方形周溝墓3号 (南から) (2)方形周溝墓3号 (東から)
- 図版第29 (1)方形周溝墓1号 (北西から) (2)方形周溝墓全景 (北から)
- 図版第30 (1)S D0102・0103・0104 溝 (南から) (2)S D0103・0104 溝 (北から)
- 図版第31 (1)S D0104 溝南肩土器出土状況 (2)A地区土器出土状況
- 図版第32 (1)S D0110溝 (南から) (2)S D0110 溝 (東から)
- 図版第33 (1)S D0104 溝 (南から) (2)S D0103 溝 (北西から)
- 図版第34 (1)S D0104 溝 (北から) (2)S D0103 溝 (北西から)
- 図版第35 (1)S D0104 溝 (南から) (2)S D0104 溝北壁断面 (南から)
- 図版第36 (1)S D0103 溝 (東から) (2)S D0103 溝内流木出土状況 (東から)
- 図版第37 (1)S D0103 溝 (東から) (2)S D0103 溝内流木出土状況 (北から)
- 図版第38 (1)S D0103 溝内遺物出土状況 (2)S D0103 溝内遺物出土状況
- 図版第39 (1)S D0103 溝内遺物出土状況 (2)S D0103 溝内遺物出土状況
- 図版第40 (1)S D0103 溝北肩遺物出土状況 (2)S D0103 溝北肩遺物出土状況
- 図版第41 (1)S D0103 溝北肩遺物出土状況 (2)S D0103 溝東肩遺物出土状況
- 図版第42 (1)S D0103 溝北肩遺物出土状況 (2)S D0103 溝北肩遺物出土状況

篠・窯跡群

- 図版第43 (1)西長尾窯跡全景 (北西から) (2)西長尾窯跡全景 (北西から)
- 図版第44 (1)西長尾1・4号窯調査前全景 (北西から)
(2)西長尾3号窯調査前全景 (南西から)
- 図版第45 (1)西長尾1・2・4号窯完掘状態 (西から)
(2)西長尾1・4号窯完掘状態 (西から)

図版第46 (1)西長尾3号窯完掘状態(西から) (2)西長尾3号窯完掘状態(西から)

図版第47 (1)西長尾5・6号窯完掘状態(西から)

(2)西長尾5・6号窯完掘状態(東から)

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

図版第48 (1)大内集落と調査地(北西から) (2)調査地全景(東から)

図版第49 (1)調査地北斜面(北から) (2)トレンチ設定状態(北から)

図版第50 (1)帯ぐるわ発掘前(東から) (2)帯ぐるわ発掘後(東から)

図版第51 (1)井戸1発掘前(北から) (2)井戸1発掘後(南から)

図版第52 (1)調査地北部発掘状態(東南から) (2)土塁・空堀断面(西南から)

図版第53 (1)建物6検出状態(西から) (2)建物3・溝1検出状態(北から)

図版第54 (1)井戸1・集石遺構検出状態(北西から) (2)集石遺構検出状態(北から)

図版第55 (1)土壇1土器出土状態(東から) (2)土壇1土器出土状態(西から)

図版第56 (1)輸入陶磁器(第2期整地層内) (2)輸入陶磁器(第2期整地層内)

図版第57 (1)瓦器椀、土師器大皿・小皿 (2)古瀬戸鉄釉瓶子片

図版第58 (1)調査地近景と南辺の土塁(南から) (2)西地区調査前状況(北から)

図版第59 (1)西地区調査地全景(北から) (2)西地区調査地全景(南から)

図版第60 (1)南辺土塁調査状況(東から) (2)南辺土塁調査状況(南から)

図版第61 (1)東辺土塁調査状況(東から) (2)東辺土塁断面

図版第62 (1)調査地全景(西から) (2)主体部上面検出状況(西から)

図版第63 (1)主体部検出状況(西から) (2)第1主体部(東から)

図版第64 出土遺物

図版第65 (1)調査地遠景(北西から) (2)調査地近景(北から)

図版第66 (1)B地点調査状況(東から) (2)C地点調査状況(南東から)

図版第67 (1)D地点調査状況(南から) (2)D地点南側遺構検出状況(北西から)

図版第68 (1)1号住居跡(南から) (2)2号住居跡と弥生溝(北東から)

図版第69 (1)D地点弥生溝土層断面 (2)同 溝南端部検出状況

図版第70 (1)D地点弥生土壇(南から) (2)同 完掘状況(南から)

図版第71 (1)調査地全景(南から) (2)試掘調査の状況(南西から)

図版第72 (1)礎石建物跡全景(東から) (2)中世墳墓群(西から)

図版第73 (1)1号墓全景(西から) (2)同 埋葬施設(西から)

図版第74 (1)1号墓北側土壇上面検出状況(東から) (2)同 完掘状況(西から)

図版第75 (1)石組遺構検出状況(西から) (2)同 石組内部(西から)

図版第76 (1)2号墓全景(東から) (2)同 骨蔵器埋設状況(東から)

図版第77 (1)3号墓全景(西から) (2)同 埋葬土壌(北から)
(3)同 完掘状況(南から)

図版第78 (1)1号墓出土遺物 (2)3号墓出土遺物

豊富谷丘陵遺跡

図版第79 (1)遺跡全景航空写真(東南方より) (2)Ⅱ区航空写真(東南方より)

図版第80 (1)Ⅱ区遺跡遠景(西方より) (2)狸谷17号墳(北東方より)

図版第81 (1)狸谷3号墳(南西方より) (2)狸谷17号墳鏡出土状況(北方より)
(3)大道寺跡No.1遺物出土状況(北西方より)

図版第82 (1)大道寺跡A地区全景(東方より) (2)大道寺跡B地区全景(東方より)

図版第83 (1)大道寺跡3号墓(北方より) (2)大道寺跡6号墓(北西方より)

図版第84 (1)大道寺跡経塚全景(北方より)
(2)大道寺跡経塚経筒埋納状況(北方より)

図版第85 出土遺物(1)

図版第86 出土遺物(2)

図版第87 出土遺物(3)

図版第88 出土遺物(4)

1. 国道9号バイパス関係遺跡 昭和56年度発掘調査概要

はじめに

国道9号バイパスに伴う発掘調査は、昭和47年8月、建設省京都国道工事事務所より京都府教育委員会に国道建設予定帯内における遺跡の分布状況の調査が依頼され、その結果、瓜生野古墳（園部町）・善願寺遺跡（園部町）・小谷古墳群（八木町）・拝田古墳群（亀岡市）・小金岐古墳群（亀岡市）・千代川遺跡（亀岡市）・条里遺構（亀岡市）・篠窯跡群（亀岡市）の以上8遺跡が調査の対象となった。昭和49年2月、建設省京都国道工事事務所より「一般国道9号改築事業の整備計画」が発表され、京都市右京区大枝沓掛町から京都府船井郡丹波町須知に至る延長32kmに亘る整備計画が進められることとなり、建設省の委託を受けて京都府教育委員会が調査主体となって、昭和50年度より本格的な調査が実施されることになった。昨年度までに実施された調査は、善願寺遺跡^(注1)試掘調査、小谷2号墳^(注1)発掘調査、拝田8号・9号・10号墳^(注2)発掘調査、小金岐古墳群^(注2)発掘調査、千代川遺跡^(注3)発掘調査、篠黒岩・前山・小柳・芦原窯跡等の発掘調査及び篠町の予定路線内の全域に亘る試掘調査である。また昭和55年度には、園部町で新たに見つかった曾我谷遺跡^(注3)の発掘調査も行われた。なお昭和55年度より、篠窯跡群の位置する老ノ坂峠から曾我部風ノ口に至る延長約10kmの区間を日本道路公団が施行することとなり、この年度より日本道路公団と京都府教育委員会の協議のうで調査が進められることになった。

さて、今年度より国道9号バイパスに伴う発掘調査を京都府教育委員会より引き継いで当調査研究センターが実施することとなり、再三に亘る引き継ぎ業務を行ったのち本年度の調査に入った。

本年度の調査は、昨年度調査に引き続き、弥生式土器片が広範囲に散布し、丹波国府跡の西南部に推定される亀岡市千代川町北ノ庄に所在する千代川遺跡の発掘調査である。文化財保護法第98条第2項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査届出書」を昭和56年4月30日付けで文化庁長官あて提出し、同年5月14日より現地調査を開始した。現地調査は後述する調査成果を得て、同年7月28日に現地説明会を開催し、7月31日に一時調査を終了した。また本年度一貫して実施する予定であった千代川遺跡の発掘調査は、建設省京都国道工事事務所の事情により急拠条里遺構の発掘調査に変更され、「埋蔵文化財発掘調査届出書」を昭和56年9月8日付けで文化庁長官あて提出し、同年9月17日から12月10日までと、昭和57年2月2日

から3月27日までの二期に分けて現地調査を行った。発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査員水谷寿克・村尾政人・引原茂治・久保田健士が担当して行った。

調査協力者 京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府南丹教育局・亀岡市教育委員会・
亀岡市大型プロジェクト対策室・亀岡市青少年センター・建設省近畿地方
建設局・金下組

調査補助員 岡崎 研一・小仲 敏之・由良 実・山口 文吾・才本 好孝
平本 哲・広川 徹也・山本 喜昭・上畑 右一・沖 洋介
足立 正・平本 浩樹・松元 達也・斉藤 雅彦・小早川泰章
中沢 勝・河原 昭夫・榎 康夫・浦芝 久照・沢 裕俊
松村 俊成・中井 秀樹・小仲 幹夫・田中 暢一

調査整理員 岡崎 法子・山本 弥生・日下部博美・田宮 睦子・兵頭 真千
加藤百合子・末広 春美・物部留美子・中野あけみ・斉田 英子
酒井 信子・吉岡みよ子・石原 俊子

調査作業員 中西 宏・八木 初治・八木小太郎・八木 敏夫・松井喜代治
井上 久雄・佐野 和夫・田中 格一・谷沢 種市・中西 力松
真継幸太郎・山田 貞次・八木 感一・岩本 蔵一・湯浅隆太郎
柿田 秀雄・山内 茂市・佐野 利器

なお、この概報の作成にあたっては、上述の調査補助員・調査整理員・調査作業員として
だけではなく調査事務員としても協力をいただいた中西 宏氏等の方々のもとに、「はじめ
に」を水谷が、出土遺物の須恵器の項を引原が、他の各項を村尾が執筆した。

(水谷 寿克)

(1) 千代川遺跡

1. 位置と環境

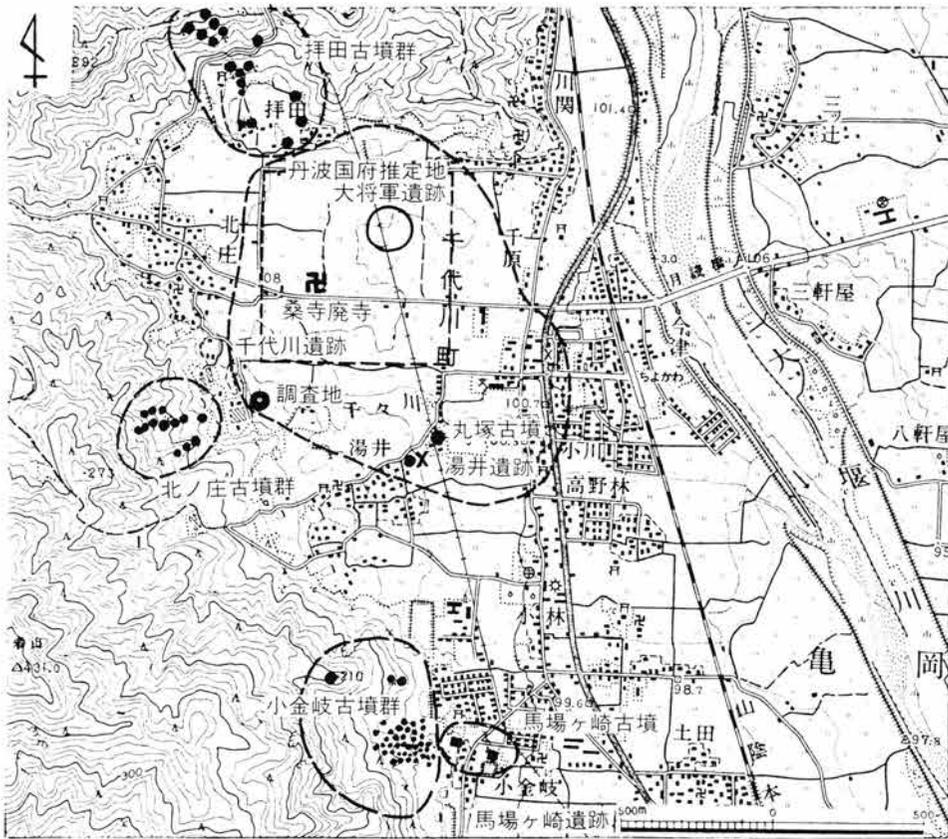
亀岡盆地は、口丹波地方の最南部に位置し、盆地中央を大堰川が南東方向へ流れ、盆地東端の北西から南東に続く山地と平地の境界には亀岡断層が明瞭に残っている。調査地が位置する盆地西端部ではこの亀岡断層があまり見られない。また、大堰川兩岸平野部には条里制地割が残る水田地帯が展開しており、水田の畦筋にはハゼやハンノキなどはさ木がみられ、亀岡盆地特有の景観を呈している。

調査地は、南北約80m、東西約100mの広がりをもち西から東へ向かって緩やかに傾斜する舌状台地上にあり、北東に開ける盆地を一望することができる。

周辺の歴史的環境は、もっとも古いもので縄文時代後期の三日市遺跡^(注1)があり、他に小金岐古墳群下層と墳丘より磨製石斧3点^(注2)、拝田8号墳の墳丘から打製石鏃1点、石錘1点、磨製石斧^(注3)1点が出土している。また今回の調査で縄文式土器片と石器類が数点出土している。弥生時代の遺跡は、現在の亀岡市内に25か所確認されている。そのほとんどが弥生時代後期と考えられ、千代川町周辺の大將軍遺跡・湯井遺跡・高宮遺跡・馬ヶ崎遺跡^(注4)・千代川遺跡・南金岐遺跡も弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡である。今回の発掘調査においては弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡が確認できたが、これに類するものは当地方では確認されておらず、御上人林廃寺第3・4次調査により弥生時代後期の竪穴式住居跡1棟・古墳時代後期の竪穴式住居跡4棟が検出された^(注5)だけである。住居跡以外では、昭和52年度に防火水槽建設に伴って立合調査を行った馬場ヶ崎遺跡^(注4)で弥生時代後期の溝状遺構が検出された。また、9号バイパス南金岐遺跡発掘調査において、弥生時代中期の方形周溝墓3基や弥生時代後期の溝から多量の土器が出土している。さらにこの南金岐遺跡の西山に位置する蕨田野町鹿谷東谷山頂から最近、弥生時代後期の壺が1点完形で出土している。出土地点が標高340mの高所で、約2.5mの巨石を2個と約1mの石を数個組んである下位より出土していることから、おそらく馬場ヶ崎遺跡や南金岐遺跡だけでなく、亀岡盆地を一望した祭祀的な遺跡と考えられる。

古墳時代になると、千代川遺跡より眺むところにある^(注3,6) 拝田古墳群や、大堰川東岸平野の千歳にある全長80mの前方後円墳である千歳車塚古墳や野条古墳、方墳の旭町天神塚古墳・馬路町坊主塚古墳^(注7)・篠町滝ノ花塚古墳・王子三ツ塚古墳・樹塚古墳・浄法寺古墳・大井町馬場ヶ崎1・2号墳、湯井の平地にある丸塚・西丸塚古墳などがある。これらの古墳では一辺約30m、高さ3～6mの方墳が2基並んで平地に築かれていることが特徴的である。

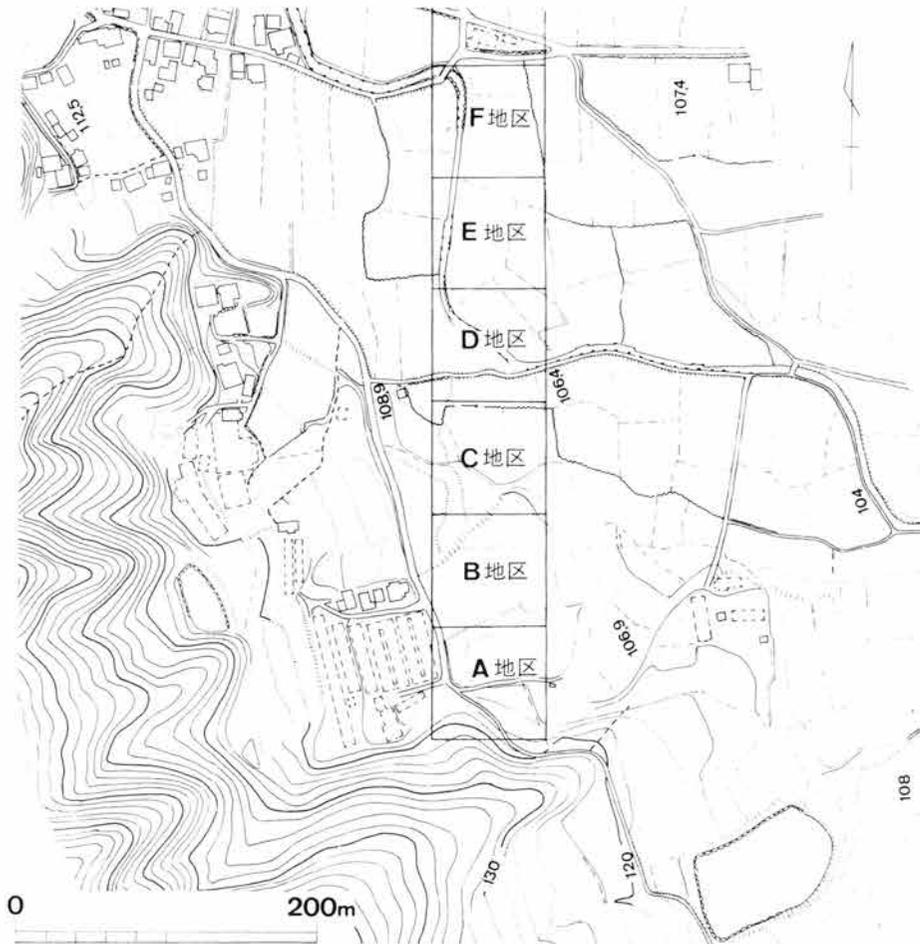
古墳時代後期になると亀岡盆地の丘陵上に多い所で100基近くの群集墳が築かれる。千代



第1図 千代川遺跡と周辺の遺跡

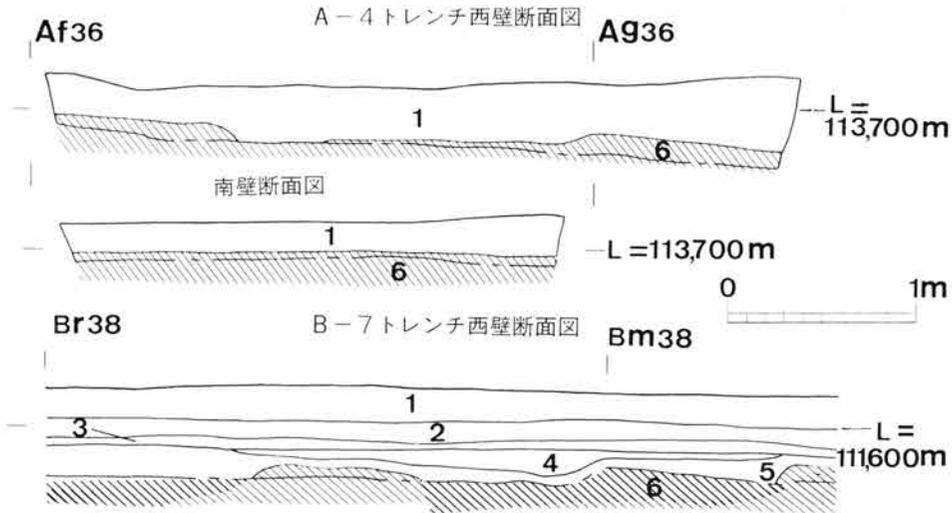
川岡周辺では八木町の小谷古墳群・内山古墳群・大法寺古墳群・上川関古墳群・小金岐古墳群・拝田古墳群・北ノ庄古墳群などがあり、特に著名なものに拝田9号墳、10号墳、16号墳がある。これらの古墳は昭和52年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査により次のようなことが明らかになっている。9号墳は石障の施設を持つ横穴式石室の円墳であり、8号墳と10号墳に隣接している。10号墳は径20mの円墳で割竹形木棺を主体とし、内行花文鏡・勾玉・白玉・ガラス製小玉・直刀・鉄剣・刀子・鉄鏃などが出土している。16号墳は、当地方では特殊な石室構造の石棚を持つ千代川町付近唯一の前方後円墳である。今回の調査地に最も近い古墳群としては北ノ庄古墳群がある。この古墳群は調査地の西山麓(250m)に近接しており、14基を数える円墳である。

奈良時代になると河原林町にある丹波国分寺や御上人林廃寺^(注8)・篠町観音芝廃寺^(注9)・曾我部町寺村与能廃寺・千代川町桑寺廃寺がある。また亀岡盆地一帯の平野に律令国家の基礎になっ



第2図 千代川遺跡地区図

たとえられる^(注10)条里制が及ぼされ、条里地割に一致する方6町の丹波国府推定地がある。^(注11)丹波国府推定地は他に屋賀説（船井郡八木町大字北屋賀）、篠説（亀岡市篠町）、案察使説（亀岡市保津町案察使）、保津説（亀岡市保津町）、三宅説（亀岡市三宅町）、曾我部説（亀岡市曾我部町）、宇津根説（亀岡市宇津根町）、国分説（亀岡市国分町）、千歳説（亀岡市千歳町^(注10)）などがある。中でも現在もっとも有力と考えられるのは千代川説と屋賀説である。またこの奈良・平安時代には篠町の丘陵一帯に須恵器や瓦などを大量生産した窯跡が多数分布している。^(注12)口丹波地方は、平安時代以後、平安京に接する国として重要な位置を占めていたことから中世・近世村落や山城に関しても注目すべきところである。



第3図 A-4, B-7 トレンチ断面図

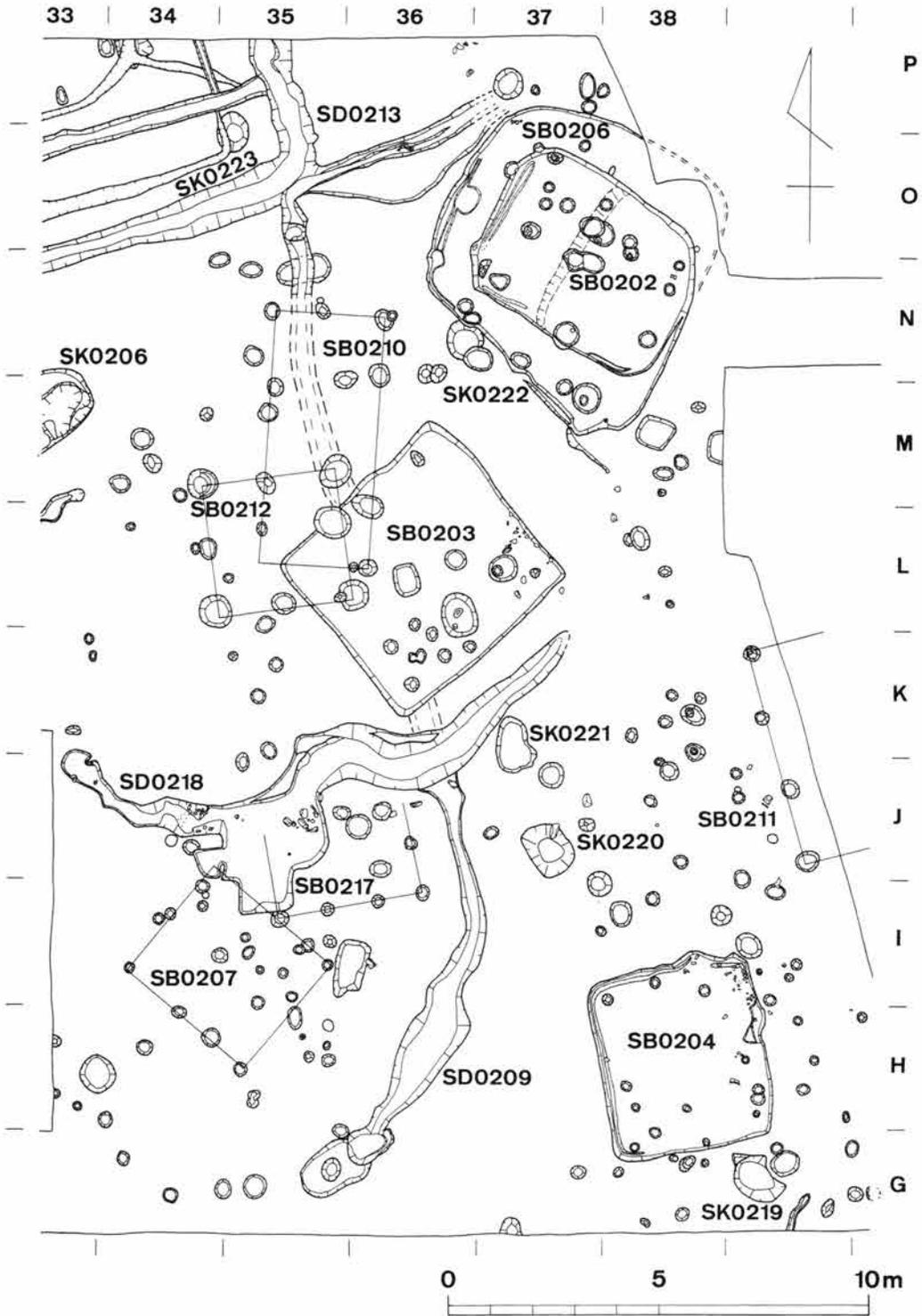
1. 耕作土 2. 茶褐色土層 3. 暗青灰色砂層 4. 暗茶灰色砂層 4. 暗茶褐色土層
5. 黒褐色粘質土層 6. 黄褐色粗砂層 (地山)

2. 調査経過

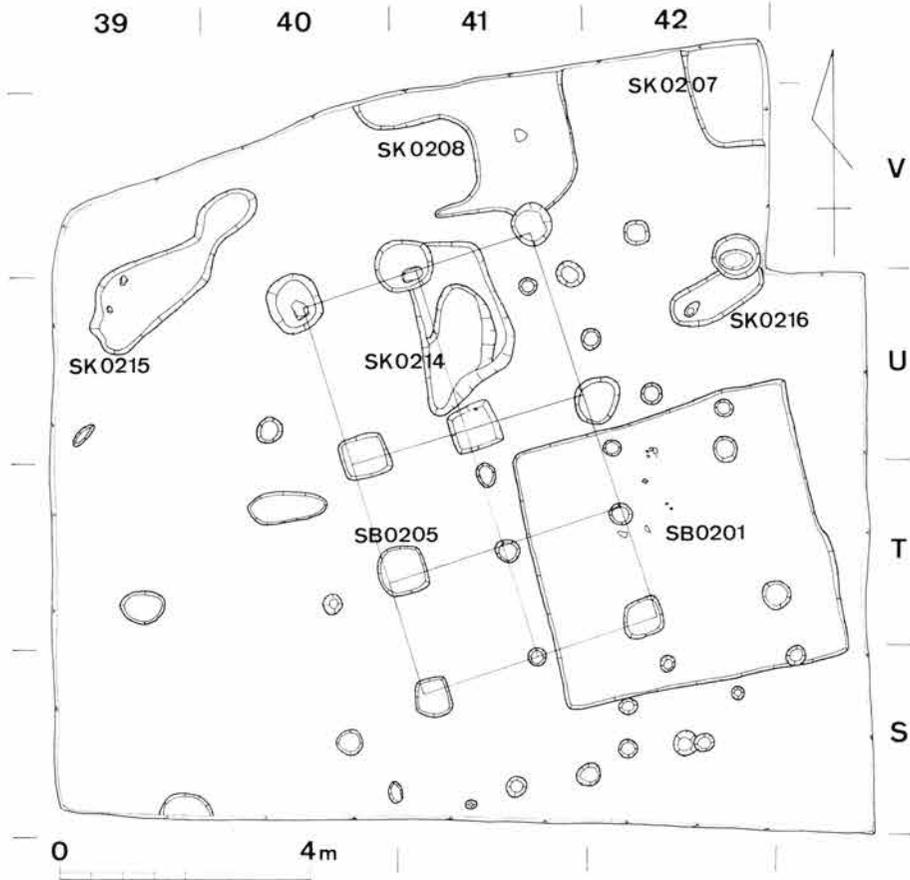
千代川遺跡の発掘調査は、亀岡市千代川町北ノ庄地区を対象として、昭和56年5月6日から同年7月31日まで実施した。今回の調査は昨年度に引き継いで実施した第2次調査である。昨年度の調査は国道9号バイパス予定路線内にあたる丹波国府跡推定地西南部の一角で、千々川が西から東方向に流れ南方向に直角に屈折している両側の水田面の調査であった。調査地が千々川の氾濫原であったため、砂礫層が多く、遺構の検出はできなかった。トレンチを約2mまで掘削した結果、耕作土・茶褐色土・灰褐色土・黒褐色土層があり、中でも灰色砂礫層がもっとも厚く堆積していた。出土遺物は黒灰色粘質土層内より奈良時代前期の須恵器片・土師器片・格子目タタキを施した平瓦片が出土している他は、古墳時代から鎌倉時代頃までの遺物が出土している。

今回の第2次調査は、千代川国府推定地外の南側丘陵に位置する水田地帯より弥生式土器片や土師器片・須恵器片が散布する事から、住居跡等の遺構の確認を主たる目的として総延長300m幅約70mの道路予定路線内を約100m²の試掘溝を設け調査を行った。地区割は、75m四方を大地区としてAからMの13地区に分け、さらに小地区として3m四方の方眼に区画し、南西隅の杭を基準に南北を小文字アルファベットで(a~yの25)、東西を数字(道路予定路線中央が30ライン)で地区名を付けた。

調査は1/200地形測量を実施することから開始した。次いで大地区のA・B・D地区に幅



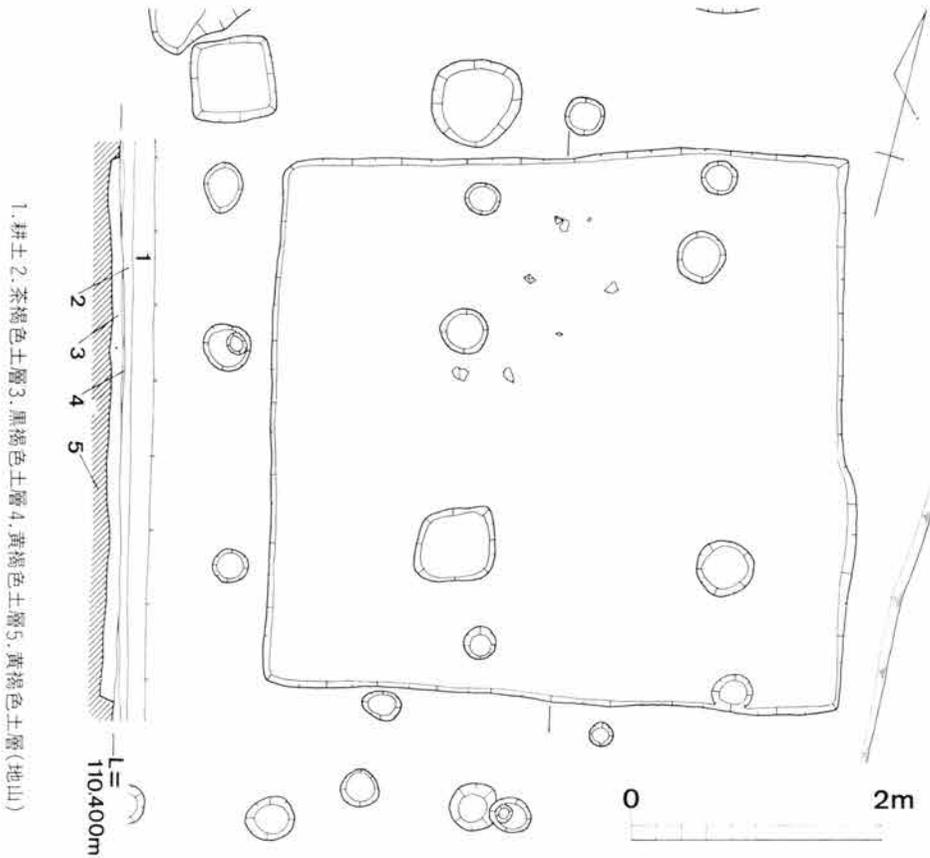
第4図 千代川遺跡遺構実測図(I)



第5図 千代川遺跡遺構実測図(2)

25mのトレンチを数本設定し、掘削にかかった。まずA地区では、南の谷筋から北側へ3本のトレンチ (Ab37~42・Af36~An36・Ae37~Ae46) を設定した。A地区は東方へ緩傾斜する平坦面の少ない谷筋であるため、散布する弥生式土器片は摩滅した小破片が多い。またトレンチを1.2m程掘り下げたところでは、厚さ約5cm程度の弥生時代の遺物包含層を検出したが、遺構は検出されなかった。

B地区については東側に伸び出した舌状台地に位置するため頂部の平坦地に十字 (Bg25~Bg41・Bc31~Bn31) と他に2本 (Bd38~Bn38, Bm33~Bm41) のトレンチを設定し遺跡の範囲を確認することから開始した。両側のトレンチ Bg25~Bg36, Bc31~Bn31 では平均3cm掘削したところで黄褐色土層 (地山) を検出し、すでに遺構は削平されていることが判明した。また東側の (Bd38~Bn38, Bm38~Bm41) のトレンチでは、地山面を切り込んだピット群や土塊、黒褐色土層の遺物包含層を検出した。その結果、当該地は縄文時代晩期



第6図 SB0201 竪穴式住居跡実測図

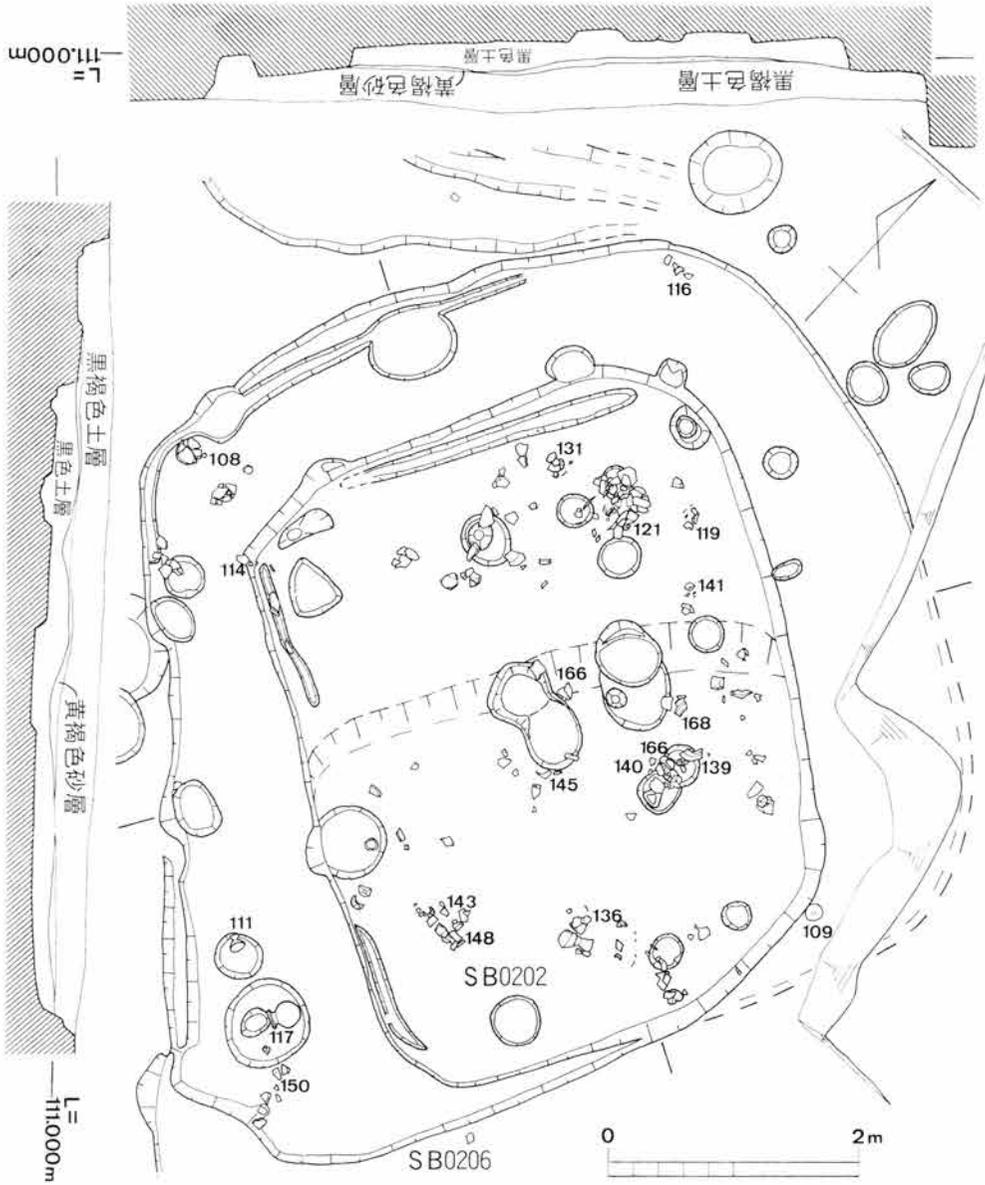
から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡であることが判明したのでトレンチを拡張した。平坦部の Bh38～Bn38 地区で奈良・平安時代の溝状遺構・列石状遺構・掘立柱建物跡などと北東の Bs43, Bt43 地区にて竪穴式住居跡 SB0201, それに伴うと思われる溝状遺構 SD0208・土壇状遺構 SK0207, 他に掘立柱建物跡 SB0205 を検出した。また西側の Bo38 地区と BI36, Bh38 地区に各1基の竪穴式住居跡などとともに掘立柱建物跡・溝状遺構・土壇状遺構を検出した。

以下、各遺構について概要を述べる。

3. 遺 構

竪穴式住居跡 (SB0201)

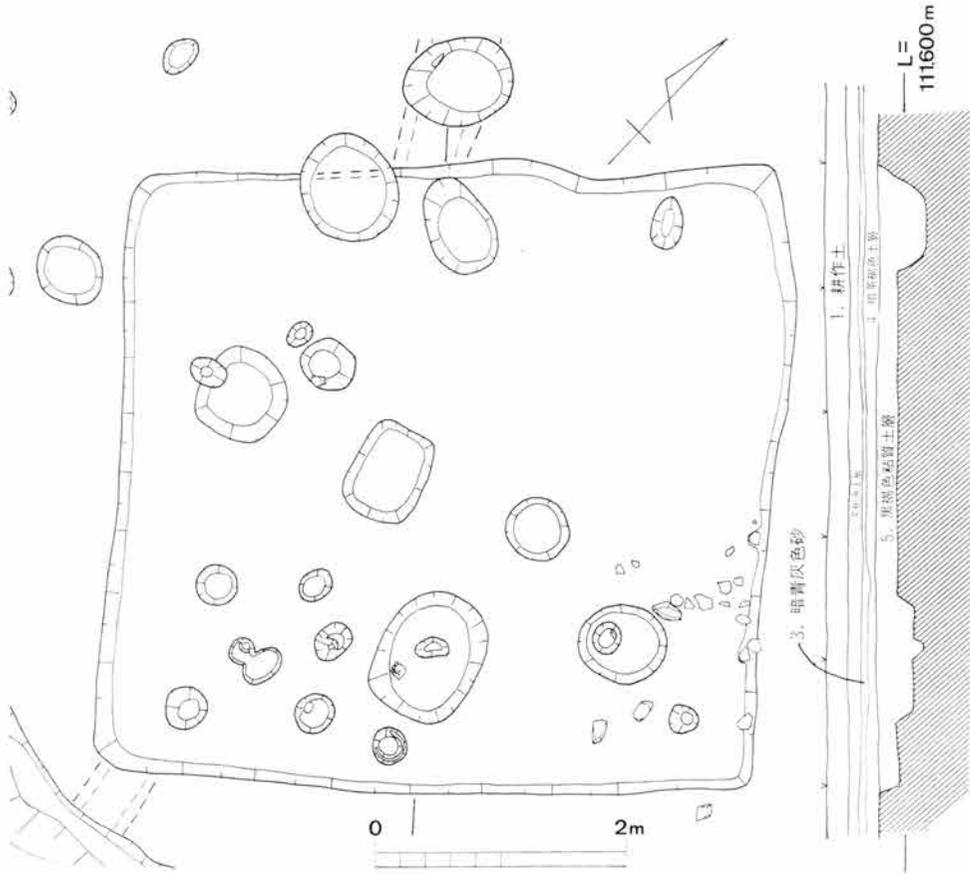
南北辺が4.5m, 東辺が4.4mの方形住居跡で住居内においては、9個の柱穴を数えるが、まとまりをもつものは確定できなかった。周溝はもたず床面は平坦であり貼床の痕跡も認められなかった。残存する壁が深さ15cm～10cm ならずであるのは地形的に舌状台地の緩や



第7図 SB0202, SB0206 竪穴式住居跡実測図

かな位置にあるため、段状に区画された水田により削平されたものと考えられる。

住居内の土層は黒褐色土層の単一層である。住居内からの出土遺物は布置式土器が多く須恵器片を含まない。このことから時期的には古墳時代前・中期に位置するが、比較的短い時間に使用された住居であると推測した。

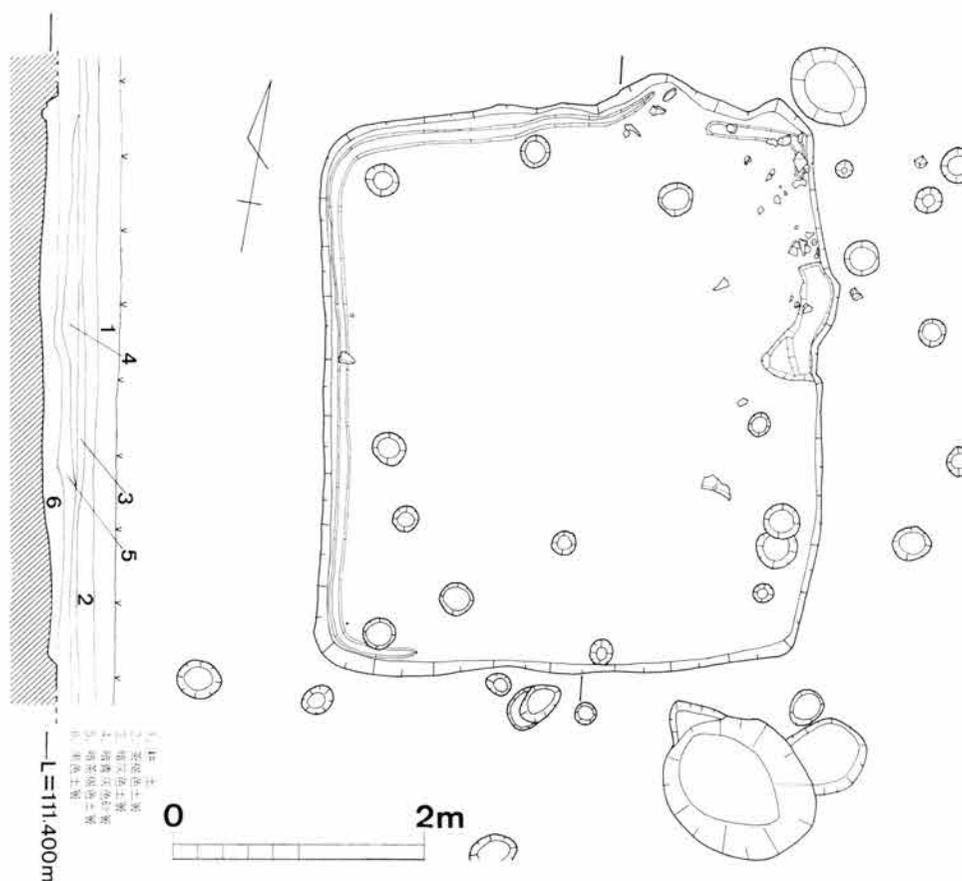


第8図 SB0203 竪穴式住居跡実測図

竪穴式住居跡 (SB0202)

調査地北東の標高130mに位置し隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西4m、南北5m、残存する壁の深さ40cmを測る。周溝は北西壁と西南壁に沿って一部に巡らせてあり、幅約10cm、深さ約5cmを測る。また南東壁では周溝がないが北西壁周溝よりやや深い床面となっている。住居内の床面は北側で約10cm高い床面となっており、いわゆるベッド状遺構である。床面は厚さ約6cmを測る黄褐色粘土の貼床を行っている。住居跡内では柱穴跡と考えられるピットを18個検出したが、主柱と考えられる対角線上に4個ある形式的なものは確認できない。また、かまど跡、炉跡は确实なものがないが、住居跡中央に2か所と西側よりに1か所、焼土と多量の炭を検出した。

貯蔵穴は南西壁の住居外に1か所あり、径50cm、深さ70cmを測る円形を呈するものである。出土遺物は住居跡内から多量の土師器を検出した。時期はSB0201より若干古いも



第9図 SB0204 竪穴式住居跡実測図

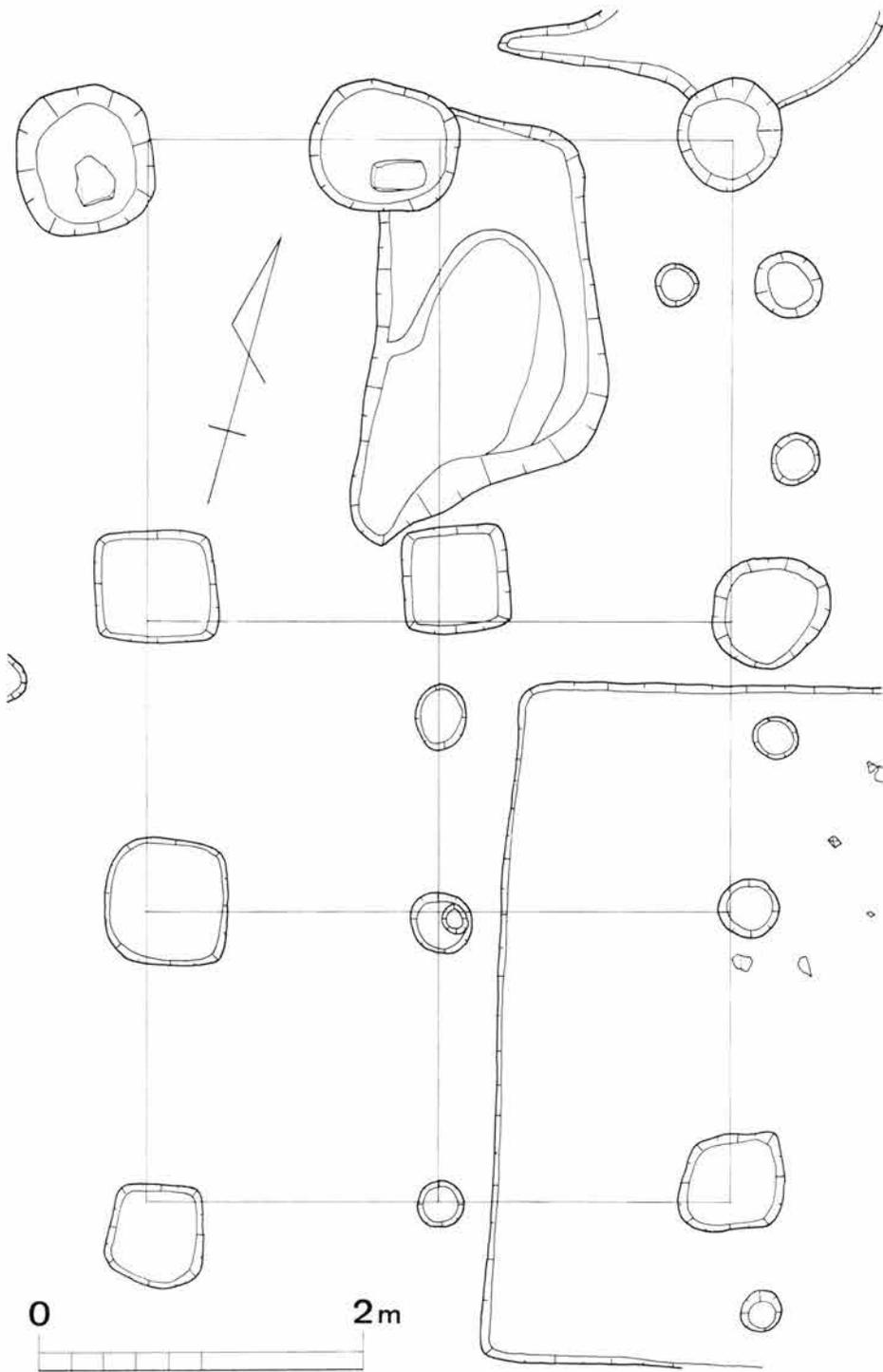
ので庄内期～布留式併行期であると考えられる。

竪穴式住居跡 (S B0203)

S B0202 住居跡と 3 m の間隔をおいて近接し、住居跡の主軸を同方向にふる方形の竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西5.2m、南北 5 m を測り、住居跡内には周溝はなく、残存する壁は約 30cm を測る。住居跡内の土層は黒褐色土層の単一層であり、住居床面は貼床の痕跡も認められなかった。柱穴は、等間隔に配置をもたない住居跡と考えられる。住居跡内のピットは21個検出している。出土遺物は古墳時代中期の布留式土器、古墳時代後期の須恵器である。

竪穴式住居跡 (S B0204)

調査地の南東端に位置し、本遺跡内ではもっとも小型に属する方形の竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西 4 m、南北 4.5m、残存する壁の深さが約 35cm を測る。



第10図 SB0205 掘立柱建物跡実測図

周溝は壁の下に沿って巡らされており、幅約 8 cm、深さ 10cm～20cm を測る。住居跡床面の貼床は平坦な地山上に約 5 cm の厚さで黄褐色粘質土を貼っている。柱穴跡と考えられるピットは住居跡内に14個検出したが、これもまた対角線上に4個の柱穴をもつものでない。

炉跡は検出されなかったが、北辺の東寄りにカマドを検出した。カマドは、粘土で構築されており、住居外に煙出しがある。焚口幅は約 30cm、奥行約 50cm を測る。またカマド付近では土師器の甕片と甔片が多数散乱した状態で検出された。他の出土遺物としては住居床面より多数の土師器片・須恵器杯身・杯蓋等を検出した。また住居近辺からは滑石製紡錘車が出土している。時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

掘立柱建物跡 (S B0205)

本調査地では、多数の柱穴状のピットを検出したが、建物としてまとまるものは少なかった。建物としてまとまったのは、(SB0205, SB0207, SB0210, SB0211, SB0212, SB0217)の6棟である。その中で S B0205 は最も大きく、3間×2間で、主軸を南北方向からわずかに西側へふる。柱間距離は約 1.8m であるが、桁行の北側1間分が約 3m となる。広縁付の建物であろうか。柱穴はほぼ方形の平面形をもつものが多く、一辺約 50～55cm・深さ約 20～50cm を測る。なお、北側2個の柱穴には礎板状の石が底部に残存していた。また柱穴内から土師器片の出土するものがあった。

竪穴式住居跡 (S B0206)

S B0202 より一回り大きなプランをもつ隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西 6.3m、南北 6.3m で北側と南側に幅約 5 cm、深さ 4 cm の周溝をもつものである。床面は平坦で貼床をもたず、全体的にわずかであるが東側が低い。住居内は黒褐色土層の単一層である。出土遺物は庄内～布留併行期であると考えられるが、S B0202 と切り合い関係にあるため詳細は将来の検討を必要とする。

掘立柱建物跡 (S B0207)

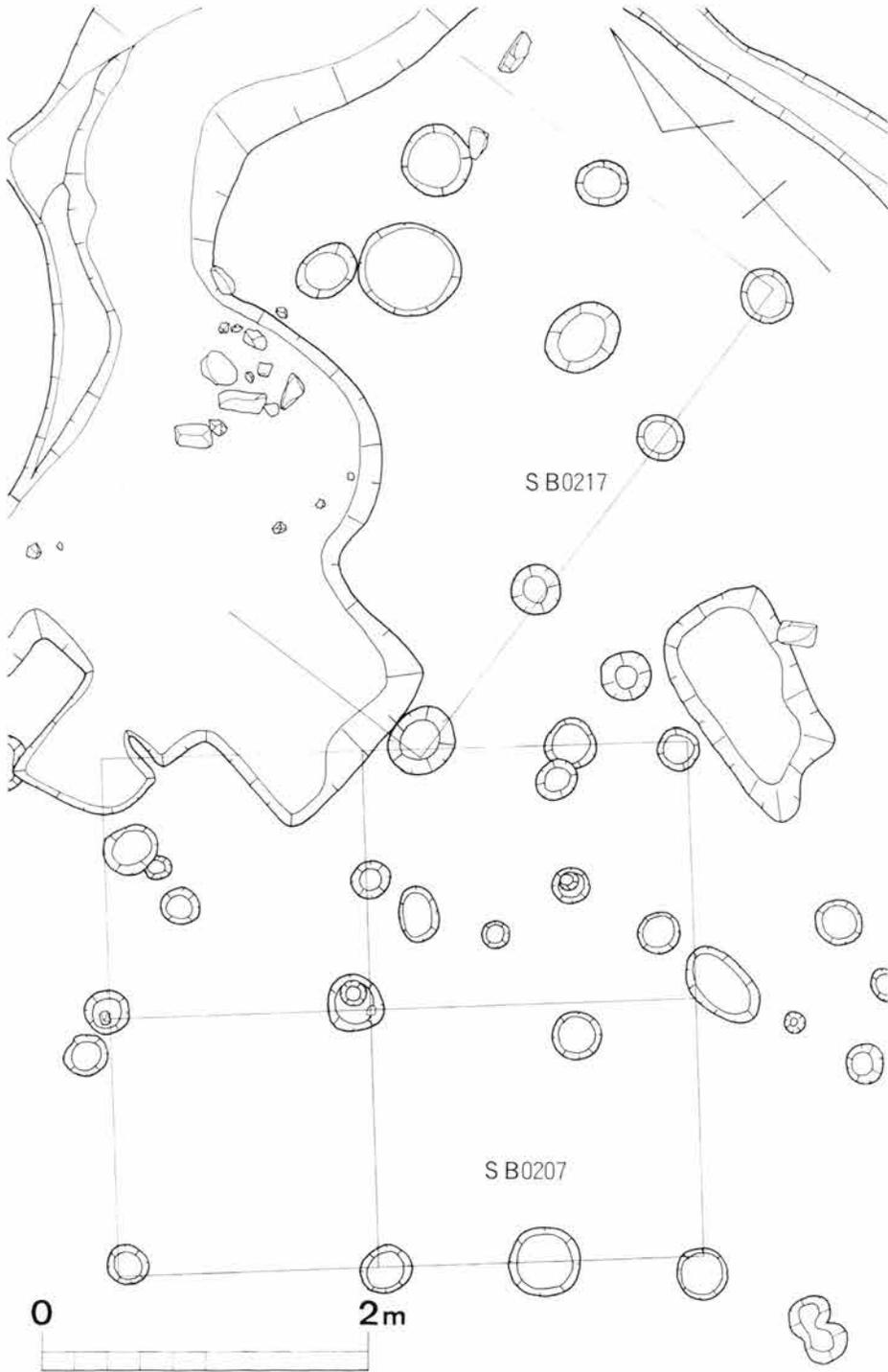
2間×2間の総柱建物跡と推定される。柱間距離は長いもので約 2 m、短いもので約 1.6m を測る。北側の柱穴は S D0218 のために消滅している様子である。中央の柱穴から土師器片が出土している。

掘立柱建物跡 (S B0210)

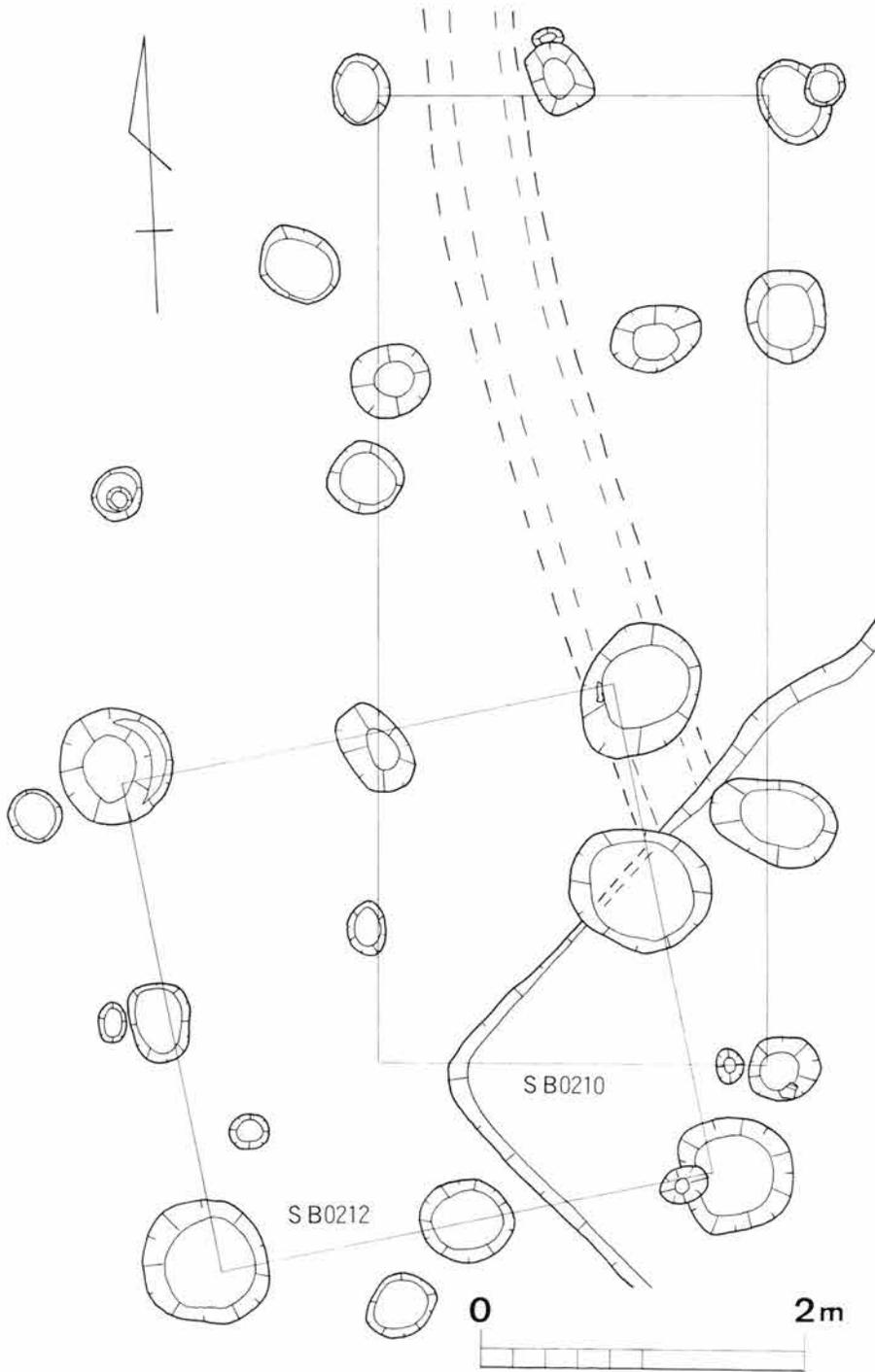
桁行約 6 m・梁間約 2.4m の規模をもつ、3間×2間の建物跡と推定される。柱間距離は一定していない。主軸は南北方向から若干東側へふる。

掘立柱建物跡 (S B0211)

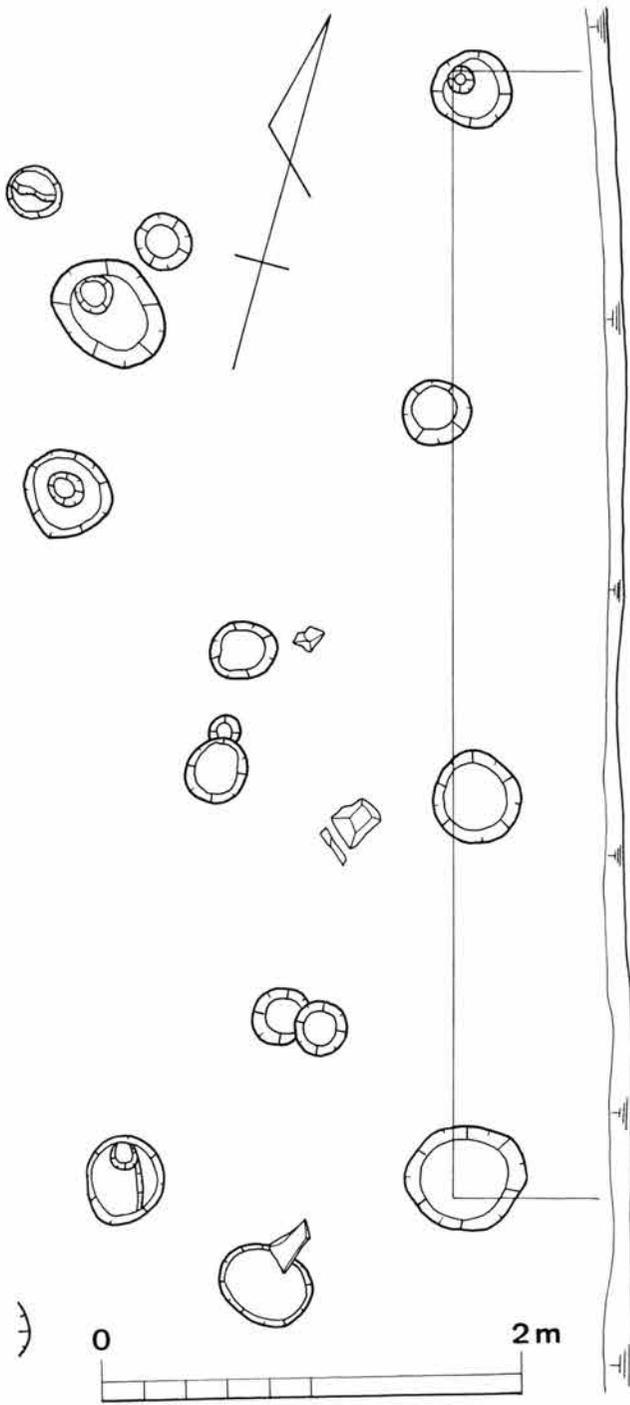
南北方向から若干北側にふって柱穴が4個並ぶ。東側部分が不明であるが、3間×2間の



第11図 SB0207, SB0217 掘立柱建物跡実測図



第12図 SB0210, SB0212 掘立柱建物跡実測図



第13図 S B0211 掘立柱建物跡実測図

建物跡かと推定される。柱間距離は約1.8mを測る。S B0205と軸方向がほぼそろっており、同一計画性をもつものと考えられる。

掘立柱建物跡 (S B0212)

2間×2間もしくは1間×1間の、ほぼ正方形の平面形をもつ建物跡と推定される。一辺約3.1mを測る。四隅の柱穴は直径約70~90cmの大きいものとなる。この建物もS B0205とはほぼ軸方向をそろえている様子であり、同一計画性をもつものと考えられる。倉庫のような建物であろう。

掘立柱建物跡 (S B0217)

3間×2間の建物跡と推定される。南側4個の柱穴は東西方向から若干北側へふり気味に並ぶ。柱間距離は約1.2mを測る。3間×2間の建物とすれば、この桁行の方向線とS B0205の妻側の方向線がほぼ平行になり、同一計画性をもつものと考えられる。なお、柱穴内から土師器片、須恵器片を出土するものがあった。

土壇状遺構 (S K0206)

幅1.8m、長さ3.4m、深さ約31cmを測り、地形に沿う方向で楕円形を呈し、南西方向に若干続くものである。土壇内は3か所の深部があり、堆積土は黒褐色土層の単一層である。残存する深さは、31cmを測るが、かなり削平されているため地山面を切り込んだ深さより確認できない。出土遺物は古墳時代前・中期の土師器片である。

土壇状遺構 (S K0207)

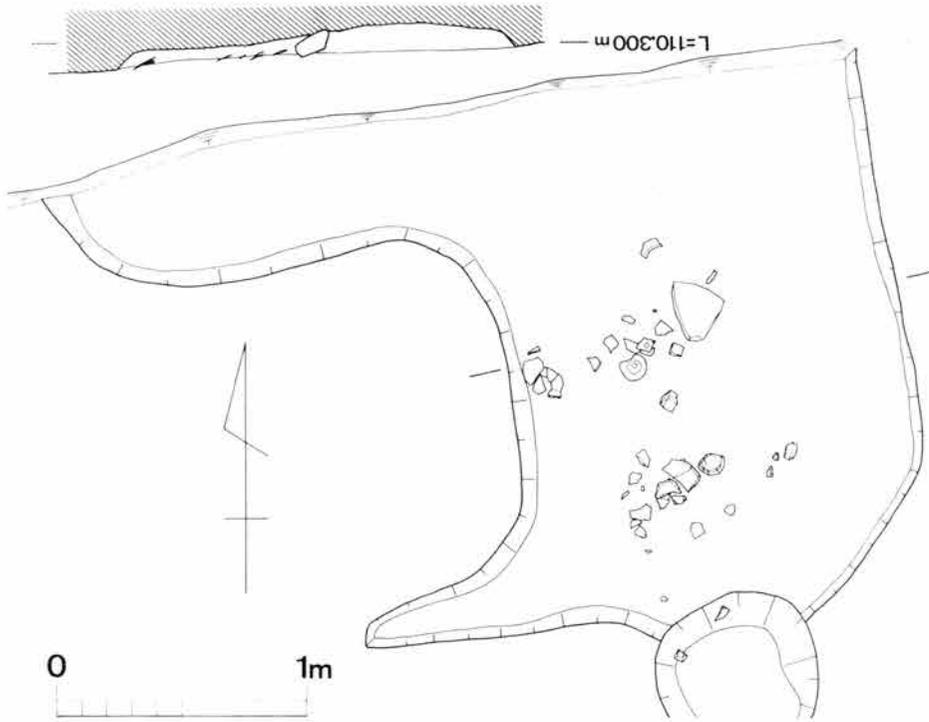
BV 42地区のトレンチに一部を検出している東西1.4m、南北1.7m、深さ約30cmの方形を呈する土壇である。また方形竪穴式住居跡の一部でもある可能性もあり、今後、北・東方向に広がる部分を検出して、全容を明らかにする必要がある。堆積土は黒褐色土層の単一層である。出土遺物は古墳時代前期の土師器片である。

土壇状遺構 (S K0208)

BV 40・41地区に位置し、北側の一部がまだ確認されていないが、東西幅1.7m、南北幅3.2m残存、深さ10cm、南部分の深いところで36cmを測る不定形の土壇である。表土下約30cmで、黄褐色砂層(地山)を掘り込んでいる部分だけが検出されたもので、上層はかなり削平されているものと考えられる。土壇内は黒褐色土層が堆積しており、上層より古墳時代前期の土師器類(第20図)が出土していることからS B0201と同時期に機能を失って埋没したものと考えられる。

土壇状遺構 (S K0214)

南北2.7m、東西1.4m、深さ40cmの南北に長い不定形の土壇である。南側が一段深く



第14図 SK0208 遺構実測図

55cm を測る。また、北側は S B0205 のピットにより切られている。堆積土は黒褐色土の単一層である。出土遺物には古墳時代前期の土師器小片がある。

土壙状遺構 (S K0215)

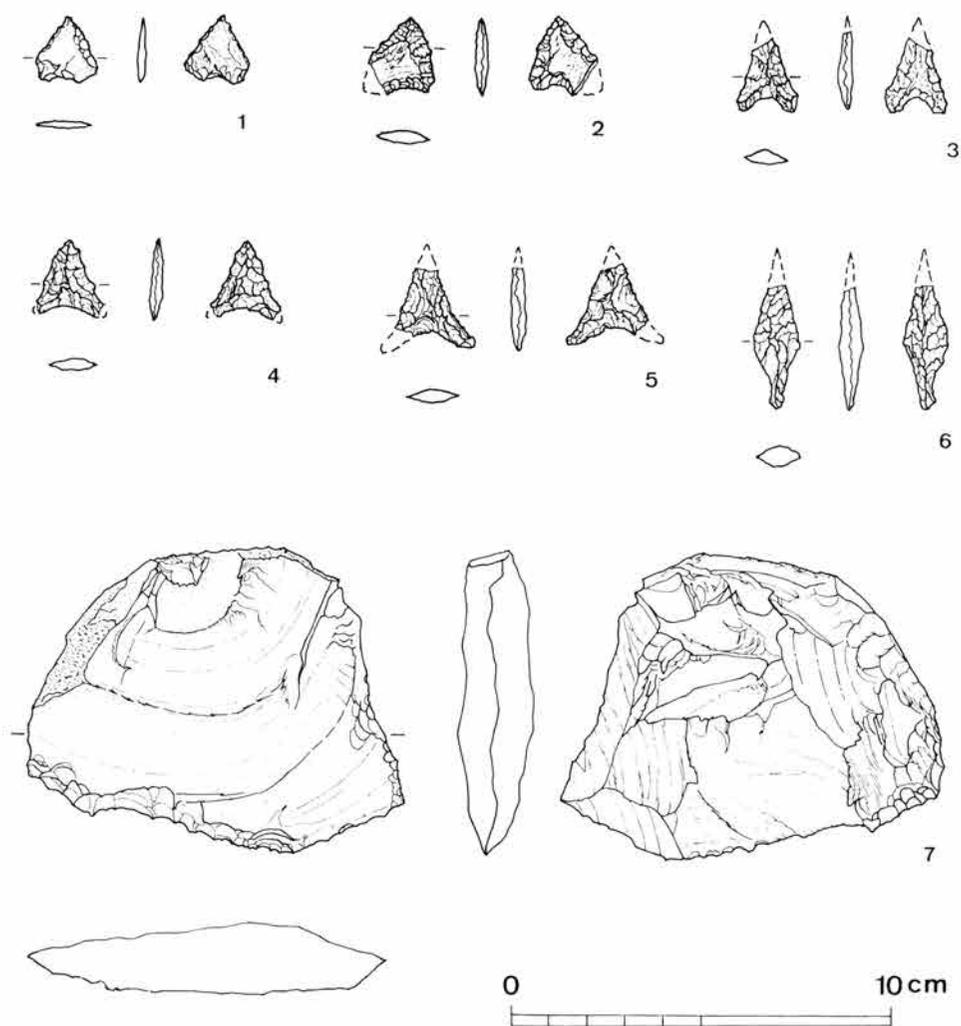
南北 3.1m、東西 40cm、深さ 40cm を測る楕円形状を呈する土壙で、地形の傾斜に沿う方向に長く検出した。堆積土は黒褐色土の単一層である。

土壙状遺構 (S K0216)

南北 1.1m、東西 0.5m、深さ 0.2m を測る楕円形を呈する土壙で S K0215 と同様で、地形の傾斜に沿う方向に長く検出した。土壙の北側はピットにより切られている。

土壙状遺構 (S K0219)

Bg 39 地区に位置し、SB0204 の貯蔵穴と考えられる径 1.1m、深さ 0.6m の円形土壙である。表土下 0.63m で、黄褐色砂層 (地山) を掘り込んで造られており、ピット 201・202 により切られている。堆積土は黒褐色土の単一層である。遺物は、古墳時代の土師器片が出土している。



第15図 B地区包含層出土遺物(I)(石器)

土壙状遺構 (SK0220)

Bj37地区に位置し、径1.2m、深さ0.65mを測る円形の土壙である。また焼土と高杯を転用したカマド跡を検出していることから竪穴式住居跡が Bj37・38地区に考えられ、それに伴う南側の貯蔵穴と推測した。堆積土は黒褐色土の単一層である。遺物は古墳時代と思われる土師器小片が出土している。

土壙状遺構 (SK0221)

Bk37地区に位置し、SK0220と同様の住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる。径1.4m、深さ0.68mを測り、位置的にSK0220が住居跡の南側と考えられることから、西側の若干南に

付表1 石器一覽表

番号	種類及び形態	石 材	出土地区	遺構及び 出土層	法 量				備考
					現存長	幅	厚み	重量	
第15図 1	石鏃(平基無茎鏃)	サヌカイト	B h 45	表 採	mm 17	mm 16.5	mm 2.5	g 0.63	
2	〃 (〃)	チャート	B m 38	暗茶褐色土	20.5	18	3.5	1.27	
3	〃 (凹基無茎鏃)	サヌカイト	B n 37	暗茶褐色土	19	16	3.5	0.8	
4	〃 (〃)	サヌカイト	B j 35	茶褐色土	20.5	17	3	0.72	
5	〃 (〃)	サヌカイト	B h 45	表 採	17.5	20.5	4	1.1	
6	〃 (凸基有茎鏃)	サヌカイト	B j 39	暗茶褐色土	32	13	6	1.7	
7	不定形搔器	サヌカイト	B k 36	暗茶褐色土	80	101	20	188	
第27図 4	磨 石	粘板岩	S B 0202	暗茶褐色土	50.5	41.5	11.5		

付設していたものであろう。堆積土は黒褐色土の単一層である。

土壇状遺構 (S K 0222)

Bn 36 地区に位置し, SB0206 の南西に付設する貯蔵穴と考えられ, 径0.75m, 深さ0.6mを測り円形を呈する。堆積土は黒褐色土の単一層で, 古墳時代前期の土師器小片が出土した。

土壇状遺構 (S K 0223)

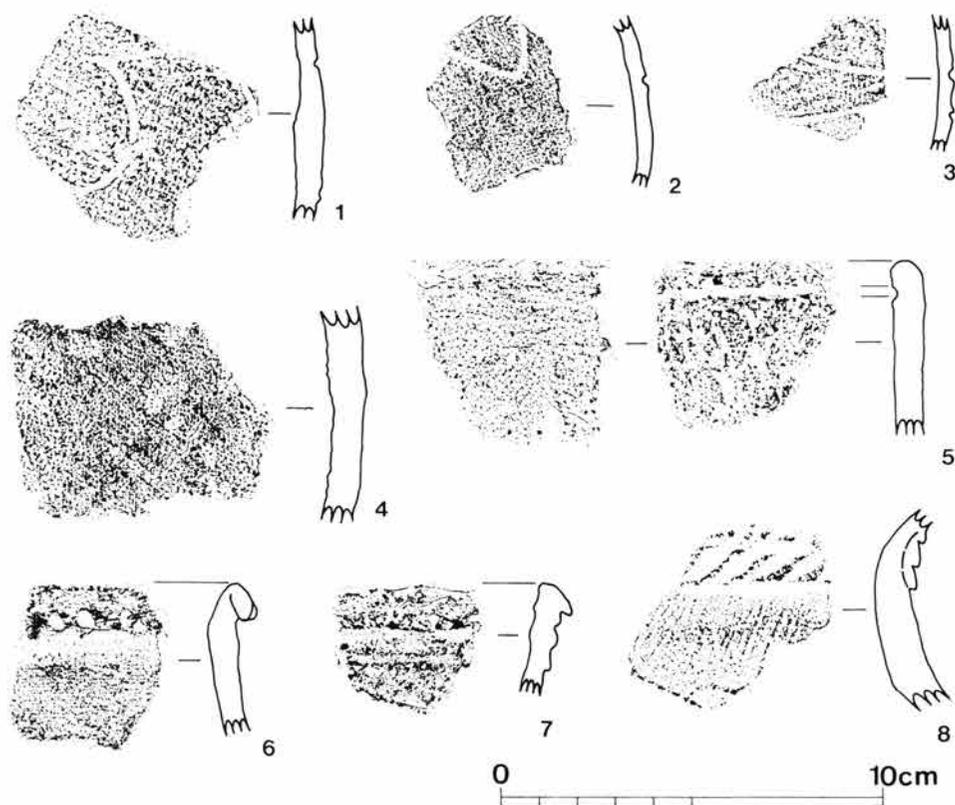
Bo 34・Bp 34 地区に位置し, 径0.8m, 深さ0.55mを測る。この土壇も, S K 0220・0221と同様で, 住居跡は検出されなかったが, 規模から貯蔵穴と考えられる。堆積土は上層が黒褐色土, 下層が黒色粘土である。出土遺物は, 土師器片が少量含まれていた。

溝状遺構 (S D 0209)

Bg 35・Bg 36 地区から北方向に緩傾斜し, Bo 35 地区で蛇行し, Bp 37 地区では直角に屈折した溝状遺構である。Bh 36 地区で, 若干幅広く1.1m, 深さ0.4mあるが, 全体的に幅0.4m, 深さ0.2mである。堆積土は暗茶褐色土層で, 土師器片・須恵器片が少量と土錘1点(第19図2)が出土している。茶褐色土層・黄褐色土層を掘り込んだ南西から北東へ流れる小さな溝である。

溝状遺構 (S D 0213)

Bn, Bp 33・34・35 地区, 東西4条, 南北3条の溝である。Bo 33 地区から東方向の Bo 35 地区で直角に屈折し, 北方向の Bp 35 地区へ延びる幅1m, 深さ0.4mの幅広い溝を中心に同様の形体で北側に2条の溝がある。この3条の溝は南から北に移行し, 浅くなっている。黄褐色砂層(地山)を掘り込んで造られた溝で, 堆積土は暗灰色土層である。溝内には須恵器片・土師器片を若干含んでいた。



第 16 図 B地区包含層出土遺物(2) (縄文式土器・弥生式土器)

溝状遺構 (SD0218)

Bk 33 地区からやや弧を描いて北東方向へ蛇行しながら流れる溝である。Bp 37 地区に流れ、SD0209 と方向が一致し合流すると考えられる。Bj 35 地区で幅 2.8m、深さ 0.35m、Bj 36 地区で幅 1.5m、深さ 0.5m を測る。Bj、Bi 34・35 地区で方形に近い広がりを呈し、溝底に径約 0.2m の花崗岩を敷いている。黄褐色砂層 (地山) を掘り込んで造られた溝で、堆積土は上層が暗茶褐色土、下層が黒褐色土層である。出土遺物は、土師器片・須恵器片が少量出土している。

4. 出土遺物

今回の千代川遺跡は、弥生時代末期の住居跡から平安時代の溝状遺構にいたるまでの複合遺跡である。出土遺物は多種多様であるが、大きく 3 つに分けると次のようになる。第 3・第 4 包含層出土の古墳時代から鎌倉時代の遺物、第 5・第 6 層下位の黄褐色砂層 (地山) を切り込んだ竪穴式住居跡・溝状遺構・土壇状遺構・列石状遺構出土の遺物、第 5・第 6 包含層

出土の縄文・弥生時代の遺物。以下、各遺構別に順次、形態分類し記述した。形態は壺がABCの3形態、甕がA・A₁～Iの10形態、高杯がA～Jの10形態、小型丸底壺がA～Gの7形態、鉢がA～Dの4形態、台付鉢がA～Dの4形態とした。

B地区包含層出土遺物(1)(石器)(第15図)

第5・6層内、表採及び弥生式土器・縄文式土器片とともに出土した石器類である。石鏃(1)はサヌカイトの薄い剥片の両側を調整した小型石鏃である。(2)は暗赤色のチャート質で、全面の両端を細かい剥離で調整している石鏃である。石鏃中央は自然面を残し1端の脚部を欠く。(3)は両面を粗く剥離し、片面に自然面を残す。先端部を欠く。(4)は(3)と同様で、粗く剥離している。(4)は大きく脚部が開く、えぐりが深いサヌカイト質の石鏃である。両面を粗く剥離した肉厚の凹基無茎鏃である。Bh 45地区表採である。(6)は、断面が菱形を呈する肉厚の粗く剥離した凸基有茎鏃である。

不定形搔器(7)は不定形剥片刃器のような厚味があり、打面の調整がないまま礫面を丁度輪切りにするように加撃された背面や側面に自然面を残す。剥片の薄い2側面を剥離調整し刃部を形成する不定形搔器である。材質はサヌカイト質である。

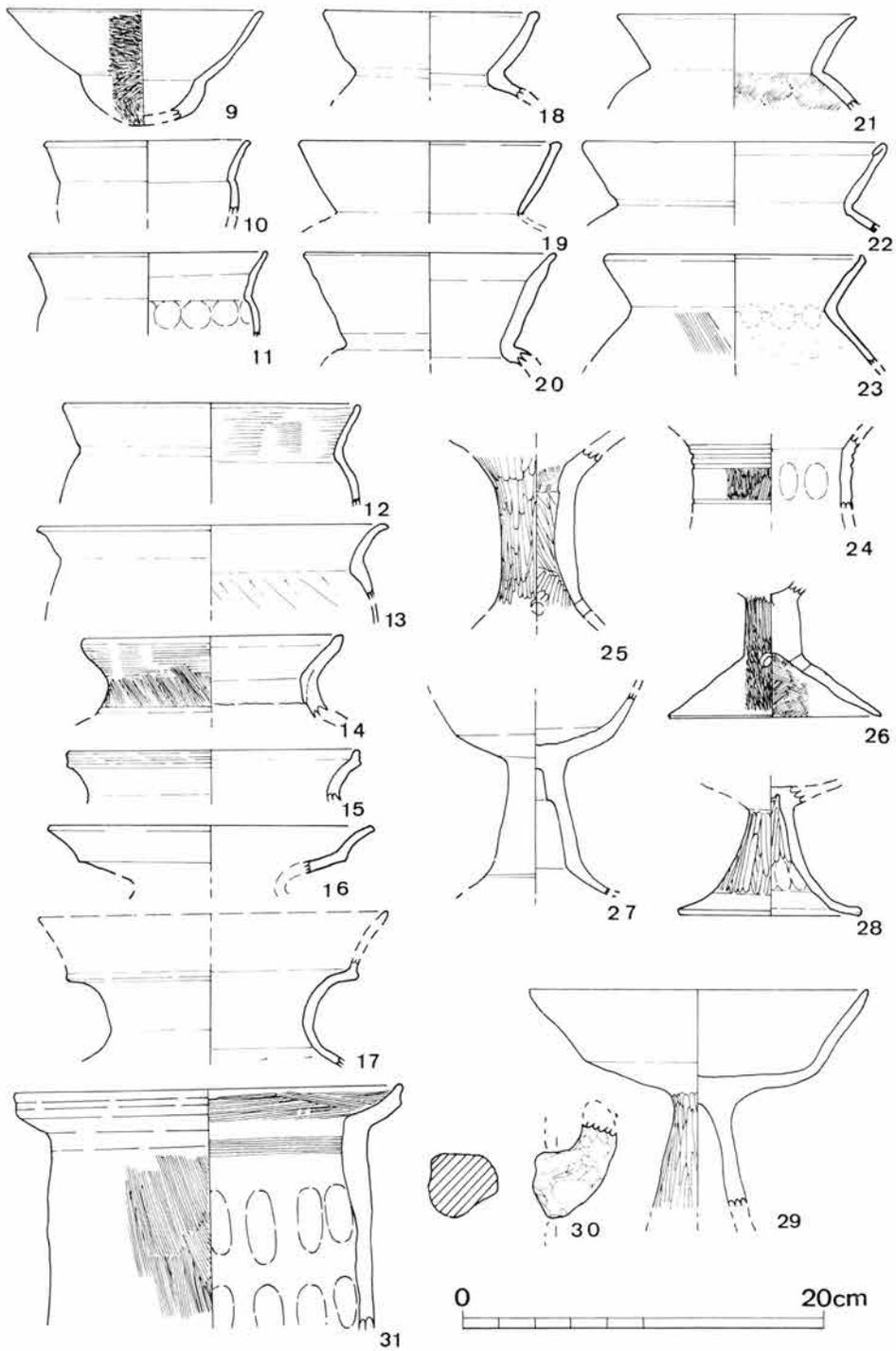
B地区包含層出土遺物(2)(縄文式土器・弥生式土器)(第16図)

第5・6層より出土した縄文式土器(1～7)弥生式土器(8)である。

(1～3)は、磨消縄文系の土器で、沈線を幾可学的に施し、沈線間に貝の回転による擬縄文を施している。(1)は、太目の沈線を波状に施し、片方に擬縄文、もう片方は無文となっている胴部である。(2)は「く」の字状の細目の沈線を施し、沈線下方に擬縄文を施している薄手の胴部である。(3)は2本の平行な細い沈線をほぼ水平に施し、沈線間に擬縄文を施すもので、胴部であろう。

(4・5)は条痕文系土器である。(4)は器壁が厚く、色調が黒褐色を呈し、細い条痕文を左から右下の一定方向に施している胴部である。(5)はほぼ直立した口縁部で、内面上部に口縁に従って一本の太い沈線が走る。外面はほぼ水平に何条もの条痕文が施されている。胎土は石英が多く含まれた粗製のもので、色調は、黒色である。

(6・7)は無文系の口縁部である。縄文時代後期から弥生時代前期と考えられる。(6)はほぼ直立した口縁端部に突帯をもつものである。突帯には太い刻目を施す。全体的に器壁が厚く、胎土にはチャート・金雲母等が多く混入されており、密である。(7)は若干、開いた口縁部に鋭い突帯をもっている。突帯のすぐ下には、口縁部に従った状態でヨコナデされている。胎土は石英粒が多く混入された粗製のものである。色調は茶褐色である。(8)は頸部に1帯の貼付突帯を施すものである。突帯は、ヘラ状の刻目を斜めに施している。また突帯



第17図 B地区包含層出土遺物(3) (弥生時代以降の土器類)

には縦方向のハケ目を施している。畿内第Ⅲ様式であろう。

B地区包含層出土遺物(3)(弥生時代以降の土器類)(第17図)

小型丸底壺 小型丸底壺はA～Gの7形態に分類した。(9)は口縁部が大きく開き、体部が球形を呈するD類で、器面調整の細かいヘラミガキを施す。(10・11)は短めの広く開いた口縁部をもつ小型丸底土器E類である。(11)はくびれ部内面に指圧痕を残す。

甕 甕はA・A₁～I類の10形態に分類した。(12)は口縁部がゆるくくびれて外反する。内面に横ハケを残す。(13)は口縁部が「く」の字状に外反する。(14)は全体に厚く、短く立ち上がり外反し、端部は丸くおさめる。(15)は外反する口縁部で端部は若干肥厚し、中央を外方へ突出させ、端部は丸くおさめる。(18・19・22)は外彎気味に短く立ち上がる口縁部をもち、端部内面を肥厚させ丸くおさめる「布留式」甕Iである。(23)は「く」の字状の口縁部をもち、端部を上方へつまみ上げる「庄内式」甕Eである。

壺 壺は3形態に分類した。(16・17)は二重口縁で、(16)が2段目で大きく外反して短く上方に伸びるものである。(17)は2段目が、わずかに内傾して垂直に立ち上がるものと考えられる。布留1式である。(20・21)は外方へまっすぐ伸びる口縁部で端部はうすくおさめる壺Aである。

器台 (24)はゆるやかに外反する体部に3条と下方に1条の沈線を施している。

高杯 (25～29)はA～Jの10種類に分けられる。A(25)は筒状の柱状部をもつもので、細かいヘラミガキの器面調整を行っている。B(26)は中実の短い柱状部をもち、直線的に開く脚部をもつ。外面は丁寧なヘラミガキを、内面はハケを施す。C(27～29)は裾部で大きく開く脚部をもち、柱部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキを施し杯部は鉢状を呈する。(28)は杯部が形態不明である。

把っ手 (30)釜、あるいは甗の把っ手である。断面は楕円形を呈する。

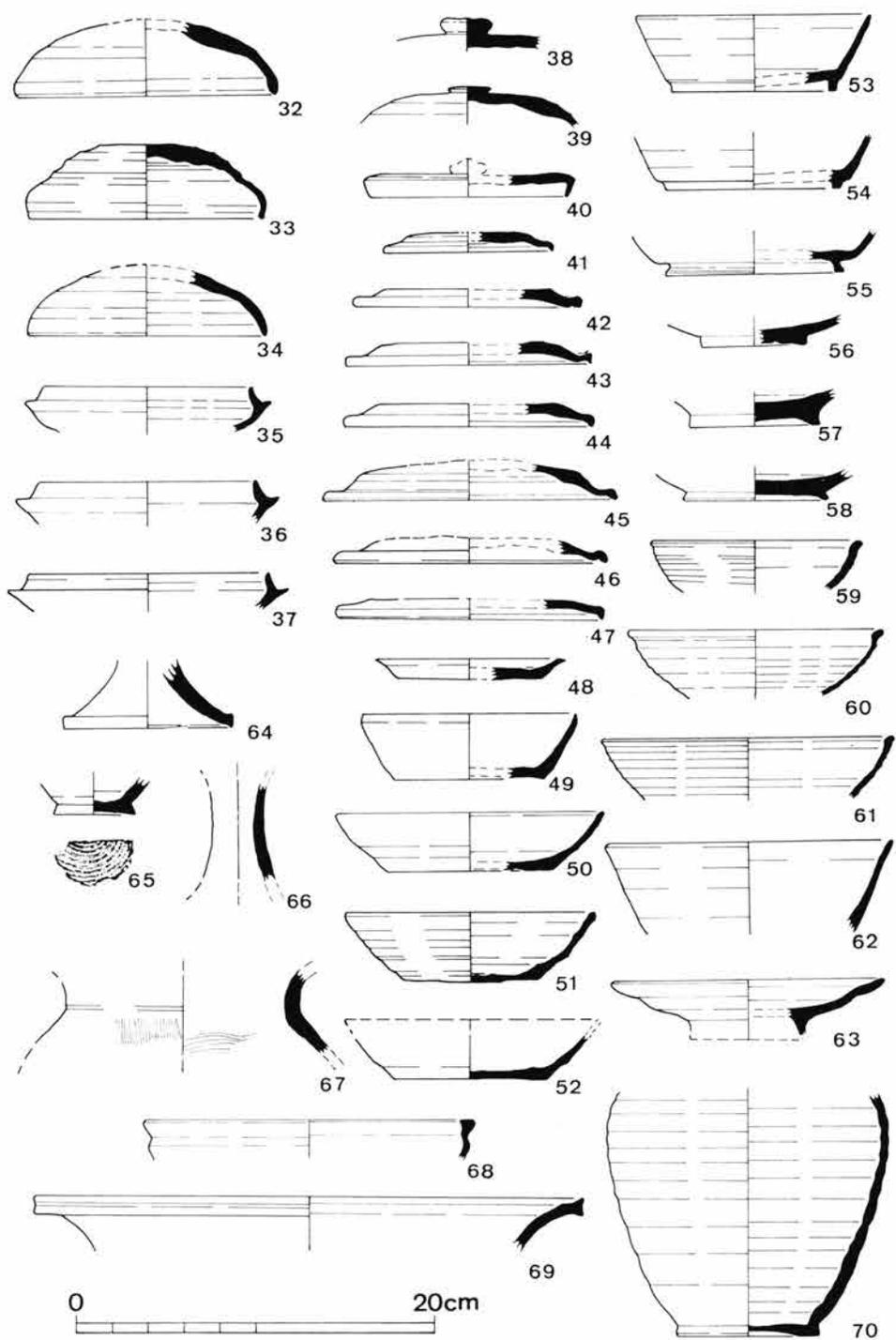
土師鍋 (31)口縁部が外傾し、端部はまっすぐ立ち上がる。基部から、ほぼ真下に体部はのびる。体部外面は縦ハケ、口縁部内面は不定方向ハケ目、口縁基部付近に8条の凹線が走る。中世の土師鍋であろう。 (村尾 政人)

B地区包含層出土遺物(4)(須恵器)(第18図)

包含層からは古墳時代から中世までの須恵器が出土している。そのうちでも、奈良時代末から平安時代にかけての須恵器には、亀岡市篠窯跡群から出土している須恵器と共通するものが多くみうけられる。

・古墳時代の須恵器

杯蓋 (32・34)は、丸い天井部をもつものとみられ、口縁端部は丸味を帯びる。外面上半



第18図 B地区包含層出土遺物(4)(須恵器)

部にていねいなヘラ削りが施される。杯蓋(33)は、丸い天井部をもち、口縁は内傾し端部を丸くおさめる。杯蓋(39)は外面上部にヘラ削りがみられ、扁平なつまみが付く。

杯身(35~37)は、立ち上がりが短く内傾するものである。高杯脚部(64)は、端部を上下につまみ出す。高杯脚部(66)は浅く細い沈線が数条施されている。

これらの須恵器は、いずれも陶邑編年^(注14)第Ⅱ期後半に並行し、6世紀末から7世紀初頭に比定されるものであろう。

・奈良時代以降の須恵器

蓋(38)は扁平な宝珠形つまみをもつ。蓋(40)は葉壺形の壺の蓋とみられ、口縁は内傾気味に直立する。蓋(41~47)は、口縁端部を折り曲げており、丸くおさめるものと断面が三角形を呈するものがある。いずれも宝珠形つまみがついていたものとみられる。以上の蓋は、いずれも篠窯跡群^(注18)芦原窯出土のものに類似し、8世紀末に比定されよう。

杯(49~52)は平底で、8世紀後半頃のものともみられる。杯(55)は張り出した高台をもち、篠窯跡群^(注13)西長尾奥1号窯出土のものに類似する。8世紀中葉に比定される。杯(53・54)は、篠窯跡群^(注13)西長尾C地区出土のものに類似する。9世紀中葉以後に比定される。碗(56)は、高台底部が回転ヘラ削りされ、蛇ノ目状に沈線がめぐり、篠窯跡群^(注15)前山2・3号窯出土のものに類似し、10世紀後半の年代が与えられよう。碗(59~61)は、ロクロ目が明瞭に残るもので、篠窯跡群^(注18)黒岩1号窯出土のものに類似する。10世紀後半に位置付けられよう。碗(57)は、大振りな貼付高台をもち、見込みには重ね焼き痕を残す。碗(58)は若干軟質で貼付高台をもつ。いずれも東海地方系に属するものであろう。

皿(48)は篠窯跡群^(注18)芦原窯出土のものに類似する。皿(63)は、段皿状で高い高台をもつ。緑釉が剥落したものかもしれない。鉢(68)は口縁部がS字状に屈曲し、端部が肥厚する。篠窯跡群^(注2)小柳1号窯出土のものに類似し、9世紀前半に位置付けられよう。

瓶(65)は高台底部に糸切り痕を残す小型品である。瓶(70)はロクロ目を明瞭に残している。いずれも篠窯跡群出土のものに類似し、9世紀代に位置付けられよう。

甕(69)は口縁端部を上下につまみ出している。8世紀末頃に比定されよう。甕(67)は瓦質に近いもので、内外面ともにタタキ目が残る。

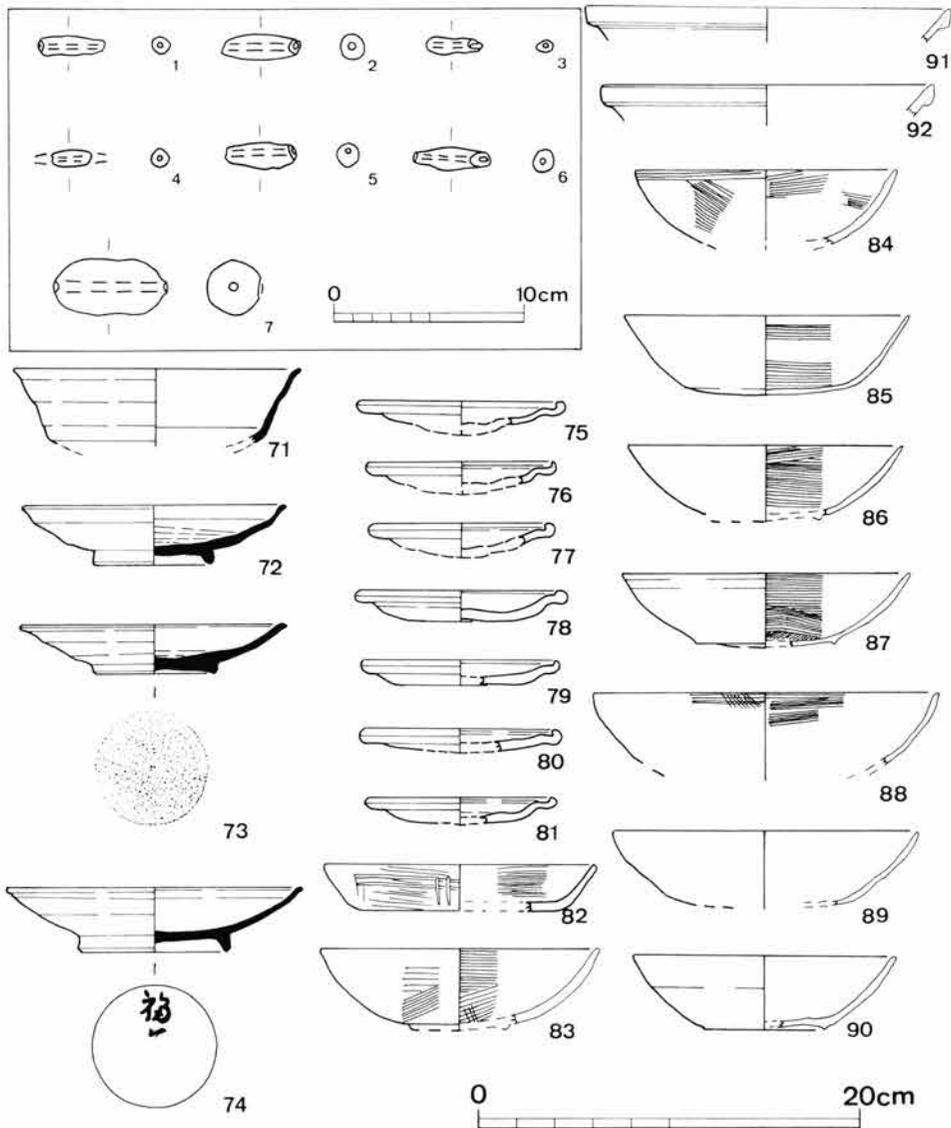
B地区包含層出土遺物(5)(奈良時代以降の土器類)(第19図71~92)

緑釉碗(71)は、器胎が須恵器であり、暗緑色の釉がかかる。内面見込みと立ち上りの境は明瞭に屈曲し、沈線がめぐり、口縁端部は外反する。緑釉皿(72)は器胎が土師質であり、淡緑色の釉がかかる。内面にはみがきの痕がみとめられる。高台は貼付の後、ヘラ削りしている。緑釉皿(73)は、器胎が須恵質であり、二次焼成温度が高すぎたためか、釉調にむ

らがある。器形は篠窯跡群前山2・3号窯出土のものに類似するが、高台底部には蛇ノ目状の沈線を施さず、ヘラで一文字に引いた窯印とみられる沈線をもつ。10世紀頃に比定されよう。

灰釉皿(74)は、内外面上半部のみ施釉し、見込みには重ね焼き痕を残す。高台内には「福□」の墨書が残る。

土師皿(75~81)は、口縁部が強く外反し端部を内側へ折り返して肥厚させているもので



第19図 B地区包含層出土遺物(5) (奈良時代以降の土器類)

ある。これは、平安京跡左京内膳町^(注19) S D41A・S E288 下層出土のものに類似し、平安京Ⅲ期新段階に^(注20)並行するものとみられ、11世紀後半に比定されよう。土師皿(82)は剥落のため詳細は不明であるが、外面にヘラで沈線を引いている。

黒色土器壺(84~89)はA類に属するもので、内面および外面口縁端部に炭素を吸着させている。外面の調整は剥落のため不明であるが、内面はていねいにみがきを行っている。内面口縁端部に沈線をめぐらすものもある。高台は低く、断面三角形を呈する。黒色土器壺(83)は、B類に属する。炭素の吸着が不十分なためか、色調は褐色である。内面はていねいにみがかれ、外面も一部にみがきがみとめられる。内面口縁端部に沈線をめぐらす。器胎は厚手である。

瓦器壺(90)は剥落のため調整は不明である。器胎は厚手であるが、特に口縁部が肥厚しており、いわゆる丹波の瓦器とよばれるものであろう。内面口縁端部には沈線を施さない。高台は低く、断面三角形である。

白磁碗(91・92)は、中国宋時代のもので、口縁部は外側に折り返され、太い玉縁状を呈する。11世紀後半頃に位置付けられよう。(引原 茂治)

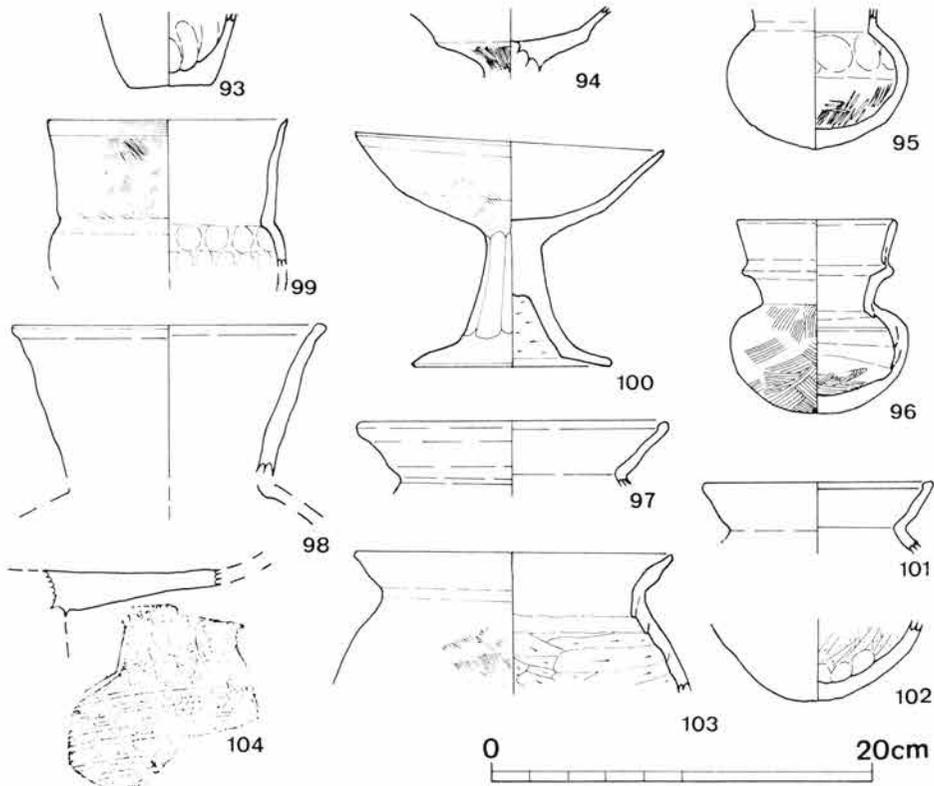
土錘(第19図1~7)は、断面が球形で棒状を呈し、中央に、径0.2~0.4cmの円孔を穿つ。長さ3.4~4.2cm、径0.8~1.6cm。(1~6)は、同一形態であるが、(7)は、長さ6.1cm、径3.0cmで、中央に径0.4cmの円孔を穿つ。胎土は石英を含み粗い。色調は黄褐色を呈する。竪穴式住居跡S B0202から出土している。

A地区包含層・SB0201・SB0203・SK0208 出土遺物(第20図)

(93~95)は、A地区包含層出土遺物である。(93)は手づくね土器で、(95)の小型丸底Aと同様の胎土と黒褐色の色調である。高杯(94)は杯部と口縁部の接合部に段を有する高杯Eである。

(97・98)は、竪穴式住居跡S B0201出土遺物である。この住居跡からの出土遺物は極めて少ないが、住居跡床面に張り付いた状態で検出した。壺(98)は口縁部がゆるく外反しながら立ち上がる壺Aである。甕(97)は口縁部が内彎気味に、外反し、口縁端部の内側へ肥厚させた布留式甕Iである。

(101~104)は竪穴式住居跡S B0203出土遺物である。甕(101)は口縁端部を内面に肥厚させた布留式甕Iである。小型丸底壺(102)は胎土が粗く、黒褐色の色調を呈する底部のみ残存するもので小型丸底壺Bである。甕(103)は短く外上方へ立ち上がる口縁部をもつ甕である。高杯(104)はS B0203の柱穴3から出土した高杯である。S B0203と関係のない古墳時代以降のものであろう。



第20図 A地区包含層・S B0201・S B0203・S K0208 出土遺物

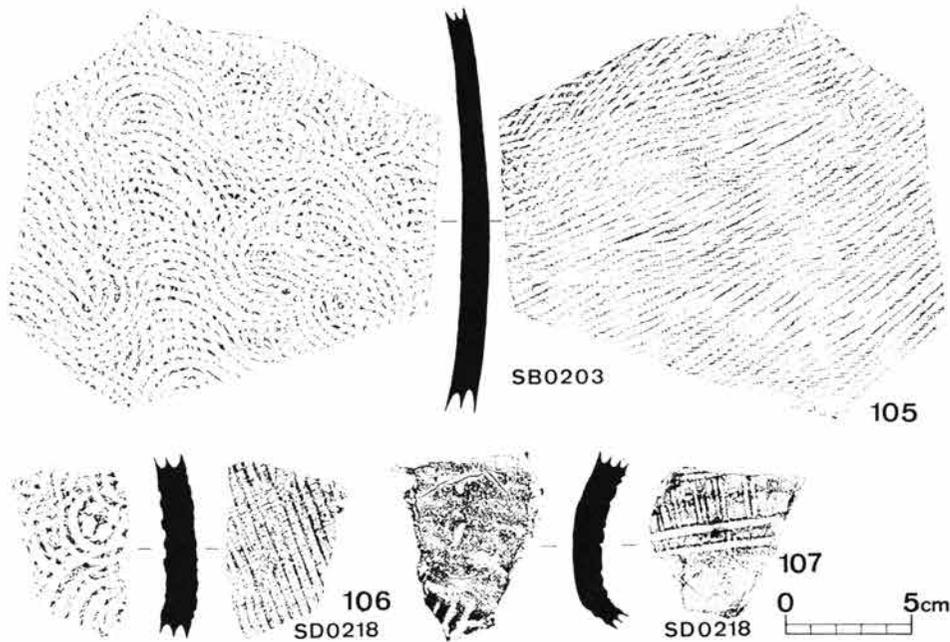
(96・99・100) は土壇状遺構 S K0208 出土の一括土器である。小型丸底壺(96)は頸部から上方へ立ち上がり口縁端部を尖がり気味にした二重口縁の小型丸底Aである。小型丸底壺(99)は口頸部が長く立ち上がる小型丸底Fである。高杯(100)は杯部の整形はハケ目を施し、底・脚部はヘラケズリを施す高杯Dである。S K0208 内より出土した遺物は布留2式に併行するものであろう。

須恵器拓影(第21図)

(105)は須恵器で内面に同心円、外面に平行タタキを施している甍片である。S B0203 出土である。(106・107)はS D0218出土の須恵器甍片である。(106)は外面格子状、内面は同心円のタタキを施している。(107)は頸部で、(106)と同個体であらう。

S B0202・S B0206 出土遺物(第22~25図)

蓋(108~110)は天井部のつまみが平坦である(108・110)と中央がくぼんでいる(107)の二種類ある。弥生式土器であるが、当地方では、庄内期まで続くのであろうか。3点とも



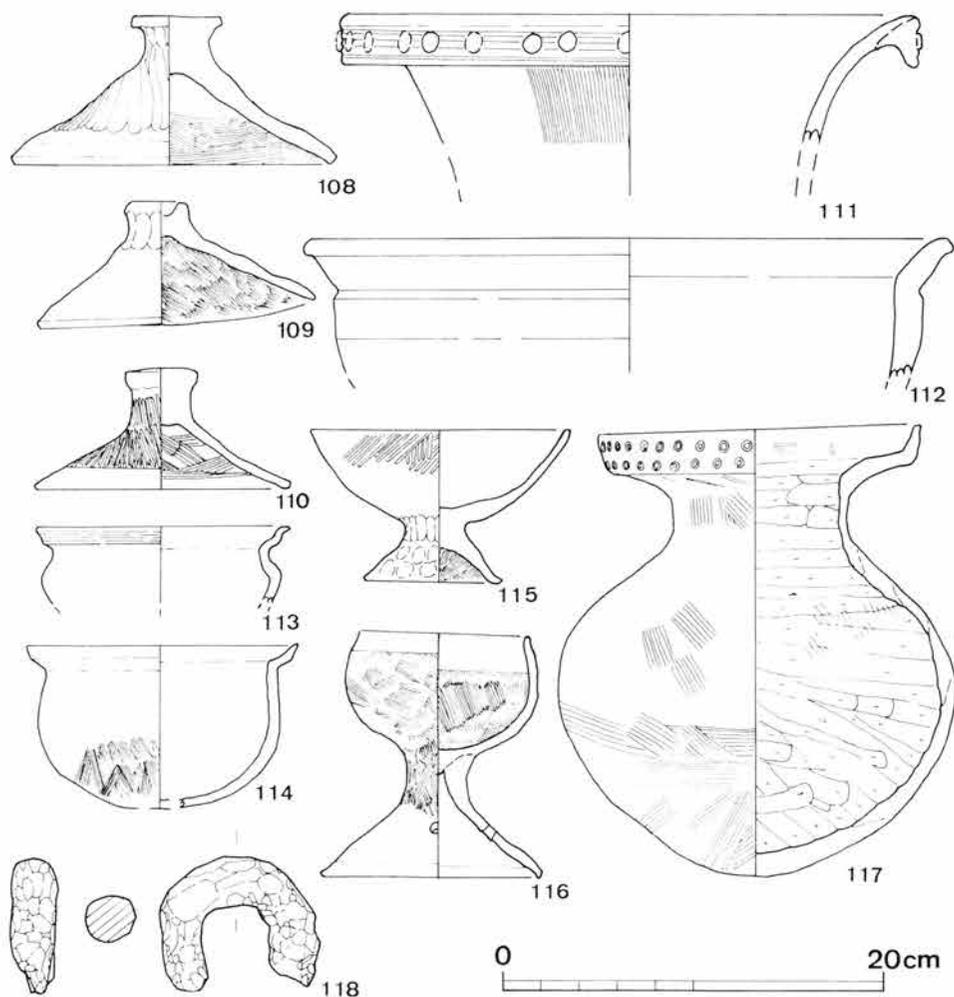
第21図 須恵器拓影

完形品で出土しており、(109)は内面端部、外面一部に煤が付着している。(111)は畿内第Ⅲ様式の壺である。暗茶褐色を呈し、胎土は密である。(112)は体部がほぼまっすぐ立ち上がる器壁の厚い甕である。SB0202 上層出土で、住居跡とは関係のない遺物と考えられる。鉢(113)はS字状に屈曲しながら立ち上がる口縁部を有する鉢Aである。(114)も同様の鉢Aである。高杯(115)は底部の端がやや尖がり気味で小さく低い。口縁部付近の外面にタタキ目が残っている。(116)はウィングラス形を呈する台付椀である。脚部には四孔を穿っている。壺(117)は体部から口縁にかけて「5」字状に屈曲しており、口縁部外面に竹管文を施す壺Cである。(118)は弥生式土器の肩に付設していたと考えられる環状把手である。

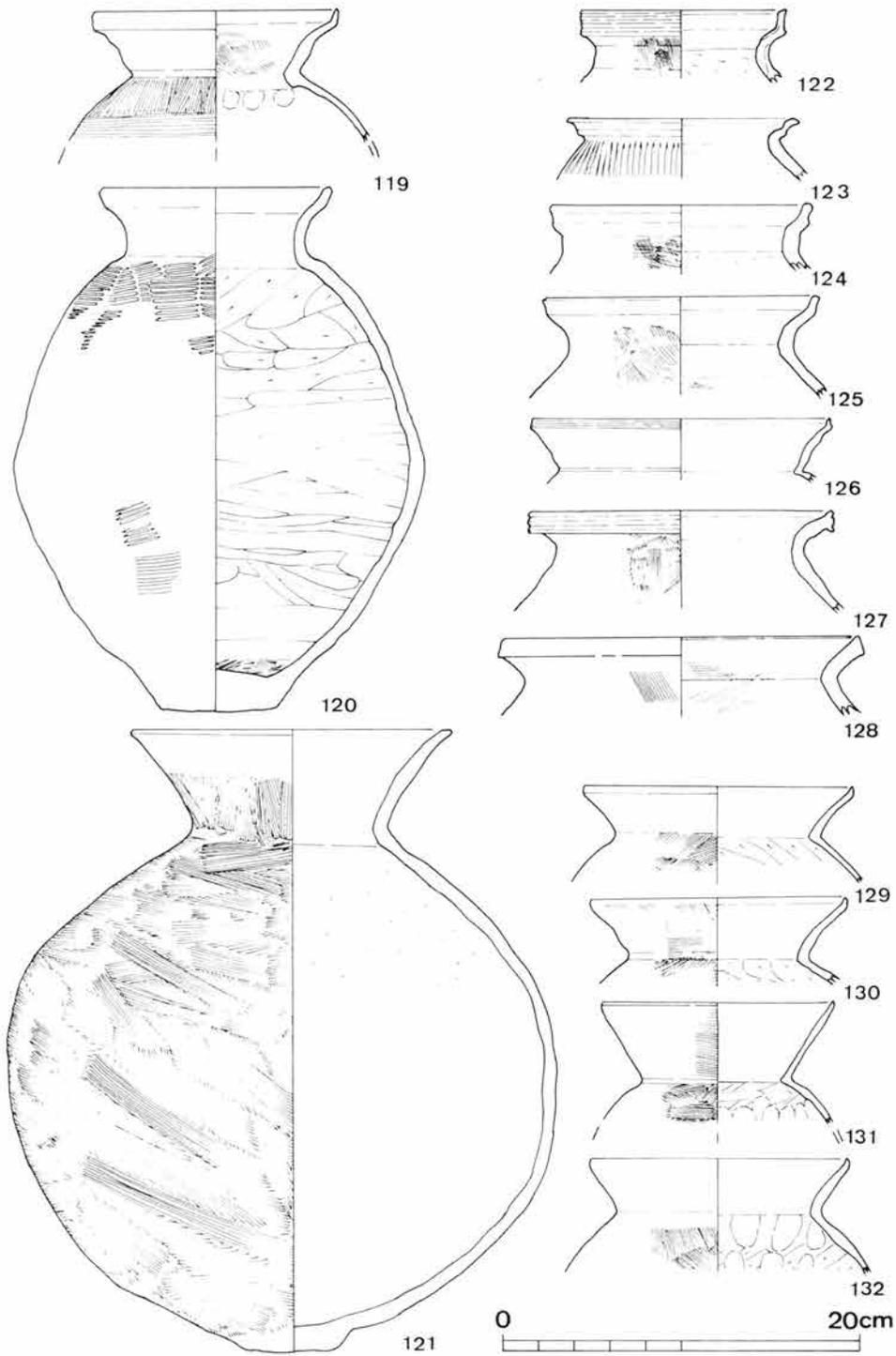
甕(119)は口縁が外反し、端部近くで一度外折し、わずかに立ち上がる甕Aである。甕(120)は口縁部が頸部より、ゆるやかに屈曲し、端部はまるくおさめる。底部は突出する分厚い平底である。甕B類である。壺(121)は口縁部が「く」の字に外折し、端部は外反している。体部は球形をなしており、底部は突出する分厚い平底である。壺A Iである。

甕(122)は口縁部外面に鋭い稜が走るもので、擬凹線文をナデ消している甕C類である。甕(123)は「S」字状口縁を呈し、体部にハケ目を施す東海系の甕D類である。(122・124・120・125)は甕C類である。

甕 (124) は外反する口縁部の端部をやや拡張し、外面に稜をもち、上方へつまみ上げている。甕 (126・129・130・132・119) は「く」の字状に屈曲して立ち上がり、口縁端部はつまみ上げて尖りぎみにおさめる甕Eである。甕 (126) は口縁端部の外面に擬凹線文が若干ある。甕 (127) は甕G類で、口縁端部外面に2条の凹線文を持つもので、畿内第Ⅳ様式以降の凹線文が盛行する時期のものである。(128) は甕F類のもので甕 (127) と同様、口縁部断面が三角形を呈するが口縁部外面に凹線を持たない。壺 (129) は壺A 2で、壺 (131) と同形に近いが、(131) は口縁端部が「く」の字状のまま直線で尖りぎみにおさめる壺Aである。器壁は薄い。



第22図 S B0202・S B0206 出土遺物実測図



第23図 SB0202 出土遺物実測図

小型丸底壺は (A・B・C・D・E・F・G) と6形態に分類されるが、住居跡 SB0206 からは (133) のB類と (134) のC類、(135) のG類が出土している。(133) は扁球形を呈し、口縁部が直線的に外上方に開く。口縁部は若干器壁が厚くなっている。(134) は口縁部が長く直線的に外上方に開くものと考えられる。外面に細かいヘラミガキを施している。(135) は丸い器体にゆるやかに屈曲し、口縁部が上方に向いた複合口縁を呈し口縁部外面に鈍い擬凹線文を施している。体部外面は細かいヘラミガキを丁寧に施している。

高杯は SB0206 住居跡内の中央上層から (B・C・E・F・G・H・J) の8形態が出土している。B類は (142・143) の2個体がある。(第17図26) の様な中実の短い柱状部をもち、直線的に開く脚部を呈するものである。C類は (147・148) で裾部で大きく開く脚部をもつと思われる鉢状の杯部である。E類は杯部と口縁部の接合部に段を有する高杯である。

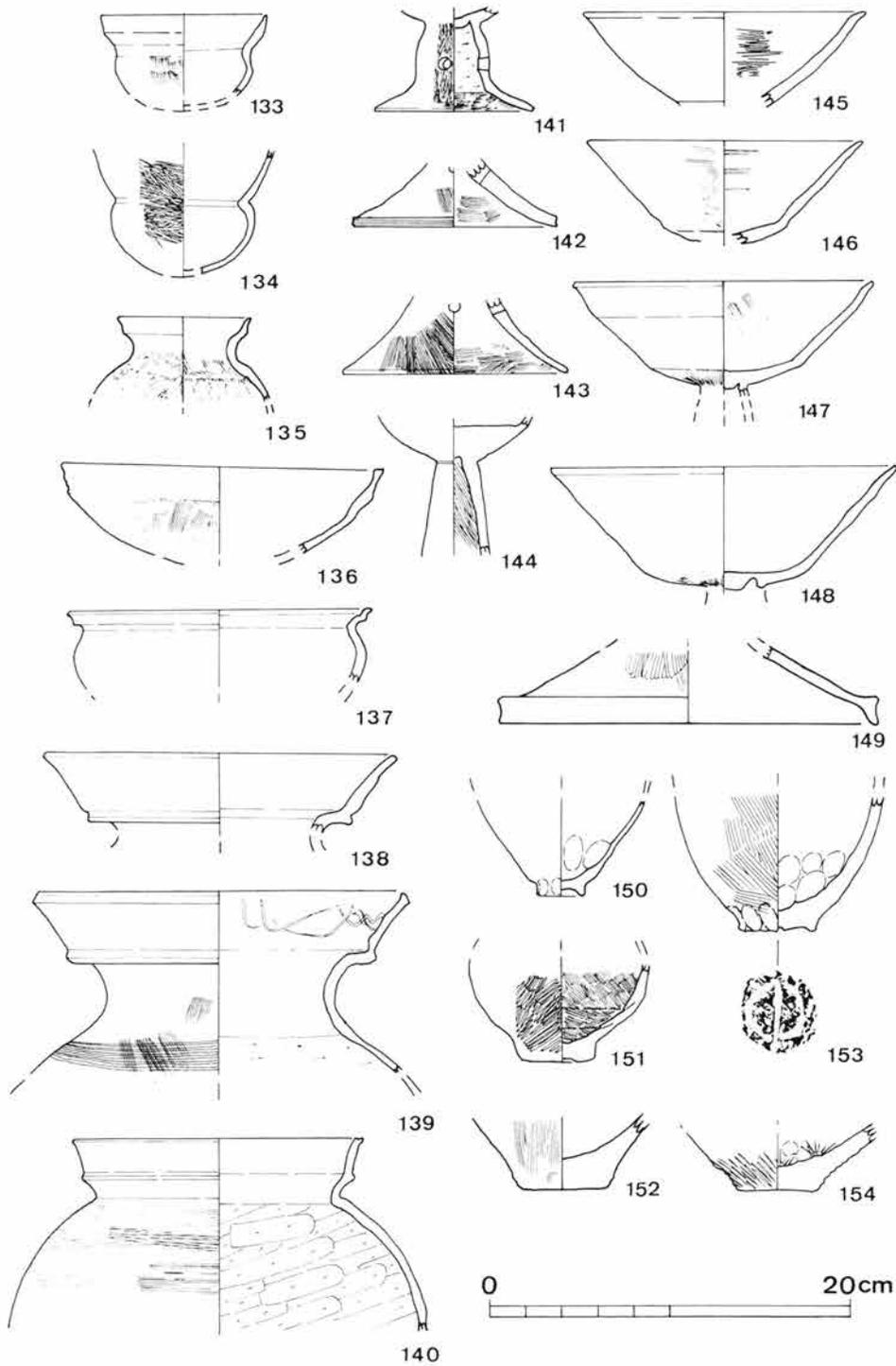
(F) は口縁部外面に鈍い擬凹線を施す杯部のみである。(G) は中空円筒の中ふくらみの柱部を呈する高杯である。(H) も中空の円筒状柱部を呈する高杯であるが、杯の内面底が厚く平坦になっている。(J) は裾部で大きく開き端部外面に鈍い擬凹線文の後ナデ消している。

鉢は (A・B・C・D) に分類されるが、SB0206 からはC類の (137) とD類の (150・153) の3点が出土している。(137) は「S」字状に体部から口縁部にかけて屈曲しており、口縁端部は外反ぎみに上方に向いている。(150) は内彎ぎみの体部に指圧痕がある小さな脚台が付く全体に薄手のものである。(153) は (150) とほぼ同形を呈するが、若干厚手である。脚部は (150) よりも短く、底部に一本の沈線を施している。

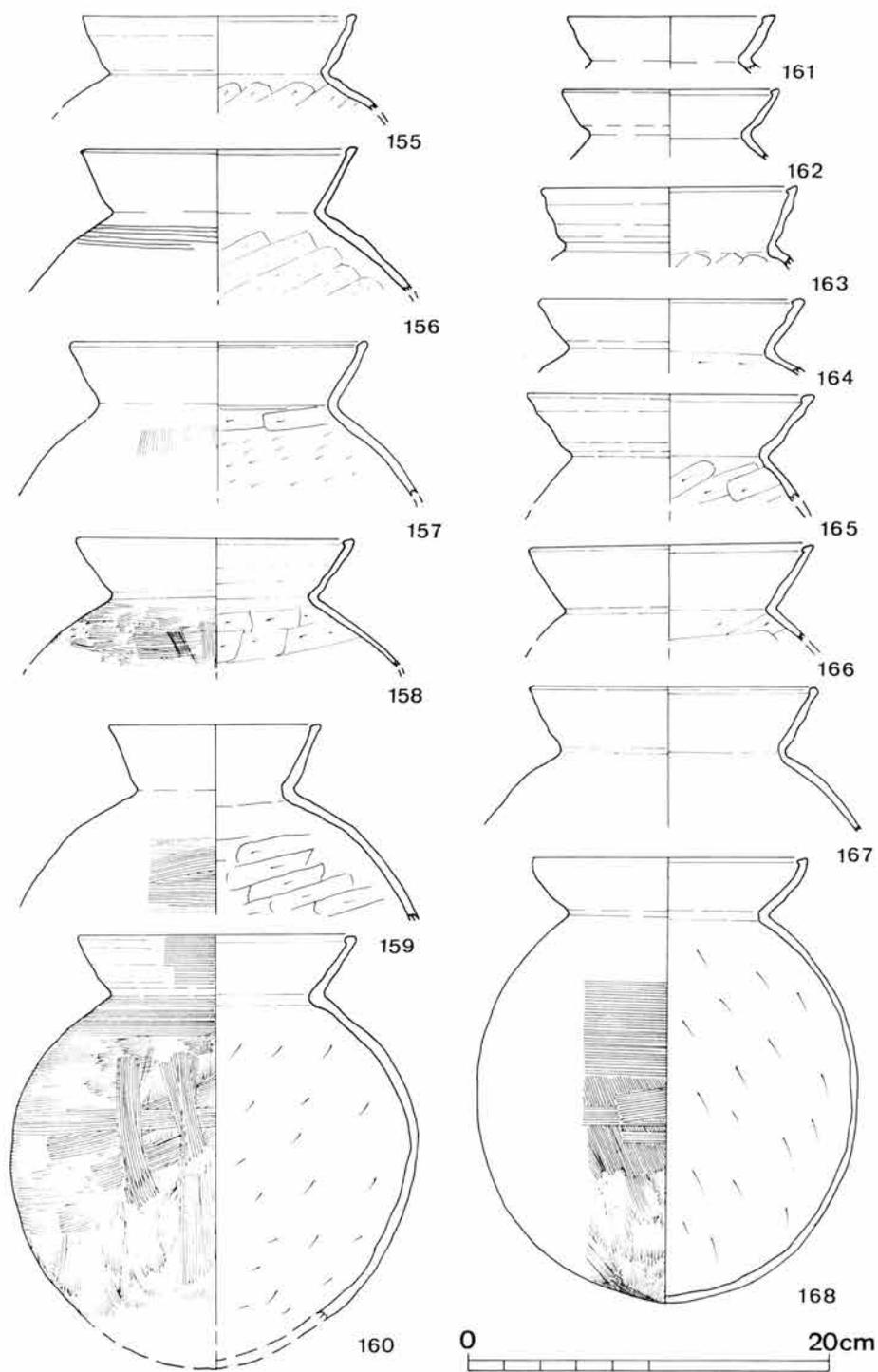
壺は B・C 類が SB0206 から出土している。B類は (138・139)、C類は (151) がある。B類は二重口縁の壺である。(138) は頸部が欠しているため不明であるが、大きく彎曲し体部が球形に近い形態をとるものであろう。二次口縁端部はまるくおさめて、一次口縁部がほぼ水平に小さく張り出している。(139) は頸部、体部は (138) と同様であるが、二次口縁端部がつまみ上げる庄内式の特徴を残している。一次口縁部はほぼ水平となり小さく張り出している。外面に細かいハケ目、内面にヘラケズリを施す布留式壺である。

C類は小型品の壺で、器高10cm前後のものと考えられる。底部は中央の凹んだ平底である。外面は右上がりのタタキ。内面は左上がりのハケ目を施している。

甕H類の (140) は口縁が一度短く外反し、さらに屈曲して外傾する二重口縁である。屈曲するところには稜をつくり、口縁端部は若干のはみだす稜をもつ平坦面である。(152・154) は平底の底部のみであるが、甕と考えられる。(152) は外面がハケ目 (154) は外面が左上がりのタタキで内面は細かいクモノ巣状のハケ目を施す。



第24図 SB0202 出土遺物実測図



第25図 SB0202 出土遺物実測図

甕 口縁端部内面を肥厚させた甕Ⅰ類ばかりである。甕は全体的に内面がヘラケズリで外面が細かい横方向のハケ目で器肉が薄く球形の体部を呈している。口縁部は「く」の字状に外反するが、内彎きみに伸びるもの(168)がある。口縁端部が巻き込むかんじて肥厚させた(160・164・165)と端部を小さくさせた(155・156・157・158・159・161・162・163・166・167・168)がある。中でも肥厚部が平坦面をもつ断面三角形状を呈し尖りきみに終らせる(158・162・163・165・166・168)がある。甕Ⅰ類の中でさらに分類し、口径が12cm前後の小型をA類、15cm前後をB類、16cm以上をC類と分類した。A類は(159)の口径の割に口縁高が長く伸びている。他に(161・162)がある。(161)は若干厚手で口縁端部はあまり肥厚していない。B類は(155・156・158・160・163・164・168)があり、もっとも多い。C類は(157・165・166・167)がある。

S B0204 出土遺物(第26図)

竪穴式住居跡 S B0204 からの出土遺物は須恵器の杯身・杯蓋・壺や土師器の甕・壺・小型丸底土器・甗が出土している。布留式土器が須恵器の中に伴出していることから古墳時代中期から後期にかけての住居跡と考えられる。須恵器の杯身・杯蓋は住居跡北西・北東床面に貼りついて検出している。また、(177)はカマドの一部に転用されていた。(178)甗はカマド付近に散乱した状態で検出した。

須恵器(杯蓋・杯身・壺)

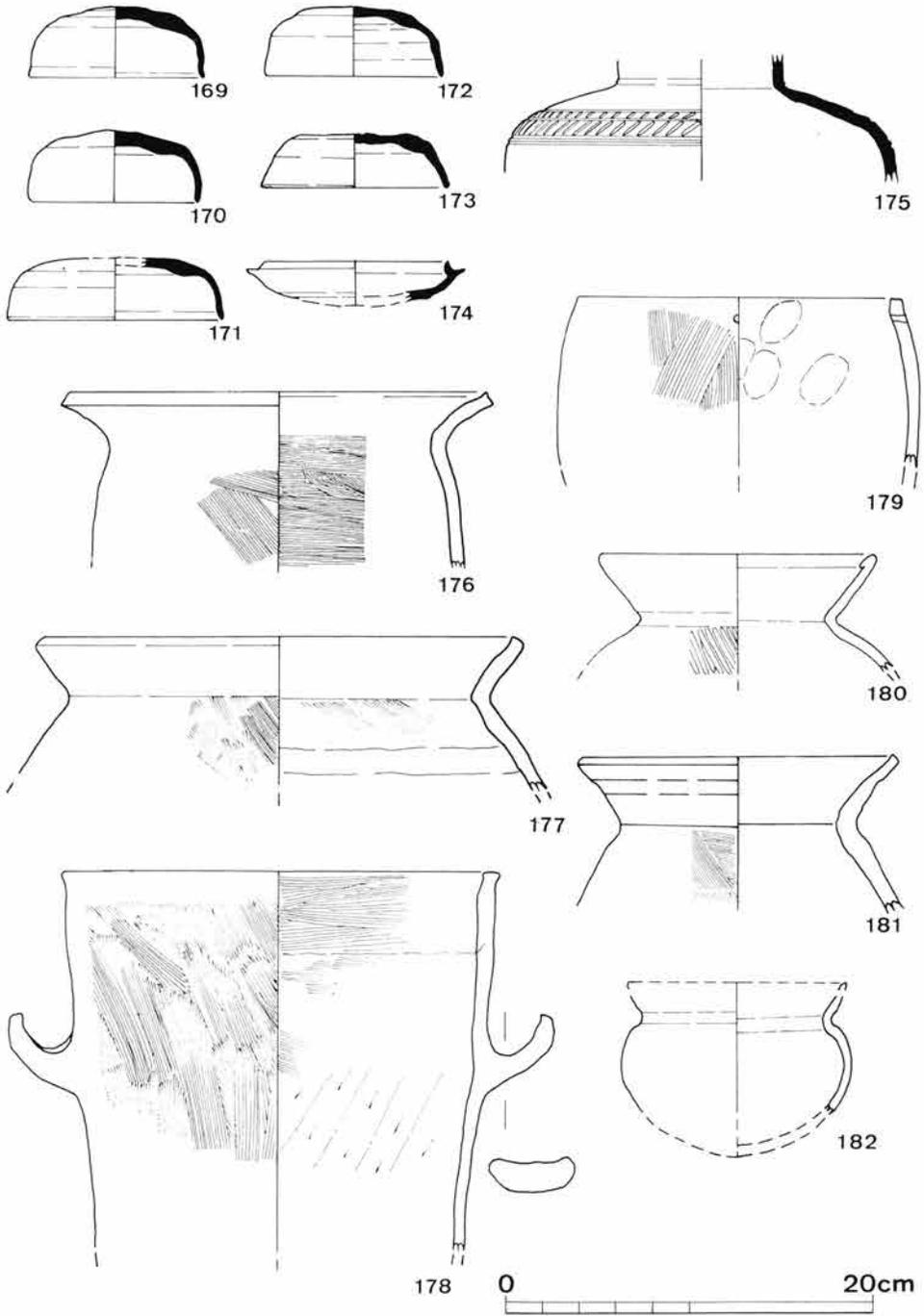
杯蓋は天井部がやや丸味をもち口縁部はまっすぐ降りる。口縁端部は丸い。天井部はヘラ削りを施し、その他はヨコナデ調整である。(171・180)は天井部が他に比べて若干平坦で浅い。(169・171)は焼成軟である。

杯身(174)は立ち上がりの低いものである。外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ調整である。第18図B地区包含層出土遺物(4)(須恵器)の(32~37)杯蓋・杯身はS B0204の住居跡外の包含層から出土したものであるが、S B0204に伴う遺物と考えられる。

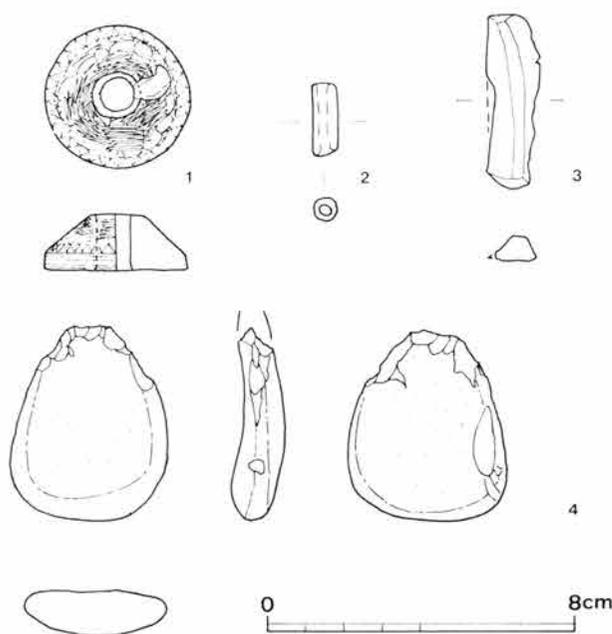
壺(175)は肩部はややはり、頸部はほぼ上方に向かう、また肩部に4本の沈線と2段のきざみ目文様を施している。内外面ヨコナデ調整である。

甕(176・177・180・181)の4点が出土している。(176・177・181)は体部が内彎気味にのび頸部で「く」の字状に屈折する。内外面ともハケ目調整である。(177・181)は若干口縁部が長く、胴部が張りだしている。(177)は大型の甕で体部に巻き上げの粘土紐の痕を残す。(180)は口縁端部内面を肥厚させた甕Ⅰ類である。口縁端部の肥厚は他に比べて厚く大きい。外面タタキ、内面ヘラケズリである。

無頸壺(179)は体部からゆるやかに内彎しながらまっすぐ立ち上がり口縁部が樽形を呈す



第26図 SB0204 出土遺物実測図



第27図 S B0202・0204 付近出土遺物実測図
紡錘車(1)、ガラス製管玉(2)、鉄器(3)、磨石(4)

る。口縁部付近に一孔を穿っている。外面ハケ目、内面ナデ調整、指圧痕を残す。

甌(178)は体部から口縁部にかけてまっすぐにのび、口縁部は直口して、端部近くでヨコナデしている。両側面に把手をもつ。外面、内面上半はハケ目、内面下半はヘラ削りである。

小型丸底壺(182)はB類である。体部は丸く球形を呈するもので頸部で「く」の字状に屈折している。口縁部は若干内彎ぎみに外上方に開く。

S B0202・S B0204 付近出土遺物(第27図)

紡錘車(1)はS B0204の東南約2mより出土している。厚手の円錐台形を呈している。滑石製で外面に細かいノミ痕、鋸歯文等を施している。大きさは径3.8cm、厚さ1.5cm、孔径0.9cmを測る。

管玉(2)はS B0206内の中層から出土したガラス製管玉である。暗青色を呈し小さな気泡がみられる。全体的に丸く角をもたない断面が長方形である。大きさは長さ1.9cm、径0.6cm、孔径0.2cmを測る。

不定形鉄器(3)は細長くゆるく彎曲した鉄器で、断面は台形を呈する。彎曲した内側に刃部を形成している。大きさは長さ4.6cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。

磨石(4)はS B0202出土である。平面形が楕円形を呈する薄い篋状のものである。板岩を使用し全面を磨いている。上縁端部を打ち欠いている。大きさは長さ5.1cm、幅4.2cm、厚さ1.2cmを測る。

(村尾 政人)

5. まとめ

千代川遺跡は2次に亘る調査が終了し、第1次調査では千々川の氾濫原であることが判明しただけであったが、第2次調査において多数の遺構・遺物を確認した。

当調査地は、亀岡市の西南部丘陵の東側に伸び出た舌状台地に位置し、千代川平野を一望できる良好な土地であるためか、縄文時代後期から鎌倉時代に及ぶ長期の複合遺跡であるこ

とが判明した。検出した遺構及び遺物は地区や時期によって質・量に差はあるが、おおむね弥生時代末期から鎌倉時代に及ぶ住居跡・建物跡・土塋・溝・柱穴等である。当地方の空白を埋める初めての遺構・遺物であり、長期に亘る人間の営みが窺われることから非常に重要な遺跡である。

以下、遺構について時代順に述べていく。

今回の調査では縄文時代の遺構は確認できなかったが、縄文時代後期・晩期・弥生時代の土器が少量出土した。遺跡の立地条件からみて、当時は自然堤防背後の丘陵上に小規模な集落が築かれていたと考えられる。また千代川遺跡の周辺には湯井遺跡が近接し、同様の段丘上にあり、同じ集団による弥生時代から中世にかけての集落が広がっていたと考えられる。他に弥生時代の遺構としては、千々川より北側微高地に大將軍遺跡がある。これらのことから、千代川遺跡は湯井遺跡を母体とする一集落と考えられる。

今回の調査では竪穴式住居跡を5棟検出しているが、中でももっとも古いものに弥生時代末期の隅丸方形を呈する S B 0202 がある。弥生時代末期の住居は、丘陵上や台地上に立地している場合が多く、当遺跡も例にもれず類していることが言える。また、S B 0202 以外には弥生時代の遺構を検出していないが、同丘陵上には他に数棟の竪穴式住居があったと考えられる。その後、S B 0206 が古墳時代前期まで続くものと考えられ、他に S B 0201・S B 0203 も同時期から始まる。S B 0201 は短い時間で生活機能を失ったと考えられ、S K 0208 も同時期で終了していることや、位置的に考えて、S B 0201 で使用されていた遺物が放棄されたものと考えられる。S B 0202 からは畿内第V様式の「タタキ」を持つものから庄内期を主体とした一群が出土し、それに続く S B 0206 では布留式甕を主体とした多数の資料を得た。これらの時期に近い丹波地方の出土例は、他に園部町曾我谷遺跡から出土した、庄内期併行のものがあるだけで数少ない貴重な資料である。S B 0206 に続くものとしては S B 0203・S B 0204 が布留式盛行期から古墳時代後期まで続いたと考えられるが、中でも S B 0204 はもっとも遅く古墳時代末期まで続いたものであろう。

住居跡の主軸は西側へ若干ふるものと、真北方向に向けるものに分けられるが、前者が古墳時代前・中期の住居跡で、後者が古墳時代後期と考えられる。また後者に属する S B 0204 は、唯一の馬蹄形を呈するカマドを北壁にもつ。古墳時代後期のものとしては他に溝 S D 0218 が地形の傾斜に沿って南西から北東へ流れていたものと考えられる。溝は3本を確認しており、古墳時代後期に属する S D 0218 以外は奈良・平安時代の小流である。また、S D 0213 は中・近世の畑地に伴う溝と考えられる。奈良・平安時代の掘立柱建物跡と考えられるものが6棟ある。S B 0203 竪穴式住居が機能を失った後から S D 0213 が出現するまでの間に建っていたと思われるものに S B 0210 がある。また S B 0212 も同時期と考えられ

るが、短期間に建て直したものであろう。S B0217・S B0207も同様と考えるが、S D0209・S D0218があることから次の様な変遷が考えられる。S B0203→S B0210→S B0212となり、この時期にS D0218が機能を失いS D0209となる。またS B0212はS B0217→S B0207へと南に移動する。出土遺物は、掘立柱建物跡の柱穴から土師器・須恵器の小片が若干出土している。同時期の遺物は包含層内から検出しており、同時代の数少ない日常生活を知る貴重な資料である。また、この期の土器類に日常生活にあまり関係のない灰釉・緑釉陶器や輸入磁器が含まれていることは、寺院・官衙などや千代川国府推定地と強い関係があるものと考えられる。奈良末から平安時代の須恵器には器形・製作手法の画一的なものが多いが、特に篠窯と考えられる製品が数多く含まれている。篠窯では、集中生産した製品を平安京中心に供給していたと考えられるが、各地から出土することから、平安京以外にも供給されたのであろう。灰釉陶器(第74図)は東海系(猿投)と思われるが、緑釉陶器(第19図73)などは篠窯であろう。また、平安期の施釉陶器を模して作った土師器皿や底部がやや小さく、薄手の黒色土器も含まれている。黒色処理は、内面と口縁部外面の一部で、内面はへら磨きされ黒色の光沢をもっている。黒色土器はやがて瓦器碗に変化していくのであろう。

以上、今回の調査により得られた各時期の成果は当地方の文化を解明する上に貴重な資料を提供するものと言えよう。(村尾 政人)

(2) 桑田郡糸里制遺構(南金岐)

1. 位置と環境

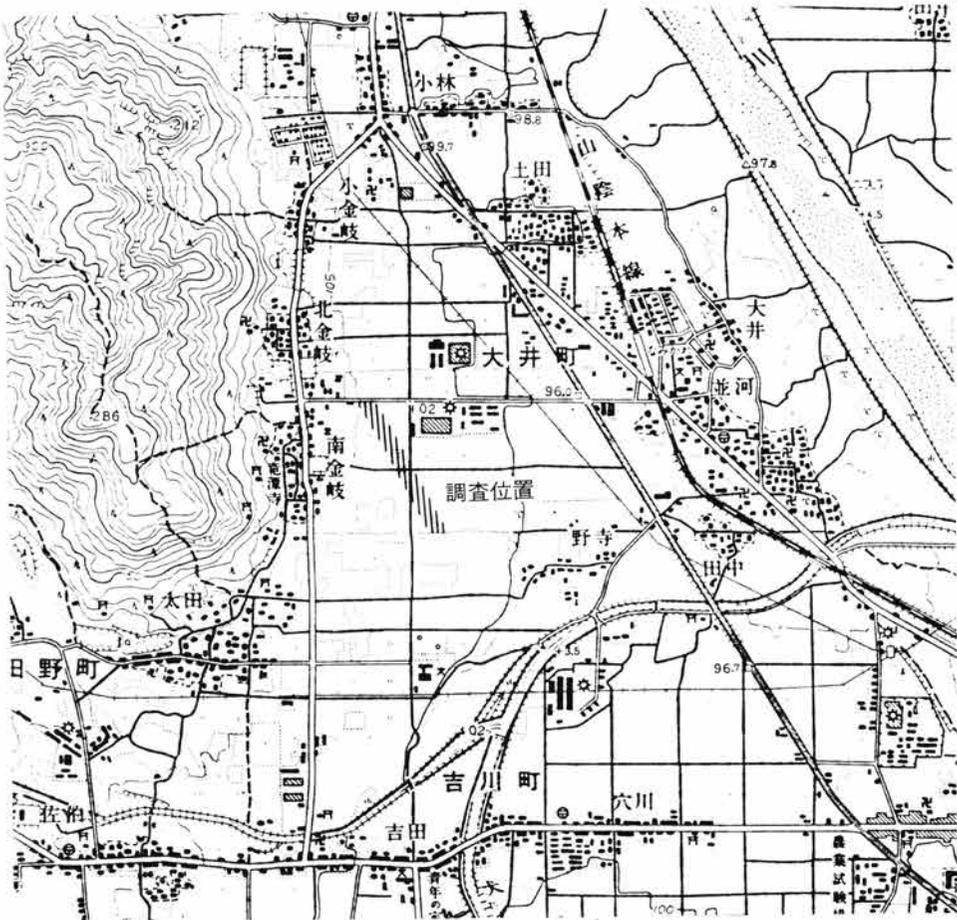
亀岡は京都府を二分する二大河川の由良川、大堰川により切り開かれたなだらかにつづく丹波山地の最南端に位置する。盆地中央を大堰川が南流し、平野裾には丘陵が長い間の浸蝕作用によりできた河岸段丘を形成している。

今回の調査地は、亀岡盆地のほぼ中央に位置する標高431mの行者山南東の平野部に広がる良好な水田地帯である。亀岡盆地内は全域に碁盤目状の方格地割が整然と広がる糸里制跡が見られ、調査地である大井町南金岐では半折型が多く認められる。このような半折型が認められるのは、行者山からの緩やかに張り出す丘陵のため、狭い地形を利用したものと考えられる。また南金岐周辺には弥生時代の馬場ヶ崎遺跡、古墳時代の方墳である馬場ヶ崎古墳1・2号墳、古墳時代後期の群集墳である小金岐古墳群・北金岐古墳群・鹿谷古墳群などがある。馬場ヶ崎遺跡は昭和52年に宅地開発に伴い亀岡市教育委員会の発掘調査が行われた結果、弥生時代後期の土器類と幅1.2m、深さ0.8mの溝が検出された。溝は地形の傾斜に沿った南北方向のもので、確認されているのは6mであるが、おそらく近接に予想される住

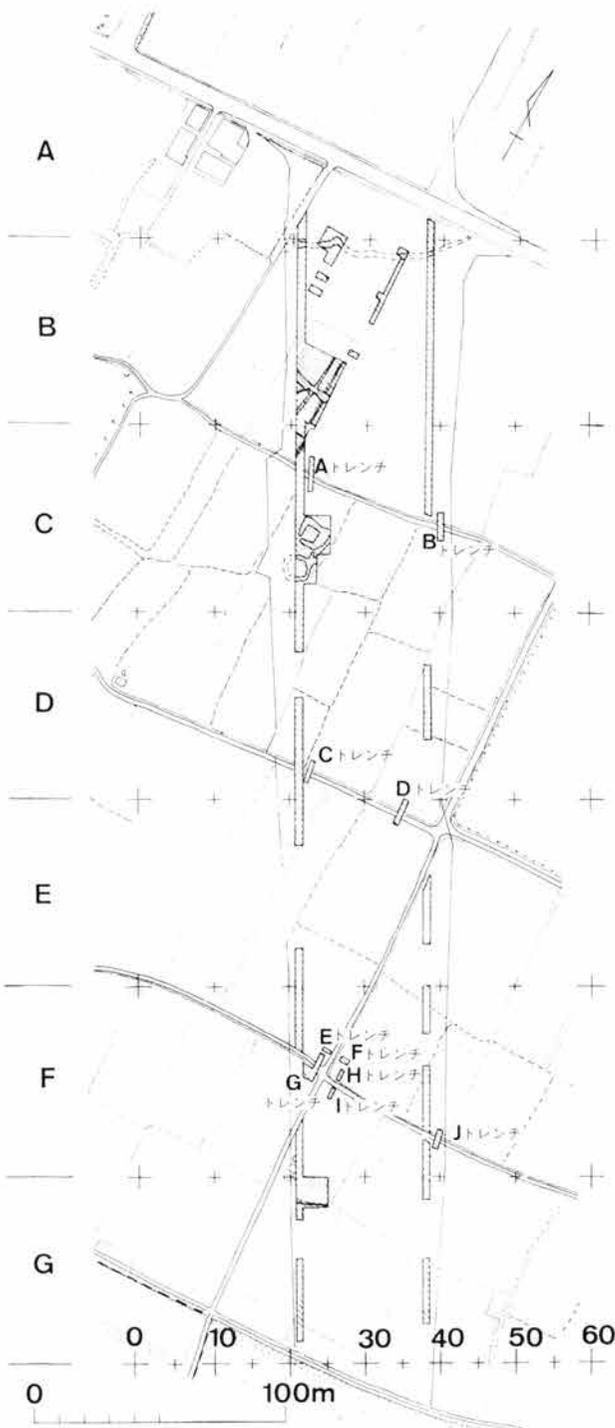
居跡から続くものであろう。また遺跡内には、一辺12m高さ3mの1号墳と一辺21m高さ3mの2号墳が間隔140mをおいて並ぶ。その西側丘陵上には約100基の横穴式石室を有する小金岐古墳群がある。昭和45年に国道9号バイパスに伴う分布調査が行われ、昭和51年度に発掘調査が実施されている。行者山周辺には鹿谷古墳群・北金岐古墳群などがあり、特に注目すべきものに小金岐76・77号墳や鹿谷古墳など石柵を有するものがある。また小金岐古墳の墳丘から縄文時代に属する磨製石斧が3点出土している。行者山の最南端（太田）には千ヶ畑城、犬飼川の北側には野寺廃寺などもある。

2. 調査結果

桑田郡条里制（南金岐地区）の調査は昭和56年9月17日から同年12月10日まで現地調査を行った。調査地は東西南北方向に条里制区画の道路や畦畔・溝などが整然と並ぶ水田地帯で



第28図 南金岐遺跡調査位置図



第29図 南金岐遺跡地区図

あるが、南金岐地区の北限では行者山より延びた丘陵に若干高い畑地がある。区画された1町間(約109m)単位の水田が4枚あり、各1町に小字名が付してある。北から小字又ケ田・町田・重見・丁田とあり、その1町内には地形に沿った水路が走っている。亀岡盆地大井川右岸の条里制については竹岡 林氏の研究があり、中・近世の文献や地籍図によって条理地名、条理制の復元、坪付方法などが行われている。

条里制に関連すると考えられる小字名は町田・丁田である。町田・丁田は千代川町大字湯井の30坪にあたる所が丁の坪であることが知られていることから、町田・丁田も丁の坪から変化した可能性が高い。また丁田には1の坪・2の坪・五反田がある。

今回の調査は、今までの地籍図、文献や測量等による調査と違い、現在も耕作されている水田であったため困難を極めたが、発掘調査に入ることとなった。まず、調査地区割を千代川遺跡と同様に75m四方の大地区を設定することからはじめた。75m

四方の大地区は道路予定中心部を基準に北からA～Gに割付け、さらに小地区として3m四方の方眼に区画した。また小地区は南西隅の杭を基準に南北を小文字アルファベットで（a～yの25）、東西を数字（道路予定路線中央が30ライン）で地区名を付けた。

調査はAからH地区にいたる21ラインと38ラインの3m幅トレンチを、灰褐色土(第2層)まで重機により掘削した。その結果、Bx21地区で幅2m深さ1.7mの地山面を切り込んだ溝 S D0101、Ba～Bd21地区で溝 S D0102・S D0103・S D0104・S D0105・S D0106、Cr～Bf21地区で方形周溝墓3基、Bv21地区で溝 S D0107を検出した。これらの21ラインのトレンチでは弥生時代から中世に及ぶ溝を検出したが、38ラインのトレンチでは地形が低湿地であったためか、遺構は検出しなかった。また現在の地表面に残っている畦畔、溝、農道などの条里制地割10か所（A～Jトレンチ）の断ち割りを表土下約1～2mまで行った。しかし、現在の畦畔、溝、農道の下位からは古代・中世の遺構は検出されなかった。

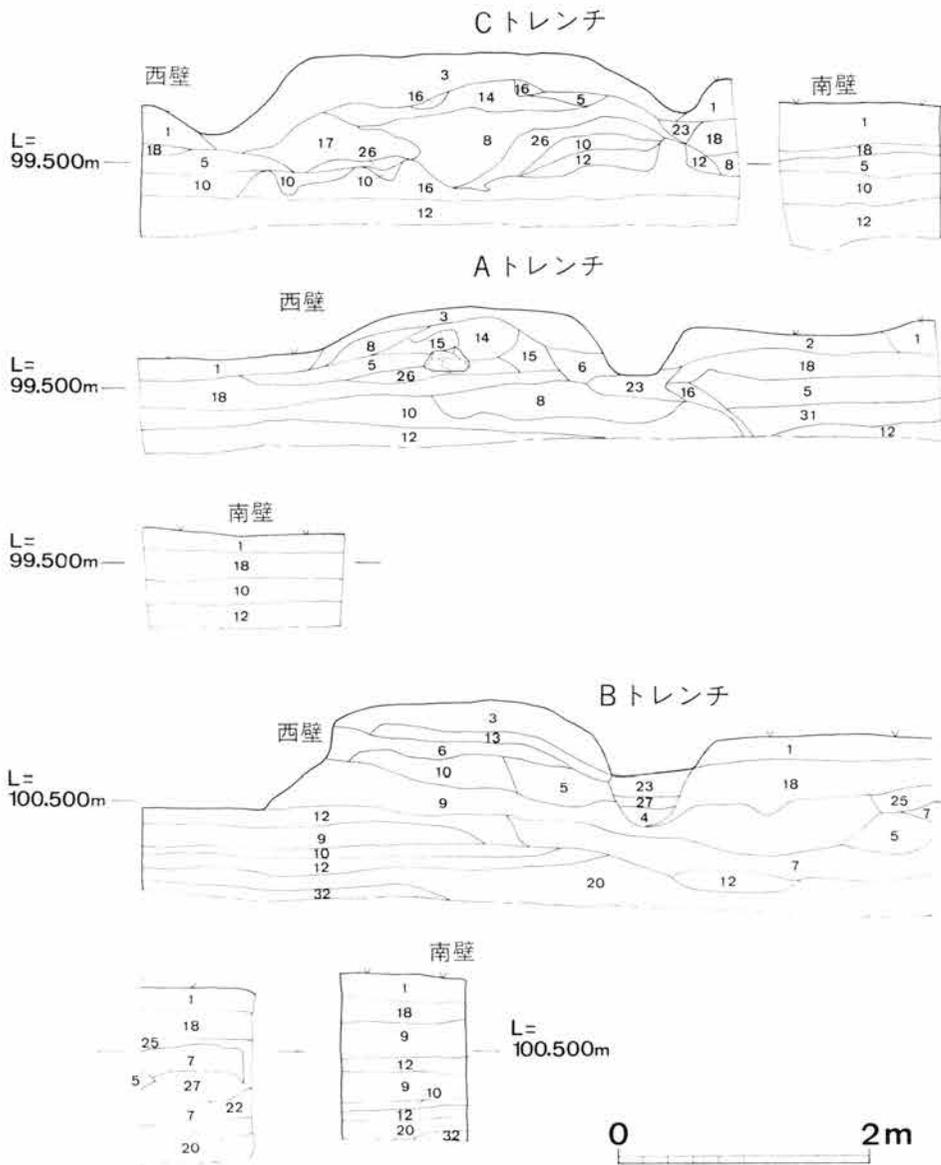
3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期の溝 S D0101、弥生時代中期から庄内期までの溝 S D0102・S D0103・S D0104・S D0105、弥生時代中期の方形周溝墓3基であり、中でも最も多量の弥生式土器が出土した溝 S D0103・S D0104 は注目すべきものである。以下、各区の層位と主な検出遺構について簡単に説明する。

弥生時代中・後期の遺構

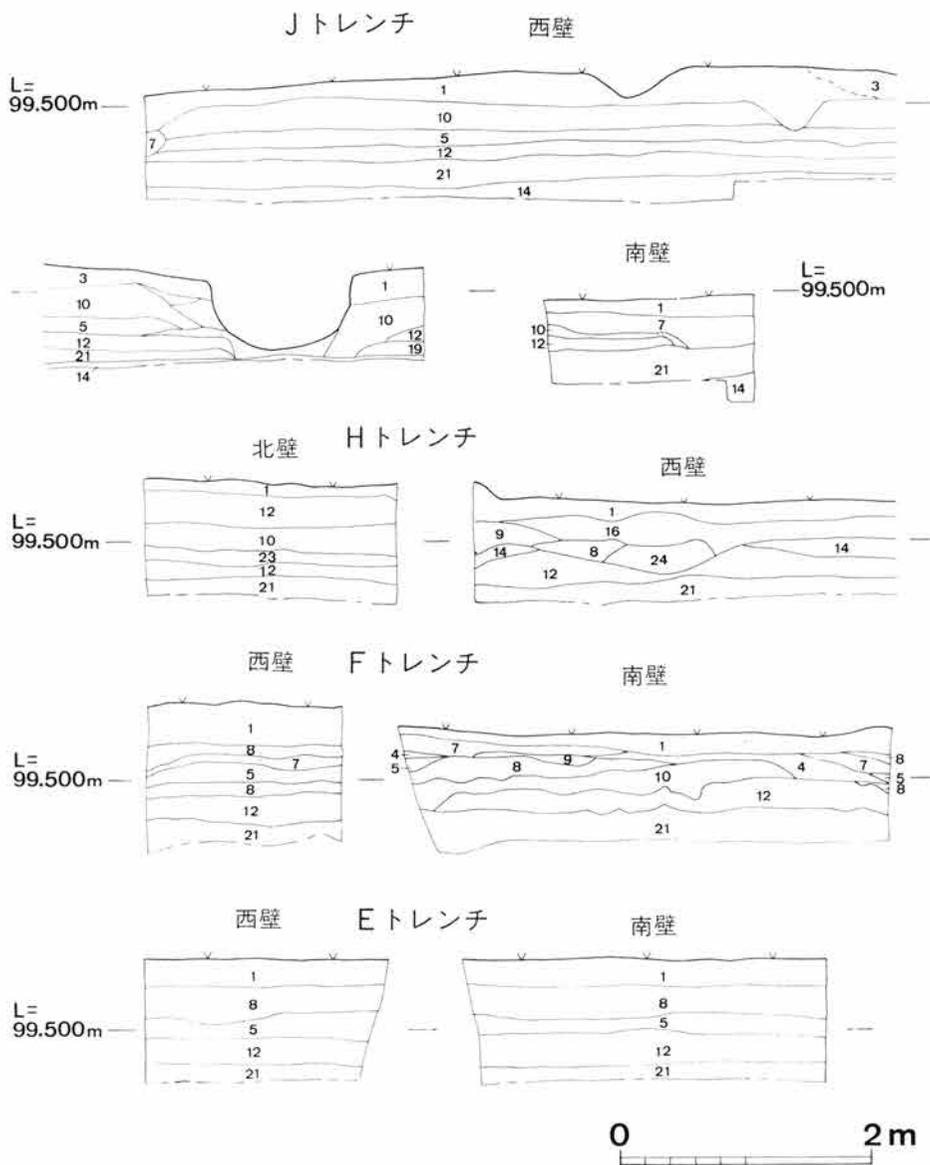
S D0101はB x 21地区からB w 38地区の丘陵が西から東へ傾斜する方向に掘られた溝状遺構である。B y 24地区では大きく蛇行しており、溝幅2m、深さ1.7mを測る。B x 21地区では、黄褐色粘土(地山)をU字状に切り込んでいるが、B y 24地区やそれより東側ではV字状に切り込まれた溝に黒褐色粘土層・茶褐色粘土層・黄褐色砂層が堆積している。また大きく蛇行しているところから、溝は人為的なものではなく、自然の流路と考えがちであるが、溝内には少なくとも3次にわたる造り替えがあったことが溝内の堆積層から窺うことができる。溝はB w 38地区で浅く小さな自然流のようになっていた。これらのことから溝は検出した長さだけで55mを測り、溝の規模から測定して、標高110m付近にあると考えられる住居跡から流れるものであろう。溝内からの出土遺物は弥生時代後期の甕片が10数片出土している。

S D0102はB d 21地区で S D0103・S D0104 に合流していた幅0.4m、深さ0.2mを測る小流で、地形の傾斜に沿って西から東方向へ流れていたと考えられる。また、この溝はS D0103に流れていたものが短期間で機能を失ったものであろう。溝の断面はU字形を呈し、茶褐色土層に掘り下げている。溝内には暗茶褐色土層・黒褐色土層が堆積していた。ま



第30図 A・B・C トレンチ 断面図

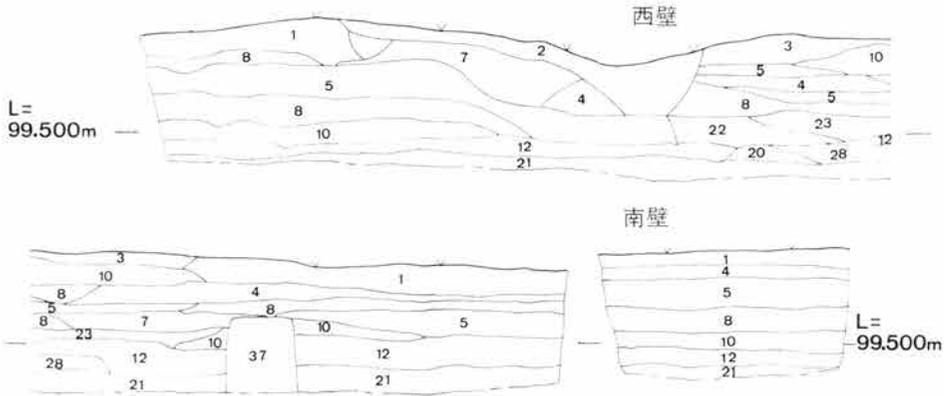
1. 耕作土 2. 表土 3. 道路 4. 暗灰色土 5. 灰褐色土 6. 淡灰褐色土 7. 暗灰褐色土 8. 茶灰色土
 9. 暗茶灰色土 10. 茶褐色土 11. 淡茶褐色土 12. 暗茶褐色土 13. 黄灰色土 14. 黄褐色土 15. 淡黄褐色土 16. 青灰色土 17. 明青灰色土 18. 暗青灰色土 19. 黒色土 20. 黒褐色土 21. 黒ボク
 22. シルト 23. 黄褐色砂層 24. 明黄褐色砂層 25. 暗黄褐色砂層 26. 灰褐色砂層 27. 茶褐色砂層
 28. 茶灰色砂層 29. 茶褐色砂質土 30. 灰褐色砂質土 31. 黄褐色砂質土 32. 黒褐色砂質土
 33. 暗茶褐色粘質土 34. 黄褐色レキまじり 35. 暗黄褐色レキまじり 36. 地山 37. 暗渠 38. コンクリート



第31図 J・H・F・E トレンチ断面図

- 1.耕作土 2.表土 3.道路 4.暗灰色土 5.灰褐色土 6.淡灰褐色土 7.暗灰褐色土 8.茶灰色土 9.暗茶灰色土 10.茶褐色土 11.淡茶褐色土 12.暗茶褐色土 13.黄灰色土 14.黄褐色土 15.淡黄褐色土 16.青灰色土 17.明青灰色土 18.暗青灰色土 19.黒色土 20.黒褐色土 21.黒ボクシルト 22.シルト 23.黄褐色砂層 24.明黄褐色砂層 25.暗黄褐色砂層 26.灰褐色砂層 27.茶褐色砂層 28.茶灰色砂層 29.茶褐色砂質土 30.灰褐色砂質土 31.黄褐色砂質土 32.黒褐色砂質土 33.暗茶褐色粘質土 34.黄褐色レキまじり 35.暗黄褐色レキまじり 36.地山 37.暗渠 38.コンクリート

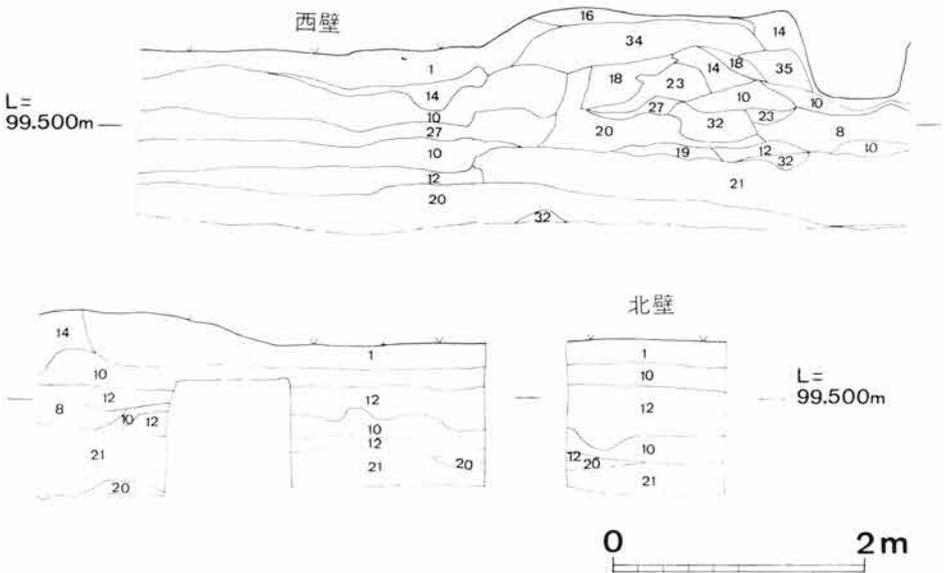
Gトレンチ



Iトレンチ



Dトレンチ



第32図 G・I・D トレンチ断面図

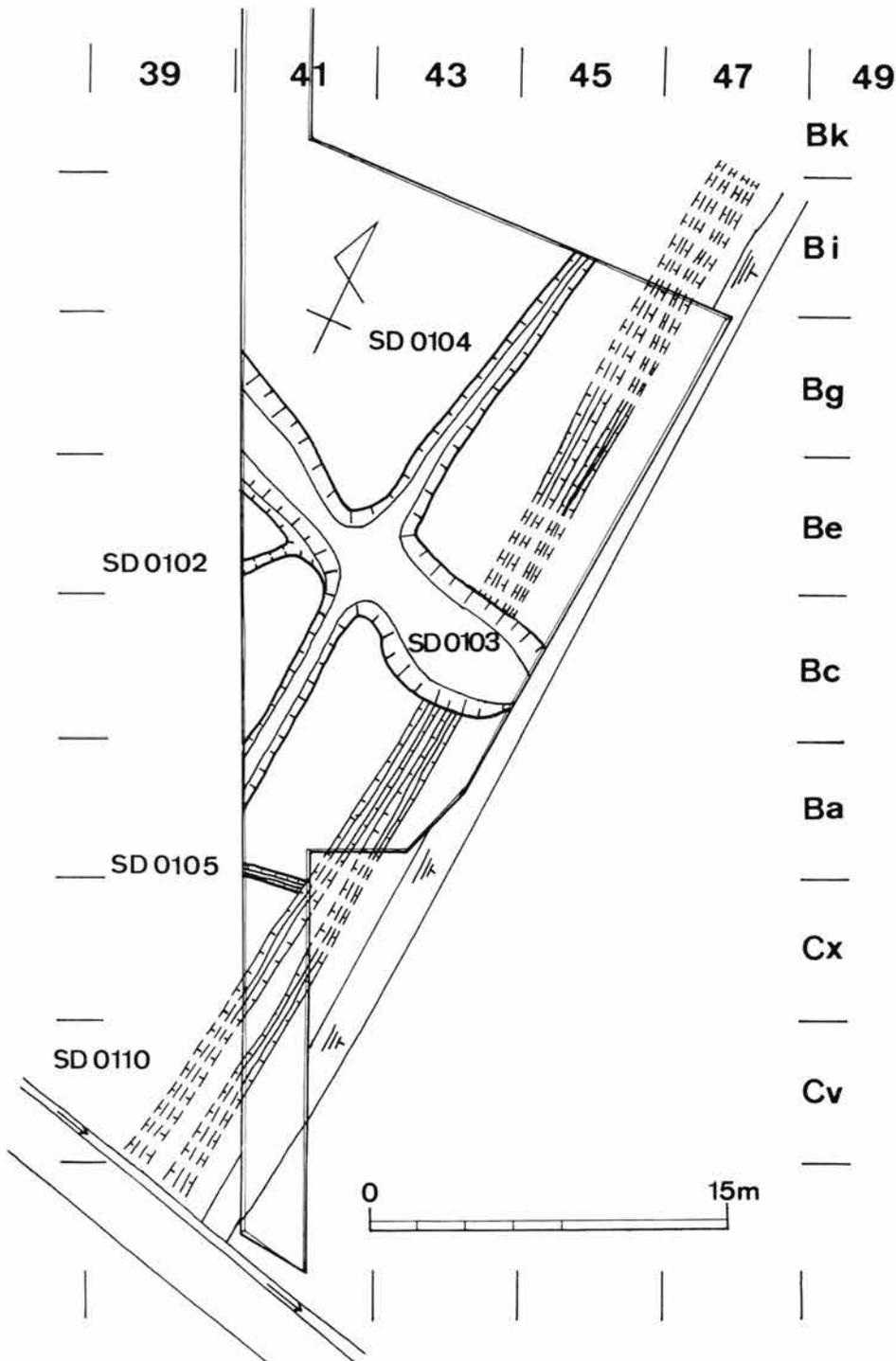
- 1.耕作土 2.表土 3.道路 4.暗灰色土 5.灰褐色土 6.淡灰褐色土 7.暗灰褐色土 8.茶灰色土 9.暗茶灰色土 10.茶褐色土 11.淡茶褐色土 12.暗茶褐色土 13.黄灰色土 14.黄褐色土 15.淡黄褐色土 16.青灰色土 17.明青灰色土 18.暗青灰色土 19.黒色土 20.黒褐色土 21.黒ボク 22.シルト 23.黄褐色砂層 24.明黄褐色砂層 25.暗黄褐色砂層 26.灰褐色砂層 27.茶褐色砂層 28.茶灰色砂層 29.茶褐色砂質土 30.灰褐色砂質土 31.黄褐色砂質土 32.黒褐色砂質土 33.暗茶褐色粘質土 34.黄褐色レキまじり 35.暗黄褐色レキまじり 36.地山 37.暗渠 38.コンクリート

た、この溝はほぼ直線的に東西方向に走っている。溝内からの出土遺物には、弥生時代後期の土器片が少量あった。

S D0103はB g 21～B d 25地区を東西方向にほぼ直線で走り、S D0104 と交差し、若干北側へ彎曲して B d 26 地区で広く、浅くなって絶える。溝の規模は B g 21 地区で、幅 3.5m 深さ 1 m、B d 25 地区では幅 5 m、深さ 0.4m を測る。溝は東に延び B d 26 地区で絶えるが、西端は S D0101 と同様、標高 110m 付近の集落跡が予想される地点からほぼ直線で続くものと考えられる。検出した全長は約 15m である。S D0102 の小流と一時期であるが合流して暗茶褐色土層・暗茶褐色砂層が南北方向に堆積し絶えた後に黒褐色土層が東西に堆積している。また S D0103 は S D0104 とはほぼ直角に交差し同時期に黒褐色土層が堆積して絶えたと考えられる。溝の断面はU字形を呈し、溝内には黒色粘土層・黒褐色土層・暗茶褐色土層・暗茶褐色砂層・茶褐色砂層など各種の粘土と砂層が交互に堆積をしている。また溝内からは、弥生時代後期から末期にかけての多量の、自然流木・植物が包まれており、溝が交差する上層及び溝肩から弥生時代末期の完形に近い土器類が出土していることから、比較的短い時間の中で堆積し、機能を失って放棄されたものであろう。

S D0104はB b 21～B i 25地区を南北方向に直線状に走り、S D0103 と交差する。溝の規模は地形の傾斜がない南北方向に直線に走り回ほぼ幅 1.3m 深さ 0.5m を測る。また B h 24地区で幅 1.2m、深さ 0.3m を測る。溝の全長は検出しているところで 23m を測るが、ほぼ直線で南北に続き、若干、北側で浅くなっていく傾向がある。また S D0103 と交差して同時期に埋没したと考えられるが、溝北限では、黒褐色土の単一層であることから北限は最後の短期間に埋没したのと考えられる。溝の断面はU字形を呈し、南側溝内では黒褐色土・黒色土・暗茶褐色土・茶褐色砂質・黄褐色砂層が交互に堆積をしている。出土遺物は、S D 0103とは比較にならないほど少量で、自然流木等も含まない。しかし、S D0103と交差する付近の特に西肩・東肩からは弥生時代末期の完形に近い土器を検出している。これらのことから S D0103 が主流であったことが窺われる。

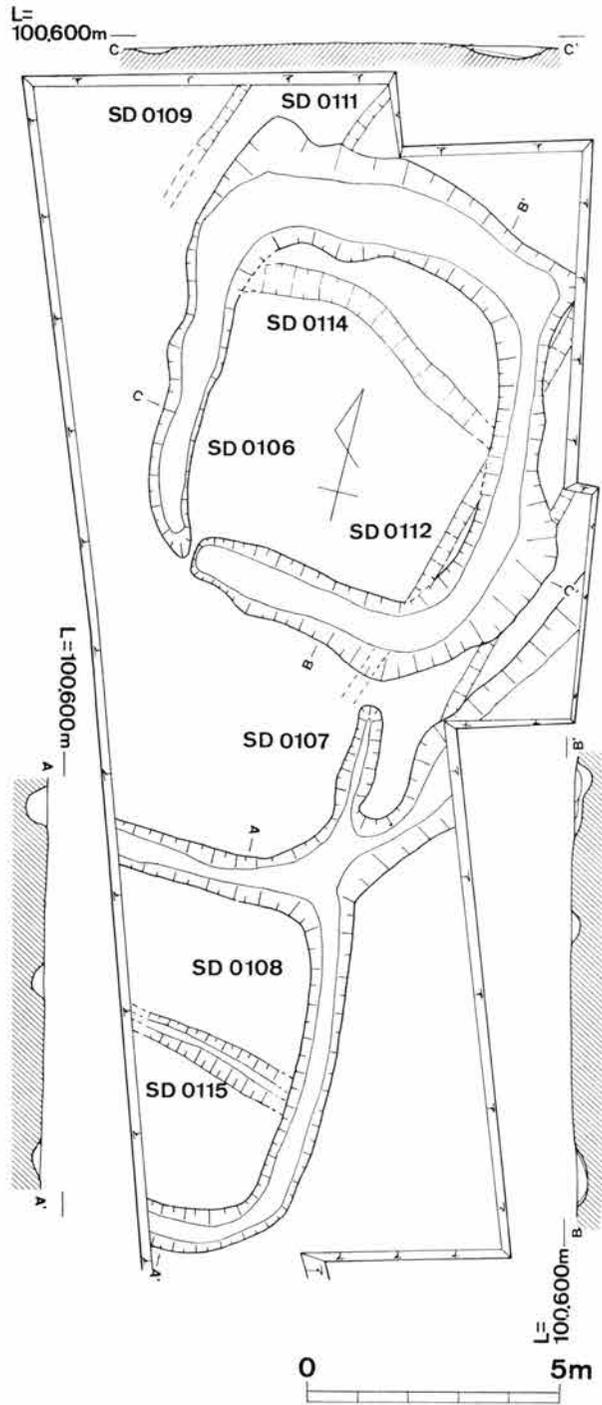
S D0105はC y 21～B a 21地区を東西方向に走る溝で、規模は S D0104 と違って小さいが、それに直角に合流すると思われる。溝幅 0.5m、深さ 0.2m を測り溝の断面は U 字形を呈する。また、溝内は S D0104 の北限と同様で、黒褐色土の単一層である。溝の全長は検出している部分で 3 m を測るが、丘陵上へ直線状に続くものであろう。また、東方向は浅くなっているところからあとわずかで絶えると考えられる。出土遺物には、弥生式土器片が少量あった。この溝についても短期間で埋没したことが窺われる。



第33図 溝状遺構実測図

1号方形周溝墓 (SD0106)

Cjk121~Cjkl 25地区で、南北方向に沿った方形周溝墓を検出した。南北に若干長い長方形を呈し、規模は、南北幅6.4m、東西幅5.5mを測る。北辺溝幅1.5~2m、深さ0.4m、東辺溝幅1~2m、深さ0.32m、南辺溝幅1~1.5m、深さ0.25m、西辺溝幅0.8~1.7m、深さ0.22mを測るV字形を呈しており、南西角に陸橋部を形成している。また、溝内は、黒褐色土層が堆積する単一層である。西辺溝の南側一部が、後世の削平によって特に浅くなっている。北辺溝の北西角、北東角がやや突出気味である。東辺溝の南側が一部外側へ広がっているのは、溝が現存する段階で崩れたものと考えられる。方形周溝墓上層からは、弥生時代後期の土器片・中世の土師器片・瓦器片が出土しており、古代から中世にかなり削平されたと考えられるため主体部は確認できなかった。また、北側で東西方向の溝SD0114に、東辺の南側で南北方向の溝SD0112に、西辺北側で東西方向の溝SD0111により切られている。いずれも中世の溝と考えられる。西辺の溝北側に平行に南北へ走る溝SD0109が



第34図 方形周溝墓

ある。これは、他の S D0111・S D0112・S D0113 と同方向へ走り溝内の堆積土・出土遺物から中世の溝でなく、方形周溝墓に関係のある溝と考えられる。出土遺物は、北辺溝の西側、中央の溝底より畿内第Ⅲ様式の甕片・壺片が少量、東側中央溝底部からほぼ完形に近い畿内第Ⅲ様式の高杯（第35図8）が出土した。北辺溝より出土した土器類は散乱状態で出土しているが、東辺溝底の高杯は張り付いた状態で出土している。また、高杯については小片が多く、破れ口が複雑であることから故意に破ったのではないかと考えられる。

2号方形周溝墓（S D0107）

C h 21・22～C j 21・22地区で1号・3号方形周溝墓の中間に位置し、北軸に沿っている。規模は南北幅4.7m、東西幅4.5mを測り、ほぼ正方形を呈すると考えられる。東西幅は西辺が確認できなかったが、1号方形周溝墓の西辺、陸橋部を参考とし、ほぼ平行と考えた。南辺溝は3号北辺溝が東西に走り2号方形周溝墓と区画し共有している。東辺溝は、幅0.7m、深さ0.37mを測り、北東角に陸橋部を有する。溝内は、黒褐色土層の単一層で、断面はV字形を呈する。出土遺物は、東辺の溝内から弥生式土器片が若干出土している。

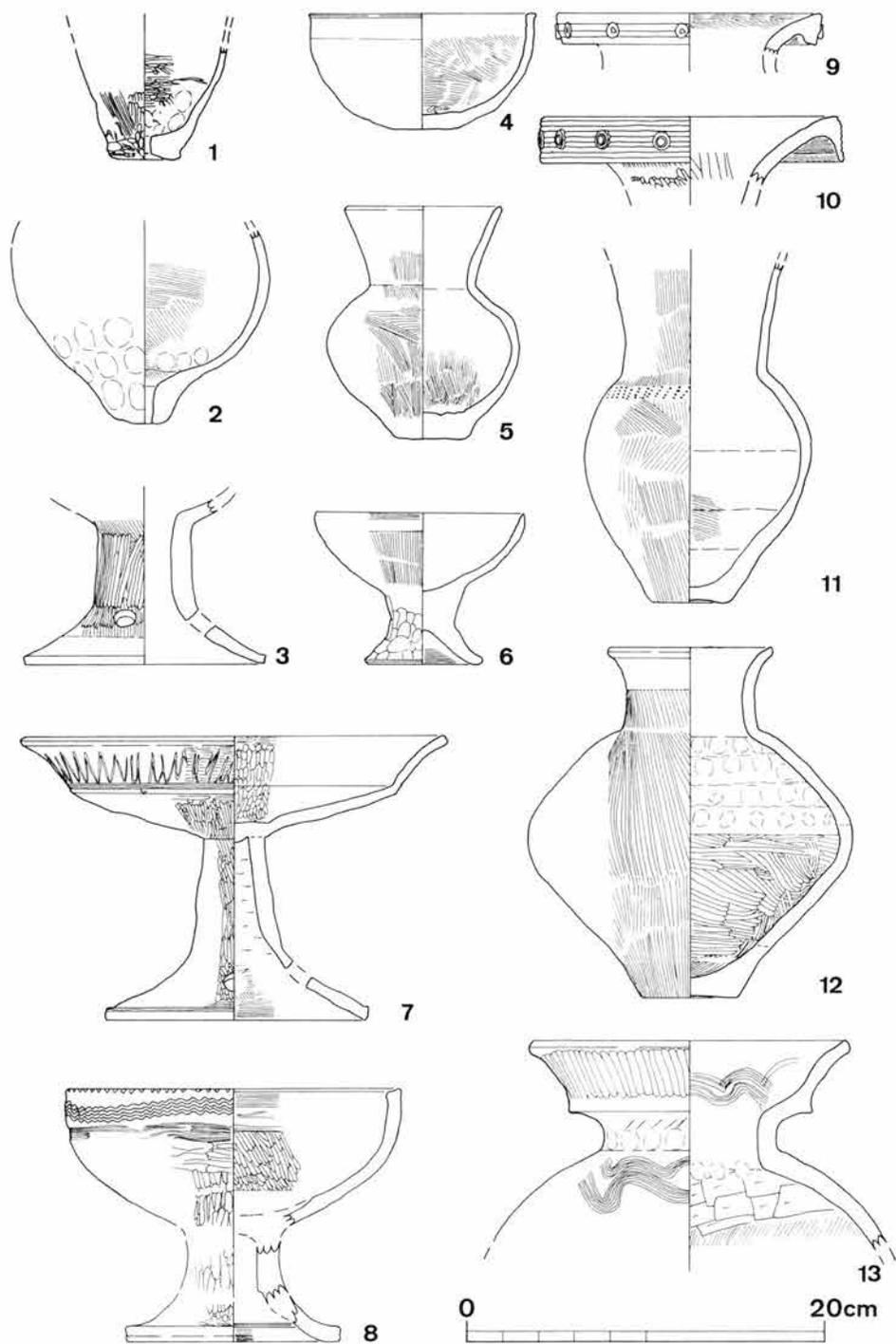
3号方形周溝墓（S D0108）

C e 21・22～C g 21・22地区で、1号・2号墓の南端に位置し同様の北軸に沿っている。規模は、西側半分が不明であるが、南北幅6.4mを測る。おそらく、東西5.5mで1号墓と同形の南北に若干長い長方形を呈するものであろう。北辺溝幅0.8～1.2m、深さ0.4m、東辺溝幅0.6～0.9m、深さ0.2m、南辺溝幅0.6～0.8m、深さ0.23mを測る。溝断面はV字形を呈しており、北東角から2号墓の東辺溝へ張り出し共有するものと、もう一方の北東方向へ続いていく溝に分かれている。また、溝内は黒褐色土の単一層である。方形周溝墓中央は、溝 S D0115 により切られている。おそらく中世の大きく削平された同時期のものであろう。出土遺物は、北辺溝・東辺溝・南辺溝内より弥生式土器片が若干出土している。

奈良時代～鎌倉時代の遺構

溝 S D0110

C x・y 21地区・B e 22・23・24・25～B h 22・23・24・25地区拡張トレンチの茶褐色土層面で検出された溝状遺構である。現在残っている条里地割の1町間に合う畦筋に平行している。南北方向にはほぼ直線で走り、現在の畦筋より西側へ約1mずれた状態で検出されたのは、おそらく現在の畦が西側から掘り出した丘陵により低地の東側へ平行移動したと考えられる。位置・方向など共に条里制の溝と一致するものである。規模は、溝幅約0.2m、深さ0.1mを測るもので、4条から8条を検出した。溝は断面がU字形を呈し、暗茶褐色土の堆積土で瓦器片・土師器片を若干含んでいる。



第35圖 土 器 実 測 図

4. 出土遺物

出土遺物は溝状遺構 S D0103・S D0104 から出土した弥生時代中期後半から後期にかけてのものがもっとも多く、今回の調査による出土遺物の大半をしめている。(第35図1～7・9～13) その量はコンテナ箱にして約250箱を数えた。溝内からは土器の他に石器(石包丁2点・石剣1点・磨製石斧1点)や種子・植物体・自然流木等が多数出土した。他の溝内からは少量の土器が出土しており、そのほとんどの溝が弥生時代を中心とするもので、条里制に伴う溝・畦等の遺構・遺物は確認されなかった。溝状遺構の他に方形周溝墓からの出土遺物がある。方形周溝墓は1・2・3号墓が検出されているが、主体部は確認されなかった。遺物は方形周溝墓上層の包含層と周溝内から出土している。包含層内からは弥生時代中期の方形周溝墓に伴う遺物と、弥生時代中期以降の奈良・平安時代の遺物を含んでいる。周溝からは1号墓北辺と東辺の周溝底から高杯(第35図8)と甕が一括投棄された状態で検出された。他のほとんどの周溝内からは若干の弥生式土器片が出土した。

出土遺物については、現在整理段階にあるため次年度に譲り改めて報告することとしたい。

5. ま と め

今回、第1次条里制跡の発掘調査を実施したが、現地表で整然と残っている条里地割と違い、条里制遺構の確実なものは検出できなかった。しかし、条里制以前の弥生時代中期から後期にかけての溝状遺構・方形周溝墓や多量の遺物を検出することができたのは、空白の多い当地方の文化を知る上で貴重な資料を提供したと言える。

当遺跡は弥生時代前期の遺物包含層があることから、この地域周辺に前期からの集落が考えられ、弥生時代中期の方形周溝墓3基や溝状遺構などを検出していることから西側丘陵にはこれらと非常に強い関係の集落が広範囲に発展していることが推定される。また、この集落は弥生時代中期から後期にかけてさらに発展して、約1km北にある弥生時代後期の馬場ヶ崎遺跡(注4)と一帯となっていると考えられる。亀岡盆地内には弥生時代後期に多数の遺跡があり、その分布も盆地内の標高約100mの微高地や段丘・丘陵上にはかならずと言えるほど遺跡の分布が考えられる。当遺跡は盆地西側丘陵上の南側に位置しこれより南側は犬飼川が東流していることから川までの間には弥生時代後期の遺跡は考えられないが、北側は小金岐古墳群下層遺跡や馬場ヶ崎遺跡・湯井遺跡・千代川遺跡と連面と続いている。古墳時代になると弥生時代後期に発展していた割には前期古墳が今のところ確認されていない。しかし、古墳時代後期には約100基を数える古墳群が小金岐山麓に出現する。当遺跡の西側にも北金岐古墳群があり、この行者山周辺一帯には多数の古墳群が密集する。弥生時代後期から古墳時代後期にいたる発展の実相は、なお将来の課題であるが、当遺跡が成立した時期の各地に点

在する遺跡との関連性や前期古墳との対比、集落の実体について非常に興味深い。

(村尾 政人)

- (注1) 樋口隆久『御上人林麿寺第5次発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1980
- (注2) 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1979)京都府教育委員会) 1979
- (注3) 堤圭三郎・安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会) 1977
- (注4) 吉水真彦『馬場ヶ崎遺跡発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978
- (注5) 樋口隆久『御上人林麿寺第3次発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978 樋口隆久『御上人林麿寺第4次発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1979
- (注6) 安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978
- (注7) 『亀岡市史』上巻 1960
- (注8) 八木茂美『丹波国分寺』『国分寺の研究』1938 安井良三・江谷 寛『御上人林麿寺発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1973・1977 樋口隆久『御上人林麿寺第3～5発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1978・1979・1980
- (注9) 角田文衛「丹波国分尼寺」『考古学論叢』1938
- (注10) 『亀岡市史』上巻 1960 竹岡 林「大井川右岸地域に於ける条里制—京都府亀岡盆地—」『亀岡高校研究紀要』3集 1954
- (注11) 木下 良『丹波国府址』1966
- (注12) 魚澄惣五郎「丹波国沿革」『南桑田郡志』1924 (注8, 9に同じ)
- (注13) 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979
- (注14) 中村 浩『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会 1977
- (注15) 安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- (注16) 安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979
- (注17) 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- (注18) 安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978
- (注19) 奥村清一郎ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会) 1980
- (注20) 泉 拓良・岡田保良ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981

付表2 千代川遺跡出土遺物観察表

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
小型丸底D	第17図9	口径14.2 器高 6.4	丸味をもった浅い器体にラッパ状に外傾する口頸部を有する。口径は、くびれ部の径よりも、はるかに大きく器壁は一樣に薄い。	外面底部は、ナデ仕上げで、口頸部は、縦方向のヘラミガキを行う。内面は、ヘラミガキによって整形されている。	B N 35
甕	第17図10	口径11.2	口頸部は外傾し、口縁端部は、外方へわずかなふくらみをもつ、内面に1条の稜が巡り、器壁は、薄い。口径は、体部最大径よりも、わずかに大きいものと思われる。	内外面とも、ナデによる整形である。	B I 39
甕	第17図11	口径13.0	口縁部は外方にまっすぐ立ち上がり、口頸部内面に弱い稜が巡り、器壁は薄い。	器壁は薄い口縁部は内外面ともナデによる整形、体部内外面は残存する限り、ナデによる仕上げである。	B I 39
甕	第17図12	口径16.2	口縁部は、頸部でわずかにくびれて外傾し、口縁端部は丸い、頸部状面に、一条の弱い稜が巡る。	内外面とも、ナデによる整形体部内面にはヘラケズリを施す。	B N 25
甕	第17図13	口径19.1	口縁部が短く立ち上がる甕である。口縁端部は丸い。	口縁部は内外面ともナデ仕上げ、体部内面にはヘラケズリを施す。	B I 39
甕	第17図14	口径14.2	口縁部は、ゆるやかにカーブする頸部から、外傾し、端部は、ほぼ上方を向いている。全体的に器壁は厚い。	外面頸部は、右下方から左上方へのハケ目を施し、その他はナデによる。内面は、ナデ仕上げである。	B O 30
甕	第17図15	口径16.0	口頸部が短く立ち上がる小型の甕である。ゆるやかにカーブする頸部はそのまま口縁部に続き、端部を上方へ短くつまみ上げたものである	内外面ともナデ仕上げである。	B P 37
壺B	第17図16	口径17.7	二重口縁の壺である。頸部から、外方にのび、口縁基部において断面が三角形の凸帯をわずかに巡らし、内彎しながら口縁端部まで外傾する。	外面はナデ仕上げで、内面は、口縁部まで横方向のヘラ削りを行い、口縁基部から頸部にかけては縦方向のヘラ削りを行う。	B O 37
壺B	第17図17	口径19.2 (推定)	二重口縁の壺である。16よりも、頸部のカーブがゆるやかであり、大型の壺である。	外面頸部はナデによって仕上げ内面頸部もナデによる。頸部下部から体部にかけては、ヘラ削りを行っている。	B N 37
甕I	第17図18	口径11.7	口縁部のみ残存。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は、内側に丸くおさめる。	口縁部は、内外面ともナデ仕上げ、体部も残存する限り、ナデによるものである。	B O 37
甕I	第17図19	口径14.3	口縁部のみ残存。外上方にまっすぐ立ち上がり、端部は平坦である器壁は薄い。	口縁部、内外面ともナデ仕上げである。	B P 35
壺A	第17図20	口径13.9	口頸部が長く立ちあがる壺である。口縁端部は外上方へ丸くおさめている。	内外面ともナデ仕上げ。	B N 38

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
壺A	第17図 21	口径13.3	わずかに口縁部が立ち上がるものであるが、20とは異なり、口縁端部は、尖りぎみに終る。	口縁部は、内外面ともナデ仕上げ、体部外面は、残存する限り、ナデ仕上げで頸部外面は、タタキである。	B L 37
甕I	第17図 22	口径16.6	わずかに口縁部が立ち上がるものである。やや内彎気味に立ち上がった口縁は、端部で内側にふくらみをもつ。	口縁部は、内外面ともナデ仕上げ、体部も残存する限りナデによるものである。	B K 36
甕E	第17図 23	口径14.1	口縁部が短く立ち上がる甕である。口縁端部を尖らせて終る。全体に器壁は薄い。	口縁部は内外面ともナデ仕上げ、体部内面はヘラ削りを行い、外面は右下方から左上方へのハケ目を残す	B K 36
器台	第17図 24	—	円筒部の短い器台である。円筒部上位に3条の凹線が下位に1条の凹線が巡る。	円筒部外面はヘラ磨きを行った後、凹線を巡らしている。内面はナデ仕上げ。	表採
高杯A	第17図 25	—	高杯の円筒部のみ残存。器壁は受部の方が厚く、脚部の方は薄い。また脚部下位に四孔を穿つ。	内面はナデ仕上げを行い、外面はヘラ磨きを行っている。	B P 37
高杯B	第17図 26	底部径 11.9	細い円筒部から「ハ」の字形にまっすぐにのびる脚を有す。脚部上位に三孔を穿つ。	円筒部外面はヘラ磨き、脚部内面は、ハケ目を残し、外面はていねいなヘラ磨きを行っている。	B O 37
高杯C	第17図 27	—	わずかに脚部に近づく程広がる円筒部を有し、脚部は更にラッパ状に広がっている。脚部の端部は28と同じものと思われる。また「U」字状の受部を有し、外面中位に一条の稜が巡る。	受け部、内外面ともナデ整形をし、受け部端部付近の内面はヘラ磨きを行っている。円筒部上位はヘラ磨きを行っているが、中位から脚部においてはナデ仕上げである。脚部・円筒部内面もナデ仕上げ。	B O 37
高杯C	第17図 28	底部径 10.0	円筒部から脚部にかけてラッパ状に広がっている。脚端部付近で水平に近く広がっているのが特徴である。受け部は欠損している。	円筒部から脚部にかけて内面はナデ仕上げ、円筒部外面はヘラ削り後、ナデ仕上げをし、脚部下位外面はナデ仕上げである。	B L 36
高杯C	第17図 29	口径18.8	比較的大型の高杯である。「U」字状の受け部に「ハ」の字型に広がる円筒部を有する。受け部外面に1条の稜が巡る。	内外面ともすべてナデ仕上げ、円筒部外面はヘラ削り後、ナデ仕上げである。	B K 37
把手	第17図 30	—	甕か甔のとっ手である。断面は楕円形である。	ヘラ削りの後、ナデ仕上げ。	B N 38
土師鍋	第17図 31	口径21.3	口縁は外傾し、端部は、まっすぐに立ち上がる。口縁基部から、ほぼ真下に体部はのびる。チャート、石英の小石を多く含む。	体部外面は、縦方向のハケを施し、口縁部内面には、不定方向のハケ目が、わずかに残り、口縁基部付近に8条の凹線が巡る。体部内面は、ナデ仕上げである。	B L 39
杯蓋	第18図 32	口径14.4 器高 4.3	天井部から口縁部にかけて丸味をおびた、器高の高い杯蓋である。口縁端部は丸く、天井部は欠損している。	外面半分までヘラ削りを行い、口縁端部は丸くおさめている。内面天井部付近は不定方向のナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ整形を行う。	B J 38

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
杯蓋	第18図 33	口径13.0 器高 4.2	天井部から口縁部にかけて丸味を帯びながら屈曲している。外面中位に1条の稜が巡る。口縁端部は丸く、天井部中央は凹凸が激しい。	外面中半までヘラ削りを行い、口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。天井部内面は不定方向のナデが施されている。	B K 39
杯蓋	第18図 34	口径13.3 器高 4.1	天井部から口縁部にかけて丸味を帯びながら屈曲する蓋である。	内外面ともヨコナデ調整である。	B K 37
杯身	第18図 35	口径11.6	B地区から出土した杯身は立ち上がりを低く内傾するものばかりである。立ち上がりは、内傾しながらまっすぐに立ち上がり、受け部はわずかに上外方に向く。	内外面ともヨコナデ調整による。	B J 39
杯身	第18図 36	口径12.1	立ち上がりは、内傾しながらまっすぐに立ち上がり上外方に向く。	内外面ともヨコナデ調整による。	B J 37
杯身	第18図 37	口径13.5	杯身35、36と同タイプのものであるが、わずかに器壁が薄く焼成が軟である。	内外面ともヨコナデ調整。	B P 37
蓋	第18図 38	—	天井部つまみのみ残存。扁平なつまみである。	内外面ともヨコナデ調整。	B I 35
蓋	第18図 39	—	38よりも扁平なつまみを貼り付けた蓋である。天井部は平らである。	内面はヨコナデ調整。外面は、ヘラ削り後ヨコナデ調整。	B K 37
蓋	第18図 40	口径11.0	口縁部が真下に向かう蓋である。口縁端部は丸い。	内外面ともヨコナデ調整。	B O 39
蓋	第18図 43	口径13.8	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。口縁端部は丸く、天井部は平坦である。口縁端部の断面が三角形のものと、丸いものがある。	内外面ともヨコナデ調整。	B N 36
蓋	第18図 41	口径 9.5	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。小型である。	内外面ともヨコナデ調整。	B D 37
蓋	第18図 42	口径12.6	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。	内外面ともヨコナデ調整。	B K 36
蓋	第18図 44	口径13.9	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。	内外面ともヨコナデ調整。	B H 39
蓋	第18図 45	口径16.4	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。	内外面ともヨコナデ調整。	B M 36
蓋	第18図 46	口径15.2	口縁部から天井部にかけて「S」字形に屈曲する蓋である。	内外面ともヨコナデ調整。	B K 36
蓋	第18図 47	口径14.8	口縁端部が真下に小さく向かう蓋である。	内外面ともヨコナデ調整。	B K 36
皿	第18図 48	口径11.7 器高 1.1 底部径 8.1	平らな底部から短く外上方にのびる口縁部を有す。口縁端部は平坦である。	内外面ともヨコナデ調整。	B O 38

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
杯	第18図 49	口径12.1 器高 3.6 底部径 8.4	平らな底部から外上方に立ち上がる体部をもつ。口縁端部は尖っている。	切り離しは、ヘラ切りである。その他は、ヨコナデ調整。	B N 38
杯	第18図 50	口径15.1	平らな底部から外上方にゆるやかに立ち上がる体部をもつ。	切り離しは、ヘラ切りである。ヨコナデ調整。	B N 35
杯	第18図 51	口径14.1	平らな底部から外上方にゆるやかに立ち上がる体部をもつ。	切り離しは、ヘラ切りである。ヨコナデ調整。	B I 39
杯	第18図 52	口径14.1	平らな底部から外上方にゆるやかに立ち上がる体部をもつ。	切り離しは、ヘラ切りである。ヨコナデ調整。	B O 34
杯	第18図 53	口径13.2 器高 4.2 高台径 9.3 高台高 0.5	平らな底部に外上方に直立する口縁部を有す。高台の断面は台形で、高台径は、底部径とほぼ同じものと若干高台径の方が小さいものがある。	切り離しはヘラ切りで、その他はヨコナデ調整である。口縁端部は丸くおさめている。	B K 36
杯	第18図 54	底部径 9.3	高台を有する平らな底部に外上方に直立する口縁部をもっている。	切り離しはヘラ切りでその他はヨコナデ調整である。	B P 37
杯	第18図 55	底部径 10.1	内側に高台を有する平らな底部に外上方に直立する口縁部をもつ。	切り離しはヘラ切りでその他はヨコナデ調整である。	B H 39
椀	第18図 56	底部径 6.0 高台高 0.6	底部が平らで、そのまま体部につながる。高台は、平底で蛇ノ目に凹線が巡る。	切り離しは糸切りで体部内外面と底部内面は、ヨコナデ調整である。	B M 36
椀	第18図 57	底部径 7.4 高台高 0.7	平らな底部に断面が三角形の高台を有したものである。器壁はひじょうに厚い。	糸切り後高台を貼り付けている。内面はナデ調整である。重ね焼きの痕がある。	B H 39
椀	第18図 58	底部径 8.2 高台高 0.5	平らな底部からわずかに内彎しながら体部に至る。高台端部は丸く低い。	切り離しは糸切りで、体部内外面及び底部内面はヨコナデ調整である。	B I 37
椀	第18図 59	口径 7.9	体部からゆるやかに内彎しながら口縁部に至るものである。口縁端部は丸く仕上げている。59のみ器壁は厚い。	内外面ともヨコナデ調整。	B J 36
椀	第18図 60	口径14.4	体部からゆるやかに内彎しながら口縁部にいたるもので器壁は薄い。	内外面ともヨコナデ調整。	B N 36
椀	第18図 61	口径16.5	体部からゆるやかに内彎しながら口縁部にいたるもので器壁は薄い。	内外面ともヨコナデ調整。	B N 37
椀	第18図 62	口径16.2	体部から直立する椀である口縁端部は丸い。	内外面ともヨコナデ調整。	B L 34

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
皿	第18図 63	口径15.3 器高 3.3 高台径 6.6 高台高 1.1	高台付け根付近からゆるやかに内彎しながら、立ち上がり体部中位内外面に弱い1条の稜が巡る。口縁端部は丸く高台はひじょうに高い。	切り離しは不明である。体部内外面はヨコナデ調整で高台は貼り付けている。	B N38
高杯	第18図 64	底部径 9.5	小型の高杯の脚である。脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は、下方につまみ出している。	内外面ともヨコナデ調整。	B M36
瓶	第18図 65	底部径 4.6 高台高 0.6	底部から体部にかけて内彎しながら立ち上がる。平底高台の小型の瓶である。高台は外下方に向いている。	底部外面は、糸切りによる切り離し、その他はヨコナデ調整。	B N35
高杯	第18図 66	—	小型の高杯の円筒部のみ残存する。わずかに円筒部中央がくぼみ、受け部、脚部近くで広がるものである。	内外面ともヨコナデ調整。	B K36
甌	第18図 67	—	ゆるやかにカーブする頸部のみ残存する。瓦質であり、時代は、他のものよりも降るものと思われる。	頸部内外面はヨコナデ調整体部上位は内外面ともタタキしめている。	B N37
鉢	第18図 68	口径18.7	「S」字状に屈曲しながら、口縁部から体部に至る。口縁端部は平坦である。	内外面ともヨコナデ調整。	B N36
甌	第18図 69	口径30.8	口縁部は大きく外反し、端部は上下につまみ出している。端部面はわずかにくぼんでいる。	内外面ともヨコナデ調整。	B N33
瓶	第18図 70	底部径 7.9 体部最大径 15.9	底部はほぼ平らでわずかに内彎しながら立ち上がる。器壁は薄い。	底部の切り離しは糸切りで体部内外面はヨコナデ調整である。	B H38
緑釉壺	第19図 71	口径15.0	内面身込みと立ち上がりの境が明瞭で沈線がめぐる。外面に強いロクロ目が残る。口縁部がわずかに外反している。	内外面とも横ナデの後みがきをかける。濃緑色釉施釉。	B J39
緑釉皿	第19図 72	口径13.8 器高 3.2	外面口縁部付近を上方に屈曲させ、口縁端部外反。	内面底部から口縁基部までヘラ磨き。口縁部内外面は、ヨコナデ調整を行い、体部中位から高台付け根までヘラ削り後磨く。切り離しは糸切りで高台を貼り付けた後ナデ整形している。	B L36
々	第19図 73	口径14.0 器高 2.7 高台径 6.2 高台高 0.5	平底高台の皿である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部で外傾する。	内面ヨコナデ調整後、ヘラ磨きを行う。外面は、体部下半はヘラ削りを行い、その他はヨコナデ調整。切り離しはヘラ切りである。	B K37

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
灰釉皿 (墨書 有り)	第19図 74	口径15.5 器高 3.5 高台径 7.6 高台高 0.9	底部のうしろから内彎しながら口縁部に至る。端部は丸い。高台は高い。	内面と底部外面、口縁部外面はヨコナデ調整を行い、高台付け根から体部中位まで、ヘラ削り後ヨコナデ調整している。高台は貼り付けている。底部の墨書は「福□」がある。	B L 37
土師皿	第19図 75	口径10.7	口縁部を強く外反させ端部を内側に折り返し肥厚させる。器胎は厚手。	外面立ち上がり口縁部の境をヘラで削った後、ナデ調整。内面はナデ調整。	B N 39
土師皿	第19図 76	口径 9.6	口縁部を強く外反させ端部を内側に折り返し肥厚させる。薄手。	外面立ち上がり口縁部の境をヘラ削り、後ナデ調整。	B N 38
土師皿	第19図 77	口径 9.0	口縁部を外反させて端部を内側に折り返す。	外面立ち上がり口縁部の境をヘラ削り、後他のナデ調整。	B N 38
土師皿	第19図 78	口径10.4	口縁部を外反させ口縁端部を折り返し肥厚させる。	外面上部と口縁部をヘラ削り他をナデ調整。	B N 39
土師皿	第19図 79	口径10.1	口縁部を外反させ端部を内側に折り返し肥厚させる。	外面上部と口縁部をヘラ削り他をナデ調整。	B N 38
土師皿	第19図 80	口径 9.8	口縁部を外反させ端部を内側に折り返す。	外面上部と口縁部をヘラ削り他をナデ調整。	B N 38
土師皿	第19図 81	口径 9.5	口縁部を外反させ端部を内側に折り返す。	外面上部と口縁部の一部をヘラ削り他をナデ調整。	B N 38
土師皿	第19図 82	口径 8.9	底部から口縁部まで直立する。口縁端部は丸くおさめている。器壁は厚い。	内外面ともナデ調整。外面体部にヘラによる横方向と縦方向に文様を施す。	S B 0201
黒色土器碗	第19図 83	口径 9.3	厚手、内面口縁部に沈線を施す。	内面および外面の一部にいいなみがきをかける。内外面ともに炭素吸着。	B K 38
〃	第19図 84	口径 8.6	やや薄手。底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがる。	内面にいいなみがき。内面および外面口縁端部に炭素を吸着させる。	B O 39
〃	第19図 85	口径 9.8	底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがる。	内面にいいなみがき。口縁部に炭素を吸着させる。	B K 37
〃	第19図 86	口径 9.2	底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがる。	内面にいいなみがき。内面、外面口縁部に炭素が吸着させる。	B J 38
〃	第19図 87	口径 9.9	底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがり、断面三角形の低い高台が付く。	内面にいいなみがき。内面、外面口縁部に炭素を吸着させる。	B J 37
〃	第19図 88	口径17.6	底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがる。	内面にいいなみがき。内面、外面口縁部に炭素が吸着。	B J 38
〃	第19図 89	口径15.6	底部から口縁部にかけてゆるやかに立ちあがる。	内面にいいなみがき。内面、外面口縁部に炭素が吸着。	B N 37
瓦器碗	第19図 90	口径 8.6 器高 4.0	口縁部肥厚。断面三角形の低い高台。	ナデ調整内面に一部ミガキ。	B P 36

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
白磁碗	第19図 91	口径19.2	口縁端部は大きく外側へ折り返し、太い玉縁状になる。		B K 39
カ	第19図 92	口径17.2	口縁端部は大きく外側へ折り返し、太い玉縁状になる。		B K 38
手づくね土器	第20図 93	底部径 4.4	底部はやや厚く平底である。	底部内面はナデ仕上げ。体部外面は右下から左上方へのナデによる。	A B 38
高杯E	第20図 94	—	受け部下位のみ残存。ゆるやかな「U」字状の受け部を有し、その外面に稜が巡る。	受け部内面底部は、タタキの痕が残り立ち上がり部は、ナデ仕上げである。外面は、稜をさかいらして上位がナデ仕上げ下位はハケによる整形である。	A E 41
小型丸底A	第20図 95	頸部径 6.4	やや底部が尖がり気味の小型丸底である。口頸部は欠損している。	内外面ともナデ仕上げである。内面底部に幅の広いヘラ削りが不定方向に施されている。	A H 36
小型丸底A	第20図 96	口径 8.5 器高10.2	ゆるやかなカーブをなす頸部から上方へ立ち上がる口縁部を有した二重口縁の壺である。底部は、やや尖がり気味で、体部最大径と口径とはほぼ同じである。	底部外面はタタキを施し体部外面は縦方向のハケ目を行っている。その他の外面及び内面はナデ仕上げである。底部外面に一部ヘラ削りとナデが施されている。	B V 36
甕I	第20図 97	口径16.4	口頸部が短くまっすぐ外上方に立ち上がる甕である。口縁端部は内側に丸くおさめている。	内外面ともナデ仕上げである。	S B 0201
壺A	第20図 98	口径16.2	口頸部が外上方へまっすぐに立ち上がる大型の壺である。口縁端部は立ち上がりよりもさらに外方を向いており、丸くおさめている。	内外面ともナデ仕上げである。	S B 0201
小型丸底F	第20図 99	口径12.6	口頸部の長い小型丸底である。体部上位からまっすぐに口頸部は立ち上がり、口縁端部は丸い。	口頸部外面はハケ調整を行い、内面はナデ仕上げである。体部上位の外面は、ナデ仕上げ、内面には指圧痕が残る。	B Y 41
高杯D	第20図 100	口径16.2 器高11.8	水平に近く広がる脚部を有した高杯である。受け部は「U」字状にカーブする以外外面中位に、弱い稜が巡る。やや脚部の方が広がる円筒部を有し、ラッパ状の脚に至る。	受け部内外面にハケ目が残る円筒部との付け根付近ではナデしている。円筒部外面はヘラ削りをしており、脚部内外面と円筒部内面は、ナデ仕上げである。28と同じ特徴をもつ。	B V 41
甕I	第20図 101	口径12.2	口頸部が短く外上方に立ち上がる甕である。口縁端部は、わずかに内側へ丸くおさめている。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0203
小型丸底B	第20図 102	—	底部のみ残存。比較的大型のものである。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0203
甕	第20図 103	口径26.8	わずかに内彎しながら、頸部に至る体部に短く外上方に立ち上がる口縁部をもつ甕である。端部は丸い。	体部内面及び口縁部内外面はナデ仕上げをしており、体部外面は右下から左上方へのハケによる整形を行っている。	S B 0203

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
高杯	第20図 104	—	受け部底部のみ残存。円筒部は六角形をしており、受け部は平坦である。	受け部内面はナデ仕上げ、受け部外面にV字形にヘラ磨きをしている。	S B 0203 内 No.3 P

須恵器拓影

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
甕	第21図 105		体部のみ残存。器壁は厚い。	内面は、同心円タタキを残し、外面は、平行タタキを行う。	S B 0203
〃	第21図 106		体部のみ残存。器壁は厚い。	内面は、同心円タタキで、外面は、格子状タタキである。	S D 0218
〃	第21図 107		頸部のみ残存。ゆるやかに屈曲しながら、立ち上がる。	外面に縦方向のヘラによる凹線が巡る。内面は同心円タタキを残す。	S D 0218

S B 0202・S B 0206 出土遺物

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
蓋	第22図 108	口径16.6 器高 7.8	直線的に開く笠形のもので、天井部のつまみは平坦である。口縁端部は丸くおさめている。	内面は、不定方向のハケ目を施し、外面は、つまみから口縁端部にかけてヘラ磨きを行っている。	S B 0202
蓋	第22図 109	口径14.4 器高 6.6	直線的に開く笠形のものでつまみは中央部がくぼんでいる。全体的にひずんでおり磨減が甚しい。	つまみは、指押えによって上方へつまみ出しており低い。内外面ともハケによる調整と思われるが、特に外面の磨減が甚しく、細部の調整までは不明である。	S B 0202
蓋	第22図 110	口径13.0 器高 6.4	つまみの高い「ハ」の字形に開く蓋である。天井部のつまみは平坦である。	つまみは指押えによって整形しており、外面はヘラ削り後、口縁部のみ、ナデ仕上げを行っている。内面は上位をタタキしめており、口縁部付近はナデている。	B O 37
壺	第22図 111	口径30.3	頸部から口縁部にかけて、そのまま外反しており、端部は、下方にのびている。	頸部外面に縦方向のハケ目を施し、ナデによって口縁部を貼り付けている。口縁端面に5条の擬凹線が巡っている。更に2.5~3cmごとに円形浮文を貼り付けている。内面は、ナデ仕上げである。	S B 0202
甕	第22図 112	口径34.2	体部はほぼまっすぐに立ち上がり、口縁部は外上方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ平坦である。器壁はひじょうに厚い。	体部は内外面とも、ハケ調整後、ナデ仕上げ、口縁部はナデ仕上げである。	S B 0202 北西上層

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
鉢A	第22図 113	口径13.5	体部から口縁部にかけてS字状に屈曲しながら立ち上がる。口縁端部は、外上方に立ち上がり、平坦である。	内外面とも、ナデ仕上げである。	S B 0202
A鉢	第22図 114	口径13.8 器高 8.5	底部から体部にかけては「U」字状にカーブしており、口縁部は外上方に向かって立ち上がっている。	底部外面は、ハケ目を施し、その他は、ナデ仕上げである。	S B 0202
高杯	第22図 115	口径13.8 器高 8.1	受け部の底部がやや尖がり気味で、脚は低い。脚は「ハ」の字状に小さく開いており、脚、口縁とも端部は丸い。全体的に磨減が甚しい。	口縁端部付近の外面に、タタキ目が残っており、脚の内面もタタキ目している。脚の付け根付近から脚端部にかけては、指圧による整形である。	S B 0202 南肩
台付椀	第22図 116	口径 8.9 器高13.0	ウイングラス形を呈するものである。脚部上位に四孔を穿つ。口縁端部は丸くおさめている。	受け部内外面ともハケ目による調整を行い、円筒部で、縦方向のヘラ削りを行っている。脚の内外面は、ヘラ磨きを行い、脚の端部付近と口縁端部付近はナデで仕上げている。	S B 0202 北西肩
壺C	第22図 117	口径17.2 器高23.5	体部から口縁にかけて「5」字状に屈曲しており、丸底部である。口縁部はまっすぐに立ち上がる。	口縁内面はハケ目を施し、体部内面はヘラ削りを行っている。体部外面は、底部に主としてハケ目が残存し、口縁部外面に竹管文を施す。	S B 0202
環状把手	第22図 118		肩部についていたと思われる半環状を呈する。		S B 0202

S B 0202 出土遺物

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
甕A	第23図 119	口径13.8	口縁部は、体部から「く」の字形に屈折し、口縁上方は、大きく外反している。	体部外面にカキ目を施している。口縁内外面はナデで仕上げている。また体部内面に指圧痕を残している。	S B 0202
甕B	第23図 120	口径13.0 器高29.2	口縁部は、頸部よりゆるやかに屈曲し、口縁部外面に稜を、内面に段をなしている。底部は突出する分厚い平底である。	体部上半外面に叩き目を施している。体部内面は、ヘラ削りを行っている。	S B 0202
壺A	第23図 121	口径17.0 器高34.8	口縁部は「く」の字に外折し、端部は、外反している。体部は球形をなしており、底部は突出する分厚い平底である。	口縁から頸部の外面に縦ハケ、体部外面に横ハケを施している。体部内面は、ヘラ削りである。	S B 0202
甕C	第23図 122	口径11.5	直上方に立ち上がる頸部が外反し、その上に垂直に立ち上がる口縁部を形成している。	頸部外面にハケ目を施し、体部内面は、ヘラ削りを行っている。その他はナデ仕上げである。口縁部に擬凹線が巡っている。	S B 0202
甕D	第23図 123	口径12.5	口縁部は短く2段の「S」字状外反している。	口縁部内外面はナデ仕上げ、体部内面は、ヘラ削りを行っている。また、体部外面には、ハケ目が施してある。	S B 0202

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
甕C	第23図 124	口径14.2	122の大型である。	頸部外面にハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 西側
甕C	第23図 125	口径15.0	頸部がゆるやかに屈曲して、口縁基部に至り、端部まで直立するものである。	内外面ともハケ目、口縁部付近はナデ仕上げ。	S B 0202
甕E	第23図 126	口径10.6	「く」の字状に屈曲して立ち上がる。器壁は薄い。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202 東側
甕G	第23図 127	口径16.8	126と同じ、器壁は126よりも厚い。	外面ハケ目、内面はナデ仕上げである。	S B 0202
甕F	第23図 128	口径19.7	「く」の字状に屈曲して立ち上がる。器壁は薄い。	外面ハケ目、内面はナデ仕上げで体部内面はヘラ削りを施す。	S B 0202 北東アゼ
甕E	第23図 129	口径15.1	口縁部は外反し、端部がわずかに立ち上がりをみせる。	外面ハケ目、内面はナデ仕上げで体部内面はヘラ削りを施す。	S B 0202
甕E	第23図 130	口径14.3	口縁部は外反し、端部がわずかに立ち上がりをみせる。	外面ハケ目、内面はナデ仕上げで体部内面はヘラ削りを施す。	S B 0202 北西
壺A	第23図 131	口径12.9	口縁端部を丸く終らし、長く直線的に外上方に伸びるもの。	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。	S B 0202 北西アゼ
甕E	第23図 132	口径14.4	口縁部は外反し、端部がわずかに立ち上がりをみせる。	外面ハケ目、内面はナデ仕上げで、体部内面はヘラ削りを施す。	S B 0202
小型丸底B	第24図 133	口径 9.0	丸味を持った浅い器体に大きく外反する、口頸部を有する。	体部外面にハケ目を施す。	S B 0202 西側
小型丸底C	第24図 134		丸味を持つ浅い器体にラップ状に広がる口頸部を有する。	内面ヘラ削り体部から口頸部にかけてナデ仕上げ。	S B 0202 東側石垣アゼ
小型丸底G	第24図 135	口径 7.4	丸い器体にわるやかに屈曲し、口縁部が上方に向いたものである。	体部外面内面に丁寧なヘラミガキを施す。	S B 0202 東隅
高杯F	第24図 136	口径18.0	口縁部からゆるやかなカーブをなして、受け部をなす。口縁部付近は、短く外上方に直立する。	内面はナデ調整、口縁部付近もナデ調整、外面は縦方向ハケ目を施す。	S B 0202 南西アゼ
鉢C	第24図 137	口径17.0	「S」字状に体部から口縁部にかけて屈曲しており、口縁端部は外上方に向いている。口縁端部は丸い。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202 上層アゼ
壺B	第24図 138	口径19.7	二重口縁の壺である。口縁部のみ残存しており、端部は丸い。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202 北側
壺B	第24図 139	口径20.9		内外面はナデ仕上げをしており、内面の口縁部にヘラによる波状文が巡り、頸部下位はヘラ削りを行っている。	S B 0202

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
甕H	第24図 140	口径16.1	短く立ち上がる口縁部外面の 中に稜が巡り、端部は外反 気味である。	内面はヘラ削りを行い、外面 は横方向のハケ目を施す。	S B 0202
高杯G	第24図 141	底部径 8.9	円筒部は中半でややふくらみ、 ラッパ状に広がる脚を有する。 円筒部中に三孔を穿つ。	外面はナデ整形後、ヘラ磨き を行い、内面は円筒部はナデ 調整、脚部はタタキしめてお り、端部はナデ仕上げである。	S B 0202 北東
高杯B	第24図 142	底部径 11.4	脚端部まで「ハ」の字状に広が る高杯である。脚上位に四孔 を穿つ。	内面はタタキ技法により外面 は縦方向のヘラ磨きを行って いる。	S B 0202 北東
高杯B	第24図 143	底部径 12.6	脚端部まで「ハ」の字状に広が る高杯である。脚上位に四孔 を穿つ。	内面はハケ目を施し、外面は 縦方向のヘラ磨きを行って いる。	S B 0202
高杯G	第24図 144	—	円筒部は上位が細く、脚に近 づく程広がる。受け部の底は 平坦である。	内外面ともナデ調整。	〃 北側石垣 アゼ
高杯E	第24図 145	口径15.8	まっすぐ外上方にのび、口縁 部は外反し、端部は丸くおさ める。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202
高杯E	第24図 146	口径15.4	まっすぐ外上方にのび、口縁 部は外反し、端部は丸くおさ める。	外面ハケ目及びナデ仕上げ、 内面ナデ仕上げ。	S B 0202 南西アゼ
高杯C	第24図 147	口径19.3	口縁部は、直線的に外上方に 開き稜を残して杯底部に続く。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202 東側
高杯C	第25図 148	口径19.3	杯部はわずかに内彎して外上 方に開き、外面に稜をもたな い。	内外面ともナデ仕上げ。	S B 0202
高杯J	第24図 149	底部径 21.0	「ハ」の字形に広がる脚に端部 は真下に降りる。	内面ナデ仕上げ、外面はヘラ 磨きを行い、端部は、ナデ仕 上げ。	S B 0202 南南東
台付鉢 D	第24図 150	底部径 2.6	底部中央がやや尖がり気味の 半球形に、径の小さい台がつ く。	内外面ともナデ仕上げ、台は つまみ出している。	S B 0202
台付鉢 C	第24図 151	底部径 3.8	球形の体部に厚手の高台を有 したものである。	外面はタタキしめ、内面はハ ケ調整を行う。	S B 0202 北東
甕	第24図 152	底部径 4.7	平底で、外上方に体部は立ち 上がる。	外面、縦方向のハケ目、内面 はナデ調整。	S B 0202
台付鉢 D	第24図 153	底部径 4.5	底部中央がやや平底で半球形 に、径の小さい台がつく。	内外面ともナデ仕上げ、外面 はハケ目内面は指圧痕を残す。	S B 0202
甕	第24図 154	底部径 4.3	平底の底部から外上方に体部 は立ち上がる。器壁は厚い。	外面はタタキしめ、外面はヘ ラ削りを行っている。	S B 0202 西側
甕 I B	第25図 155	口径15.0	「く」の字状に屈曲しており、 口縁端部は、内側に丸くおさ めている。	外面はハケ目、内面はヘラ削 りを行う。	S B 0202 東側石垣 アゼ

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
甕 I B	第25図 156	口径15.4	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目の内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I C	第25図 157	口径15.4	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目の内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I B	第25図 158	口径15.4	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 南ノアゼ
甕 I A	第25図 159	口径11.7	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目の内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 北側
甕 I B	第25図 160	口径15.4 器高24.0	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I A	第25図 161	口径11.5	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 北西アゼ
甕 I A	第25図 162	口径12.1	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I B	第25図 163	口径14.3	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I B	第25図 164	口径14.8	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I C	第25図 165	口径16.0	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 東側
甕 I C	第25図 166	口径16.0	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202
甕 I C	第25図 167	口径16.1	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202 東側
甕 I B	第25図 168	口径15.1 器高24.7	「く」の字状に屈曲しており口縁部は内側に丸くおさめている。	外面ハケ目、内面はヘラ削りを行う。	S B 0202

S B 0204 出土遺物

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
杯蓋	第26図 169	口径10.0 器高 4.0	天井部はやや丸味をもつ。口縁部はまっすぐ降りる。口縁部は丸い。169と171は焼成軟である。	天井部はヘラ削りをし、その他はヨコナデ調整。	S B 0204
杯蓋	第26図 170	口径 9.4 器高 3.8	天井部はやや丸味をもつ。口縁部は内側に降りる。	天井部はヘラ削りをし、その他はヨコナデ調整。	S B 0204

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地区
杯蓋	第26図 171	口径12.0 器高 3.4	天井部はやや丸味をもち浅い。 口縁端部はまっすぐ降りる。	天井部はヘラ削りをし、その 他はヨコナデ。	S B 0204
杯蓋	第26図 172	口径10.0 器高 3.8	天井部はやや丸味をもち深い。 口縁端部は丸い。	天井部はヘラ削りをし、その 他はヨコナデ。	S B 0204 北東
杯蓋	第26図 173	口径10.4 器高 2.8	天井部はやや丸味をもち浅く、 外に「ハ」の字状に広がる。	天井部はヘラ削りをし、その 他はヨコナデ。	S B 0204
杯身	第26図 174	口径10.0 器高 2.5	立ち上がりの低いものである。 深さは、浅い。	内外面ともヨコナデ調整。	S B 0204
壺	第26図 175	頸部基部 径 9.2 体部最大 径 21.6	肩部はややはり頸部はほぼ上 方に向かう。また肩部に四本 の沈線と二段のきざみ目文様 を施している。	内外面ヨコナデ調整。	S B 0204
甕	第26図 176	口縁径 22.8	体部は内彎気味にのび頸部で 「く」の字に屈折するものであ る。	内外面ともハケ目で仕上げる。	S B 0204 北角
甕	第26図 177	口縁径 26.6	頸部で「く」の字に屈折し外上 方にまっすぐのびる。	内外面ハケ目で仕上げる体部 に巻き上げの粘土紐の痕を残 す。	S B 0204
瓶	第26図 178	口縁径 23.9	体部から口縁部にかけてまっす ぐにのび口縁部は梯形をしめ す。	外面と内面上半はハケ目内面 下半はヘラ削りである。	S B 0204 北東壁面 カマド付 近
無頸壺	第26図 179	口縁径 17.9	体部からゆるやかに内彎しな がらまっすぐ立ち上る口縁部 は梯形を呈す。残存する限り 一孔を穿つ。	外面ハケ目。 内面に指圧痕を残す。	S B 0204
甕 I	第26図 180	口縁径 15.3	177の小型である。	口縁部内外面ナデ。 体部外面ハケによる調整。	S B 0204 南側
甕	第26図 181	口縁径 17.6	頸部で「く」の字に屈折し外上 方にまっすぐのびる。	外面ハケ目。	S B 0204
小型丸 底壺B	第26図 182	口縁径 12.0	体部は丸く球形を呈す。頸部 基部で外側に「く」の字に屈折 した後半は外面に低い稜を有 する。	内外面ナデ調整。	S B 0204

2. 篠窯跡群昭和56年度発掘調査概要

1. はじめに

篠窯跡群の発掘調査は、国道9号バイパス改築工事に伴う事前調査の一環として、建設省の委託をうけ京都府教育委員会が調査主体となって、昭和51年度より試掘調査・発掘調査が断続的に実施されてきた。昭和55年度より篠窯跡群の位置する老ノ坂峠から曾我部風ノ口に至る延長約10kmの区間を日本道路公団が施行することとなり、この年度より日本道路公団と京都府教育委員会の協議のうえで調査が進められることになった。

さて、昨年度まで京都府教育委員会が調査主体となって行われてきた篠窯跡群の調査を、今年度より京都府教育委員会の基に発足した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが引き継いで実施することとなり、京都府教育委員会と再三に亘る引き継ぎ業務を行い、また日本道路公団と協議を行ったうえで、本年度の調査を実施する運びになった。

篠窯跡群の調査は、建設道路予定帯内における窯跡の分布状況を把握することを主たる目的として実施されている。昨年度までに行われた調査は、前山1～3号窯・黒岩1号窯・小柳1～4号窯・芦原1号窯・鍋倉第4窯跡群1号窯及び西長尾C・F地区作業場の発掘調査と、篠町大字柏原小字禿尾山から大字王子小字石原畑に至る延長約2kmに亘る試掘調査である。

さて、本年度当調査研究センターが実施した調査は西長尾窯跡群の発掘調査である。文化財保護法第98条第2項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査届出書」を昭和56年4月23日付けで文化庁長官あて提出し、また砂防・保安林地区調査の許可申請を得た後、同年6月4日より現地調査を行った。

調査地は、昭和53年度の試掘調査により4基の窯が想定され、かつ昨年度実施された西長尾F地区作業場跡の調査では小柳4号窯（三角窯）と同種の椀や皿が出土していることから小型窯の存在も想定された地点である。調査の結果、8世紀後半・9世紀後半に推定される登窯3基と10世紀後半から11世紀前半と考えられる小型窯2基を検出した。特に西長尾5号窯と名付けた小型窯は、平面楕円形を呈し二重床面をもつロストル型式の窯であることが判明し、全国的にも非常に珍しい窯であることから、昨年度まで保存協議の対象とされてきた黒岩1号窯、前山2・3号窯、小柳1号窯の小型三角窯とともに、今後保存措置が考えられることになった。

発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査員水谷寿克・石井清司・久保田健士が担当して行ったが、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府南丹教育局・亀岡市教育委員会・亀岡市大型プロジェクト対策室・亀岡市篠町自治会等の関係諸機関には多大なる協力を得た。

また調査の面では、先述したような特異な窯の検出により、名古屋大学 檜崎彰一、奈良国立文化財研究所 森 郁夫・沢田正昭・巽順一郎、(財)京都市埋蔵文化財研究所 田辺昭三・百々瀬正恒・永田信一・大矢義明、大谷女子大学 中村 浩、(財)平安博物館 寺島孝一、口丹波史談会 永光 尚、多岐に亘って御指導・助言を賜わった。さらに富山大学 広岡公夫、奈良教育大学 市川米太の両氏には科学的な見地により年代測定をしていただいた。

現地調査にあたっては、上記調査員石井清司が中心となり作業の進行をはかったが、調査補助員・整理員として京都学園大学考古学研究会をはじめとする有志学生諸氏や各大学の卒業生、調査作業員・整理員として地元篠町や本梅町の方々に参加していただき記して感謝の意を表したい。^(注)なお中西 宏氏には、調査事務を含め作業全般に亘る協力をしていただき特に感謝したい。

調査期間中、調査整理事務所・現地調査事務所の土地を提供していただいた木曾侍郎・中尾清一郎・山崎泰一の各氏、ならびに調査地の土地を快よく借用させていただいた栗山範夫氏には心から感謝したい。

以上の各々の協力を得て、現地調査は昭和57年3月27日に一応の成果を得て終了したが、昭和56年9月24日に西長尾1号・3号・4号の現地説明会を、同年12月24日に西長尾5号・6号の現地説明会を行い、古代窯業生産に興味を持つ人や地元関係者が集り盛大のうちに終了した。

この概報の作成にあたっては、「はじめに」を水谷が、各窯跡の概要を久保田が、以下の各項を石井が執筆したが、現時点では膨大な出土遺物の整理が不十分であるため、今後十分な検討を行ったうえで改めて報告したい。

2. 調査の経過

西長尾窯跡群の発掘調査は、昭和52年度9号バイパス予定路線内における分布及び試掘調査の結果、西長尾F地区の丘陵西側斜面裾部に窯体の一部と3か所の灰原を検出し、4基の窯を想定した。

昭和55年度は窯が立地する斜面裾部に約169m²の平坦面があり、平坦部の試掘調査に際し、

付表3 西長尾窯跡窯体一覧表

	窯体構造	主軸方位	総長	最大幅	床面傾斜角	出土遺物	備考
1号窯	半地下式登窯	N87°W	5.30	1.35	28°	杯・皿・蓋・壺・平瓶・円面硯	
2号窯	不明	—	—	—	—	碗・鉢	灰原のみ確認
3号窯	半地下式登窯	N81°W	8.44	1.55	29°	碗・鉢・壺	
4号窯	半地下式登窯	N82°W	5.79	1.08	30°	杯・皿・蓋・瓶・平瓶	
5号窯	楕円形平窯	N75°W	2.256	1.35	第一次床面 10°24' 第二次床面 8°35'	碗・鉢・壺	焚口が2方向ある
6号窯	三角形平窯	N77°W	2.44	一辺 2.44	8°	碗	焚口が2方向ある

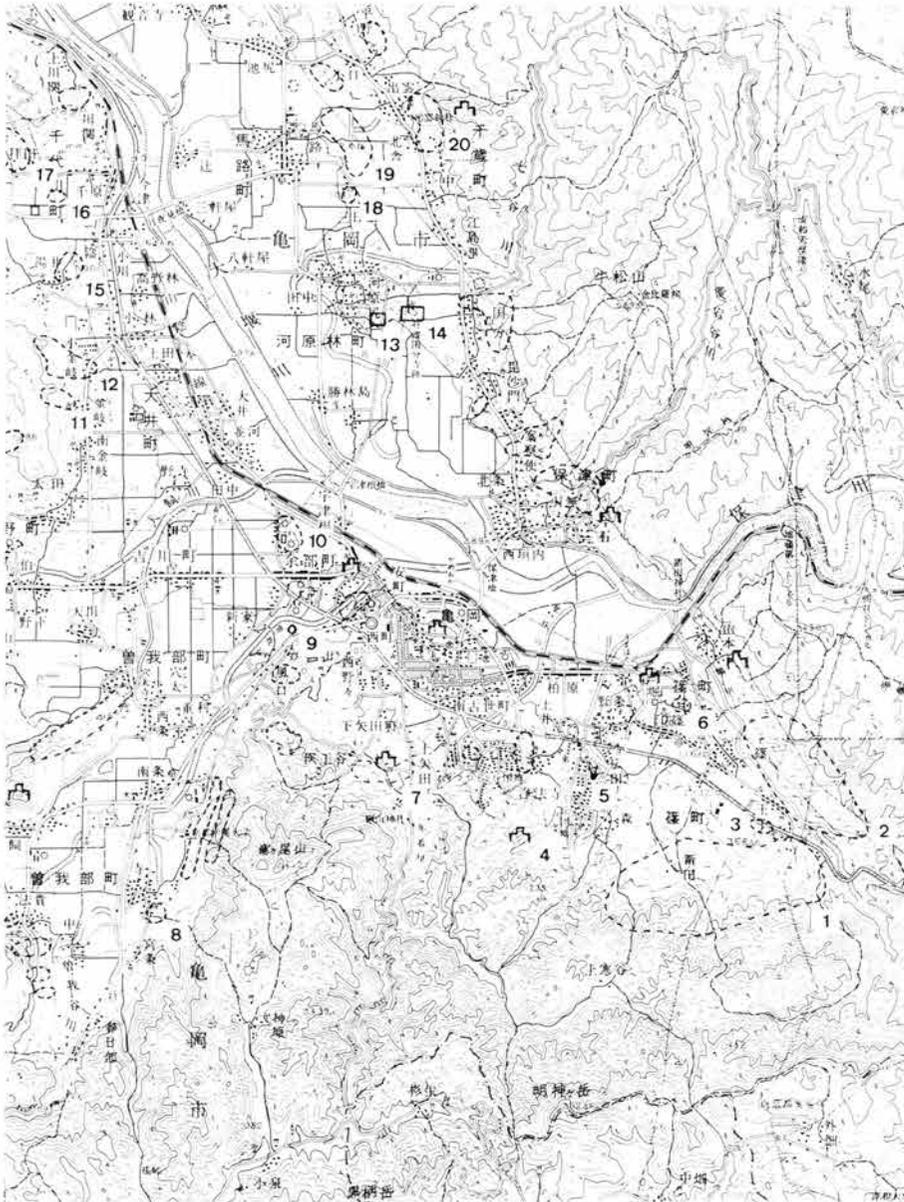
多数の須恵器片を採集したため、この平坦面が窯操業時の作業場跡であるのか、あるいは窯の灰原が水田化された際に削平されたものであるのかを明確にするため発掘調査を行った。調査の結果、作業場跡と思われる遺構は検出されず、水田化される際に削平を受け、窯の遺物が散布したことが明らかになった。

本年度は52年度の試掘調査結果を踏まえ、4基の窯を想定し、4月初旬より発掘調査の準備を行った。現地調査は6月4日に着手し、9月末日終了の予定であったが、調査が進むにつれて後述するように4基の窯のほか新たに2基の窯を検出し、最終的には埋め戻し作業も含め57年1月末日の8か月余りを要した。

現地調査は、まず、推定3号窯の立地する26～30・J～N区の丘陵斜面に3mの小地区の地区割にそい1×2mのグリッドを15か所設定し、層位・窯体の主軸方位、灰原の範囲を確認したのち、全面調査にきりかえた。その結果、3号窯は斜面に構築された半地下式登窯であり、煙道部は現地表下10cmで窯体焼土を確認したが、焚口部は現地表下2.5mを測り、予想以上に深いことが明らかになった。また、灰原は焚口部より東西9m、南北10mの範囲で広がる。

3号窯の窯体及び灰原の掘削と併行して、推定1号窯が立地する17～23・I～L区に3号窯同様、3mの小地区にそい1×2mのグリッドを15か所設定し、層位・窯体の主軸方位を確認したのち、全面調査を行った。その結果、1・4号窯の前庭部は削平を受け、1号窯の南1.5mに隣接して4号窯が構築された半地下式登窯である。1・4号窯灰原は丘陵西側斜面より17～22・M・N区の湿地帯まで広がり、1号窯灰原は現地表下より約2.5mの深さで検出され、灰原掘削に際しては湧水が著しく難渋を極めた。1・3・4号の窯体構造・灰原の範囲が

明らかになり、55年度に調査された23～26・R～Z区平坦面で確認された灰原内出土遺物より1・3・4号窯の遺物とは時期を異にする窯（2号窯）があると考え、22～24・N～O



第36図 亀岡盆地主要遺跡分布図

- 1・2. 篠窯跡群 3. 三ツ塚古墳群 4. 浄法寺城 5. 村上神社窯跡群 6. 観音芝遺跡 7. 医王谷遺跡
 8. 与能廃寺 9. 狐塚古墳 10. 余部遺跡 11. 北金岐古墳群 12. 小金岐古墳群 13. 御上人林廃寺
 14. 丹波園分寺跡 15. 湯井遺跡 16. 桑寺廃寺 17. 拝田古墳群 18. 三日月古墳群 19. 車塚古墳
 20. 出雲古墳群

区に7×6mのトレンチを設定し、窯体の追求に務めた。掘削の結果、22・23M区で直径2mの円形焼土があり、焼土直上に拳大の粘土塊が散在し、窯体の一部と考えた。2号窯窯体は削平を受け、窯体構造は明らかでないが平窯と思われる。灰原はトレンチ西壁よりN区に広がる。2号窯灰原を除去した際、トレンチ西壁に接して新たに焼土帯を検出し、急抛、調査地を西側N・O区に拡張し窯体の確認に務めた。拡張の結果、2基の窯(5・6号窯)を検出した。

5号窯は平面砲弾形を呈し、ロストル(火格子)型式による二重床面という特異な窯体構造であり、6号窯は平面三角形を呈するいわゆる「三角窯」と考えられる。

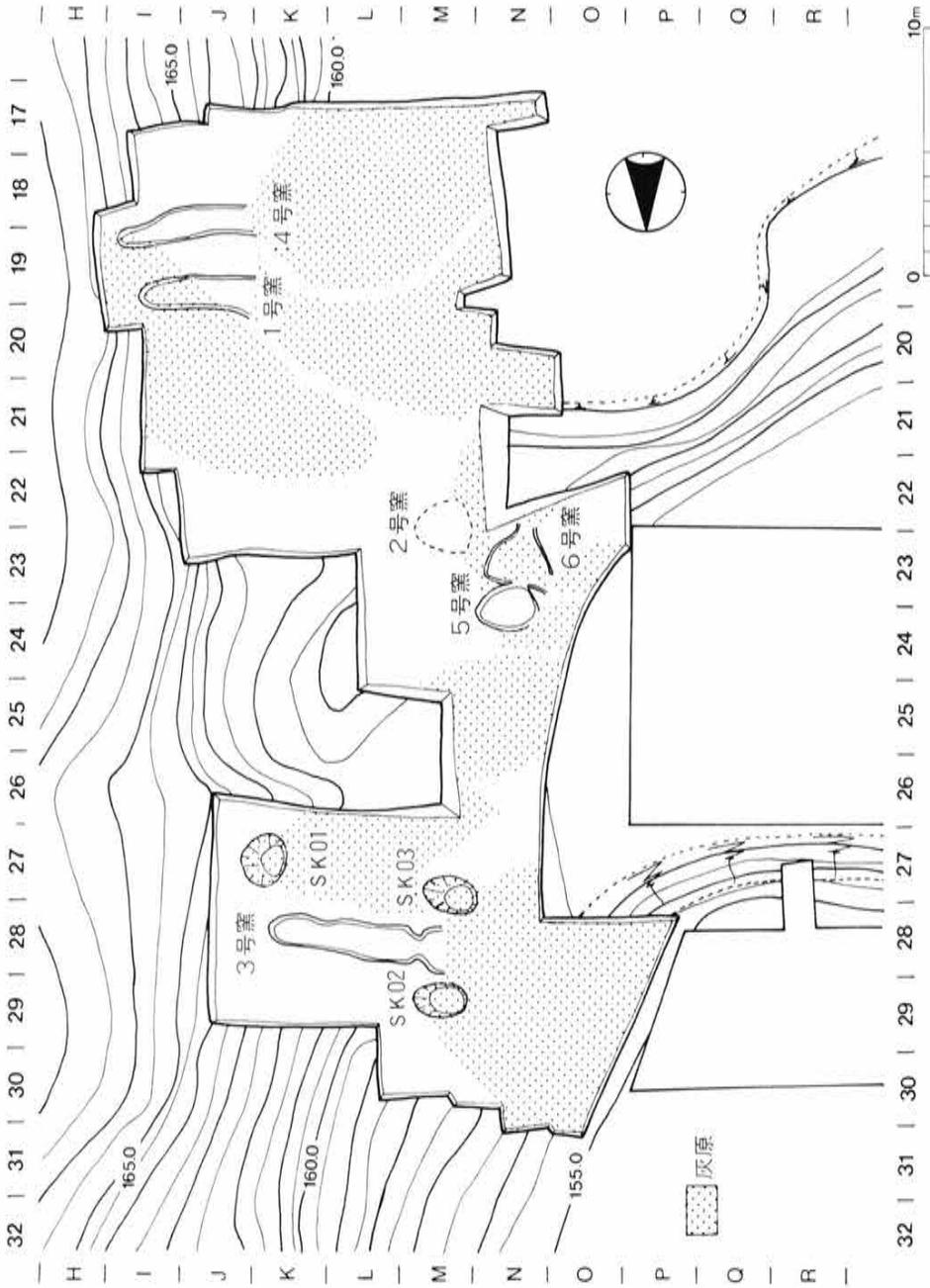
5号窯は篠窯跡群の調査では初見であり、窯体構造、今後の調査方法を検討するため、檜崎彰一・田辺昭三・中村 浩・寺島孝一の各氏に専門的な指導・助言を仰ぐことにした。

その指摘された見解は概ね次のとおりである。

- (1) 5号窯はこれまで類例をみないロストル(火格子)型式の須恵器窯である。
- (2) 円柱上面に敷かれた拳大の粘土塊が本来の床面であることは粘土塊上面に土器が密着していることと、側壁からそのまま続く粘土塊があることより明らかである。
- (3) 拳大の粘土塊に苧(スサ)が認められ、床面を拳大の粘土塊で敷き、表面積を広くすることは窯体内の保温を考慮したものである。
- (4) 焼成方法は、燃烧部の火が円柱間の隙間を這ったのち粘土塊で敷かれた床面の隙間を縫い、焼成部全面に火が効率よく回ったのち煙道部へ続く。
- (5) 燃烧部・焼成部・煙道部の各境には両側壁を内側にしほり込み、区画が明瞭である。
- (6) 5号窯出土遺物は15cm未満の小型品に限定でき、小型品を効率よく生産する窯であり、出土遺物より10世紀後半～11世紀前半と考えられ、須恵器から陶器に移行する時期に相当し、今後、分業形態を考える上にも重要な遺構である。
- (7) 以上の点より保存措置を構ずる必要がある。

以上の指摘を踏まえ、当調査研究センターは12月24日、新聞発表・現地説明会を行い、5・6号窯の遺跡保存を明らかにした。なお、保存される地域の具体的な利用計画の策定、整備計画については今後、府教育委員会、日本道路公団、亀岡市教育委員会、及び土地所有者との協議を行うこととし、その解決は将来に委ねられた。

なお、この間、京都大学 樋口隆康(当調査研究センター副理事長)、文化庁調査官 浪貝 毅、奈良国立文化財研究所理蔵文化財センター 佐原 真(当調査研究センター理事)ほか多くの学識経験者からの有益な指導・助言を受けた。また富山大学 広川公夫氏には熱ルミネッセンス、奈良教育大学 市川米太氏には熱残留磁器測定依頼を快くお受けいただいた。



第37図 篠・西長尾窯跡遺構配置図

調査終了後、1～4号窯は埋め戻し作業を行い、5・6号窯については窯体全面を覆う仮設小屋を設置し、今後の保存処置に備えることが決定した。

地 区 割

発掘調査地区割は51年度より始まった京都府教育委員会の地区割に準拠し、3m方眼を最小地区とし、最小区を東から西へA～T区までの20区(60m)を中地区とし、中地区を包括するものとして小字名により大地区を設定した。

これにより今回の調査地は、篠・西長尾F地区に相当する。

なお、最小区の地区割は東南隅を基準杭とし、東西をローマ数字、南北をアルファベットで標示する。

3. 各窯跡の概要

各窯跡の規模・主軸方向等については一覧表に譲り、各窯跡の特徴的なことについて以下概略を記することにする。

1号窯 調査地南端の4号窯の北に隣接する位置にある。地山層を「U」字状に掘り込んで構築された、いわゆる半地下式登窯である。

現状では、天井部は崩落しており、窯前庭部および煙道部の一部は削平を受けており、燃烧部・焼成部の床・壁面が残存している。焼成部では、窯壁の崩落が見られる。窯壁は須恵質状に堅く焼きしめられており、後述する3・4号窯に比し燃烧効率の良さが窺える。また、崩落した天井部壁の断面観察によれば、4回以上の窯壁の補修作業が認められる。

焚口幅は1.5mを測り、3号窯に比して狭くやや開き気味になっている。また焚口付近まで4号窯灰原が堆積しており、4号窯の操業の際、1号窯の前庭部の一部が削平されたと思われる。燃烧部床面には、杯・皿・蓋の完形品など28点以上が検出された。焼成部・煙道部も、幅は1.1mを測る。

灰原は、東西10m、南北15mの範囲で広がる。1号窯灰原は、2号窯灰原に切られており、また4号窯灰原とは砂・粘土および植物遺体(松葉・ヒシの実等)を含む間層によって隔てられている。

出土遺物としては、燃烧部床面のもの以外に灰原内から杯・皿・蓋・壺・平瓶・円面硯・二面硯が出土した。

2号窯 2号窯は1号窯の北西12mの丘陵斜面裾の平坦面に構築された窯である。窯体の遺存状態は極めて悪く、窯壁の一部と思われる焼土がほぼ円形にめぐらただけで、窯体の構

造・規模については不明である。窯体床面と思われる部分では拳大の円形を呈する窯滓が多量に出土し、黒岩1号窯との類似が指摘されようか。それらはおそらく焼台として使用されたものと思われる。灰原は南北5mの範囲で広がり、1号窯灰原を切っており、6号窯窯体の上面をおおう。なお、出土遺物としては、碗・鉢等の小型品が目立つ。

3号窯 3号窯は、調査地北端に立地する半地下式登窯である。現状では、他の窯同様に天井部の崩落が認められ、前庭部・焚口および燃焼部・焼成部・煙道部の床面・側壁が残存している。

前庭部は、2m×2mの平坦面をなしており、その南北両側に長軸2m、短軸1.5m、深さ0.3mの黒色炭層を埋土とする楕円形土壙（SK02・SK03）がある。この2つの土壙については、操業時に焚口・燃焼部に堆積したマキを埋め消したのち、灰を左右に廃棄したと思われる。前庭部平坦面は、地山土を盛土し構築したことが土層断面の観察より窺える。焚口は、やや「八」字状に開いており、天井部の一部が残存する。

燃焼部・焼成部の床面は、須恵質状に強く焼きしめられており、ところどころに修復の痕が認められる。その側壁断面の観察によれば、2～3回の窯壁補修が考えられる。なお、焼成部の一部から煙道部にかけては、床面が淡赤褐色・淡黄褐色を呈し、また側壁の残りもよくない。窯体全体として、燃焼部・焼成部の幅に比して、煙道部の幅は狭くなっている。

灰原は、前庭部から斜面下方に向かい南北9m、東西10mの範囲で広がる。灰原層の断面観察によれば、焼土・窯滓および遺物片を大規模に廃棄した層が認められ、このことから窯壁の補修作業を裏付けている。

出土遺物としては、碗・鉢・蓋・杯・瓶がある。

4号窯 4号窯は、先述したように1号窯の南に近接した半地下式登窯である。1号窯の先後関係は、窯体間の断ち割りの観察により、1号窯操業の終了ののち一部盛土を行い4号窯を構築したことが考えられる。

現状では、前庭部のほとんどは削平され残っておらず、焚口・燃焼部・焼成部・煙道部の床面・側面が残存している。焚口幅は、1mを測る。燃焼部・焼成部の床面・側面の焼きは、1号窯に比し悪く4号窯の燃焼効率は1号窯より悪かったと思われる。また窯壁の断面観察により2～3回の操業が考えられる。煙道部に比して幅も狭い。

出土遺物としては、杯・蓋・皿・平瓶・瓶などがある。

5号窯 5号窯は、丘陵裾平坦面より斜面へ移行する傾斜変換部に構築され、平面楕円形を呈する倒焰式平窯である。床面が二重構造をなし、底部床面と支柱上面の床面に分かれる。窯体の遺存状態は、比較的良好で、天井部の崩落を除けば各部分の残りはよい。焚口は、

窯体中軸をはさんで対称の位置に2方向にあり、従来知られていた「三角窯」との類似を指摘できる。燃烧部は長さ45cmと狭く、中央に円柱が2本直立した状態で残存したことより、烧成部同様の二重構造が考えられる。烧成部は、底部床面上に径10cm、長さ20~30cmの円柱を10数本立て、その円柱（支柱）上に拳大の粘土塊を敷き製品を置く床面を形成しており、特異な二重構造をなしている。床面・側面・支柱のいずれも焼きは良好で、燃烧効率の良さを窺わせる。燃烧部および煙道部との間に、窯壁の張り出しが認められる。煙道部は、烧成部の床面より若干の段をもち、側面は垂直に立ちあがっている。

灰原は、隣接する6号窯窯体内にも堆積して広がっている。出土遺物には、壺・瓶があり、ほぼ小型品に限定できる。

6号窯 6号窯は、5号窯の南に接する位置にあり、平面三角形を呈する倒焰式平窯と考えられる。

現状は、5号窯に比して残存状態は悪く、5号窯同様に二重構造の床面をもつと考えられるが、支柱が烧成部に4本遺存し、また煙道部に近い部分に二重の床面が残存しているだけである。

焚口は、左右対称の位置に2方向にあり、焚口上部のアーチ部分の崩落が確認された。燃烧部は、半径40cmの円弧を描く凹みがあり焼土の広がり方が認められる。烧成部は、先述したように、二重の床構造が想定できるが、5号窯のような烧成部と燃烧部の区切りについては不明瞭である。支柱は、床面の上に粘土塊を置きその上に設置しており、5号窯の支柱の設置との差異が指摘できる。煙道部は烧成部との間に側壁の張り出しをもっており5号窯との類似を認める。側壁は、垂直に立ちあがっている。

また灰原の層序により、5号窯が6号窯を削平したのち構築されていることが認められた。出土遺物としては、壺・鉢がある。

4. 出土遺物

篠・西長尾窯跡群の出土遺物はコンテナ・バットで200箱以上の莫大な量に達し、現地調査に併行して洗浄・接合・実測を行っているが、報告書印刷期日の関係上、各窯の器種構成・形態の差異など十分な検討を行えず、今回は各窯出土遺物の概略を記し、その詳細は一応の遺物整理が完了したのち改めて報告したい。

1・4号窯出土遺物（1~16） 1・4号窯は窯体及び灰原の層序関係により1号窯が4号窯に先行することは前述したが、1・4号窯の灰原内出土遺物を概観すると形態・器種構成に差異はなく、今回は一括して取りあげ、今後、整理作業がすすむにつれ詳細に検討していきたい。

1・4号窯出土遺物には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・壺・壺蓋・鉢・平瓶・円面硯・二面硯がある。

杯は高台の有無により高台をもたない杯A（8～10）と高台をもつ杯B（5・6・11・15・16）に大別でき、杯Bが主体をしめる。

杯Aは底部より斜め上方に立ちあがる口縁部からなり、口縁端部はいずれも尖りぎみにおわる。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を行い、底部外面はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。

杯Aは口径10～17.5cm・器高2.5～4.0cmを測り、口径12cmを前後するI群と16cmを前後するII群に細分できる。

杯Bは杯Aに高台を付したもので口縁部が内彎ぎみに立ちあがるものとわずかに外反するものがある。高台は断面台形を呈し底部と口縁部の屈曲部近くに付するものが多い。杯Bは口径10cm、器高3.5cmを測る小型品から口径21cm、器高5.5cmを測る大型品まで大小の差異があり、口径12～13cm、器高3～4cmが主体をしめる。

蓋A・平坦な頂部より屈曲する縁部へ続くもの蓋A（1・3・4・12・13）と断面笠形を呈するもの蓋Ab(2)があり、頂部中央にいずれも扁平な宝珠形つまみを付す。頂部外面はヘラ削りののち、一部ナデ、縁部内・外面はロクロナデ調整を行う。杯B蓋は口径12～22cmと大小の差異があり、口径14cm前後が主体をしめる。

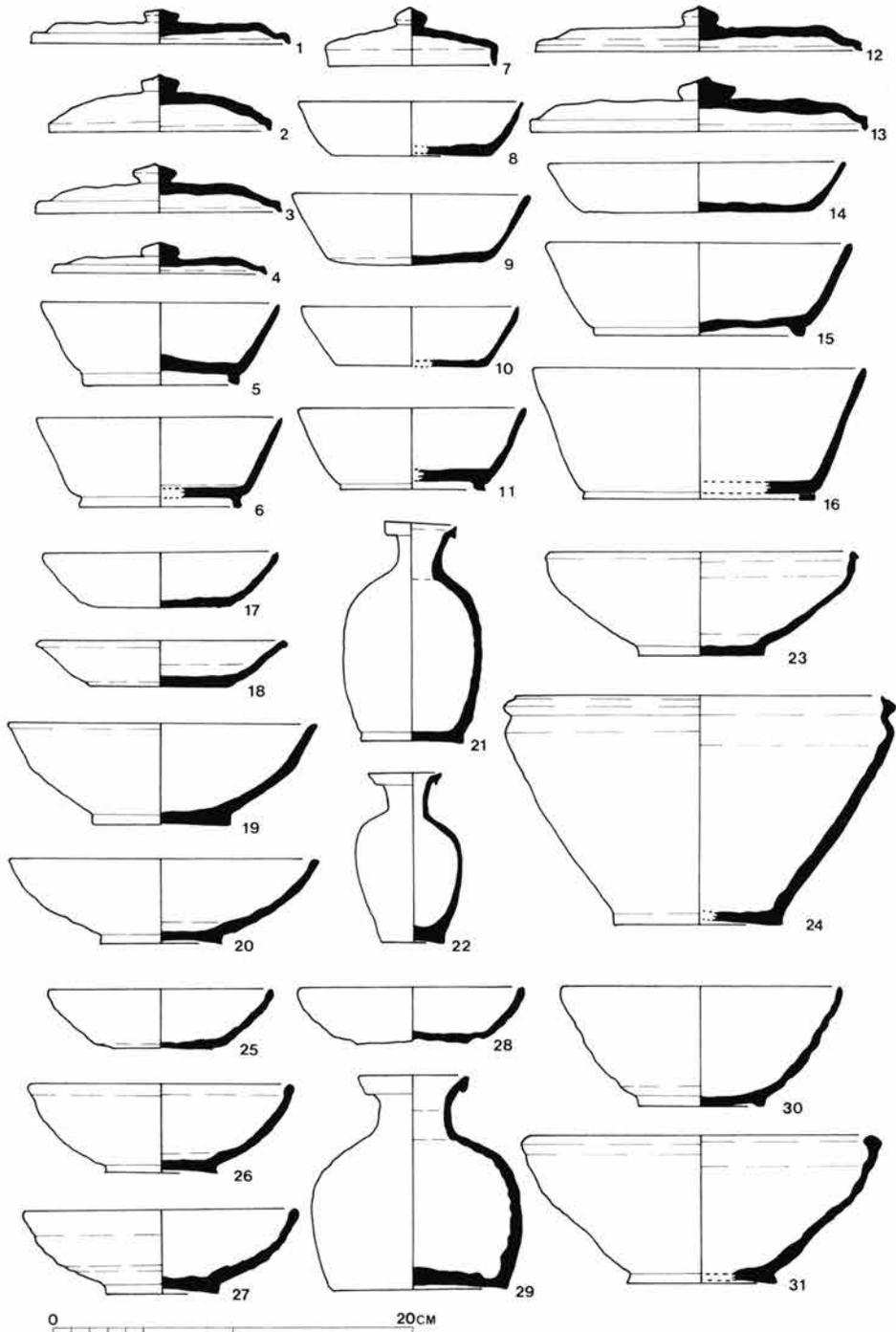
蓋B(7)は、平坦な頂部より直行する縁部へ移行するもので、頂部中央に扁平な宝珠形つまみを付す。縁部内・外面ロクロナデ調整。

皿(14) 皿は高台の有無により、高台をもたない皿Aと高台をもつ皿Bに大別でき、皿Bは数点を数えるのみで皿Aが主体をしめる。皿Aは扁平な底部より斜め上方に短く立ちあがる口縁部を付し、口縁部内・外面及び内底面はロクロナデ調整を行う。底部外面はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。皿Aは口径10～22cmまで大小の差異があり、口径15cm前後が主体をしめる。

3号窯出土遺物(17～24) 3号窯出土遺物は杯・碗・壺・鉢があり杯・碗が主体をしめる。

杯は平坦な底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部をもつもの(17)と外上方に直線的に立ちあがるもの(18)がある。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を行い、底部外面はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。3号窯出土遺物の内、杯Aに高台を付す杯Bは皆無である。

碗(19・20) 碗は小さな平底で底部より内彎ぎみに深く立ちあがり、口縁部を付し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内・外面はロクロナデを行い、底部外面は回転糸切り痕をと



第38圖 土器 実測図

1号窯出土遺物；1~16，須惠器杯A；8~10，杯B；5・6・11・15・16，杯B蓋；1~14・12・13，壺蓋；7，皿A；14，3号窯出土遺物；17~24，須惠器杯，A；17・18，碗；19・20，鉢；23・24，壺；21・22，5号窯出土遺物；25~31，須惠器杯A；25・28，碗；26・27・30・31，壺；29

どめる。

壺 (21・22) 壺はナデ肩の体部より口縁部は上で強く外反し、端部は上方に突出する。底部は平底で回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

鉢 (23・24) 平底の底部より直線的に外反する体部へ続き、肩部で強く内彎し、口縁部は「く」の字形に屈曲する。口縁端部は尖りぎみにおわる。壺は口径 16.8cm、器高 4.8cm の小型品と口径 20.4cm、器高 12.8cm の大型品がある。底部外面には回転糸切り痕をとどめる。

5号窯出土遺物 (25~31) 5号窯出土遺物は杯・壺・鉢がある。杯 (25・28) は底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部を付す。杯は底部へラ切りのもの (28) と回転糸切り痕をとどめるもの (25) がある。

壺は平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部を付し、口縁端部は内・外面にわずかに肥厚する。底部外面に回転糸切り痕をとどめる。

壺 (29) 壺は器高と体部最大径が等しく扁平を呈する。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部をわずかに垂下させる。底部外面に回転糸切り痕をとどめる。

鉢 (31) 鉢は平底の底部より斜め上方に立ちあがる体部を付す。口縁部は内・外面に肥厚し、玉縁状を呈する。底部は突出ぎみの平底を呈し、底部外面に回転糸切り痕をとどめる。

5. ま と め

篠・西長尾窯跡群の調査は、昭和56年6月4日より57年1月末日までの8か月余りを要し、現在、各窯の窯体構造・出土遺物について資料整理を行っているが、特異な窯体構造を呈する5・6号窯を含め、総数6基を数え、出土遺物はコンテナ・バットに200箱以上と莫大な量にのぼり、今後資料整理を進めた段階で詳細に検討していきたい。

今回は報告書印刷期日の都合上、概略を記し、現地調査期間に気付いたこと及び今後整理作業の段階で留意すべき点を摘記して結語としたい。

(1) 各窯の窯体構造は、1・3・4号窯が西側斜面（傾斜角30~40°）に構築された半地下式登窯であり、5・6号窯は丘陵裾部平坦面に構築された平窯である。

(2) 1・4号窯は1.5mの間隔をおいて隣接し、窯体断ち割り及び灰原の層序より1号窯が4号窯に先行する。出土遺物は2基とも器種・器形に差異がなく、近接した時期に操業されたことが窺える。

(3) 1号窯灰原内出土遺物は、6基の内、出土総数が最下であり、また窯壁断面観察より4回以上の補修作業が考えられ、3・4号窯に比し、燃焼効率の良さが窺える。

(4) 3号窯は西長尾窯跡群中、最大規模をほこり、窯壁断面観察及び灰原の層序より2回以上の補修作業が考えられる。出土遺物は杯・埴・壺・鉢があり、いずれも底部は回転糸切りによる。

(5) 5号窯は二重床面という特異な窯体構造を呈し、須恵器窯としては初見である。出土遺物は杯・埴・壺・鉢があり、小型品が主体をしめる。

(6) 6号窯は平面三角形を呈し、これまで言われている「三角窯」と近似する。床面は5号窯同様に二重床面の可能性があり、また、窯体及び灰原内に緑釉陶器を含まず、これまでの「三角窯」との差異が指摘できる。

(7) 5・6号窯の先後関係は、6号窯の操業が終了したそののち、近接した時期に6号窯を削平し5号窯を構築したことが断面観察より窺える。また、5・6号窯とも二重床面と考えられ、6号窯から5号窯への窯体構造の変化が指摘できる。

(8) 各窯出土遺物はこれまでの篠窯跡群の調査例の内、良好な一括資料であり、土器編年の際の指標になると考えられる。

(注)

調査補助員	立花 正寛・波多野 徹・山口 文吾・小島 敏明・大石 淳也・平本 哲 山本 喜昭・上畑 右一・後藤 馨・松元 達也・三原 進・山本 健
調査作業員	中西 宏・宇野 三雄・木村千代一・平田数太郎・法貴 四郎・松本 春樹 矢代四一郎・井内 悦子・小西すみえ・木村 一江・日下部イクエ・小西 君江 西田 初恵・中西ふみ子・小川 ふじ
調査整理員	岡本美代子・岩田 且子・村田 澄江・三木 伸子・河原 早苗・山本 末子 片山 律子・冬木 千恵・村上 晴美・染野いづみ・堤 涼子・大田めぐみ

3. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和56年度発掘調査概要

はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、昭和54年度に開始され、今年度で3年目を数える。

昭和54・55両年度の調査については、日本道路公団大阪建設局の委託により、京都府教育委員会が事業主体となって実施したが、今年度からは、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続して行うことになった。

同計画予定線内の遺跡については、昭和53年に行われた分布調査によって、福知山市大字大内山田から、同長田に至る約15km区間に、10遺跡が所在することが確認されている。

(表4、第39図)

付表4 近畿自動車道舞鶴線関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	所在地	備考
1	多保市城跡	城跡	(中世)	福知山市大字長田小字岩崎	追加確認遺跡
2	岩崎古墳	古墳	古墳時代	// // //	
3	岩崎古墓	古墓	江戸	// // //	
4	宮遺跡	集落跡・古	弥生～中世	// 宮小字城ノ尾他	昭和54年度から継続 今回報告
5	城ノ尾古墳	古墳	古墳後期	// //	昭和54年度調査
6	大内城跡	城館跡	弥生～近世	// 大内小字平城	昭和55年度から継続 今回報告
7	後正寺古墓	古墓	(中世)	// // 小字後正寺	
8	後青寺跡 (後青寺古墳)	(館跡)	弥生～近世	// // 小字後青寺他	本年度調査 今回報告
9	洞楽寺古墳	古墳	古墳後期	// // 小字坪田	
10	山田館跡	館跡	(中世)	// // 小字大内山田	

今年度は、それらの遺跡のうち、大内城・後青寺跡・宮遺跡の3か所について、発掘調査を実施した。後青寺跡については、今年度初めて着手するものであるが、宮遺跡は、昭和54年度からの継続調査である。また、大内城跡についても、昨年度に樹木伐採と測量準備等の予備調査を行っており、今年度は発掘調査を行ったものである。

調査期間については、下記のとおりである。

大内城跡 昭和56年5月14日～9月30日、(一時中断)12月8日～昭和57年3月31日。

後青寺跡 昭和56年8月18日～9月18日。

宮遺跡 昭和56年10月6日～12月21日。

現地調査は、当調査研究センター調査課調査員 松井忠春・辻本和美・伊野近富が担当した。また、調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・福知山市教育委員会・同市史編さん室・同企画室・福知山史談会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得た。調査期間中の作業については、各大学の学生諸氏ならびに地元の方々の献身的な参加協力をいただいた。また、調査全般にわたって、宮総代 今川栄一氏、大内総代 西躰 太氏をはじめ各地区の区長様には、格別の御高配をいただいた。さらに、埋蔵文化財の保護に理解を示され、発掘調査を快諾された土地所有者の方々および、現地で直接に、または間接的に御指導・御教示を賜った方々に、心より謝意を表したい。

本書は、大内城跡・後青寺跡・宮遺跡の3編の調査概報を収録したものである。執筆の分担については各稿の末尾に明記した。(辻本 和美)

調査参加者

学生補助員及び整理員

跡部 康治・阿部 悌二・金子 彰男・杉山 司郎・西口 俊郎・藤田 一
堀 誠・松岡 宏高・山本 和子・山本真由美・義則 敏彦

現地作業員

(大内地区) 芦田 勇・芦田 実雄・芦田 弘・井上 光治・井上 和成
土家 一・土家 良夫・土田 正巳・中司順太郎・中司丈太郎・西躰 一三



第39図 近畿自動車道舞鶴線内遺跡分布図

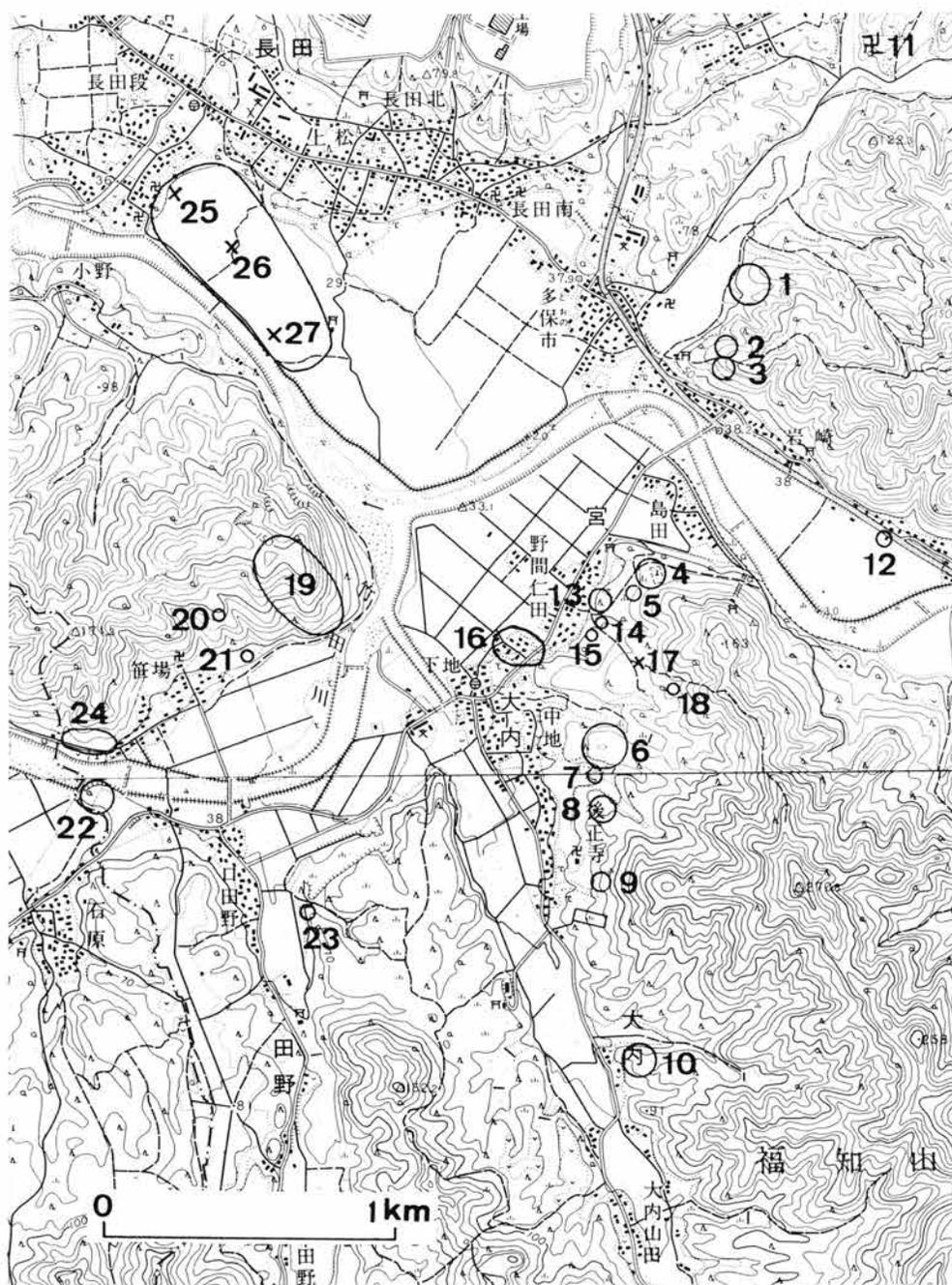
西躰 隆雄・西躰 種夫・堀 一三・堀 一夫・堀 喜太郎・堀 嘉寿
 堀 憲三・堀 三次郎・堀 俊治・堀 俊太郎・堀 清治・堀 只志
 堀 武雄・堀 竹三・堀 宗男・堀 好一・堀 佐一・堀 敏晴
 堀 正博・山本 伝一・吉田 義雄・芦田ふさの・今川 智子・竹内千枝子
 土田かず子・土田 幸子・土田みちえ・土田ゆき子・土家 禎子・土田としえ
 中野千代の・西躰 正江・堀 昌子・堀 綾子・堀 恵美子・堀 きみ
 堀 千恵子・堀 とし子・堀 ノブエ・堀 まきえ・堀 松枝・堀 みさえ
 堀 美智子・堀 ゆき子・堀 よしえ・堀 あいの・堀 ヨシエ・山本すが子
 山本美喜子・片山サワ子・中司てる子・堀 美津野・堀 コトエ・土田美千代
 土田 初枝
 (宮 地 区) 今川 栄一・井上 五郎・杉山梅太郎・藤田 清・藤田 勉
 芦田みえ子・芦田みさ子・井上はつ江・井上美代子・今川美佐保・今川 芳子
 今川 和美・杉山 静香・藤田 秋野・藤田 昭子・藤田はるえ・藤田 美行
 藤田千代子
 (順不同・敬称略)

位置と環境

今回の調査対象地は福知山市の東南部に位置しており、古代には「六人部郷」と呼ばれていた地域にある。以下この章では六人部地方の歴史的環境について概述し、地域の特色を把握しておきたい。

六人部地方は、国道9号線(旧山陰道)と播磨からのルートが合流する地点に当たっており交通の要衝として古代から重要視されたことは想像に難くない。京都・丹後ルートの中間地点として重要であったことは、平安中期の小式部が詠んだ「大江山生野の道の遠ければまだ踏みも見ず天の橋立」という歌の中の生野がこの地にあることから知ることができる。また、播磨・六人部の交流としては弥生時代中期の宮遺跡から播磨系の土器が出土している事実がある。さて、このような要衝の地が歴史的にはどのように変遷したかを以下述べよう。

先土器時代に遡る可能性のある遺跡として和田賀遺跡(第40図25)がある。ここで採集されたチャート製削器が製作技法上から先土器時代の所産である可能性が指摘(注1)されている。縄文時代の遺跡は未だ不明だが、武者ヶ谷遺跡から縄文時代草創期の小型丸底土器が出土しており、半田遺跡からは後期の遺物が出土している。弥生時代になると集落跡として宮遺跡が生まれ、少量の遺物が大内城跡や第40図16の散布地で認められることから、集落と耕地、キャンプサイトが中期頃に経営されていたらしい。



第40図 周辺遺跡分布図

1. 多保市城跡 2. 岩崎古墳 3. 岩崎古墓 4. 宮遺跡 5. 城ノ尾古墳 6. 大内城跡 7. 後正寺古墓
8. 後青寺跡 9. 洞楽寺古墳 10. 山田館跡 11. 多保市廃寺 12. みこし塚古墳 13. 城山城跡(仮称)
14. 男塚古墳 15. 姫塚古墳 16. 散布地 17. 須恵器採集地点 18. 奥谷遺跡 19. 庵戸山古墳群
20. 庵戸山古墳 21. 庵戸古墳 22. 田野城 23. 口田野古墳 24. 境谷古墳群 25. 和田賀遺跡
26. 前ヶ嶋遺跡 27. 仲堤遺跡

古墳時代には他地方と同様後期になると多くの古墳が造営される。今年度調査した後青寺跡では6世紀初めの木棺直葬墓が発見され、古墳の中ではもっとも古い時期の資料となった。6世紀中頃には六人部地方唯一の前方後円墳である男塚が造られ、これ以後一丘陵一基程度の割合で造られるらしい。しかし、この状況は大内・宮の周辺にのみ認められ、竹田川を越えた所には、庵戸山古墳群や境谷古墳群が造営される。単墳と群集墳が1つの川を挟んであることは、この一帯が有機的に結びついていたと仮定すれば、身分の差異により墓域の選別が行われたと解釈できる。

奈良時代になると多保市廃寺が造立されたらしい。平安時代には文献史料から六人部庄という荘園が経営されていたことが知られる。なお本家は八条院、領家は平頼盛であった。今年度調査した大内城跡はこの時期に館として機能しており、平安末期の様相の一端が明らかとなった。鎌倉時代になると宮遺跡の南方の一面に、マウンドをもった中世の墓が造られ、墓(村)?堂も併設される。

室町時代に入ると、大内城や奥谷遺跡が経営され、同末期になると、田野(福岡)城、大内城(特に丘陵端の郭)、城山城跡、多保市城跡が造られ、一村に一郭という割合で城館が営まれる。なお、規模は40m前後の台形に土塁や空堀をめぐるした単郭がほとんどであるが、多保市城跡だけは3つの平坦面で構成されている。(伊野 近富)

各遺跡の調査概要

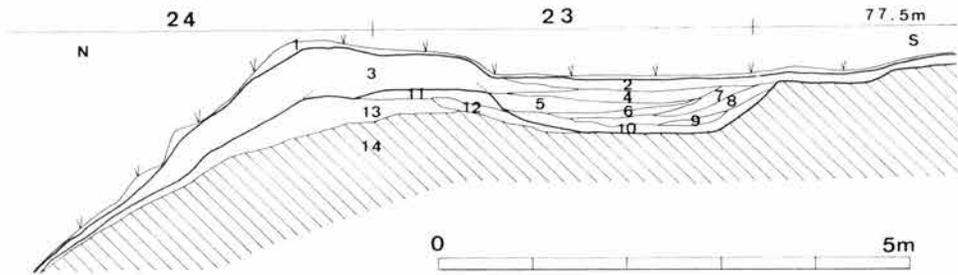
(1) 大内城跡

1. 調査の概要

大内城跡は西へのびる幅約100mの丘陵地を幅100m、長さ400mに亘って人為的に改変し、城としたものである。調査前の観察によれば土塁や空堀がめぐり、帯ぐるわなども良好に認められる中世の平山城と考えられていた。なお、藤井善布氏は大内城にある郭が西部と東部とでは統一を欠いていることを指摘し、東部は「長田野を含めた六人部一帯を支配した古代豪族の屋敷跡^(FE2)」と推定されていた。

調査地は大内城の東部の南北約100m、東西45m前後の地域であり、大内城全体の約10分の1が対象となった。なお、標高は70m台で谷の水田面との比高差は約20mである。

調査は、まず全域を道路のセンター杭を利用して4m方画の地区を設定することから始めた。そしてこれを基準に幅1.5mのトレンチを設け層序の把握に努めた。その結果、腐蝕土(数cm)、黄褐色土(20~30cm)、暗褐色土(0~20cm)、赤褐色土(地山)の土層が確認で



第41図 北部土塁・空堀断面図 (Kライン2.5m東)

1. 腐蝕土 2. 黄色土 (第2期整地層) 3. 黄褐色土 (第2期土塁) 4. 黄褐色砂質土 5. 暗黄褐色土
6. 暗褐色土 7. 暗黄褐色土 8. 暗茶褐色土 9. 黄褐色土 10. 暗褐色土 11. 暗茶褐色土 12. 赤褐色粘質土 13. 暗黄褐色土 (黒色土混入) 14. 黄褐色粘質土 (地山) [4~10はS D06埋土][11~13は第1期土塁]

きた。この段階で溝や柱穴などが発見され、暗褐色土からは多量の陶磁器が出土した。このため調査地全域を順次調べることとなった。

2. 検出遺構

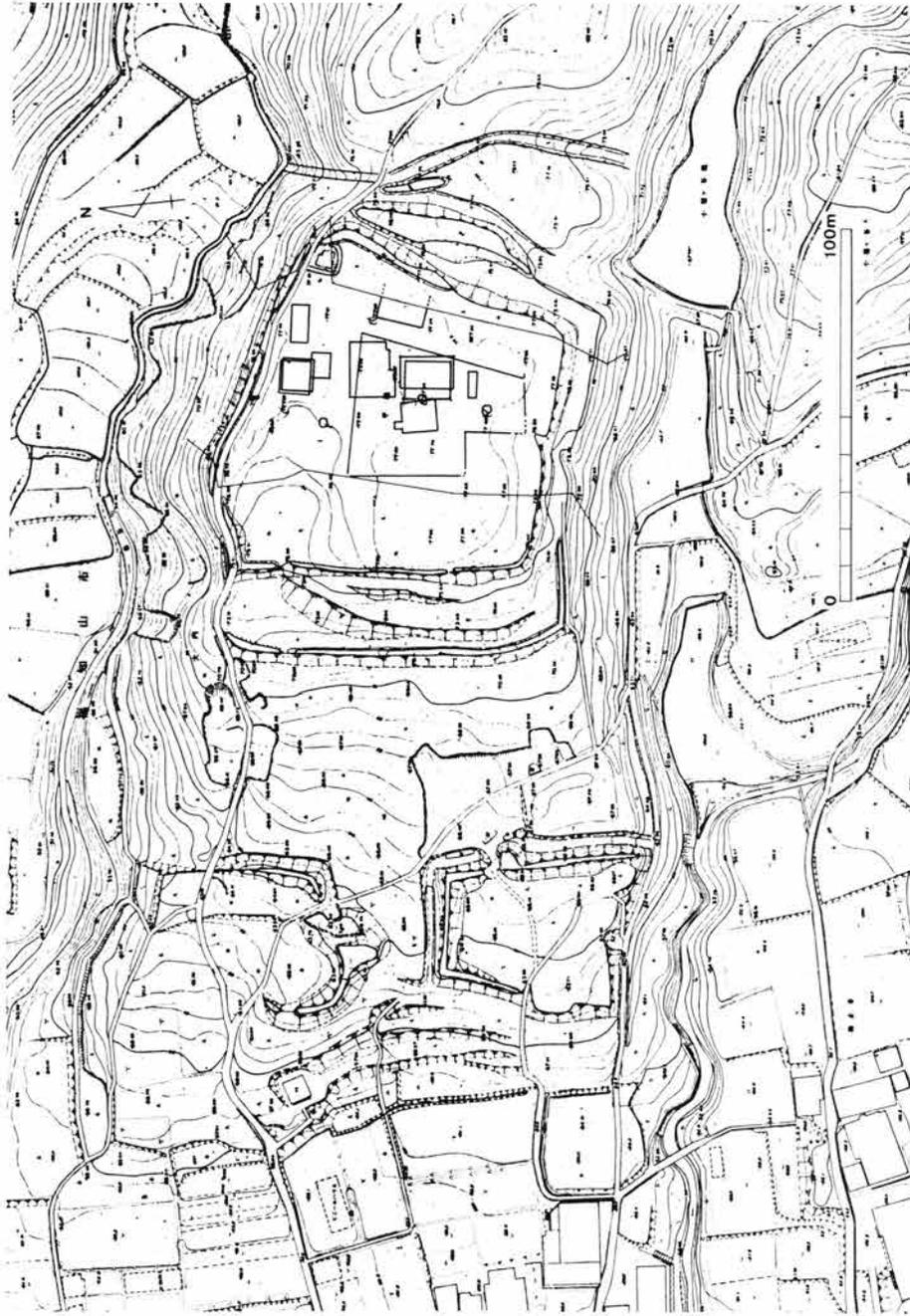
現在までに検出した遺構は、掘立柱建物跡9棟、井戸2基、集石遺構4か所、溝4条、土塁、空堀、墓2基、土塙、柵3条以上などである。これらは黄褐色の整地層によって大きく二時期に分けることができる。今、整地層の下から検出された一群を「第1期」とし、整地後の一群を「第2期」と呼ぶ。丘陵北端で検出された土塁と空堀の観察によれば (第41図参照)、現在認められる土塁の下に低い土塁があることが判明した。更に低い土塁の内側には幅3mの空堀が埋没していることも判明した。現土塁が第2期に、埋没した土塁と空堀が第1期に対応する。

第1期は、出土遺物から平安末～鎌倉初期と考えられる。8棟の掘立柱建物と、これを防衛する形で南北両端に土塁や空堀が造られており、館的な要素が強い時期と把握できる。現在目に止めることができる第2期土塁の下には必ず第1期の土塁と空堀が認められるので、第1期から北辺100m、南辺70mの台形区画が形成されていたらしい。なお、東半分建物群は集中しており台形区画の中でも「住み分け」が行われていたらしい。以下は主要遺構の概要説明である。

建物1 南北5間×東西4間 (12m×9.6m)。柱間は8尺等間。柱穴は一辺約30cmの方形掘形をもち、現精査面から30cmの深さがある。なお底には平石を据えている。総柱建物。

建物2 南北6間×東西4間 (14.4m×9.6m)。柱間は8尺等間。柱穴は径30cm程度で円形。総柱建物。

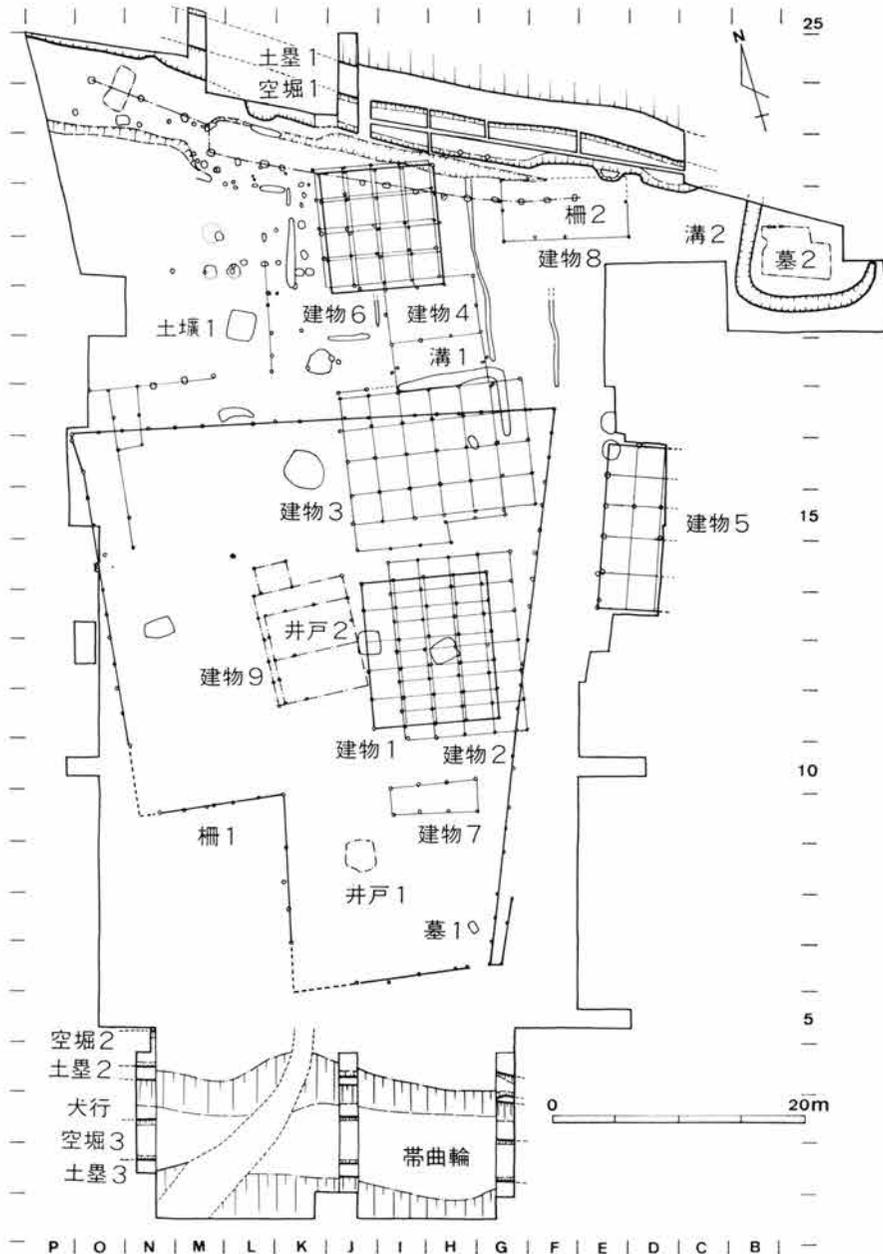
建物3 南北4間×東西6間 (9.6m×14.4m)。柱間は8尺等間。南側には7尺と2尺の



第42図 大内城跡周辺図

張り出し部（廂）がつく。一部建物2と連結していた可能性がある。また北西部には2尺の張り出し部がつき、北東部は建物4と連結していた可能性がある。総柱建物。

建物4 南北2間×東西3間（4.8m×7.2m）。南側は先述したとおり建物3と連結して



第43図 遺構平面図(略測)

いた可能性がある。また北側は後述する建物6と連結していたらしい。

建物5 南北5間×東西2間以上。柱間は西部が7尺、東部が8尺である。南北は8尺等間。南側に2尺の張り出し部（廂）がつく。総柱建物。

建物6 南北4間×東西4間（9.2m×9.2m）。柱間は8尺等間。総柱建物。北側に建て替えている。古い方をA、新しい方をBと呼称する。先述した建物4と建物6Bとは一部の柱を共有しており、同時期と考えられる。

建物7 南北1間×東西3間（2.1～2.4m×7.2m）。柱間は7～8尺。

建物8 南北2間×東西4間（4.8m×9.8m）。柱間は8尺等間。

井戸2 一辺約2mの方形。深さ1.8m以上。木枠があったと考えられるが遺存していない。

溝1 幅0.6～0.9m。現存の深さ0.3m。「L」字状に屈折。建物3の雨落ち溝か。但し南折した部分は建物3の下に隠れており、雨落ち溝としての機能が果されていない。したがって、建物3が東西5間であった時に造られた溝であって、その後、建物を東へ一間分建て増ししたと考えたい。

柵1 建物1を台形状に囲む北辺約38m、東辺約44mの柵。柱間は6～9尺で7尺がもっとも多い。なお、出入口と思われる箇所が南東隅にある。地形的には北西隅が低くなっており、ここに通路を想定することもできる。南西隅が幅狭くなっているが、この柵の外側には白色の円礫（5～10cm大）が径12mの円形に露出している。層的に40cm程度下位にあるべき土層が第1期遺構面に露出していることは、かつて地形の高い所があって、これをカットしたため下位にあるべき土層が露出したと考えられる。つまり、柵1を構築した頃は白色の円礫が露出した箇所にマウンドがあり、これを避けて柵を構築したのではなかろうか。

土壇1 一辺約2mの方形。深さ30cm。底面に完形の瓦器碗や皿、土師器皿などを整然と弧状に並べており、その中心には瓦器盤が置かれていた。

土塁1 幅2m、高さは第2期の土塁で削平され不明。空堀1を掘削した際の排土を利用し土塁を構築したと考えられるので、往時は50cm程度の高さはあったらしい。

空堀1 幅3m、深さ0.5m。土層は3層認められる。上層は第2期整地層である黄褐色土。中層は炭を包含する黒褐色土。下層は完形に近い遺物を包含する暗褐色土である。

土塁2 調査地南部にあり、空堀2を掘削した際の排土を利用したと考えられる。幅1m、高さ30cm。

空堀2 幅3m、深さ30cm。K区で途切れる。入口か。

土壘3 幅1m、高さ30cm。黄褐色土。

空堀3 幅3.2m、深さ20cm。埋土は暗褐色。

ピット1 14L区。直径30cm、深さ10cmの円形。

小 結

以上のように、整然と配置された遺構群を確認することができたが、これらは新旧の2段階に分けることができる。つまり、古段階として建物1、建物5、建物6A、柵1。新段階として建物2、建物3、建物4、建物6B、建物7、溝1である。土壘と空堀は古段階に造られ、新段階に廃棄されたと考えているが、あるいは南側が早く廃棄され整地されて、北側のみ新段階まで遺存した可能性も、埋没した土師器皿の形態差から考えられるかも知れない。

新旧関係の直接的な根拠としては、柵1→溝1、建物1→井戸2の切り合い関係がある。この事実により柵1→建物3、建物1→建物2の新旧関係がわかる。また建物の構造上のつながりで建物1=建物4・建物6Bと考えられ、柵1の東辺を意識した建物5が古段階である可能性を指摘できる。建物7については、他の建物との関係では新段階が妥当だが、柵1の南部の張り出し部に注意すれば古段階とも考えられる。

なお、調査地の南西部及び土壘1付近には暗褐色の遺物包含層が30~50cmの厚さで堆積している。これは窪地を平らに整地した際の土層と考えられる。この整地層の上から土壘1が掘り込まれるが、これには新段階の土器が整然と据えられていた。意図的な埋納状況を平安時代の文献にみられるような建て替え時の祭りの痕跡と考えれば、新段階に地鎮祭が行われたとも解釈し得る。このような祭祀の状況は、建物群の柱を抜き取った穴にも完形の瓦器碗や土師器皿が埋納されており、当該地では普遍的に認められる。腐朽し易い建造物であったためか、廃棄と再生を繰り返しながら生活した往時の人々の意識構造が祭りの痕跡を通して我々に語りかける好資料である。

埋土は第1期古段階が灰褐色土や暗褐色土が多く、新段階は炭を含む黒褐色土がほとんどである。

第2期は、出土遺物から鎌倉後期~室町末期と考えられる。全体を黄褐色土で盛土し、その際浅い窪地となっていた第1期の空堀を埋めたて土壘部分は更に数十cm高く盛って整形したことが認められる。

建物9 南北4間×東西3間(7.2m×6.8m)。柱間は約6尺。西側に2尺の廂、北側に6尺の廂がつく。更に7尺の廊が北廂につく(中門廊)。柱穴からの出土遺物から鎌倉後期と考えられる。なお、柱穴は黄褐色土の整地層に切られており、整地直前に営まれた建物であるので、あるいは第1期遺構とすべきかも知れない。しかし建物構造や規則性にはそれとの

脈絡がなく、したがって第2期の範囲に入れた。

井戸1 一辺約2.4mの方形。深さ0.6m。水漏れ防止のため底面には粘土を貼りつける。天水を溜めるためのものか。

土塁 調査地の北端では現存高0.4m、幅2.6m。崖下3.5mまで人為的に整形している。その傾斜角は約42度である。

帯ぐるわ 調査地の南端にある幅4mの平坦地。上の平坦地との比高差は2m。調査地外へも続いており、台形区画の三方をめぐる形となっている。

第1期から第2期にかけて造営されたものとして墓1と墓2がある。

墓1 東西70cm、南北1mの長方形。深さ20cm。穴の内側は焼けており、火葬されたものか。頭は北向き。13世紀。

墓2 調査地の東北角にあり、城の占地から言えば鬼門の地に当たる。溝により10mの墓域を設定し、その中に東西6m、南北4.5mの小墓域を設定している。小墓域は平らな石(40cm×30cm)で外枠を決めている。少なくとも3体は埋葬されていたらしい。中央部に14世紀前後の丹波系甕を埋置し(火葬)その上に中国製褐釉壺や五輪塔が据えられていたらしい。また東側には南北朝頃の須恵器ねり鉢を蓋とし、土師器鍋を蔵骨器としたもの、西側には須恵器三耳壺の上に丹波系すり鉢をかぶせたものが発見された。

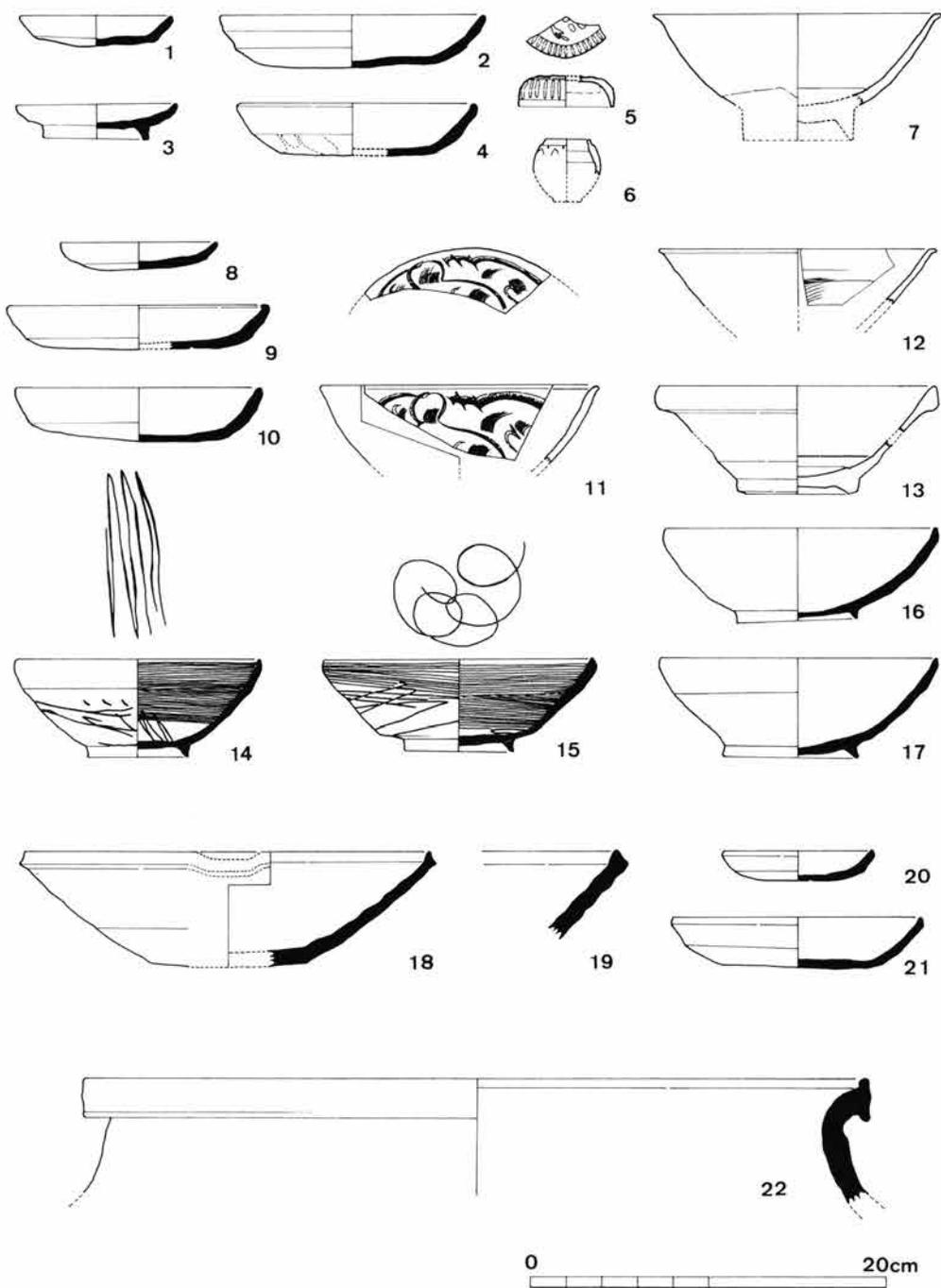
3. 出土遺物

整理箱で約200箱出土した。この内第1期のものが80%以上を占める。

第1期に伴うものは、瓦器碗・皿・盤、土師器皿(高台つきあり)、中国製白磁碗・皿、青磁碗・皿、青白磁合子・小壺、魚住系須恵器ねり鉢・甕、三田系須恵器ねり鉢、常滑系甕、滑石製鍋、鉄製鉄などである。

第1期古段階に属するものとしてピット1がある。この中に小皿4枚、中皿6枚が埋納されていた。平均口径は小皿8.8cm、中皿14.8cm。大皿の外形は口縁部を上下二段に亘ってヨコナデしたもの4(第44図2)、一段ナデのもの2が認められた。色調は淡褐色系である。在地土器と考えられる。小皿は口縁端部を台形気味に収めるものである。建物1から出土した土師器皿には高台つきのものがある。しかし、高台の有無で形態的に違うわけではない。3は口径9.1cm、器高2cmである。4は口径13cmと小さい。これは小破片であるため参考程度に止めておくべき資料である。なお、口縁端部の内側が肥厚しており、胎土も精良であることから平安京から運ばれてきた可能性もある。色調は淡褐色。

第1期新段階に属するものとして、土壌の資料がある。8の土師器皿は口径8.8cm、器高1.6cm。色調は淡褐色。9の中皿は口径14.4cm、口縁端部が肥厚する。10の中皿は口径13.8cm、



第44図 出土遺物実測図

SK128; 1・2, SB; 3・4, 第2期整地層; 5・6・22, SE43; 7, SX248; 8~17, SD159; 18~21 [土師器: 1~4・8~10・20・21, 須恵器鉢: 18・19, 瓦器碗: 14~17, 青白磁合子蓋: 5, 同小壺: 6, 白磁碗: 7・2・13, 青磁碗: 11, 越前系甕: 22]

器高3cm、口縁端部はややすばまり気味。いづれも口縁端部を一段ナデしたもので、ピット1の土師器皿より後出するものとする。11は龍泉窯系青磁碗である。12は大宰府に於ける横田・森田分類^(注3)の白磁碗V-4に相当する。内面に櫛状工具で花文を施し、その上に圈線も施す。胎土は灰白色。13は前掲分類の白磁碗Ⅳ類に相当する。胎土は黄白色で焼成不良。外面下半無釉。瓦器碗は種々のタイプがあるが大まかに見れば橋本久和氏^(注4)の言う丹波型の範疇に入る。氏は兵庫県の篠山盆地を中心とした資料で型を設定されている。口縁部が太いことと、底径が口径に比して他の類型より大きいことの2点に注目すれば、丹波型の設定は妥当と言えよう。14は口径13.8cmと小さい。外面の中央部に爪痕？様の圧痕がある。内面見込み部分にはジグザグ暗文がある。15は典型的な丹波型瓦器碗と言え。内面見込み部分とも磨滅しており調整は不明。

溝1から出土した土師器皿は大・小とも口縁端部を台形気味に収め、面取りが施されたものである。20は口径8.6cm、器高1.7cm。21は口径14cm、器高2.8cm。口縁端部をややつまみ上げている。18は須恵器ねり鉢である。小ぶりの鉢であり、口縁端部もシャープなものである。19も須恵器ねり鉢片で東播系か。

この他に第1期に属するものとして青白磁合子蓋(5)と小壺(6)がある。5は平型合子の蓋で、天井部に草花状文様を施す(型造り)。6も型造り。7は今回出土した中国製白磁碗の中でもっとも多いタイプである。なおこの時期の輸入陶磁器は約800片出土している。

第2期に属するものとして22の越前系甕がある。赤褐色で表面がザラザラした陶器である。南北朝頃。この他土師器皿・陶器鍋(赤色)・丹波系甕・越前系甕・壺・東播系ねり鉢・瀬戸灰釉・鉄釉瓶子・おろし目皿・天目茶碗・染付・褐釉壺がある。14世紀に比定できるものがもっとも多く、15・16世紀に属するものは数十点に過ぎない。

この他第2期整地層から出土したものとして古銭(開元通宝・元豊通宝・政和通宝)、鉄刀がある。

4. ま と め

以上のとおり当初の予想を大きく上回る成果があった。この報告については次年度以降に発刊する予定であるのでここでは要点を列記し、今後の指針としたい。

(1) 第1期古段階は柵1の存在によって、内郭の2重構造のあったことが判明した。これは建物1を中心とした防御施設の強化という事と共に、居住した場合の「住み分け」という意図も考えられる。

(2) 第1期新段階は防御施設の一部(柵1)を省略し、丘陵の幅一杯を使って建物を配置

する。建物同士は廊下で連結していたと考えられ、居住性を重視している。このような建物配置の類例としては「法然上人絵伝」の漆間時国の住宅などがあり、地頭級の館跡である可能性が高い。なお、鎌倉時代に属する絵巻物には中門廊が描かれているが、当該期には認められない。これを時期差と考えるか、同時代でも中門廊の有無があったと考えるかが問題となるだろう。

(3) 第1期に伴う膨大な土器は丹波地方の編年作業や、当時の生活様式を考える上で重要な資料となり得る。また大量(800片以上)に出土した中国製陶磁器は当時の流通機構を考える上で恰好の資料となった。

(4) 第1期の遺構には祭祀に関連すると見做し得るものが多い。これらは柱の抜き取り穴や溝・方形土壇に整然と据えられた状態で発見された。これを建て替え時の地鎮祭の痕跡と考えれば、当時の人々の精神生活までも言及することができる。

(5) 第1期の段階は文献史料から言えば、六人部荘として権門勢家に寄進された段階である。本家が八条院暉子内親王、領家が平頼盛(池大納言)であった。平氏は中国との貿易を積極的に押し進めたことは史実に明らかである。当該地で発見された平安末期の膨大な中国製陶磁器はこのような貿易を通して運ばれてきた可能性が高い。したがって、第1期の遺構群は六人部の荘官の館である可能性が高い。

(6) 第2期は城として造替されている。第1期とはおよそ百年ほどの空白期間がある。造替した者が六人部荘と関係するか、土豪と考えるかが問題となるだろう。

なお、第2期末期頃の有様がわかる文献がある。江戸中期に編さんされた『丹波志』には、「古城 古主城 大内村 古城地平ヲ城ト云、古主堀上総進貞次」とあり、この堀貞次が大永年中(1521～1527年)に城を造ったとも書かれている。小字平城という地名からも調査地周辺が「平ヲ城」に相当することは明らかである。また『古城趾見取図巻物』にも同様の記事があり「元龜三(1572)年堀金谷藤原広正 為□赤井が落城」と書かれている。以上の記事を信用すれば、堀貞次が16世紀前葉に城を造り、同後葉に堀広正の時兵庫黒井城主赤井氏に滅ぼされたこととなる。

上記の記事と調査地の状態を比較検討すると、調査地から16世紀の遺物はほとんど出土しておらず、この点から言えば「城」としての機能を果していたと考え得る。しかし、現段階では丘陵端にある40mの規模をもつ台形郭がこの記事と合うもので、調査地はほとんど使われなかったものと考えたい。つまり大内城は東西400m、南北100mの規模を有するが、幾世紀に亘る遺構群の集まりによってこれほどの規模となったもので、第2期末は丘陵端のみ使われたと考えたい。

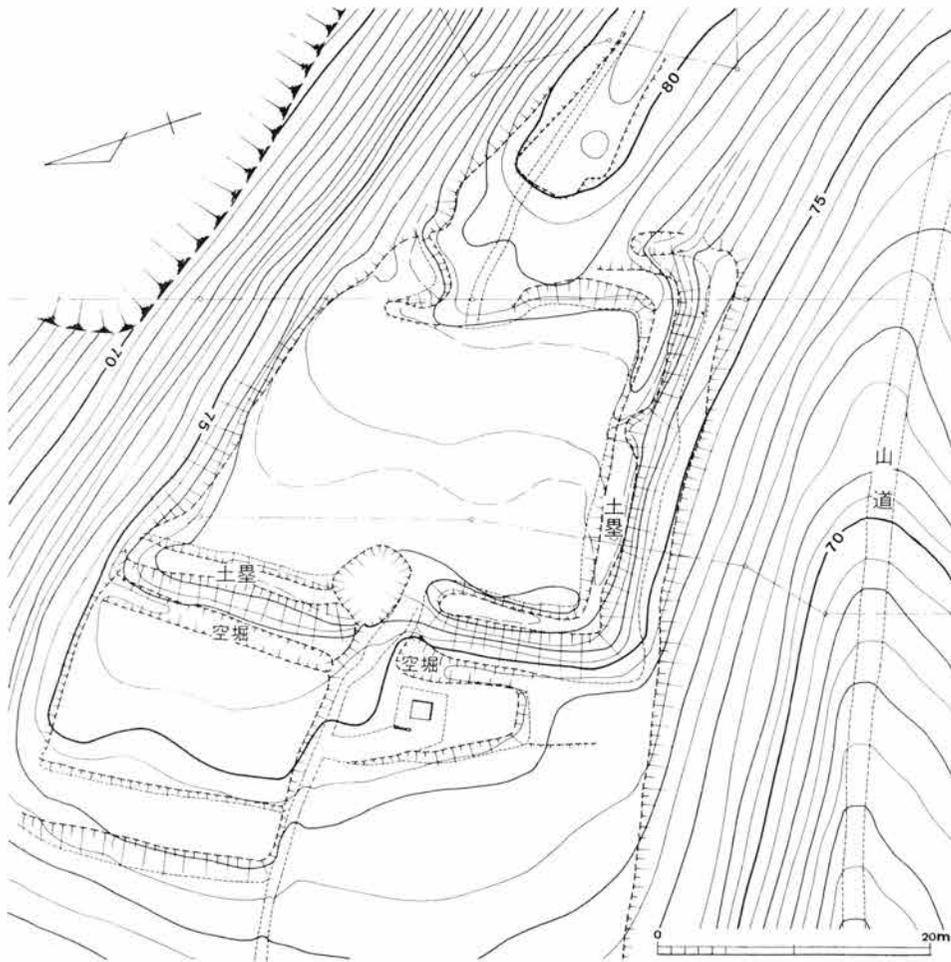
今後城郭史・植生・地質・文献の各分野^(注5)と共同研究をし、遺跡の性格を明らかにしてゆきたい。

なお、炎天下や降雪の中で調査に従事された地元の方々には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。
(伊野 近富)

(2) 後 青 寺 跡

1. 位 置

後青寺跡は、福知山市の南東約7kmの兵庫県境にほど近い竹田川右岸の丘陵地にある。同付近は、大内川と呼ばれる山間の小河川が狭隘な谷平野を形成しており、本遺跡は、そ



第 45 図 周 辺 地 形 図

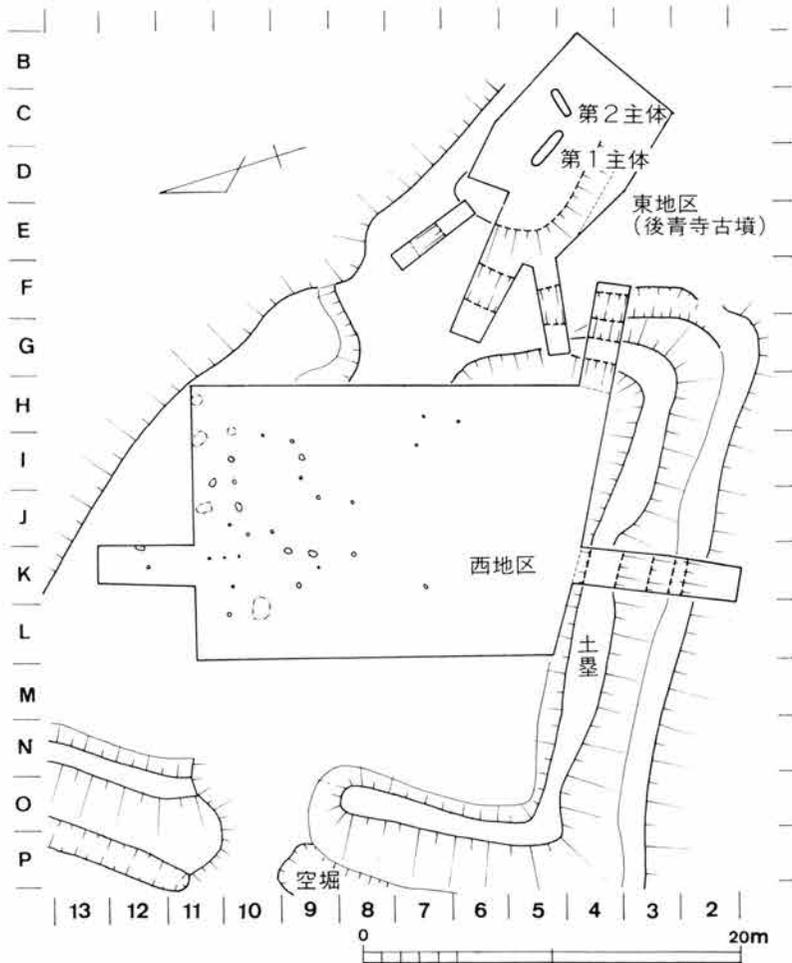
の谷平野に派生した丘陵尾根端部の標高75m付近に位置する。この尾根の約150m離れた一本北側の尾根上には、大内城跡が存在する。

2. 西地区の調査

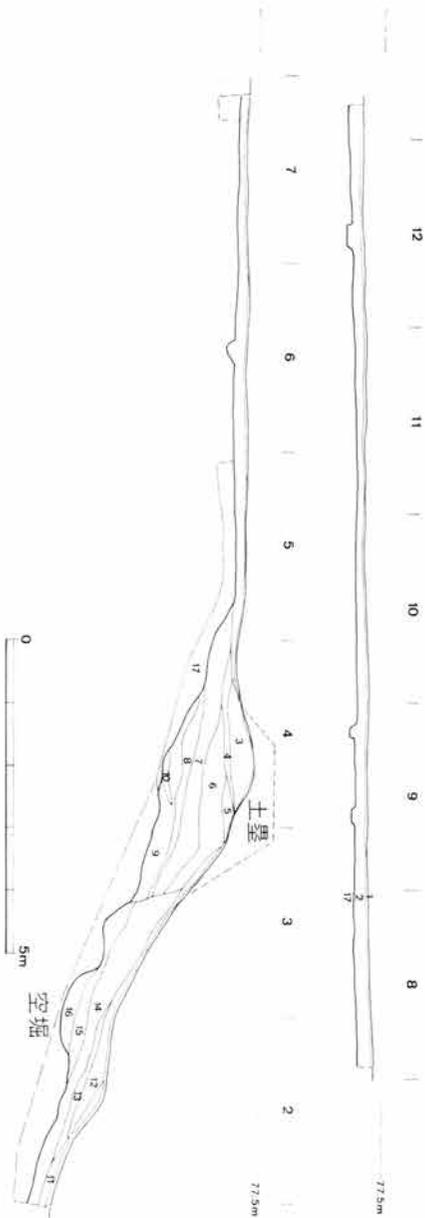
1. 外形

現地には、土塁・空堀や人為的な階段状の平坦面が良好な状態で観察される。土塁は、西側と南側および丘陵に続く東辺の一部にめぐらされているが、北側部分については欠いている。北側は、現在も崖状の急斜面になり、崖下を小屋ヶ谷川と呼ぶ谷川が流れている。

すなわち、この部分は地形上天然の要害になっているため、土塁は省略されたのであろう。南側は、傾斜のゆるやかな浅い谷状地形をなしており、現在、この凹部に山道が通じている。



第46図 調査地位置図



第47図 調査地(西地区)土層断面図

1. 腐蝕土(表土) 2. 黄褐色土 3. 灰褐色土
4. 暗茶褐色土 5. 灰黄褐色土 6. 淡黄褐色土
7. 暗褐色土 8. 黒褐色土 9. 灰黄色土 10. 黄褐色土
11. 黄色土 12. 暗黄褐色土 13. 暗茶褐色土
14. 暗褐色土 15. 暗黄褐色土 16. 暗褐色土
17. 灰黄色土(地山)3~10土塁築成土 16. 堀埋土

丘陵登口にあたる西辺の中央に入口を設ける。西辺の土塁は特に残存状態が良く、土塁の外側にめぐらされた空堀と土塁上端の比高は最大約3mを計測する。土塁の幅は約6mを測る。この西辺長さ34m、南辺長さ26mの土塁線で囲まれた略台形の内郭は、面積約730㎡ほどの平坦面になる。(第45図)

当地に関しては、これまで周辺に「後青寺」「後正寺」の小字名があることから『丹波志』に記載される同名寺院の故地に比定されてきた。今回の調査によって、館跡の可能性が強くなったが、ここでは従来よりの遺跡名にしたがっておく。

2. 調査の方法と経過

調査に当たって、まずこの平坦面を道路予定敷のセンター杭を利用して3m方眼に区画し、全域の地区割を行った。当平坦部は、後述する古墳検出地点と区別して(西地区)と呼ぶ。

次に、中央部に十字にトレンチを設定し、掘り下げを開始した。その結果、表土下10~20cm程ですぐ地山面に達した。その後、発掘区域を拡張し、調査範囲外の西側部分を残してほぼ全域を発掘した。

3. 検出遺構(第46図)

調査地の北側部分で多数の小ピットを検出した。しかし、これらは埋土からみて、建物の柱穴跡とするよりも、木根等の抜き取り穴と思われる状況であり、当初予想したような建物の存在を示す遺構は、検出できなかった。

ただこの西地区の平坦面では、小人頭大の石材が、所々に転がされていたのを、調査前の外

形観察の際確認しており、あるいは、これらの石材を台石にした簡単な建物が存在したことも考えられる。

土塁の調査 土塁は、築成状態を知るため南・東辺の2か所で断ち割り調査を行った。その結果、南辺土塁の斜面下方から幅1m程の空堀を検出した。この空堀は、西辺土塁の外側をめぐる空堀に続くものと思われる。(第47図) また土塁断ち割りの際、築成土中から古墳時代の完形の須恵器杯身が2点出土した。後述する古墳の存在が示すように、もてこの平坦面上にも古墳があり、それらを削り取って土塁が築かれたものであろう。なお、弥生土器の破片が少量出土しているが、それらが伴う遺構は検出していない。

4. 出土遺物

瓦質のすり鉢・染付茶碗・美濃系天目茶碗などの近世陶磁器類の破片の他、前稿で述べた須恵器杯身2点と弥生土器片等があるが、量はきわめて少ない。この他、北宋銭の景德元宝(1005年初鑄)が、1枚出土している。(第48図)



第48図 景德元宝

3. 後青寺古墳(東地区の調査)

1. 調査の経過

上記西地区の背後の東側尾根上にトレンチを入れたところ、古墳の埋葬主体部を2基検出した。当地点は、調査前には、寺跡に付随する墓地等の存在を想定していた場所である。尾根の稜線上を山道が通じており、現状では、古墳の存在を示す顕著な盛り上がり等は認められない。本古墳は、当地の小字名をとって後青寺古墳と呼称する。

2. 外形と規模

尾根の周辺に入れたトレンチによって、当古墳は地山面に盛土を行って築造されていることが判明した。しかし、地形の変形が著しく、正確な規模を確認するには至らなかった。現地形には、南側斜面にわずかに段状の傾斜変換点があり、これがもとの墳丘の痕跡を示すものと仮定すれば、当古墳は、約13m前後の規模をもつ円墳ないし方墳に復原される。尾根斜面の下方に入れたトレンチでは、主体部を検出した地点から約10m離れた所で浅い堀割状の落ち込みを検出した。埋土の状況では、西地区に係わる施設とするよりも、古墳に伴う可能性が高い。これによってもう一度古墳の規模を復原すれば、径20m前後になり、大きくなりすぎる感がある。ここでは、この溝状遺構について、墓域を区画する溝の可能性を考えておく。なお、調査部分については、葦石・埴輪等は、一切認められなかった。

3. 埋葬施設

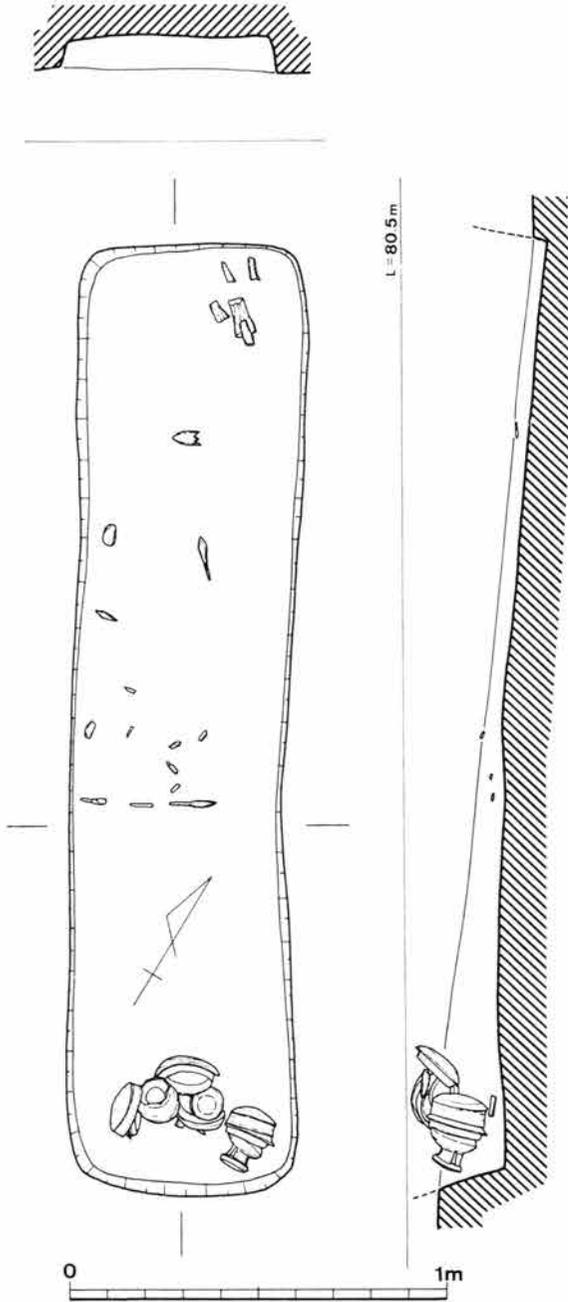
後青寺古墳において検出した埋葬施設は2か所あり、いずれも木棺の直葬墓と呼ばれる

ものである。西側のものを第1主体部、東側のものを第2主体部とする。

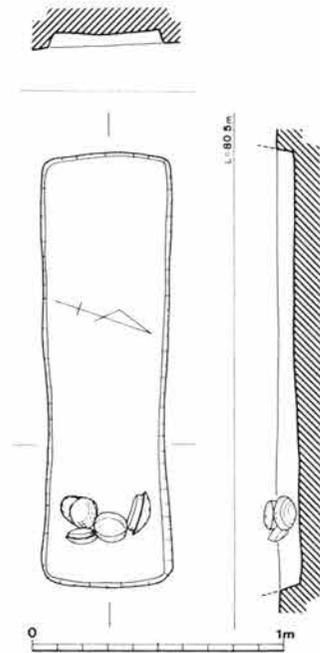
(第1主体部)

尾根に平行して長軸を置く。棺の大きさは、長さ2.5m、幅0.55mを測り、平面形は長方形を呈する。調査に入る以前に、上面はかなり削平を受けており、表土の腐蝕土をはずした段階で須恵器の上面が露れた。このため、深さは約10cm程が遺存するにすぎない。棺を安置する墓壇等の有無は不明である。棺底は、東端が最も高く、西に傾斜する。

棺東端で一括の須恵器類を検出した。それより西方には鉄類が



第49図 第1主体部



第50図 第2主体部

みられるが、配置は乱雑で一定していない。西端には、鉄斧と鉄刀子を置く。須恵器は横転し、若干棺底から浮いた状況であり、おそらくは棺上に置かれていたものが棺内に落ち込んだものと思われる。(第49図)

(第2主体部)

第1主体部の北東で検出した。これも、遺存状況が悪く、棺底に近い部分を残すのみであった。棺は、長さ1.73m、幅0.52mを測り、平面は長方形を呈する。

副葬品は、棺の南端部に土器の一括が置かれていたが、前者のような鉄製品類はみられなかった。(第50図)

4. 出土遺物

出土遺物には次のものがある。

第1主体部

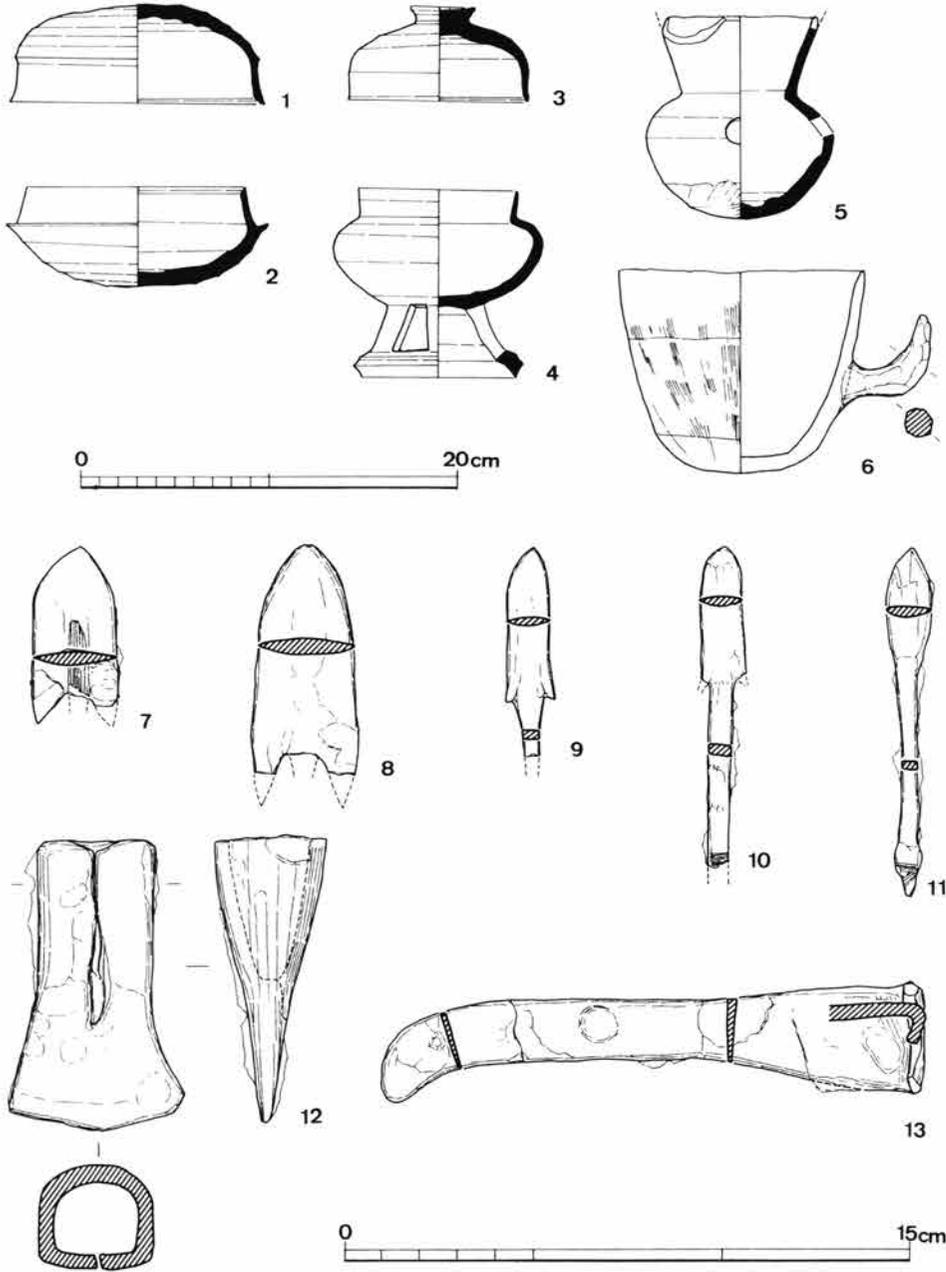
須 恵 器	杯 身	3点	(第51図—1)
	杯 蓋	3点	(同—2)
	台付短頸壺	1点	(同—4)
	蓋	1点	(同—3)
	甗	1点	(同—5)
鉄 製 品	鉄 鍬		
	平 根 式	2本	(同—7・8)
	尖 根 式	7本以上	(同—9～11)
	鉄 斧	1点	(同—12)
	鉄 鎌	1点	(同—13)
	鉄 刀 子	3振り以上	

第2主体部

須 恵 器	杯 蓋	2点	
	杯 身	1点	
土 師 器	把手付鉢	1点	(第51図—6)

これらについて今少し説明を加えると、須恵器杯身は、立ちあがり部が高く、底部のヘラ削りの範囲も広い。杯蓋は、天井部と口縁部との境が稜をなすもので、杯身と同様、口縁端部に段をつくる。台付短頸壺とつまみ付蓋はセットである。甗は、口縁部上半を打ち欠く。

鉄鎌は、平根式と尖根式の2種有り、尖根式には袂りを有するものと、袂りが無く柳葉型の形態をもつものに分類される。鉄斧・鉄鎌は、やや小型の部類に属する。



第51図 後青寺古墳出土遺物
(1~5, 7~13, 第1主体部. 6, 第2主体部)

4. 小 結

(1) 西地区からは建物跡の遺構は検出されなかったが、出土遺物から、近世初頭に築造・使用されたことが判明した。

外形上は防御的な色彩が濃く、寺跡とみるよりも城館跡とする方がふさわしいものである。すなわち、本遺構を戦国期の城館跡と想定し、本来の後青寺の跡については別の地点に求めたい。(おそらくは丘陵登口の平坦面部か?)

同様な構造をもつ一辺30mから40mの土塁と空堀で囲まれた単郭の城館跡は、当六人部谷周辺でも現在のところ8か所程度知られており、ほぼ現行の大字単位に、1個ないし2個の割合で分布している。

これらは、日常の居城としては内部の面積が狭く、そのため戦乱等の緊急時においてたてこもり、一時敵の攻撃を防ぐための施設としての機能が想定される。内部の建物等も臨時的で簡単なものであったろう。この種の城館跡の、発掘を伴う調査はこれまで少なく、今後、集落との関連やそれらを築造した階層(百姓名?)等について文献史等の調査も合わせて実施し、その成立の意義を考えて行きたい。

(2) 古墳の検出は当初予期しないものであった。前述の「城館」の造営によって大きく削平されており、全体の規模・外形等不明な点が多い。副葬された須恵器の型式から、6世紀初頭頃の築造時期が比定される。2基の主体部の構築順序については、占地からみて第1主体部が先行するものと考えられるが、土器の型式には差は認められない。当大内周辺においては、現在のところ最も古い時期に属する古墳の一つであり、今後、当地域の古墳時代の様相を考える上で重要な資料となろう。(辻本 和美)

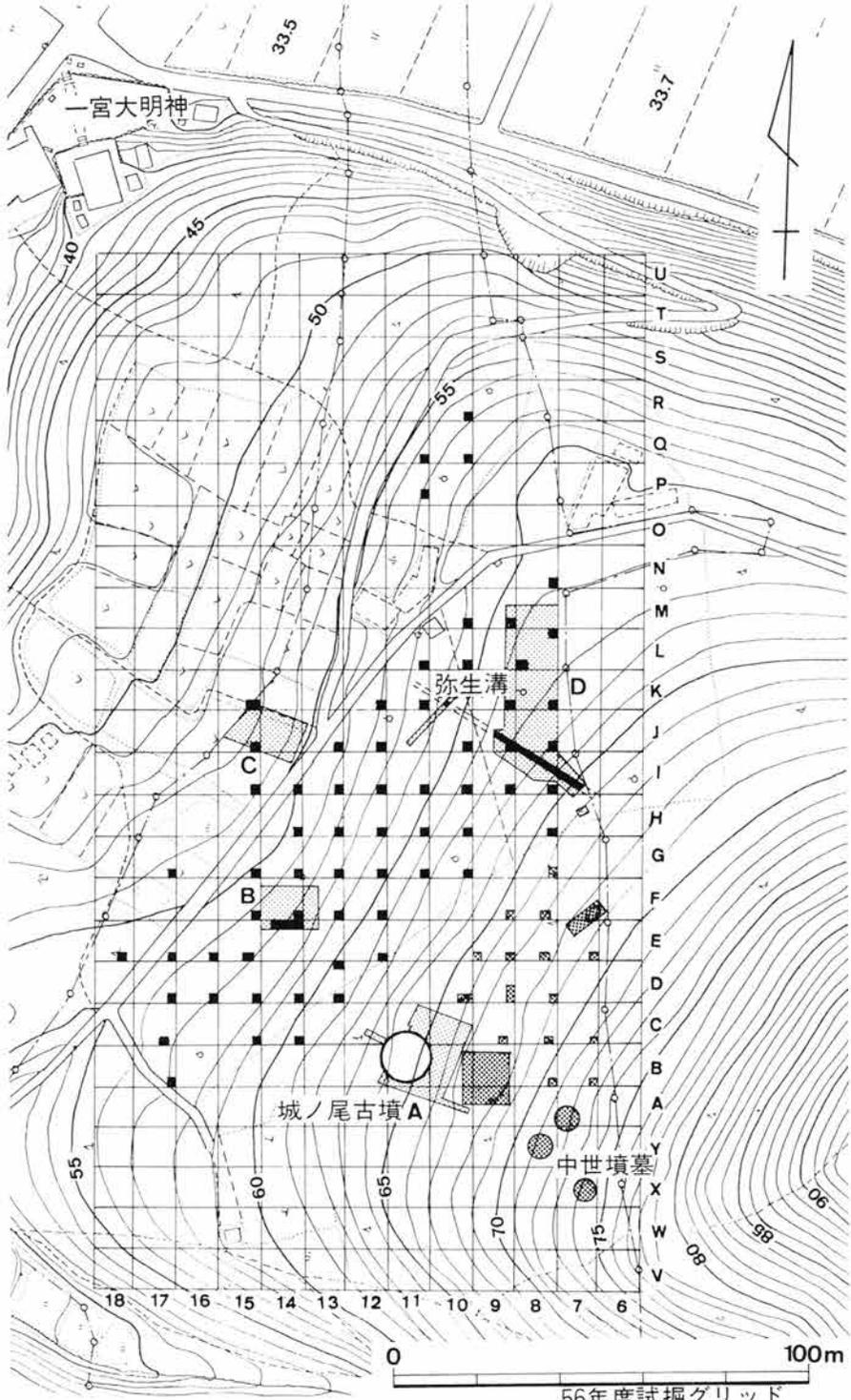
(3) 宮 遺 跡

1. 位 置

国道9号線に沿って流れる土師川西岸には、南から北へ延びる最高峰311mの比較的低平な丘陵地形が続く。本遺跡は、その先端部に位置する。現水田面からの比高は約30mで、丘陵縁辺は崖状の急斜面になっているが、当遺跡の立地する標高50~60m付近は比較的なだらかな段丘面が形成されている。また付近は、丘陵下の谷平野を見おろす景勝地である。

2. これまでの調査の経過

当遺跡は、昭和54年度に範囲確認のための試掘調査と、同地内に所在する城ノ尾古墳の発掘調査を実施した。その結果、弥生時代から中世に至る各時代の遺物が出土し、東西150m、南北200mに及ぶ広大な遺跡であることが判明した。また、城ノ尾古墳の周辺に入れたトレンチから、弥生時代中期の方形周溝墓2基と多量の礫石と瓦器を含む中世の溝を検出した。



■ 54年度試掘グリッド ▨ 55年度調査地 ▩ 56年度試掘グリッド及び調査地

第52図 宮遺跡調査地位置図

昭和55年度は、上記の成果を基にし、昭和55年4月17日から6月末日まで、調査地の残余の分の試掘調査を行い、昭和56年1月19日から3月27日まで、B・C・Dの各地点約1,100㎡の面的な発掘調査を行った。(第52図)

55年度(後半)の調査については、前回期間の関係上、詳しく述べる事ができなかったため、以下、その概略を若干述べておきたい。

昭和55年度(後半)調査の概略

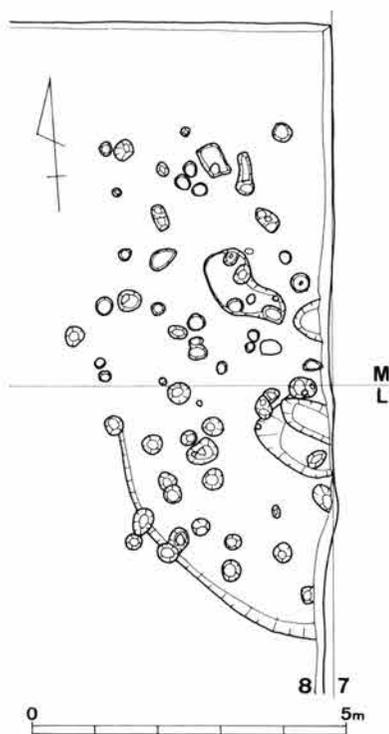
前年度の試掘調査の結果でも明らかのように、過去の開墾などによって周辺はかなり攪乱されており、遺構の保存状況はかならずしも良好ではない。そこで、調査にあたっては、グリッド掘りによって遺構が検出された箇所を中心に掘り広げて行くことにした。

(B地点)は、城ノ尾古墳の北西約30mの斜面下方に位置する。試掘調査時に、弥生土器を埋土に包含する幅約1m、深さ50cmのU字溝を検出している。今回の調査によって溝はL字形に曲ることが判明したが、西端は中世時代の攪乱によって削平されており、北側部分も、屈曲部から約4mのところまで途切れてしまいその性格については明らかでない。調査地の西側からは、瓦器碗1個と土師皿を埋納する、長さ1.2m、幅0.4mの浅い土壌を検出した。

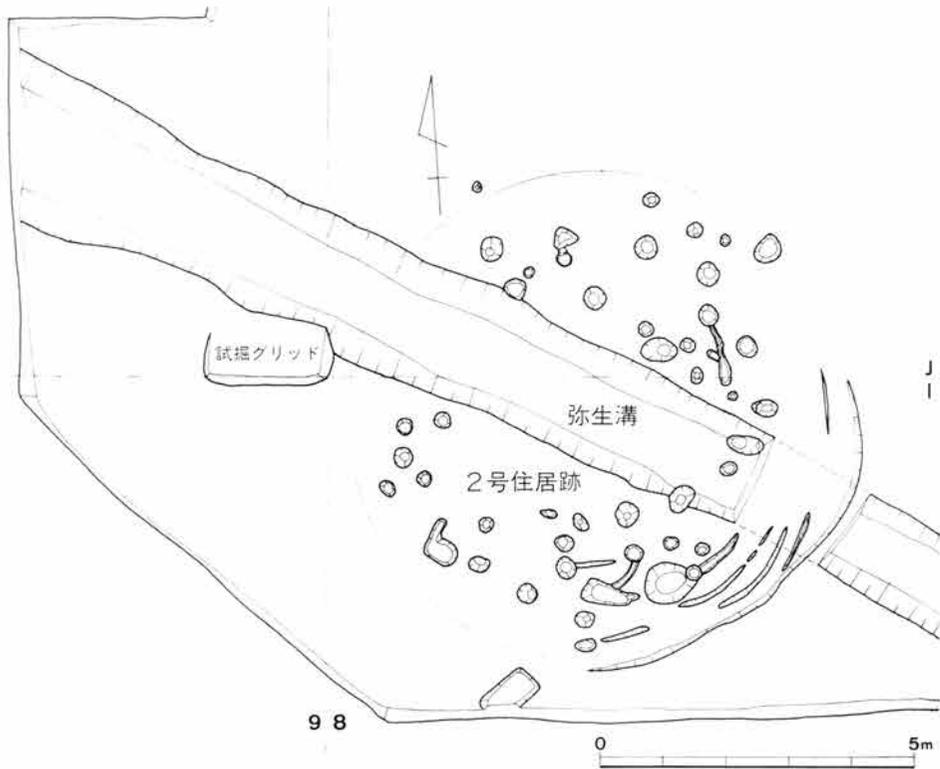
(第58図3)その形態から、中世の墓と考えられる。出土の瓦器碗は丹波型の瓦器のなかでは終末に近い時期に属するものである。

(C地点)は、今回調査した地点のなかでは、最も標高の低い場所に位置する。試掘調査時に、中世時代の井戸状の円形土壌を確認しており、周辺に同時期の生活跡が存在することが予想された。今回の検出遺構としては、等高線に平行する、幅約1.8m、深さ60cmの断面U字形の溝や石組をもつ池状の凹地、および現代の耕作溝が確認されたのみである。

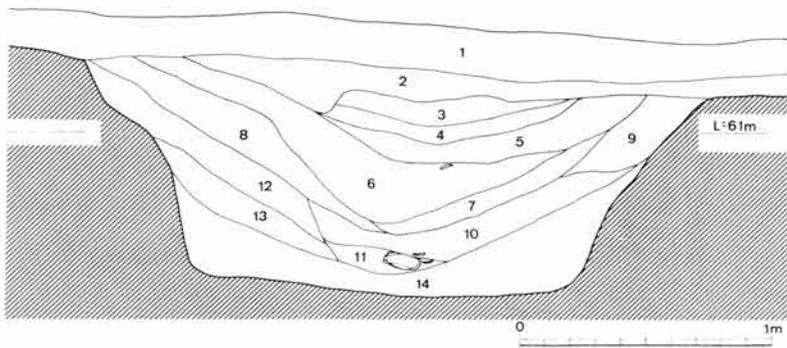
U字溝については、溝埋土から遺物が出土していないので時期等は明らかでない。しかし、位置・規模からみて、本地点の南西約70mに所在する中世館跡に関連するものと思われる。また、試掘調査時にも確認されたが、A・B両地点と北のD地点を結ぶ線の中央付近から西側にかけては、谷状の地形が存在したらしく、その延長線上に当る池状の凹地では湧



第53図 1号住居跡平面図



第54図 D地点南部遺構図



第55図 弥生溝土層断面図

1. 暗褐色土(表土)
2. 黒褐色土
3. 暗茶褐色土(以下溝埋土)
4. 暗黄褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 暗茶褐色土(炭・黄色土混じり)
7. 暗褐色土
8. 黄褐色粘質土
9. 暗褐色土
10. 黒褐色土(土器・炭多い)
11. 暗褐色土(レキ含む)
12. 暗茶褐色土
13. 暗茶褐色土(12に類似)
14. 茶褐色土

水が盛んであった。当地点からは多数の弥生土器片が出土したが、すべて表面の磨滅が著しく、上方から流されて来たものと思われる。

(D地点)は、遺跡推定範囲の北東部にあたり、北西に向かってなだらかに傾斜する丘陵の先端に近い場所に位置する。周辺は、現在栗の植林が行われており、耕作土下約20cmの比較的浅い部分で地山面に達した。本地点からは、弥生時代の竪穴住居跡2棟・かまど状の焼土面・方形土壇1基・溝状遺構2条のほか、多数のピット群を検出した。

竪穴住居跡は、調査地の北と南の2箇所から各1棟検出した。北側(L8区)の住居跡(1号住居跡)は、東側が調査地外になるため西側半分しか検出していないが、直径約6.5m前後に復原される。中央に炉跡状の焼土壇があり、その周辺の床面から柱穴状のピットが多数検出された。これらの状況からみて、おそらく同一場所で数回の建て替えが行われたものと思われる。住居跡の埋土や床面近くからは、土器片の他、石鏃2点や石器の削り屑が多く出土した。おそらく、石器類の製作に係わる住居跡ではないかと推定される。19区で検出した竪穴住居跡(2号住居跡)も、斜面の下位は削平され、高い方のみにかろうじて三日月状に周壁が残されている。復原径は7~8mを測る。1号住居跡と同様、床面には多数の柱穴状ピットが遺存しており、数回の建て替えがうかがえる。

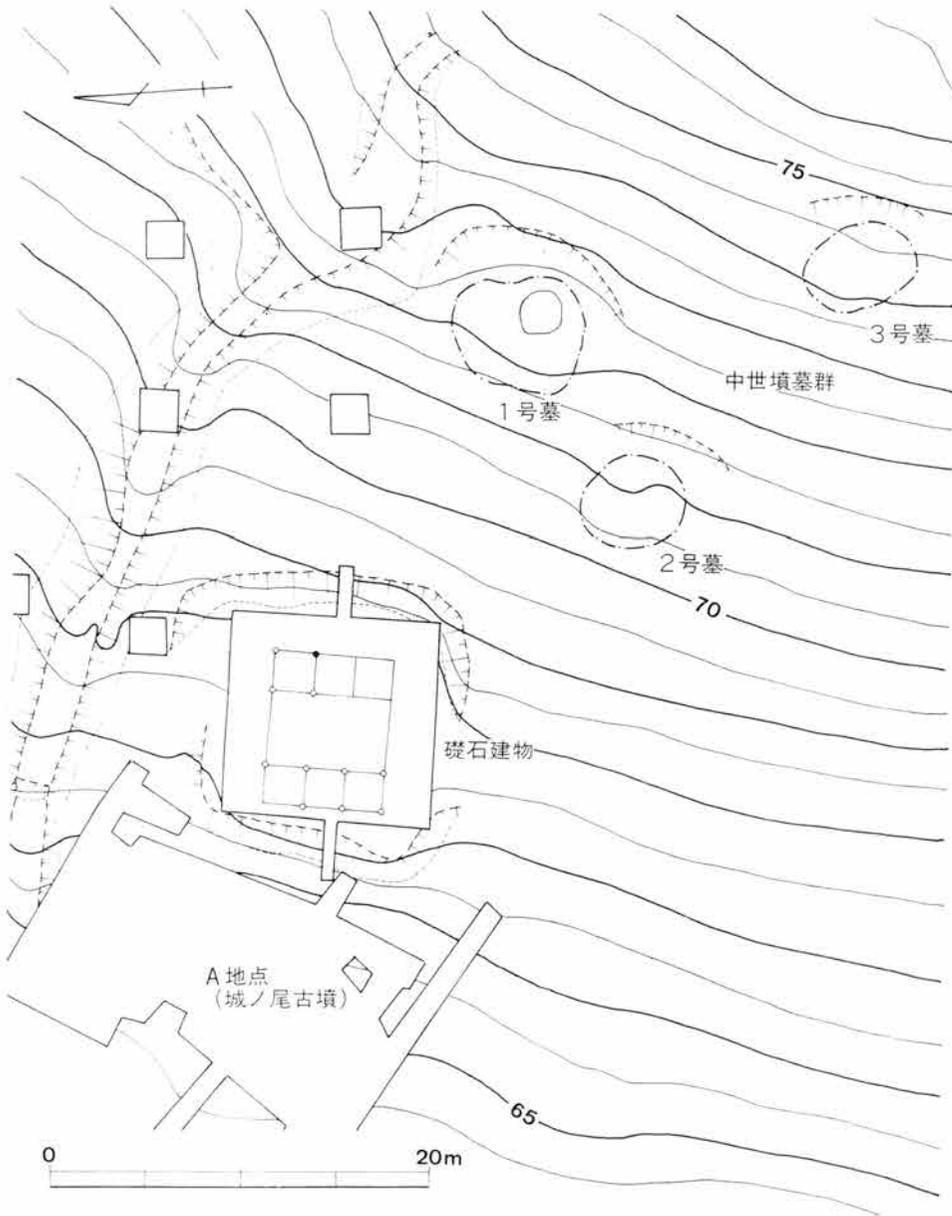
本住居跡は、後述の溝が埋まった後作られていることが、切り合い関係でわかった。(第53・54図)

溝は、調査地の17区~19区にかけて等高線に直行する形で検出した。溝幅は最大2.2m、深さ約1.3mを測り、断面は逆台形を呈する。(第55図)調査地内の溝北端から、北西約40mの延長上でも、溝が続くことを確認した。斜面上方の南側では、洪積台地の硬い礫層からなる地山面を掘削している。溝埋土から、壺・甕などの多量の土器片の他、磨製石斧・石包丁片・石鏃等の石器類が数点出土した。溝の上面には、先の2号住居跡が作られており、本溝は掘られて後、比較的短い期間に埋没したことがうかがえる。役割については、排水等の他、獣や他の部落からの侵入を防ぐ防御区画のために掘られたものと考えられる。また、L8区からは、長さ2m、幅1.2m、深さ約30cmの方形土壇を検出した。カマド状焼土面を切って掘り込み、内部から小人頭大の石塊10数個と弥生土器が出土した。祭祀に関するものと考えられる。

出土遺物

出土遺物のうち土器類は、弥生時代のものが大半である。特に、D地点の溝からは比較的まとまった形で出土している。今回記載できなかったが、いずれ機会を改めて報告する予定である。土器の時期は、弥生時代中期(第Ⅲ様式新段階)に並行するものである。壺類には、

口縁部内面や頸部に凸帯をめぐらすものが散見され、瀬戸内中・東部、特に兵庫県西南部（播磨）のあり方と共通する。これらの事実は、当遺跡が、兵庫県南部の加古川水系と丹波・丹後の由良川水系を結ぶ交通の要所に位置するという立地環境に帰納するものであろう。



第56図 調査地地形図

小 結

以上のように、今年度（昭和55年度）の調査によって弥生時代集落の様子的一端が明らかになった。すなわち、D地点から東側にかけて住居等の生活空間が広がり、その南方に谷状の地形を隔てて方形周溝墓等の墓地が存在したものと想定される。

調査例の少ない当地方の弥生時代集落跡の研究に寄与する面が大きいものと思われる。

3. 今年度（昭和56年度）調査の概要

1. 調査の経過

今年度の調査地は、これまで樹木補償等の関係上、未着手であった南東地区を中心に行った。当地点は、70～74m前後の標高を占めており、これまでの調査地点のなかでは最も高所に位置している。斜面の傾斜角も急である。

調査はまず、樹木伐採後の全体の地形測量を行い、次に遺構の有無を確かめる為の試掘調査を実施した。

調査方法については、10m四方の方面に地区割された区画毎に2m四方の試掘グリッドを掘削する従来の方法を踏襲した。試掘調査の結果では、土器等の遺物は少量出土するものの、先に述べたように山腹斜面の傾斜がきついため流出したものか、明確な遺構等は検出できなかった。

一方、樹木伐採後の地表観察によって、城ノ尾古墳（A地点調査地）のすぐ上手で、建物跡の存在を思わせる小さな平坦面と、さらにその上方で人為的な地形の隆起を3か所確認した。このため、今回の調査の主力をそれらに向けることにし、これらの遺構の性格を追求する目的で調査を進めていった。

2. 遺 構

(1) 中世墳墓

斜面の小隆起は、発掘調査の結果、中世の墳墓であることが判明した。北側に位置するものから順に1号墓・2号墓・3号墓と呼ぶ。

1 号 墓

外 形

直径6～7m、現高約70cmを測る。外形の形状はややいびつな円形を呈する。また、丘陵斜面の高位にあたる東側には、幅約2mの浅い空堀状の凹地をめぐらす。隆起部の裾に当る部分では地山の礫面が露出している。

断面観察によれば、地山面を若干整形したあと、約60cmの高さまで層状に盛土されてい



第 57 図 1 号 墓 外 形 図

る。盛土の頂部には、2か所に川原石の集石があり、その下方から埋葬主体部である土壇を2基検出した。

埋葬施設

両土壇は、約80cmの間隔を置き平行する。北側土壇は、長さ1.9m、幅0.6mを測る。平面形は隅丸方形状を呈し、北部の幅がやや広くなる。南側土壇は、長さ1.5m、幅0.8mを測り、こちらはやや長楕円形に近い平面形をもつ。

両土壇とも、盛土の途中から掘り込まれており、深さは約60cmを測る。ただ、最初に調査した北側土壇については、当初、盛土と土壇埋土との土層の区別が難しく、掘り下げすぎる失敗をおかした。

注目されるのは、両土壇とも、北西端に上半部のみ石組みで囲った一段深い「副室」を付設することである。この副室の深さは、北側土壇で、平坦部から約40cm、南側土壇で約60cm

を測る。幅は約50cm程で、下方になるほどせばまるが、南側土壌については、壁面は垂直に近く整形され箱形を呈する。石組は、穴の上縁部にあたるところに小さな段を設け、下部に比較的大きな石材、上部に小礫を置いて北端を除く三方を積み上げている。規模からみて、上部の土壌内いっばいに遺骸を納めた木棺等が安置されたと思われるが、下段の副室の性格については、不明である。

出土遺物

北側土壌から、少量の炭と骨片、および土師器小皿5枚・大皿1枚が出土した。各土器の検出面の高さはまちまちで、おそらく棺上に置かれていたものが落下したものと思われる。土器は棺の四隅に置かれていた形跡がある。南側土壌では、土器等の副葬はみられなかった。両土壌とも釘類は一点も出土していない。

なお、盛土の表面から、白磁碗片・瓦器片と用途不明の鉄製品が見つかっている。

石組遺構

1号墓の南西裾部から、小人頭大の川原石を円形ないし六角形に組む径70cm前後の石組遺構を2基検出した。南側のもの(第58図4)は、2段に石を組んだ空間内に火葬骨を埋納し、その上部を石で覆っている。本来は、紙か木製の容器を伴っていたのであろう。

2号墓

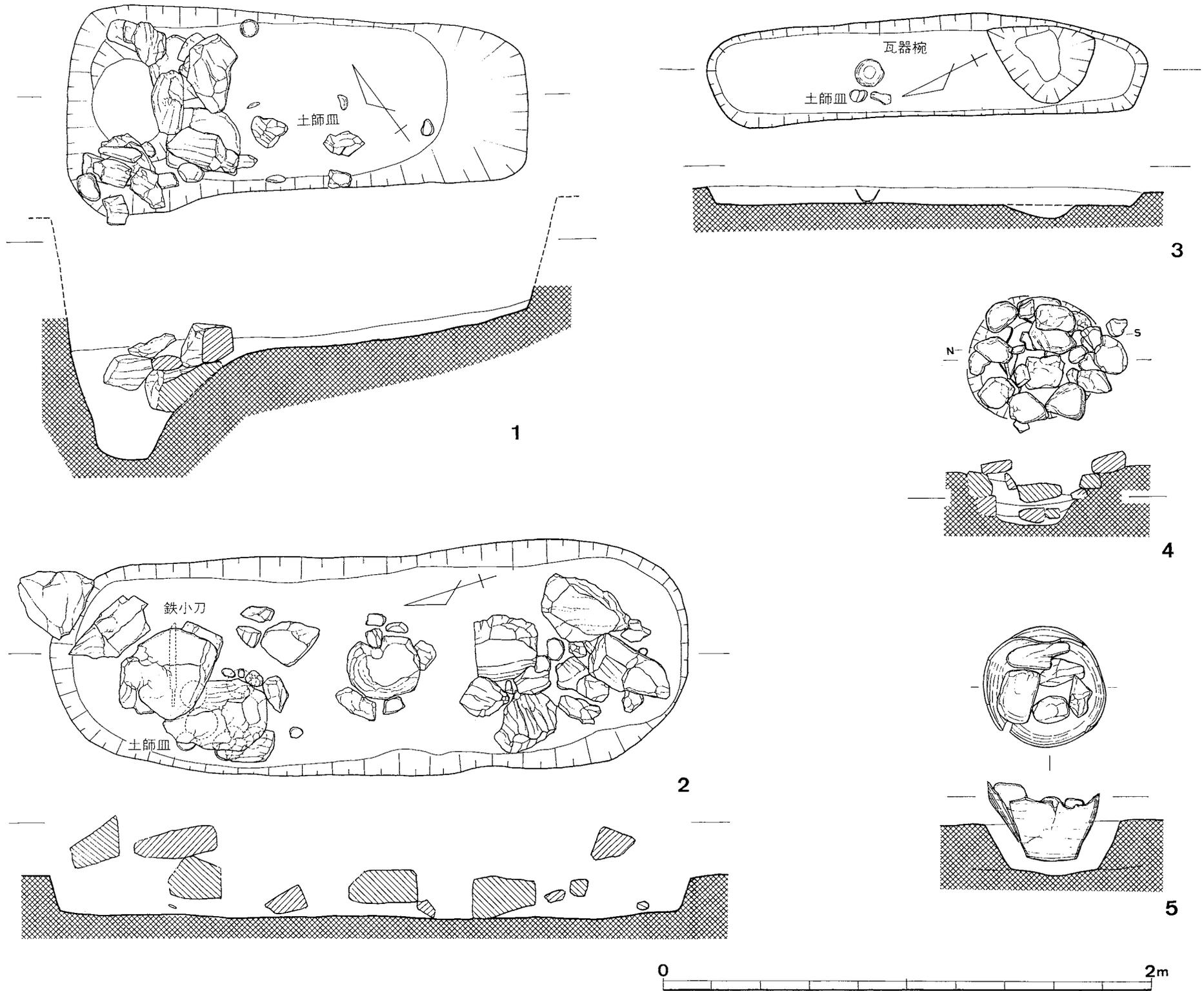
遺構の概要

中央部に大きな松根があり、残存状況はあまり良好でない。径5m前後を測りわずかな高まりをみせる。斜面の上方には、掘り割状の平坦面をめぐらす。当初からある程度露出していたが、この盛り上がり全体を覆うように、コブシ大の円礫が葺かれていることが調査の結果判明した。部分的に列状または方形状に石材が配されている箇所もある。この中央やや北寄りから、丹波系の大甕を転用した骨蔵品を検出した。甕の上半分を打ち欠き、胴部以下の下半分を利用したもので、埋葬に際しては、径55cm、深さ20cm程の墓壇を掘り甕を据え、周囲に川原石を積む。内部には多量の骨片が含まれ、その上に30cm大の割石塊が置かれていた。なお、甕の底部には、水抜き穴を穿っていた。2号墓からは、この他にも葺石の間から少量の骨片が出土している。盛り上がり部の断ち割りの結果では、地山上に20cm程の盛土を行い、その上に葺石を置いている。しかし、1号墓で検出したような土壌は確認できなかった。1・3号墓とは、外表の構成も異なっており、時期的に下るものと考えられる。

3号墓

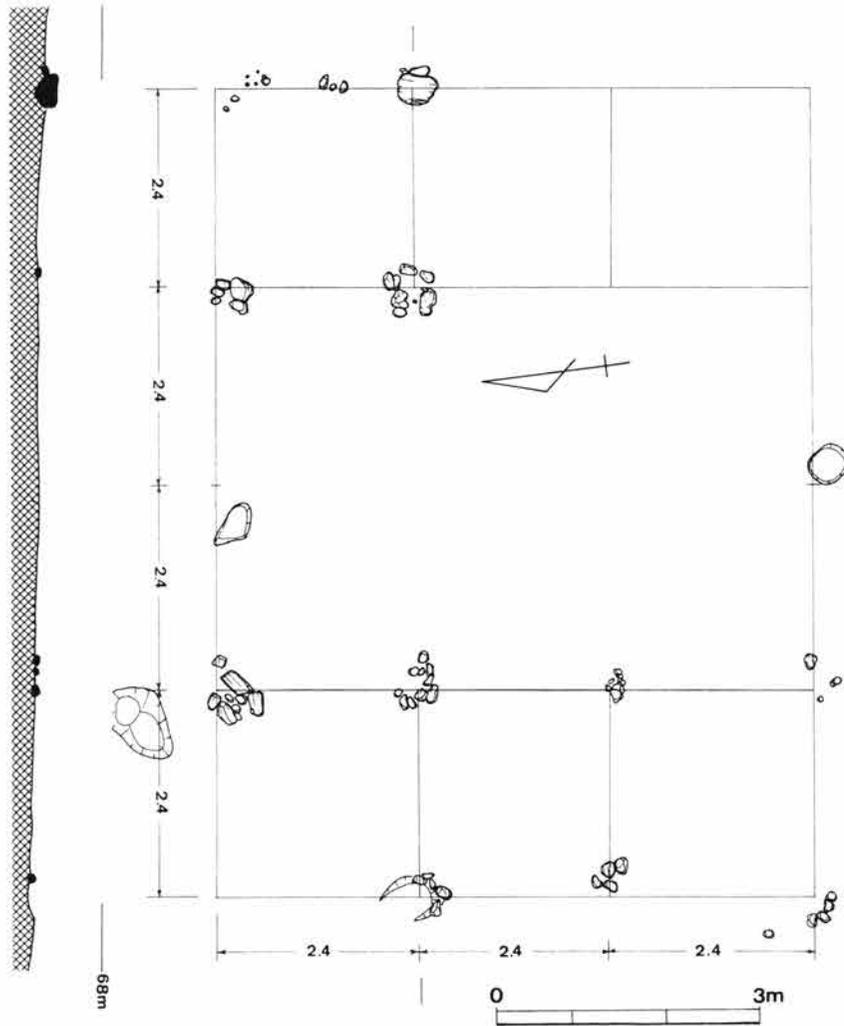
遺構の概要

2号墓と近似した規模をもつ。隆起部の中央直下から、ほぼ南北方向に軸を置く、長さ



第58図 宮遺跡中世墓の各種埋葬施設
 1. 1号墓北側土壇 2. 3号墓 3. B地点中世墓 4. 1号墓石組遺構1 5. 2号墓骨藏器

2.5 m、幅0.9mの平面長楕円形の土塋を検出した。塋内には、長径20cm程の石材が10数個埋没していた。一部組み合わせたような感じもあるが、塋底から浮き上がった状態で検出しており、おそらく棺上に置かれていたものが落下したと考えられる。塋北端部の石塊の下から、鉄小刀（一振り）、土師器大小皿9枚が並べられた状態で出土した。鉄小刀は、切先を山側に、刃先を地に向けて埋納し、土師皿類はその西辺かたわらに配置されていた。土師器小皿は天地を逆にして重ねるものがある。被葬者の頭部位置に副葬されたものであろう。この他の遺物としては、盛土表面から瓦器の破片が出土している。



第59図 礎石建物

(2) 礎石建物

外形

城ノ尾古墳の東側はやや急斜面になり、その斜面を上った所に東西12m、南北15m程の平坦面がある。この平坦面は、丘陵の高い方を削って形成しており、西方に向かって台形状の張り出しをなしている。

建物構造

調査によって、原位置にある礎石1か所とその根固めに使われた根石を検出した。根石の遺存状況もあまり良好でなく、完全に抜き取られていた箇所もみられた。礎石は、一辺40cm程の自然石を用いており、その平坦な面を利用している。残存する部分によって建物の平面規模を復原すると、東西（梁行）4間（8.4m）、南北（桁行）3間（6.2m）となる。東西の両面は、廂になるもので、柱間は2.1m（約7尺）の等間である。

東西方向の断ち割りによって東側の丘陵斜面を削り、西側斜面の低い方に厚い置土をして平坦面を確保していることが判明した。

築造時期

時期については判定する資料が少なく不明確であるが、周辺からわずかに出土した土師皿片などから、中世墳墓群とほぼ同時期の鎌倉時代～南北朝時代に比定しておきたい。また、瓦類等については一切認められないので、屋根は板かかやなどで葺かれていたものであろうと思われる。

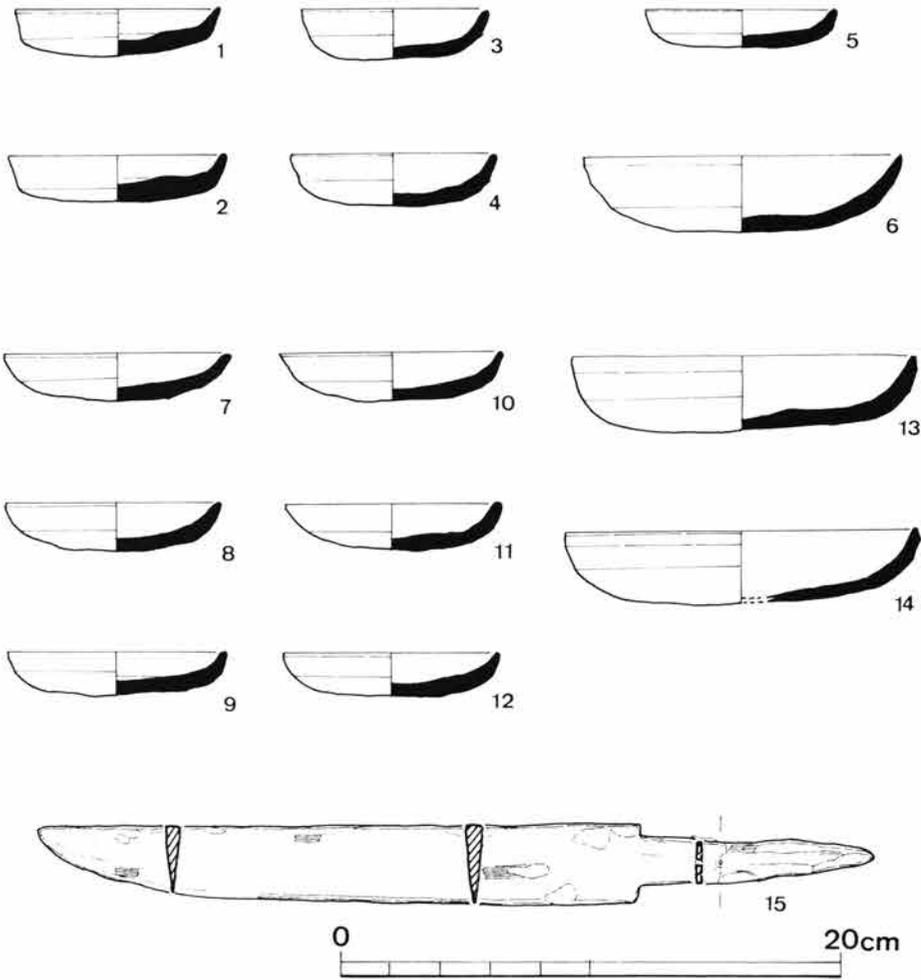
3. 出土遺物

今回調査の出土遺物には、弥生土器片・土師器・瓦器・中国製輸入陶磁器片・国産中世陶器類があり、他に不明鉄製品・石鏃等があるが、量は少ない。

付表5 中世墳墓出土土師器法量表

単位(cm)

図番号	口径	器高	図番号	口径	器高
1	8.3	1.9	8	8.7	2.0
2	8.8	2.0	9	8.7	1.8
3	7.5	2.0	10	9.0	2.0
4	8.4	2.1	11	8.7	1.9
5	7.8	1.5	12	8.8	1.8
6	12.8	3.1	13	13.7	3.0
7	9.2	2.0	14	14.0	2.9



第60図 中世墳墓出土遺物
1~6 1号墓, 7~15 3号墓

ここでは、中世墳墓に埋納された土師器・鉄小刀について簡単にふれておきたい。(第60図)
(1~6)は、1号墓出土。

土師器小皿類(1~5)は、口径と器高の比率により、A(1・2)、B(3~5)の2種に分けられるが、器壁が比較的厚く底部に移行する曲折部に明瞭な段をもつのが特徴である。赤褐色を呈し、内面に煤が付着するものがみられる。

(7~15)は、3号墓出土のもの。

土師器小皿類(7~12)は、1号墓出土例に比べやや口径が大きく、形態も通例のものである。色調は、灰黄褐色を呈する。(付表5)

鉄小刀(15)は、全長33.5cm、刃部最大幅3.3cm、刃部長24cmを測る。両刃で反りはほとんど認められない。茎には目釘穴を穿つ。表面に木質の残存が認められ、鞘に納められていたことがわかる。

図示していないが、2号墓で検出した骨蔵器に用いられた甕は、現存最大径47cm、高さ28cmを測る。焼成はやや軟質で、表面赤褐色、内面は灰黄褐色を呈しており、丹波系に属するものである。

4. 小 結

以下、今回調査の成果について、若干の整理を行っておきたい。

(1) 中世墓制の文献的な研究は、あまり進んでいないのが現状である。『餓鬼草紙』等の絵巻物により、当時の墓の姿を具体的にうかがい知ることができるが、本調査例もそれに照して考えると一層興味深い。

(2) 盛土をもつ中世墓の調査例は意外に少ない。当墳墓の被葬者像についても、一般の庶民層というより富裕な名主層や地方豪族たる武家層の累代の墓地とするのがふさわしい。

(3) 鎌倉時代前半～南北朝にかけて、3号→1号→2号墓の順に築造されたと考えられ、土葬から火葬へのおおまかな変遷がうかがえる。

(4) 3号墓では魔除けの鉄刀を埋納するなど、呪術的な要素が強くみられ、当時の葬送儀礼の様相の一端が明らかになった。1号墓でみられた下段の土壙(副室)については、その内部に真言の護符のようなものが納入されていたとも考えられる。経塚例との関連も窺われるが、類例をまって検討したい。

当遺跡内からは、これまでの調査でも、中世墓と思われる埋葬施設が数例検出されており、今後、同一地域における葬制の変遷や、当地方の中世社会の様相を知る上で貴重な資料となるろう。

(5) 礎石建物については、墳墓と結びついた墓堂(三昧堂)ないし庵的な性格をもつものとする。立地上からも、極楽往生を願うに最適の場所を占めており、永遠の眠りについた人々を弔い、先祖の霊を供養するために建てられたものであろう。

なお、最後になりましたが、宮(島田・野間仁田地区)の皆様には、今回も調査全般にわたって多大の御協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。(辻本 和美)

(注1) 鈴木忠司氏言。渡辺 誠「第3章 縄文時代」(『福知山市史』第一巻)昭和51年

(注2) 藤井善布「福知山地方の中世城郭」(『城』No.104 関西城郭研究会) 昭和55年

(注3) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国製陶磁器について」(『研究論集4』九州歴史資料館)1978年

(注4) 橋本久和『上牧遺跡』(高槻市教育委員会)1980年

(注5) 各分野から大内城跡を分析していただくために以下の方々に研究を依頼した。

藤井善布(城郭史), 百田昌夫(文献), 塩見昭吾・塩見行雄・友次雅子(文献など), 小滝篤夫(地質), 福知山文化資料館(植生)の各氏。

4. 豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要

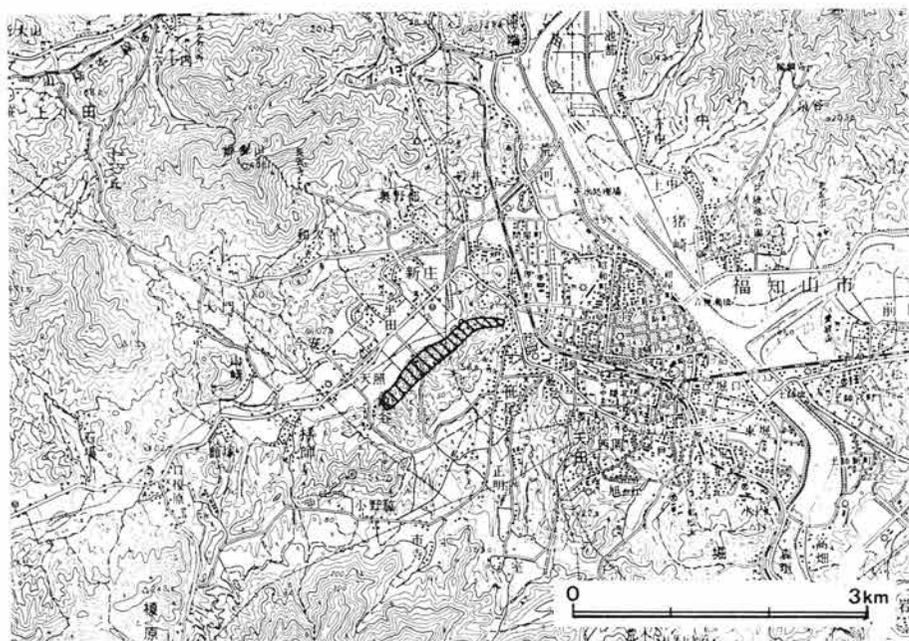
1. はじめに

日本国有鉄道（以下『国鉄』と称す）が計画推進している、国鉄福知山線の複線電化に伴う電車基地が、福知山市字笹尾から同今安に広がる標高50～60mの豊富谷丘陵西半部に建設されることになり、昨年度に引き続いて今年度も発掘調査を実施することとなった。昨年度は、京都府教育委員会によって調査された発掘件数は当初計画より10か所増加して20か所を数え、すべて古墳時代前半期から中期にかけての方形台状墓や古墳であった。今年度は、4月1日に京都府教育委員会の外郭団体として設立された当調査研究センターに事業が引き継がれ、発掘調査を5月6日から昭和57年3月末日まで実施した。昨年度の調査結果から、諸遺跡の残存状況が極めて良好であり、さらに伐採等により増加することも十分懸念されたし、また現実化したのである。結局今年度も当初発掘件数よりかなり増加し、29件を数える。その調査内容は昨年度とは若干趣を異にする点もあり、遺物整理も不十分の現段階では総括的な歴史的意義を述べることは来年度の正式報告書に譲ることとし、ここでは今年度の調査成果の概略のみ記すことに止めたいと思う。

なお、今年度の調査は前述したように、昭和56年5月6日（水）から開始し、同57年3月6日（土）をもって現地作業を終了した。調査を担当したのは、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課調査員松井忠春・竹原一彦・増田孝彦の3名である。現地作業にあっては、昨年に続き、地元今安・半田・新庄の各地区と、新たに笹尾地区から精力的な協力があり、国鉄大阪工務局、同福知山工務区、京都府中丹教育局、福知山市教育委員会、福知山市史編さん室、福知山史談会、奈良国立博物館からも多大なる援助を頂いた。さらに花園大学、同志社大学、京都産業大学、関西大学、神奈川大学の学生の積極的な参加があった。調査の成果は上記協力者の賜物であると記して、謝意を表します。（松井 忠春）

2. 調査の経過

調査は電車基地造成工事に優先させて、しかも調査に支障をきたさない程度の時間的余裕をもって実施した。この調査対象地を3区に分け、Ⅰ区は国道9号線から(18)セイゴ7号墳までを、Ⅱ区を(19)セイゴ8号墳より中山道までを、それより(81)今安寺跡までをⅢ区としたが、今年度はⅡ区を中心にし、Ⅲ区の(80)大道寺跡、(61)論田2号墳、(82)論田9号墳、(83)論田10号墳、



第 61 図 調査地位置図 (中央斜線部)

及びⅠ区の各墳墓がその対象地となった。

発掘調査は、Ⅱ区とⅢ区の(80)大道寺跡を二班で担当して遂行した。Ⅱ区では、すでに伐採が行われていたため、伐採樹木の跡片付けをした結果、さらに(99)狸谷16号墳が確認された。しかし全体として早い段階でこの地区は田畑として開墾されたらしく、Ⅱ区中央より中山道にかけてはその形跡が段々畑と化して残っていた。Ⅲ区の(80)大道寺跡では、昨年度に調査を行うべく伐採していたが、すでに地表面に小さな高まりが各所に見られ、また数か所には火葬人骨や骨壺片が散布してため、一見して中世古墓であることが確認されたし、2枚の平埴地にも建物跡が想起された。

調査の結果、Ⅱ区の北端に位置する(42)狸谷3号墳からは古式土師器が出土し、その中でも長頸壺(図版第86-1, 第67図1)は唯一の完形品である。その他(49)狸谷10号墳までは墳墓と確認されても全く遺物を有せず、また自然地形であることも分かった。これに対し中山道に近い(101)狸谷17号墳や(102)狸谷18号墳では比較的遺物が多くみられ、特に(101)狸谷17号墳では2か所の墓域内から各1面の中国製の鏡が出土した。また(102)の狸谷18号墳では墓域上面で、献納遺物としての器台を中心とした古式土師器の一括品が埋納されていた(図版第85-1~5, 第67図3~7)し、溝内からは、鉄製鎌に付着した小形管玉が出土した(図版第87-2・3)。一方(80)大道寺跡では、A・B両地区の平地より建て替えられた各2棟の掘立柱建建物跡が

検出されると共に、26基の鎌倉時代～室町時代前半期の古墓や、追善供養としての性格を有すると思われる経塚が発掘されるに至った。この両地区の調査が終了したのち、Ⅰ区とⅡ区北尾根に調査の対象を移して12月より行った。Ⅲ区北尾根では、昨年度調査された(62)論田3号墳の前面に林立する3基の墳墓から各々墓壙が検出され、内部に鉄製品や古式土師器が埋納されていたし、区画する2本の側溝内からも多量の古式土師器が発掘され、さらに特異な遺物として半載された磨製石斧が各1個出土した。Ⅰ区では、トンネル工法により追加調査となった(2)谷尾谷1号墳～(6)谷尾谷5号墳から多量の古式土師器や鉄剣・鉄鏃と共に、(2)谷尾谷1号墳から仿製小型内行花文鏡が1面確認された。しかし(13)セイゴ1号墳～(21)セイゴ9号墳では殆ど無遺物に近い状態であり、好対照を呈していた。なお全体の調査結果は付表6の通りである。

(松井 忠春)

3. 検出遺構

調査によって確認された諸遺構については、付表6に記したとおりである。

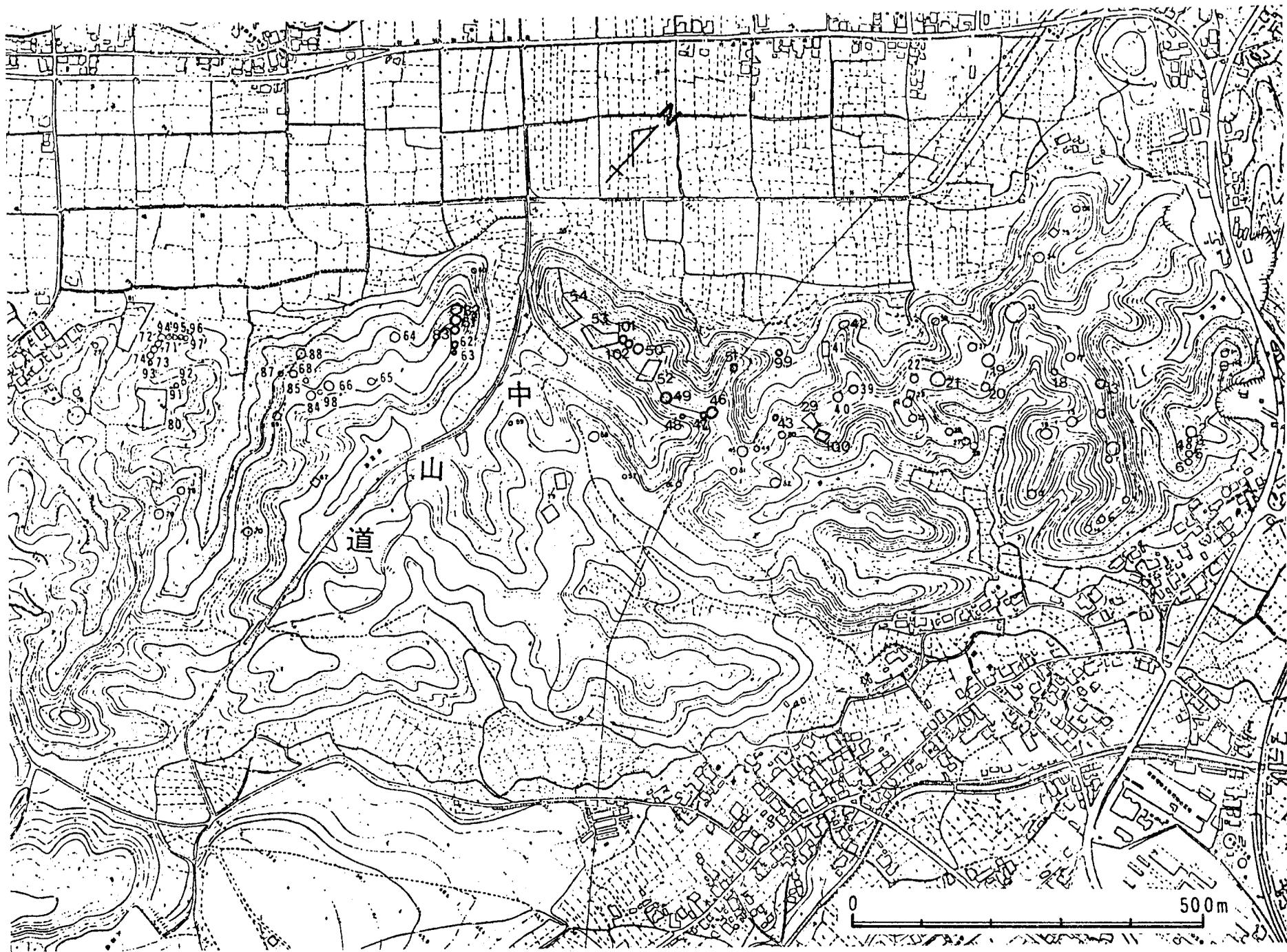
墳墓について (図版第80・81, 第63図)

調査を行った墳墓は、いわゆる“方形台状墓”に属する墓制で、標高43m～54mの狭小な尾根筋に沿って自然地形を利用して築造されている(図版第80-1)。そのため大半の墳墓が長方形、方形を呈している。墳丘自体の平均値は一辺約11m前後、高さ1～2mを測る。構築法は昭和55年度と同様、狭小な尾根筋、尾根頂部に造られているため、墳墓と墳墓、尾根と墳墓を区画するために溝が設けられている(第63図上)。

Ⅰ区は、昭和55年度調査地に比べ、墳墓の密集度も低く腰高の墳墓がかなり多くなり、独立的な性格を帯びていると思われる。そういった中でも、(2)谷尾谷1号墳～(6)谷尾谷5号墳はⅢ区南尾根のように階段状に構築されている部分もある。

Ⅱ区の(13)狸谷4号墳～(53)狸谷城跡第3地点、(99)狸谷16号墳にかけては、畑地として開墾を受けており、尾根頂部～裾部に至るまで段々畑として明瞭にその痕跡を残していた。そのため、墳墓らしきものは存在していても、かなり削平を受けており、その原形をとどめてはいない。立地的には墳墓と考えられても、調査による段階では断定するに至らなかったものもある。そのため、この付近は尾根筋の面積が大きい割合には遺跡の空白地帯となっている。

調査を行った墳墓からは、長方形に掘り込まれた土壌内に木棺を直葬した土壙墓を検出した。墓壙は大半が複数であり、その形状も二段墓壙、U字形素掘り、∟字形素掘りの例を

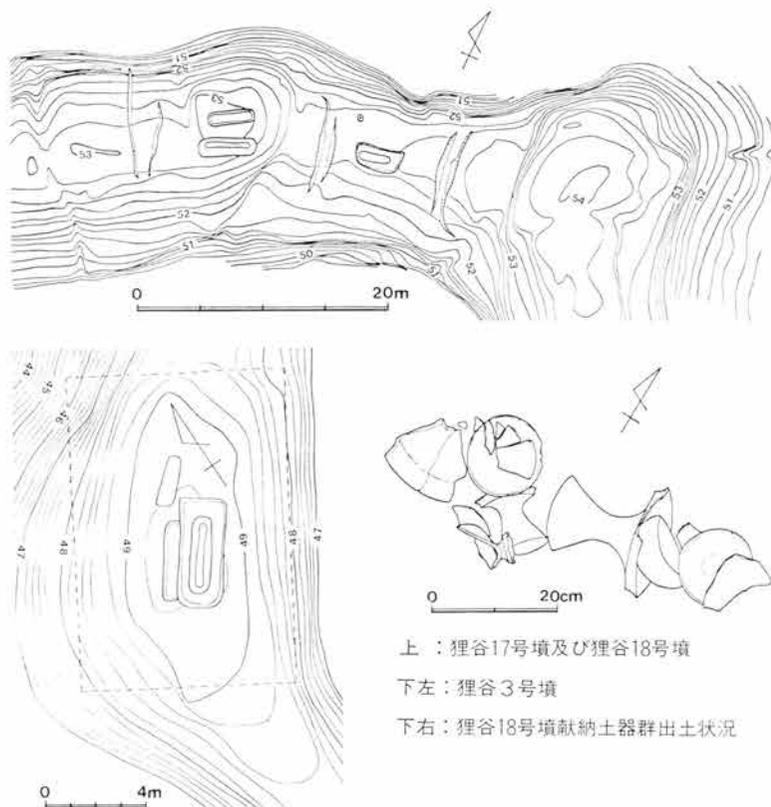


第62图 豐富谷丘陵遺跡分布图

付表6 調査結果一覧表

番号	名称	墳 丘		内 部 主 体		外 部 施 設	
		墳 形	規 模 (m)	主 体 部	出 土 遺 物	遺 構	遺 物
2	谷尾谷1号墳	円形	直径 14	木棺直葬	鏡(内行花文鏡) 鉄剣	—	—
3	谷尾谷2号墳	自然地形	—	—	—	—	—
4	谷尾谷3号墳	方形	長辺 11.7 短辺 11	木棺直葬	鉄鎌	溝	甕・壺(土師器)
5	谷尾谷4号墳	方形	長辺 13 短辺 12	木棺直葬	壺(土師器)	溝	器台・壺(土師器)
6	谷尾谷5号墳	方形	長辺 11.5 短辺 9.5	木棺直葬 火葬墓1	高杯・器台・壺(土師器) 骨細片多数出土	—	—
13	セイゴ1号墳	方形	長辺 14 短辺 10	木棺直葬	—	—	スクレイパー (縄文時代)
18	セイゴ7号墳	自然地形	—	—	—	—	—
19	セイゴ8号墳	方形	長辺 18 短辺 12	木棺直葬	—	—	—
20	セイゴ9号墳	方形?	長辺 12? 短辺 12?	売却用地 外	—	—	—
21	セイゴ10号墳	方形	長辺 18 短辺 14	木棺直葬	鉄器(鎌?)	—	—
29	セイゴ18号墳	方形	長辺 12 短辺 9	木棺直葬	—	—	—
42	狸谷3号墳	方形	長辺 12.7 短辺 8.6	木棺直葬	長頸壺・高杯・甕(土師器)	—	—
43	狸谷4号墳	方形	長辺 11.5 短辺 9.7	—	—	—	—

番号	名称	墳 丘		内 部 主 体		外 部 施 設		
		墳 形	規 模 (m)	主体部	出 土 遺 物	遺構	遺 物	
46	狸谷7号墳	方 形	長辺 15 短辺 13	—	—	—	—	
47	狸谷8号墳	自然地形	—	—	—	—	—	
48	狸谷9号墳	自然地形	—	—	—	—	—	
49	狸谷10号墳	自然地形	—	—	—	—	—	
50	狸谷11号墳	古墳?	長辺 ? 短辺 ?	—	—	—	—	
51	狸谷城跡第1地点	方 形	長辺 10 短辺 9.5	木棺直葬	土師器片 高杯(土師器)	—	—	
52	狸谷城跡第2地点	自然地形			—			
53	狸谷城跡第3地点	火葬場1	古墓7	ピット10	スリ鉢・土師器片・鉄釘・人骨片・寛永通宝			
61	論田2号墳	方 形	長辺 11 短辺 10	木棺直葬	甕(土師器) 鉄製鉈	溝	土師器(台付 壺・高杯) 磨製石斧	
82	論田9号墳	方 形	長辺 10 短辺 9	木棺直葬	土師器片 器台(土師器)鉄剣, 鉄 鎌	—	高杯(土師器) ↓ 斜面	
83	論田10号墳	方 形	長辺 9 短辺 8	木棺直葬	—	溝	高杯(土師器) 磨製石斧	
99	狸谷16号墳	方 形	一辺 9.5	木棺直葬	鉄剣	—	—	
100	セイゴ22号墳	方 形	長辺 14 短辺 11	木棺直葬	—	—	—	
101	狸谷17号墳	方 形	長辺 13.5 短辺 10.5	木棺直葬	高杯(土師器), 土師器 片, 鏡2面	溝	甕(土師器)	
102	狸谷18号墳	方 形	長辺 9.3 短辺 8.2	木棺直葬	高杯・器台・甕(土師器) 盤	溝	甕(土師器)鎌, 管玉	
80	大道寺跡	掘立総柱建物4棟, 古墓26基, 経塚1基, 古墳時代主体部3基			須恵器(甕, 片口鉢, 杯身, 杯蓋, 無蓋高杯) 土師器(壺, 甕, ナベ, 皿), 人骨多数 輸入陶磁器 経筒, 経巻, 和鏡, 宋銭, 檜扇片など			



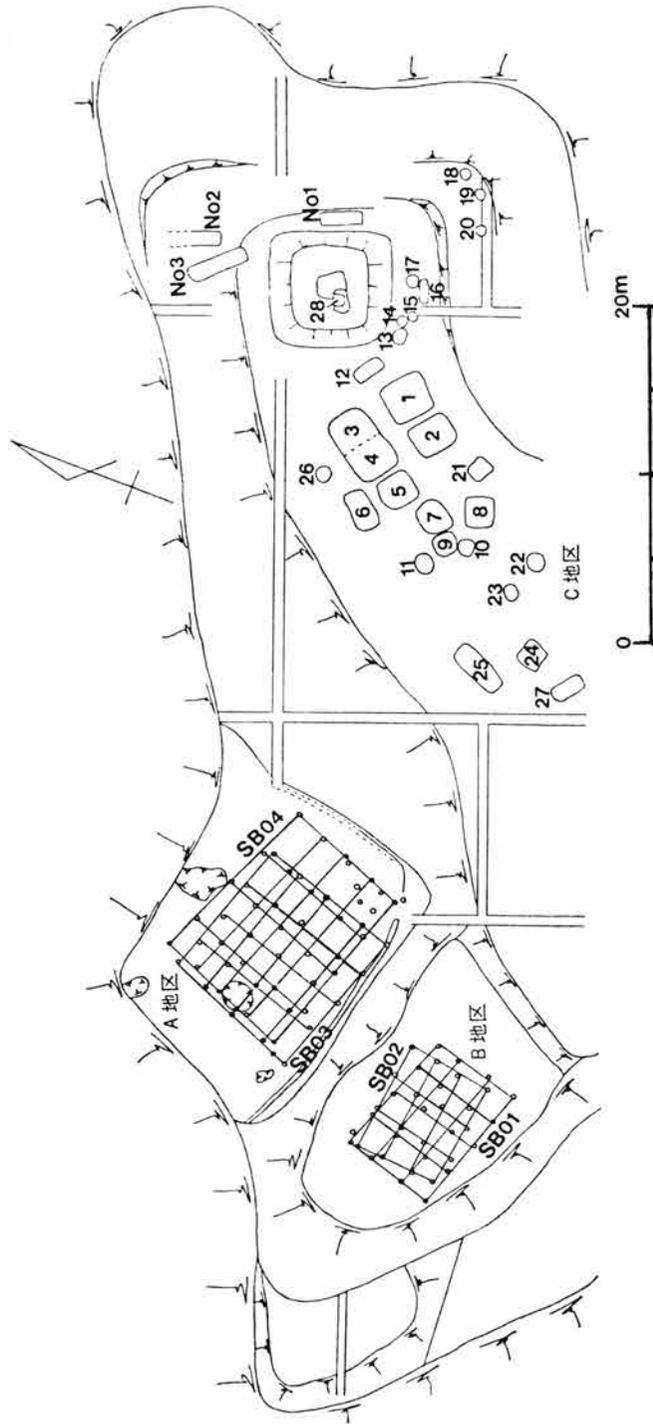
上：狸谷17号墳及び狸谷18号墳
 下左：狸谷3号墳
 下右：狸谷18号墳献納土器群出土状況

第 63 図 各古墳の平面測量図及び献納土器群出土状況図

確認したがほとんどが二段墓墳であり、その最大のものは(51)狸谷城跡第1地点の6.4m×2.8mを測る。

これらの墓墳には木棺が埋納されていたと思われるが、木棺痕跡が残されていないため棺の構造等を明らかにすることはできない。ただ、(42)狸谷3号墳(図版第81-1)、(51)狸谷城跡第1地点、(100)セイゴ22号墳、(102)狸谷18号墳のように他の二段墓墳に比べ比較的大きな二段墓墳に埋納された木棺は、墓墳断面がU字形を呈するため割竹形木棺が埋納されていたと推測されるが、調査による限りではいずれとも断定するには至っていない。(101)狸谷17号墳のように(図版第80-2、第63図上)、木棺周辺にうすい粘土を貼り付けていたという割竹形木棺の例もある。

これらの墓墳の形状や、遺物出土状況からすれば、被葬者の頭位は、おおむね東方向が中心になっているといえる。立地上からして長方形に築造された墳墓は、墓墳のスペースの関係から尾根に平行・直交という形を取っているが、尾根に直交・平行するどの主体部をと

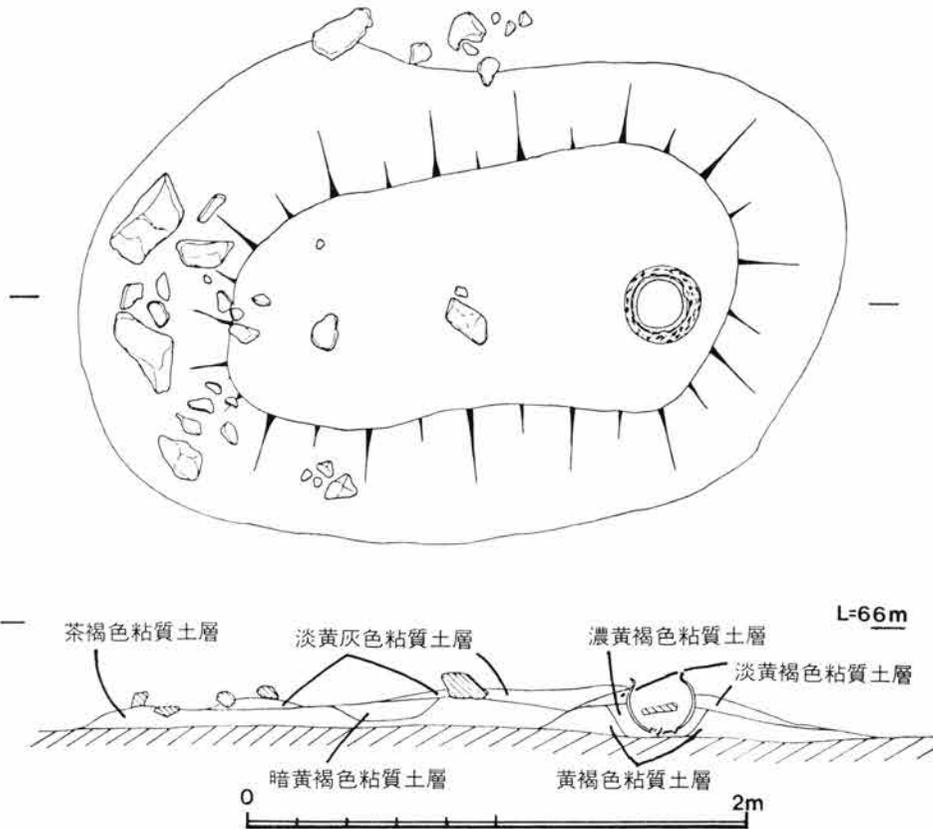


第64図 大道寺跡平面略測図

って見ても、方向を確認した場合、北方向よりも東方向にかたよっているといえる。

また主体部の数については、昭和55年度調査結果同様に、古式土師器を出土する墳墓では複数以上、鉄製品を出土する墳墓は1主体となっている。

鏡が出土した(101)狸谷17号墳や大量の土器が埋納されていた(102)狸谷18号墳（図版第79-2、第63図上・下右）は、電車基地造成予定地内のほぼ中央に位置しており、段々畑により墳丘を大きく削平されていたにもかかわらず、遺存状態が大変良いものであった。(101)狸谷17号墳では墓壇は3か所、(102)狸谷18号墳は1か所確認した。(101)狸谷17号墳の舶載鏡片（図版第86-6、第67図11）が出土した墓壇はL字形素掘りの3.8m×1.1mを測り、土師器高杯脚部（図版第85-6、第67図8）が共伴していた。一方完形の鏡（図版第85-5、第67図10）が出土した墓壇は4.6m×1.6mを有し、若干の土師器片が出土するのみであった。(102)狸谷18号墳は3.2m×1.9mの墓壇で、棺上の遺物として古式土師器高杯・器台・盃などが出土している。両墳墓は3条の溝によって区画されているが(102)狸谷18号墳のすぐ東隣に位置する㊦狸



第65図 大道寺跡6号墓実測図

谷11号墳は削平がいちじるしいためか遺構等は検出されなかった。

また(29)セイゴ18号墳は当初前方後円墳か前方後方墳ではないかと予想されたが、調査の結果、方形墳が2基近接されて築造されていることが明らかになった。(増田 孝彦)

大道寺跡について (図版第82・83, 第64~66図)

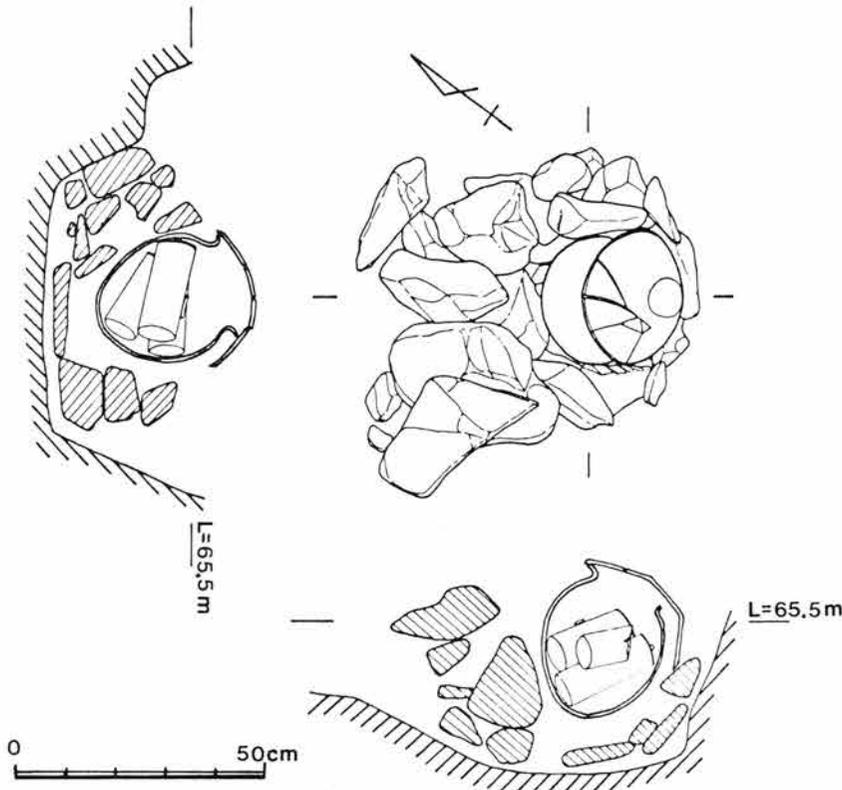
調査地内A地区・B地区において建物跡4棟を検出した。ほぼ正方形を呈するA地区では4間×4間の建物跡2棟、やや狭長なB地区では4間×3間、3間×3間の建物跡各1棟を検出した。また調査地最上部のテラス(C地区)では古墓・方形の塚・経塚・古墳時代の墓壙を検出し得た。

S B01 (図版第82-2)

B地区で検出した東西4間(約8m)×南北3間(約6m)の総柱の建物跡である。

S B02 (図版第82-2)

B地区で検出した東西3間(約7m)×南北3間(約5.5m)の総柱の建物跡である。S B01に対して中軸線は西方に偏る。



第66図 大道寺跡経塚実測図

S B03 (図版第82-1)

A地区で検出した東西4間(8.5m)×南北4間(8.5m)の総柱の建物である。一部の柱穴には河原石による礎石がみられる。

S B04 (図版第82-1)

A地区で検出した東西4間(11m)×南北4間(8m)の総柱の建物跡である。建物の東と南の両側には溝が走り、上部テラスからの雨水の排水溝とみられる。

古墓(図版第83, 第65図)

C地区で27基の古墓が確認された。古墓の形態には方形に土盛りしただけのもの9例、方形に土盛りした後河原石を張り付けたもの1例、周囲に河原石を配石したもの7例、集石のみのもの4例が認められ、ほとんどの古墓中には火葬人骨片が埋葬されていた。この他にすでに土盛りは失われ、人骨片のみが出土した例が4か所存在した。古墓中には須恵質の壺(図版第87-4, 第68図2)や土師質の鍋(図版第87-5, 第68図1)を利用した蔵骨器をもつものがある。蔵骨器をもたない古墓も人骨が密集して出土したことから何らかの容器(木製?)が使用されていたと考えられる。これらの古墓は伴出遺物から、鎌倉時代から室町時代前半にかけて、順次造られたものと推察される。

経塚(図版第84, 第66図)

C地区中央部南端で検出した仏教遺構である。地山に盛り土したのち、直径1.7m、幅1.3m、深さ0.6mの楕円形の土壇を穿っている。土壇中央部には河原石を積み上げ、主体部と副室とを画していた。主体部には小石室を設け外容器を安置させ、外容器内には経筒3口が納められていた。副室部には和鏡・北宋銭等の供養具が納められていた。

古墳時代の墓塚

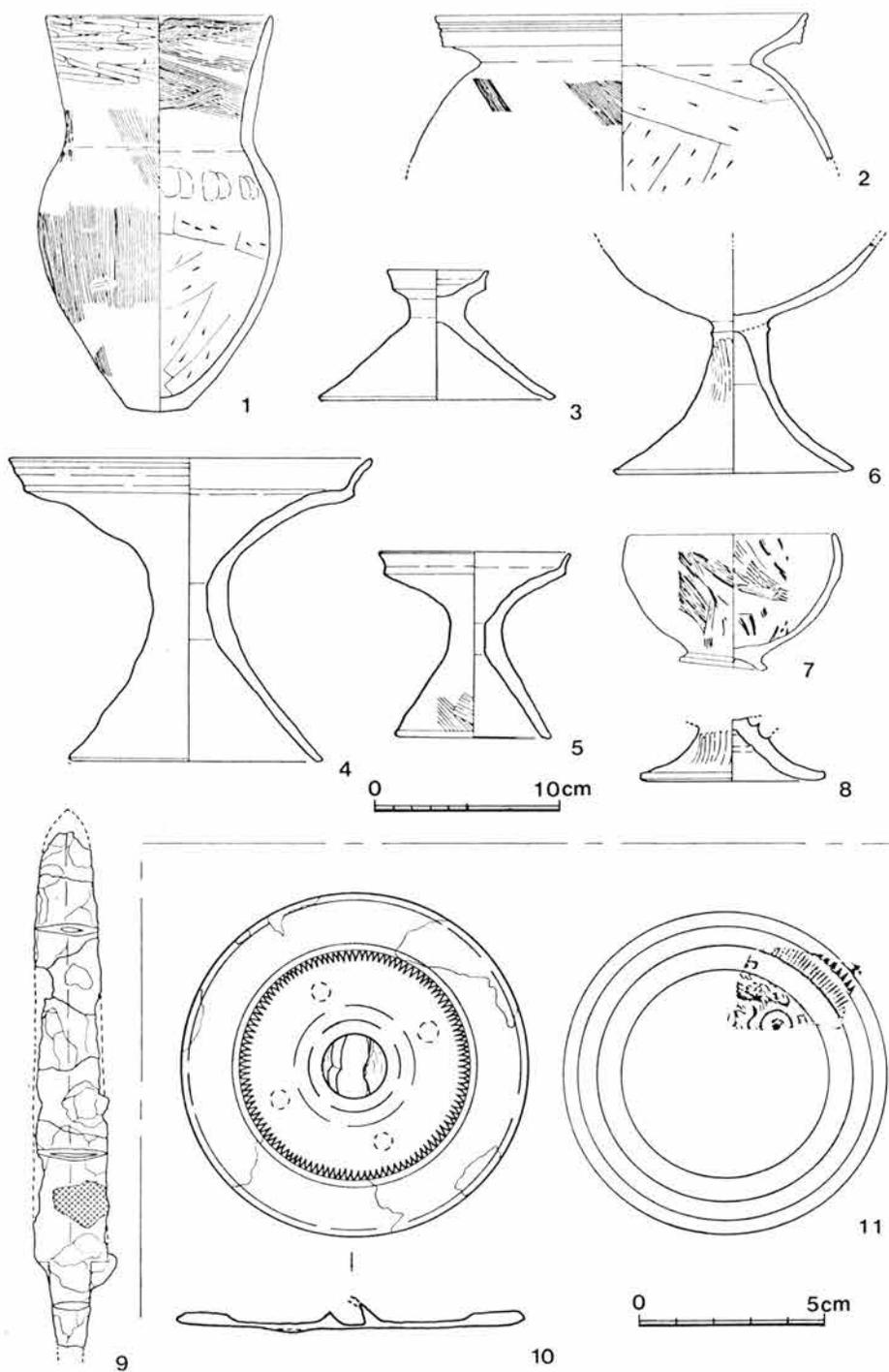
C地区北東部で3か所検出された(第64図 No. 1~No. 3)。古墳の主体部とみられるが、すでに墳丘は失われていた。1つの主体部からは5世紀後半の須恵器(図版第86-3・4)や土師質の壺が出土している。

方形塚

C地区北東部に存在する一辺約7mの方形を呈する塚である。上部には土壇や古墓が認められた。マウンド内より中世土器片が出土したことから、古墓と同一時期に造られたとみられる。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、墳墓関係では古式土師器・須恵器・鉄製品・鏡・管玉等で、主



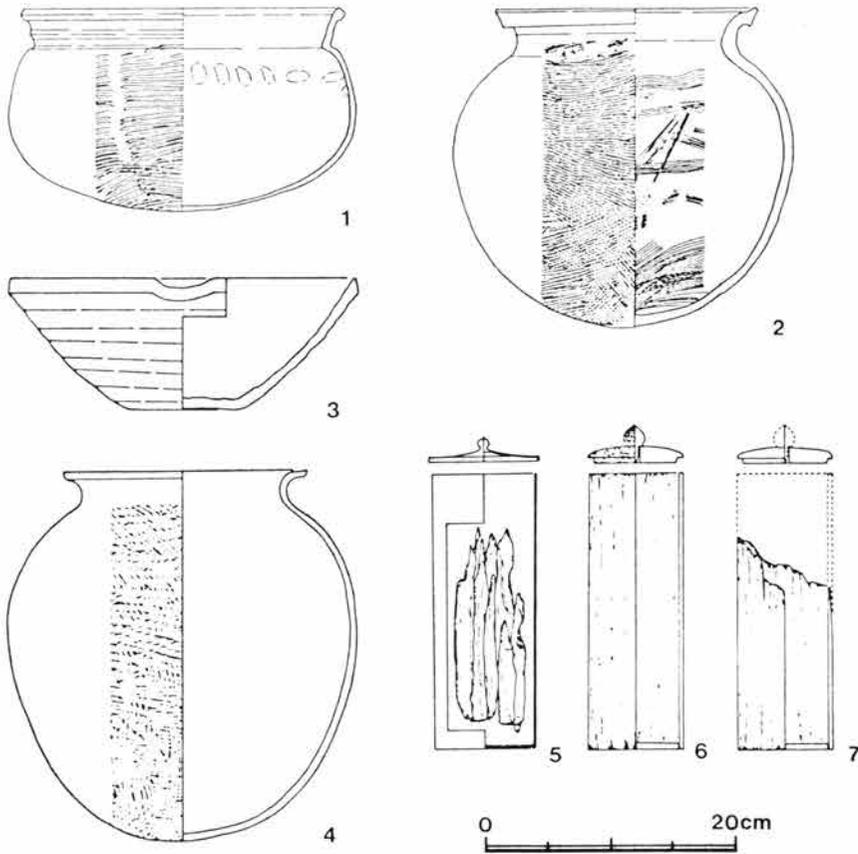
第67図 出土遺物 (1)

(1・2:狸谷3号墳, 3~7:狸谷18号墳, 8・10・11:狸谷17号墳, 9:狸谷16号墳)

体部内や溝などの遺構から出土したものが過半数を占める。(80)大道寺跡関係では、中世遺物が大多数であり、須恵質の壺や鉢、土師質の鍋・皿・瓦器椀・中国製陶磁器等と経塚出土の一括遺物がある。

古式土師器（図版第85・86-1・2、第67図1~8）

出土した土師器は、古式土師器とよばれるものであり、器種は高杯・壺・甕・器台・盥等がある。特徴として、二重口縁の器台や口縁部に擬凹線文や波状文、貼り付け竹管文を施した土器が出土している。外面はハケ目調整をした後、ヘラミガキを施している。内面は、ハケ目やヘラミガキ、ヘラケズリが行われている。土器の形態や製作方法から見ると在地系、山陰系、北陸系に分類できるようである。これらとは別に(101)狸谷17号墳及び(102)狸谷18号墳から出土した土器を見ると畿内の要素を多くもつものが確認される。すなわちタタキ技法による器壁にタタキ目の存在する土器が共伴したということである。また胎土的にも畿内河



第68図 出土遺物(2)
(1:25号墓, 2:6号墓, 3~7:経塚)

内地方のそれに酷似した丸底壺も(2)谷尾谷1号墳から出土している。時期的な位置付けは、出土遺物の検討も進んでいない現段階では、詳細を明らかにすることはできないが、大略畿内庄内式～布留式に併行するものと考えられる。

須恵器 (図版第86-3・4)

器種的には、杯身・杯蓋・無蓋高杯・平瓶・長頸壺等がある。杯身・杯蓋・無蓋高杯は(80)大道寺跡の古墳時代の主体部内から出土したもので、須恵器でも最古型式に属するものと考えられ、年代的には5世紀後半として大過なからう。ただ胎土・焼成・技法を観察する限りは在地系とみるよりもより畿内的なものと言える。平瓶と長頸壺は(5)谷尾谷4号墳の墳丘上で確認されたもので8世紀頃のものともみられる。場合によれば奈良時代の火葬墓か祭祀に用いられたものと推定されるが、出土状況は散乱しており確認し得なかった。

鉄製品 (図版第87-1～3, 第67図9)

出土した鉄製品は、剣・鎌・鏃・鉈等がある。剣は3振り出土した。長さは30cm内外である。鏃は平根式に属しやや大型である。鉈は直線的な縦断面を有する。なお(102)狸谷18号墳東溝より出土した鎌は大型であるが、碧玉製の管玉が1個付着していた。出土状況からして墓前祭に係わるものと思われる。碧玉製の管玉の大きさは、長さ1.1cm、径0.3cm、で中央に径0.1cmの孔を穿っている。

鏡 (図版第86-5・6, 第67図10・11)

鏡は完形品が2面、破片が1面出土した。図示した鏡2面は(101)狸谷17号墳より出土したものである。鏡は鏡片は舶載の四獣帯鏡で、完形品も舶載鏡と考えられここでは「素文縁鋸歯文帯四乳鏡」と仮称する。前者は、半肉式のもので現存する部分に1乳、若干の獣形を残し、外区は複波鋸歯文帯からなっているようである。全体の約6分の1弱の残存状況である。また銘帯があるが銘字の中央で鏡が破断されているため判読出来ない。鏡片断面の長辺の2辺は研磨されており、鈕をつるすために獣形と鈕部分との間に穿孔した痕跡が認められる。復元径約11cmで、鋳上がりが良く、現在でも光沢を放っている。後者は、径9.4cmをはかり、小形の鋸歯文帯が一周するのみで鋳上がりが悪かったのか、内区には文様はまったくみられない。わずかではあるが、若干の盛り上がりをもった乳を4か所確認できるのみである。この他に(2)谷尾谷1号墳から出土した仿製小型内行花文鏡がある。径8.5cmを測り、内区に6弁の花文を配す。

(増田 孝彦)

(80)大道寺跡出土遺物 (図版第87-4～10・88, 第68図)

調査地全域から中世の土器が出土している。遺物は古墓の集中するC地区東部からの出土が大部分を占める。蔵骨器や埋納品とみられる。蔵骨器としては須恵質の壺 (図版第87-4,

第68図2) 土師質の鍋(図版第87-5, 第68図1), 円筒形容器(図版第87-6)がある。蔵骨器は現在3種類しか確認されていないが他に木製もあったと考えられる。また同一種の形態からのバリエーションは認められず、蔵骨器の選定にあたり何らかの規範があったと推定される。土師質鍋の外面にススが付着したものがあり、日常什器が転用されたものであろう。蔵骨器のほかに須恵質の片口鉢が多く出土しているがこれらは蔵骨器の蓋として使用されたものであろう。その他に供献用の土師皿・瓦器・輸入陶磁器類が出土しており、これらはいずれも埋納品とみられる。

建物跡を検出したA・Bの両地区においても、少量ではあるが瓦器・土師皿・陶磁器・クギ等の遺物が出土している。

C地区においては中世遺物の他に古墳時代の須恵器片の出土や墓壇の存在から、墓地や寺院が造営される以前に古墳が存在していたものと考えられる。

なお、経塚関連遺物(図版第88, 第68図3~7)としては、

須恵質甕	1口	須恵質片口鉢	1口
銅製経筒	1口	竹製経筒	2口
経巻	10巻	菊花双鳥鏡	1面
景祐元宝	2枚	土師質皿	5枚
白磁片	1片	檜扇片	1括

がある。

以上のほかに墳墓関係では磨製石斧がある。

(竹原 一彦)

5. ま と め

今年度の調査結果の概略は以上のとおりである。その調査を総合してみると、墳墓関係では、1~2基の墳墓を除けば、畿内庄内式~布留式併行期に比定される方形台状墓群と言える。I・II区の墳墓をみる限り、鏡を副葬する墳墓とその周辺群と無遺物状況に近い墳墓群に大別出来る。これは後者が後世の開削による消失という結果とも相関するもののI区南側からII区北側の墳墓は消失していないにも拘らず無遺物であることは被葬者の社会的地位を顕著に示しており、しかも鏡副葬墓との差は歴然としていると言える。またこの両地区には鉄製品のみ埋納した墳墓は1基しか認められず、須恵器埋納にいたっては皆無であることはIII区北尾根の墳墓群と好対照を示し、今後この相異点が、築造経緯によるものか社会的背景の差によるものかは問題となるであろうが、いずれにせよIII区北尾根より先行することは他

言をようしない。またⅠ区北端の階段状墳墓群はⅡ区・Ⅲ区とは若干構築背景を異にするものと考えられ、笹尾地区との生活圏が今後の課題となろう。昨年度の調査では断続的な墳墓築造過程しか追求し得なかったが、今年度の調査では、遺物組み合わせ関係からそれらが継続することを確認し得たことは今後の墳墓編年にあたって寄与する点が多い。また寺院跡関係では、寺院跡が確認されたことで、今後、威光寺文書の今安寺との同定が問題となってくるし、建立背景を通して、この地域の中世の歴史的究明に一助を与えるものと確信する。

(松井 忠春)

圖 版

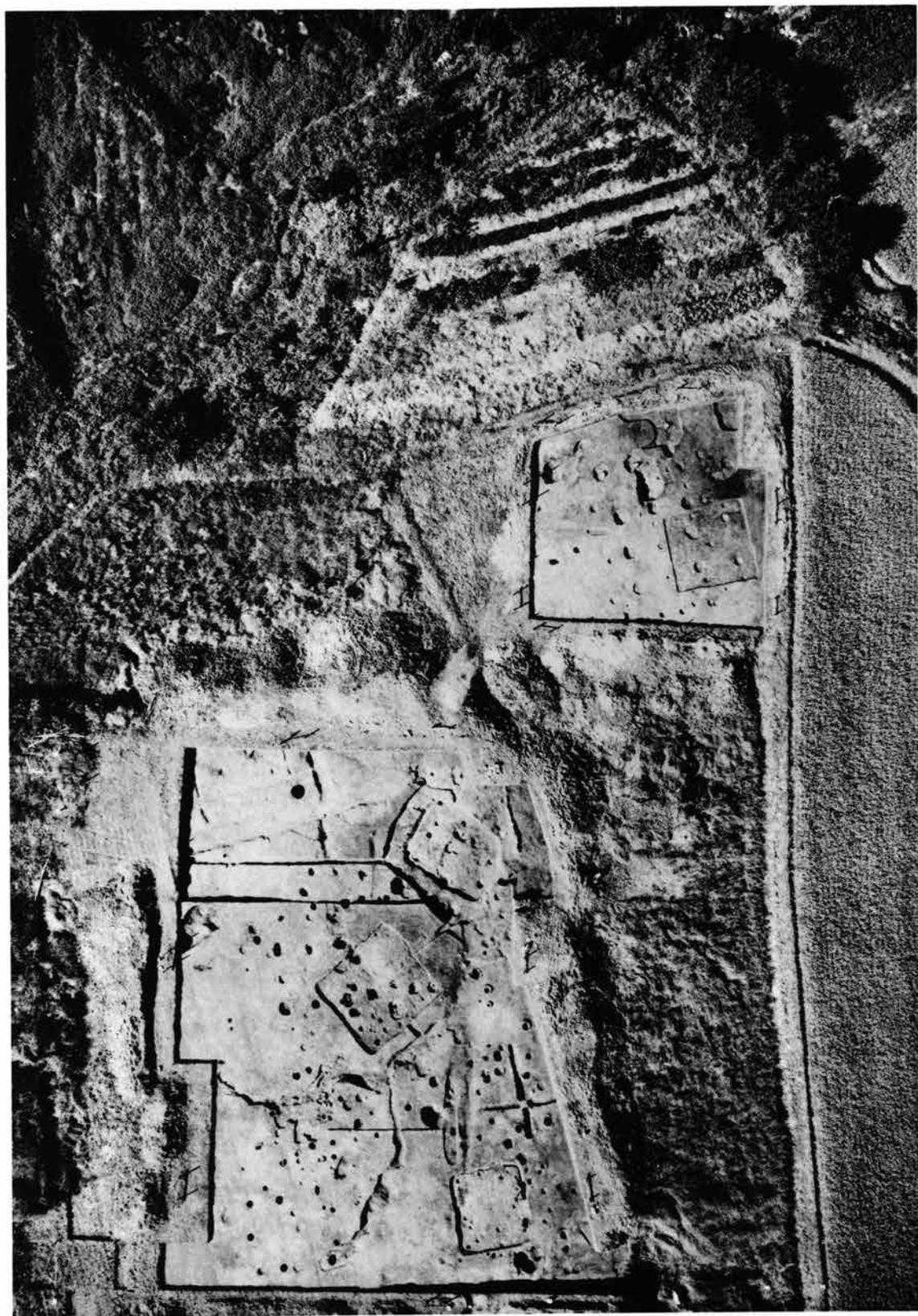
図版第1 千代川遺跡



(1) 千代川遺跡航空写真(南東から)

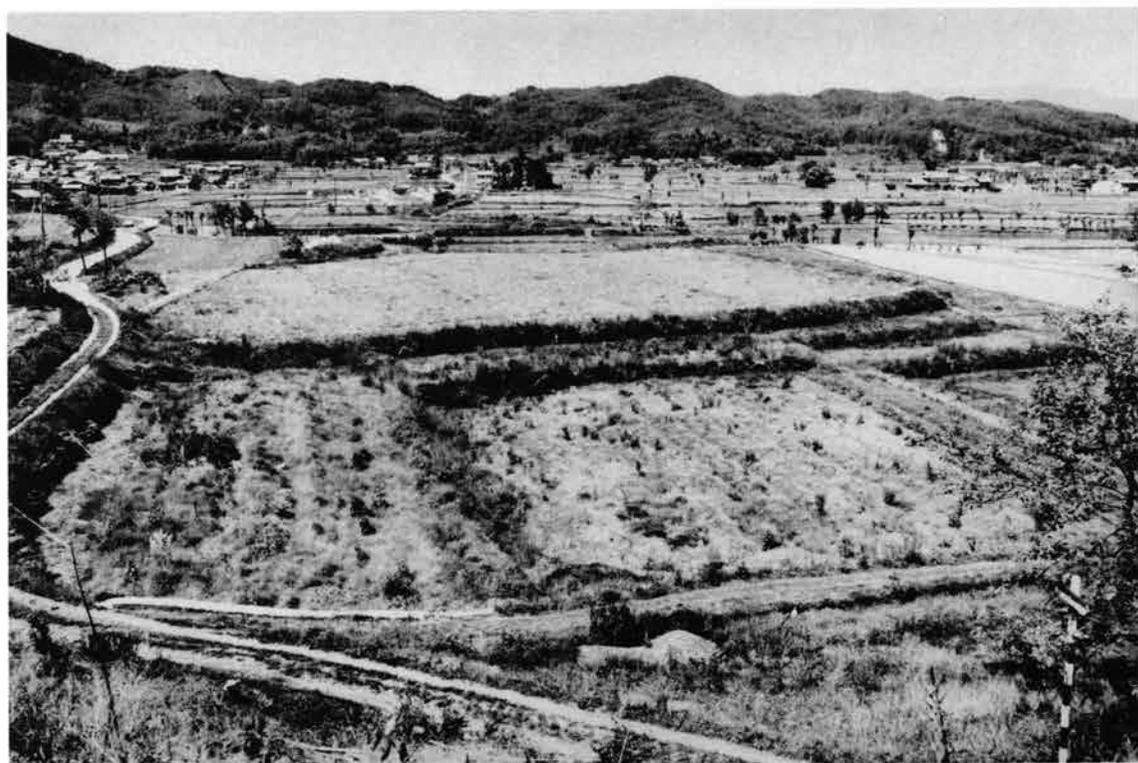


(2) 千代川遺跡航空写真(東から)



千代川遺跡航空写真

図版第3 千代川遺跡



(1) 千代川遺跡調査前遠景（南から）



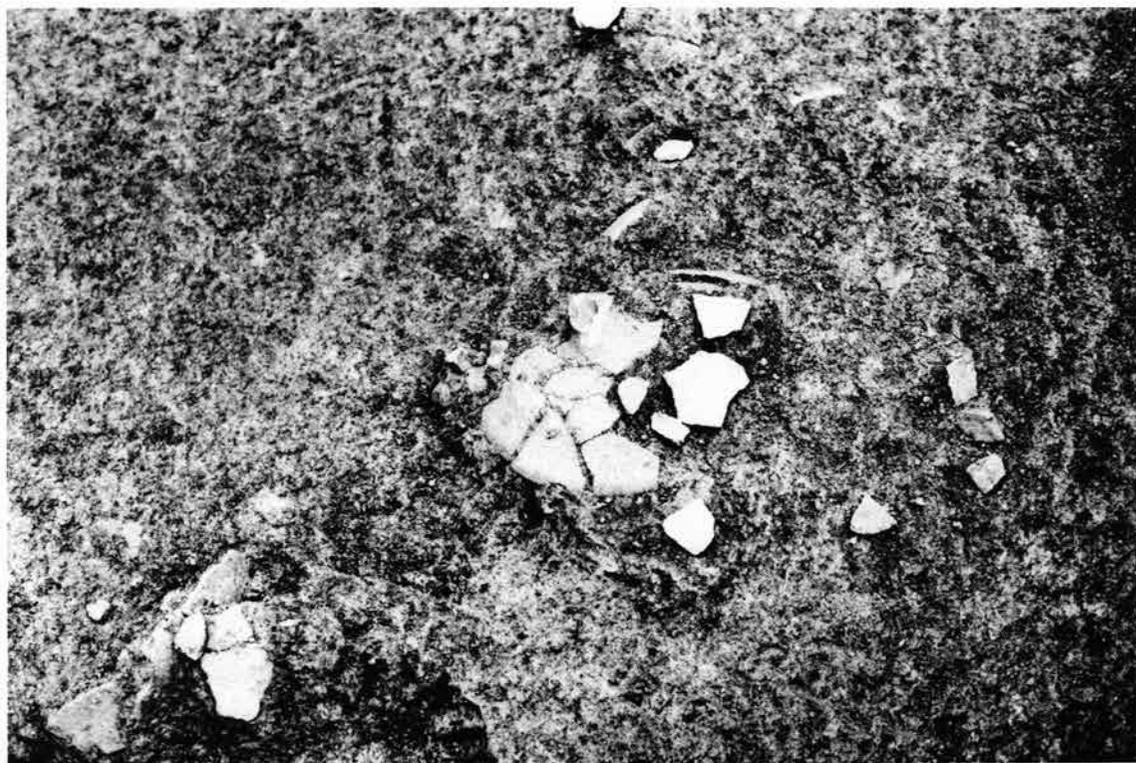
(2) 千代川遺跡全景（南から）



(1) 千代川遺跡全景（北から）



(2) 千代川遺跡近景（北から）



(1) BJ 38~BM38地区土器出土状況



(2) BJ 38~BM38地区土器出土状況



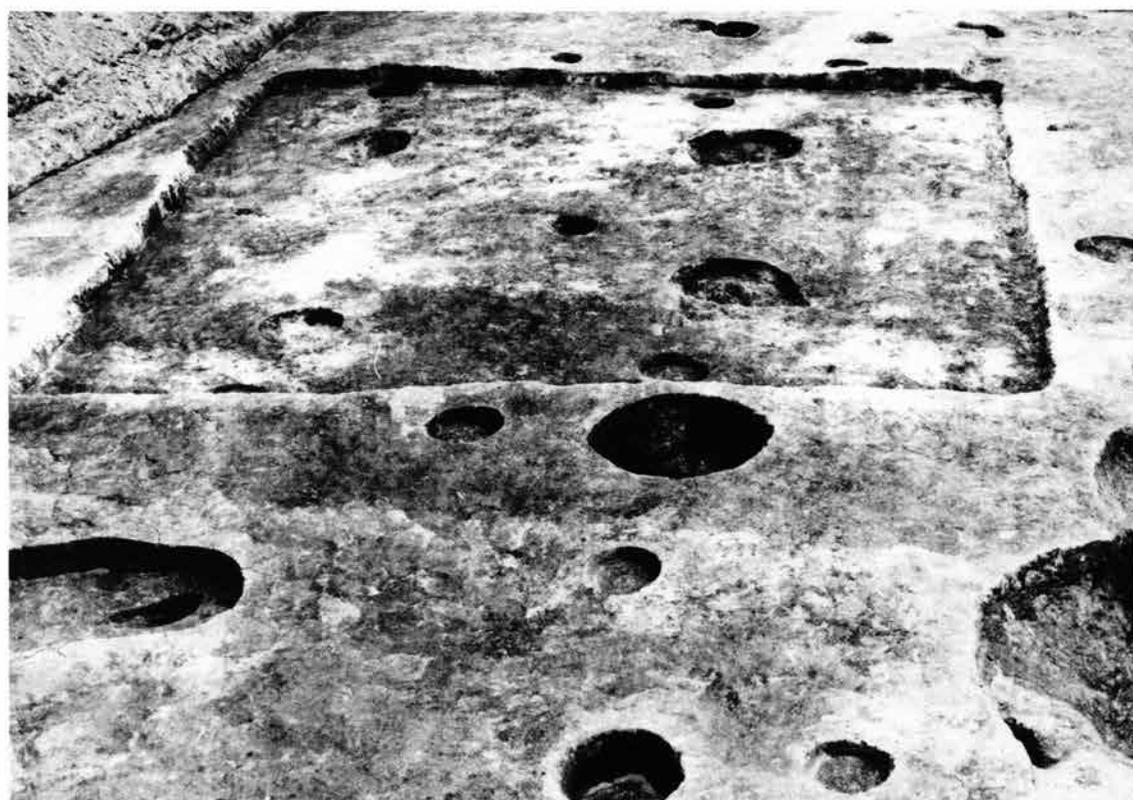
(1) BJ 38~BM38地区土器出土状況



(2) BJ 38~BM38地区土器出土状況



(1) SB0201竪穴式住居跡（南西から）

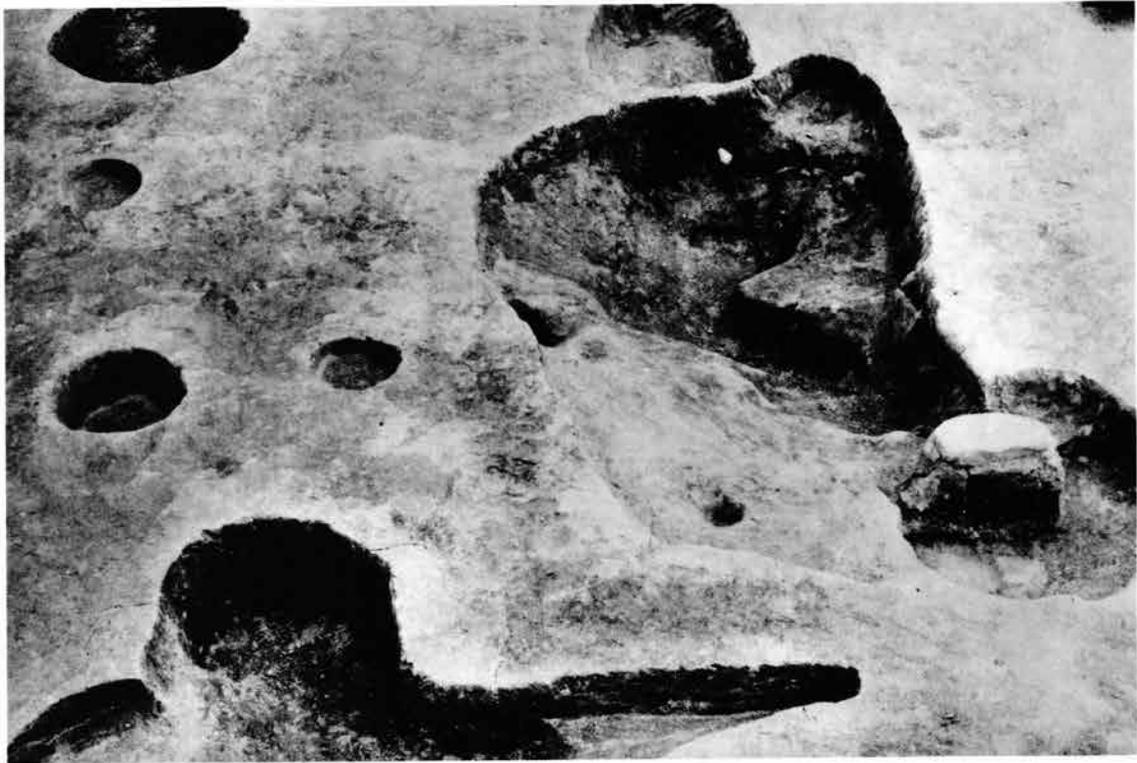


(2) SB0201竪穴式住居跡（北から）

図版第8 千代川遺跡



(1) SB0201, SB0205竪穴式住居跡全景(西から)



(2) SK0214土塚, SB0205建物跡



(1) SB0205掘立柱建物跡 (西から)



(2) SK0208土壙土器出土状況 (南から)



(1) SK0208土壌近景



(2) SK0208土壌土器出土状況



(1) SB0202, SB0206竪穴式住居跡（南東から）



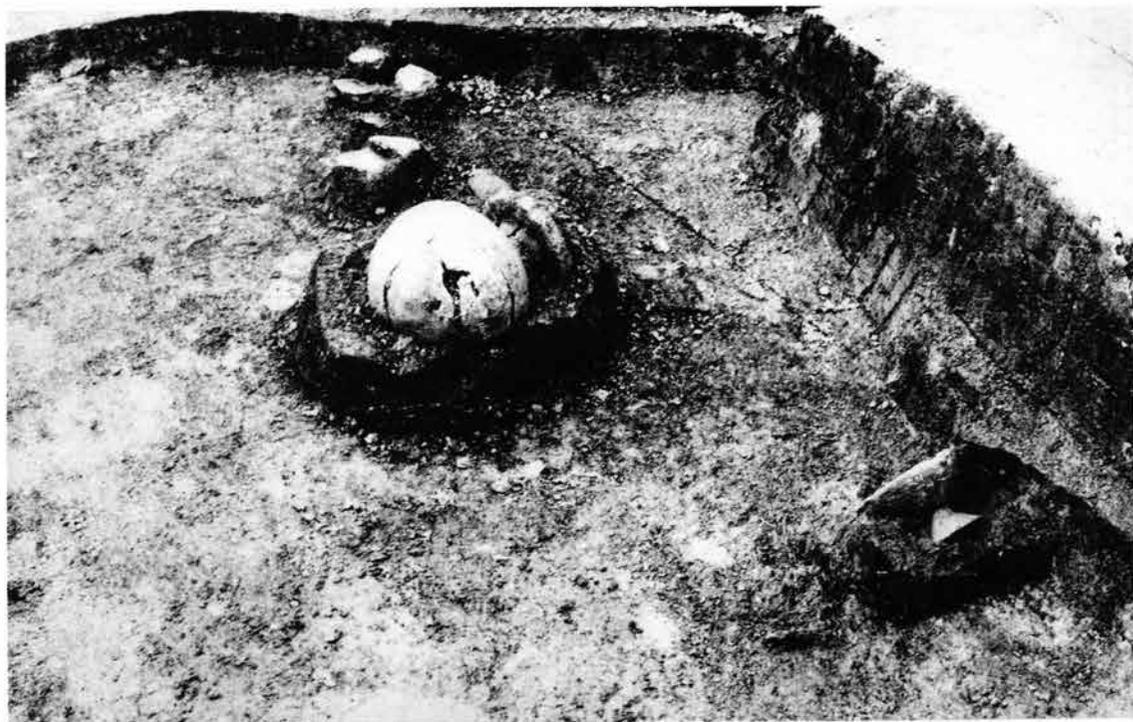
(2) SB0202, SB0206竪穴式住居跡（北から）



(1) SB0202竪穴式住居跡土器出土状況



(2) SB0206竪穴式住居跡土器出土状況



(1) SB0206竪穴式住居跡土器出土状況



(2) SB0206竪穴式住居跡土器出土状況



(1) SB0202, SB0206 竪穴式住居跡 (西から)



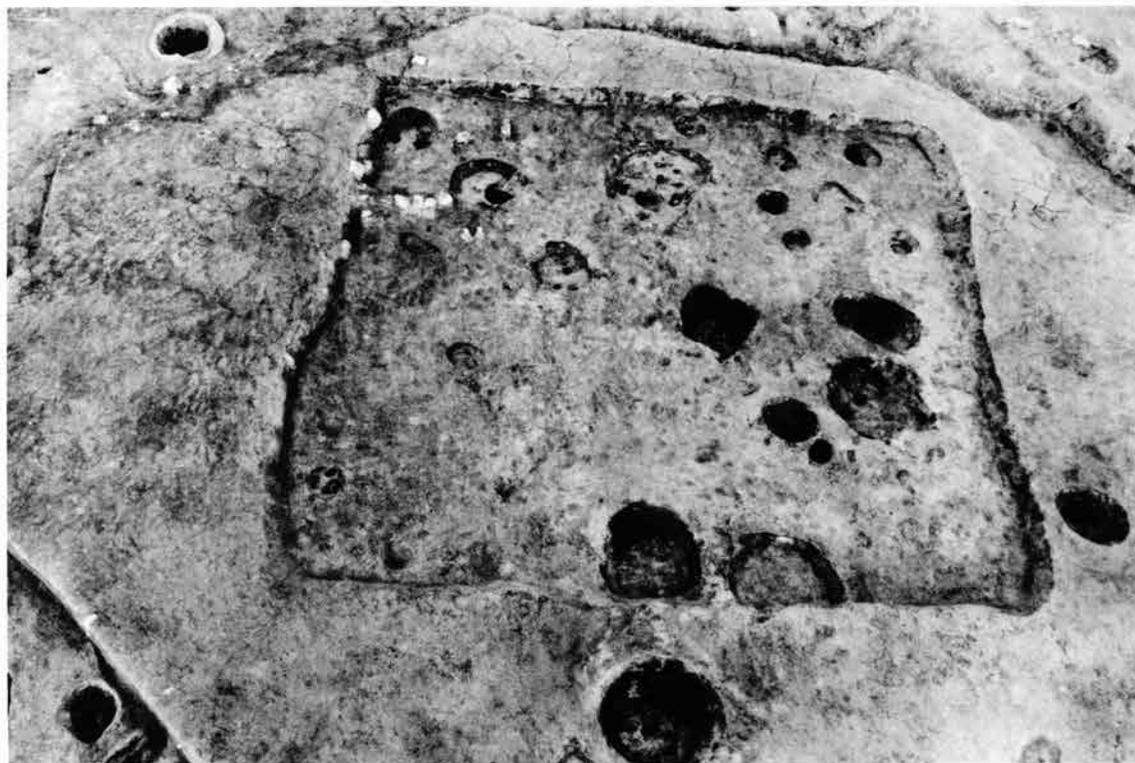
(2) SB0203 竪穴式住居跡 (南西から)



(1) SB0203竪穴式住居跡全景（南から）



(2) SB0203竪穴式住居跡全景（北東から）



(1) SB0203竪穴式住居跡（北から）



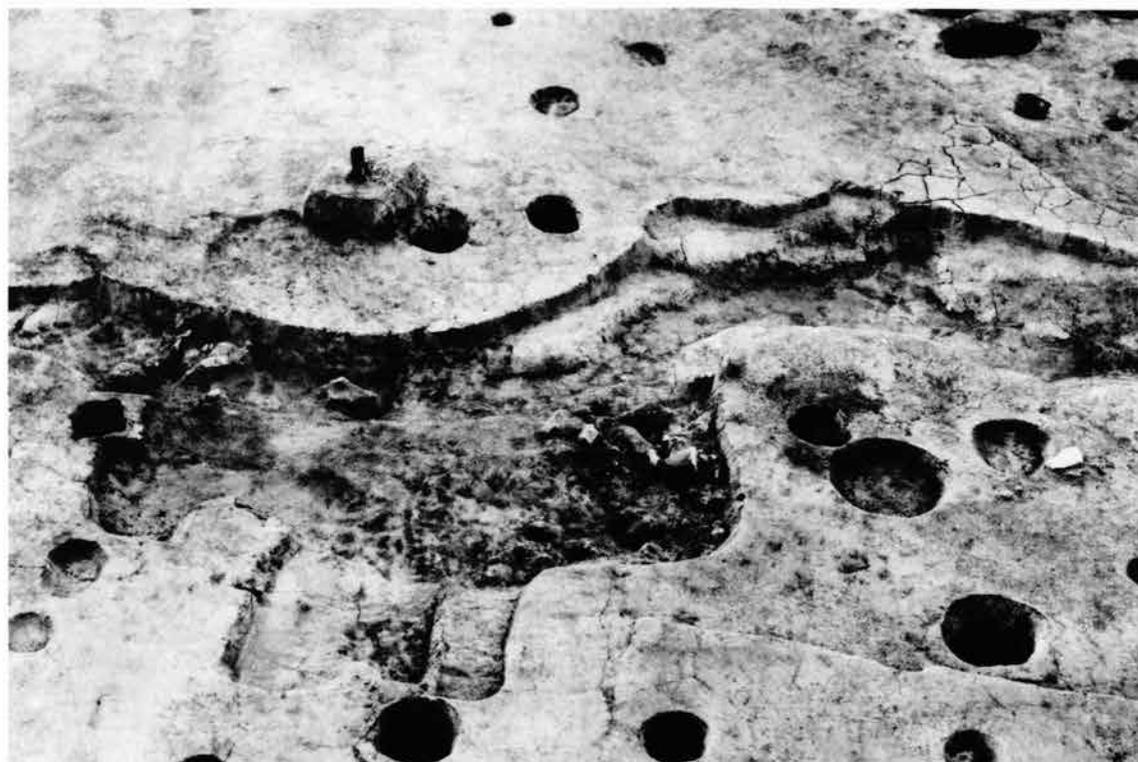
(2) SB0204竪穴式住居跡（西から）



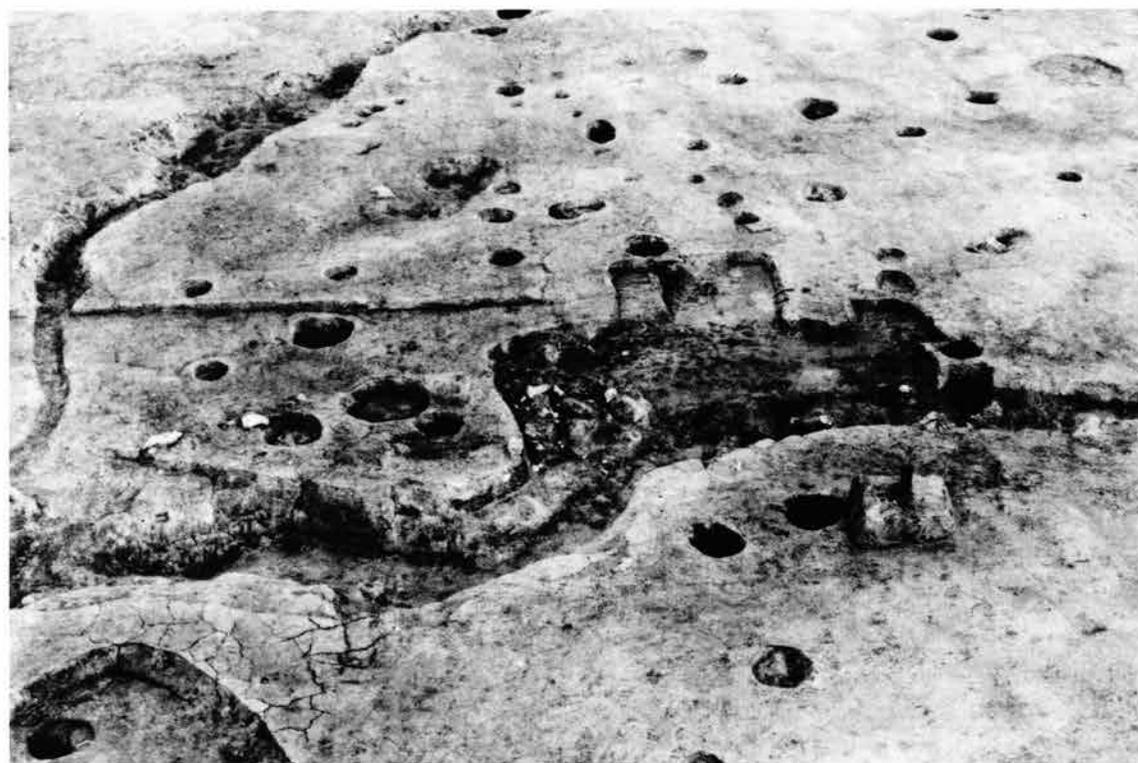
(1) SB0204竪穴式住居跡カマド跡付近 (南から)



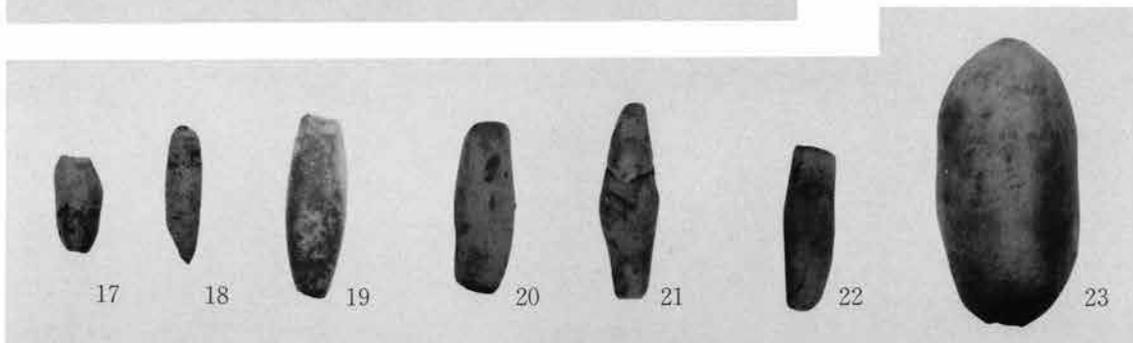
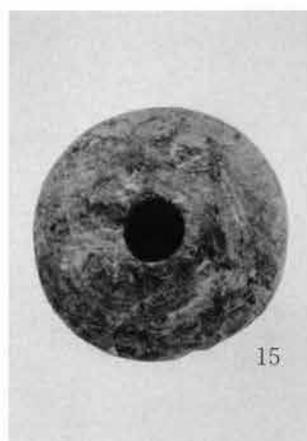
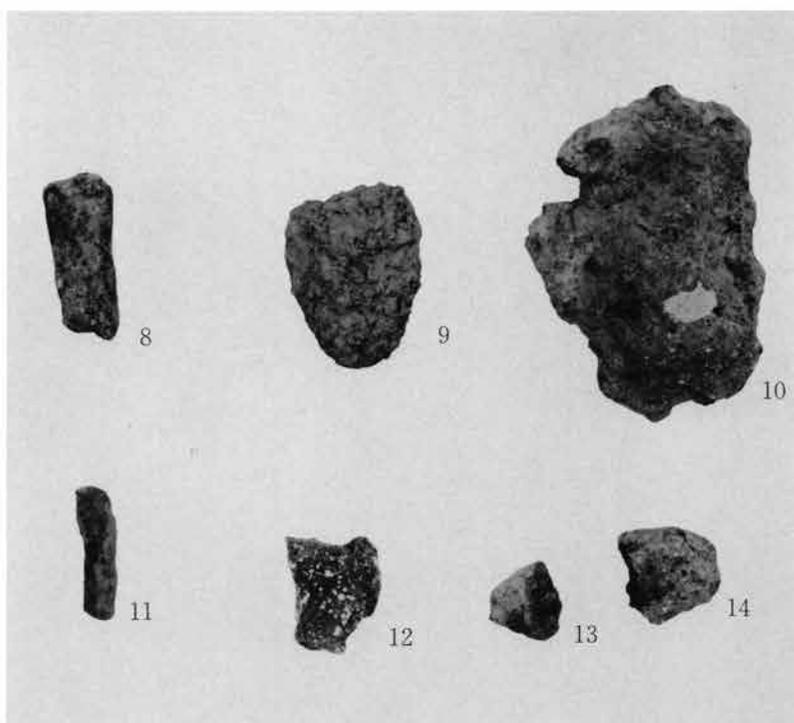
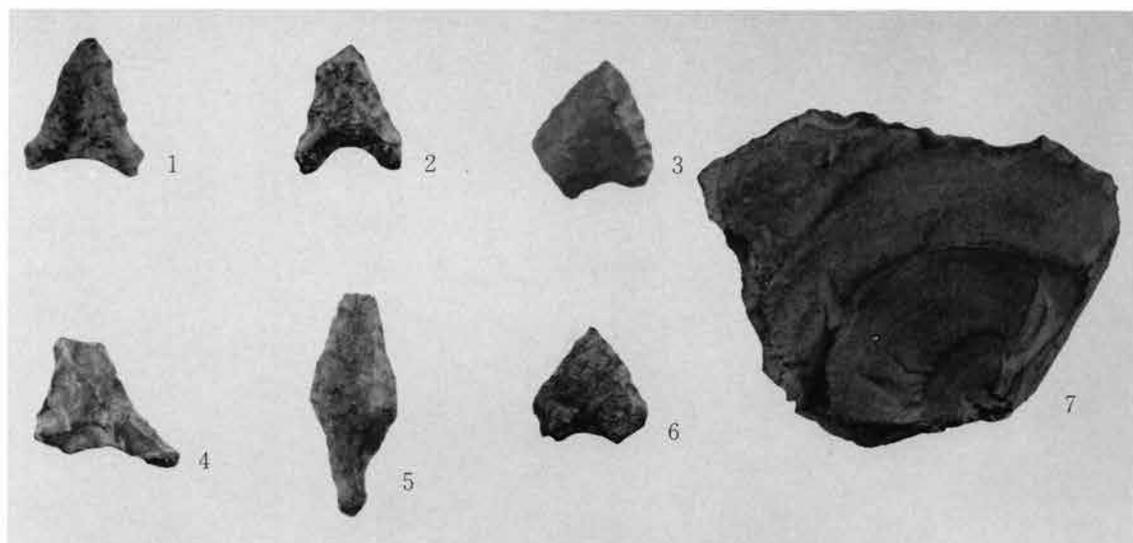
(2) SB0204竪穴式住居跡カマド跡 (西から)



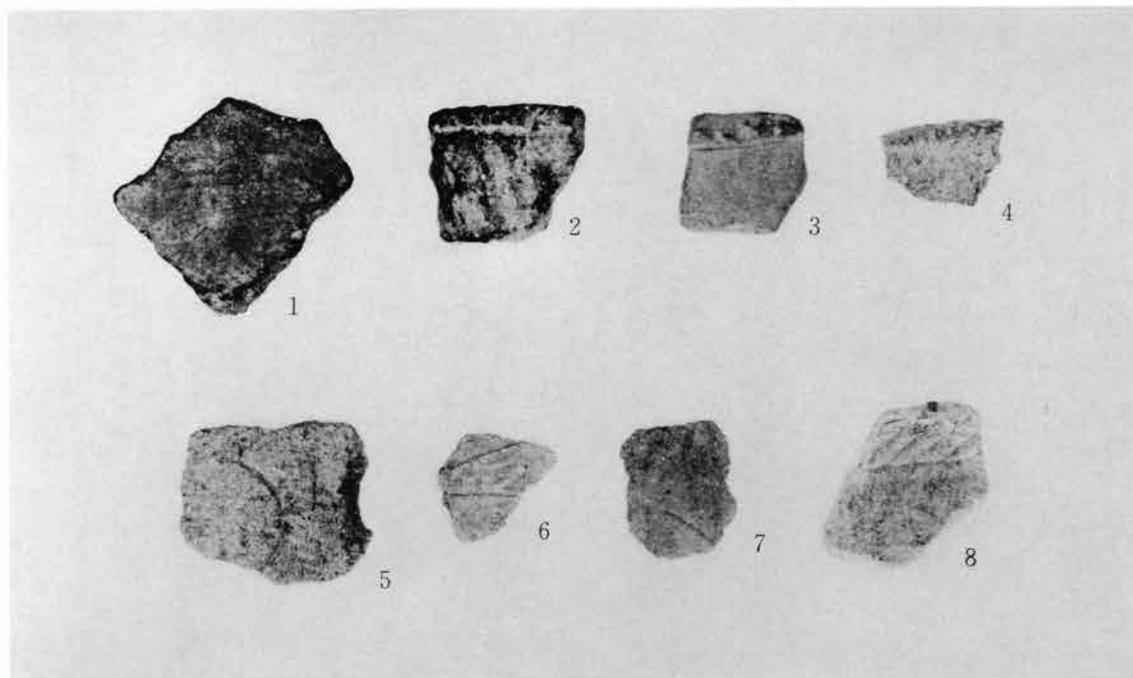
(1) SD0218溝状遺構 (南から)



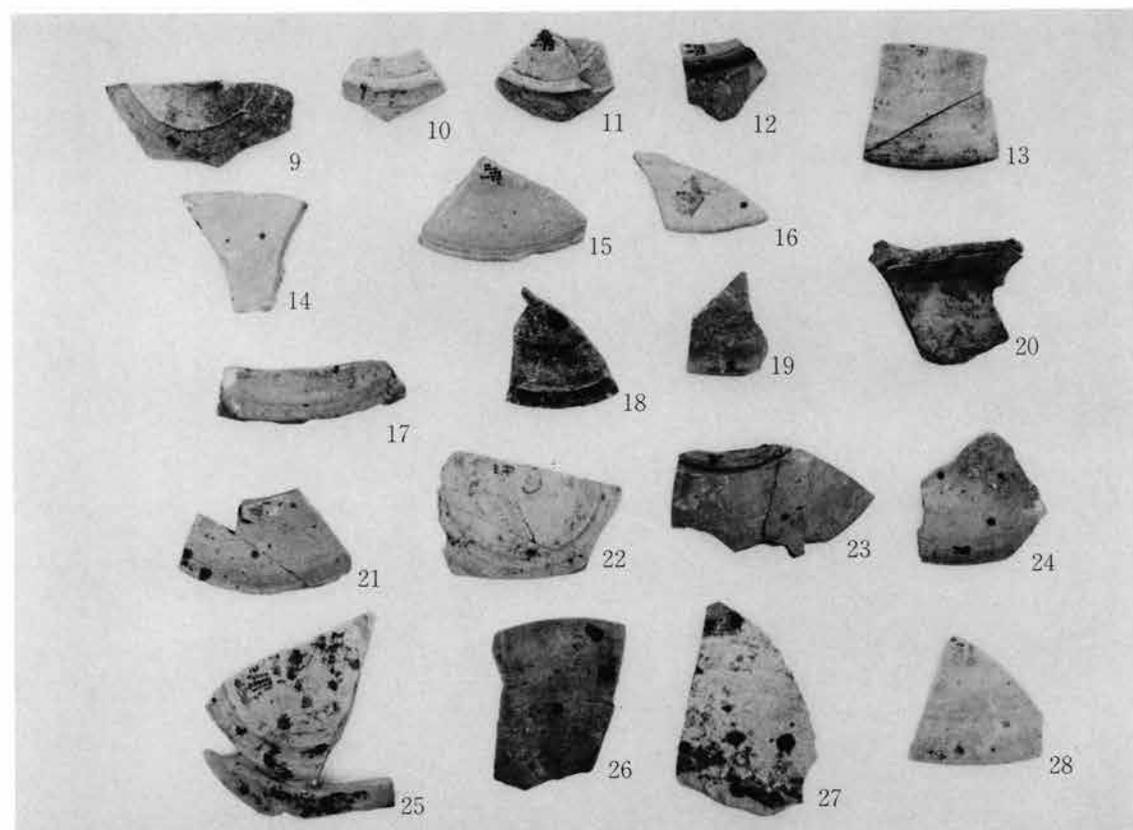
(2) SD0218溝状遺構 (北から)



千代川遺跡出土遺物(1) 石鏃(1~6), スクレイバー(7), 鉄器(8.11), 鉄滓(10・13・14)
鉄鉞石(9), ガラス(12), 紡錘車(15), ガラス製管玉(16), 土鐘(17~23)



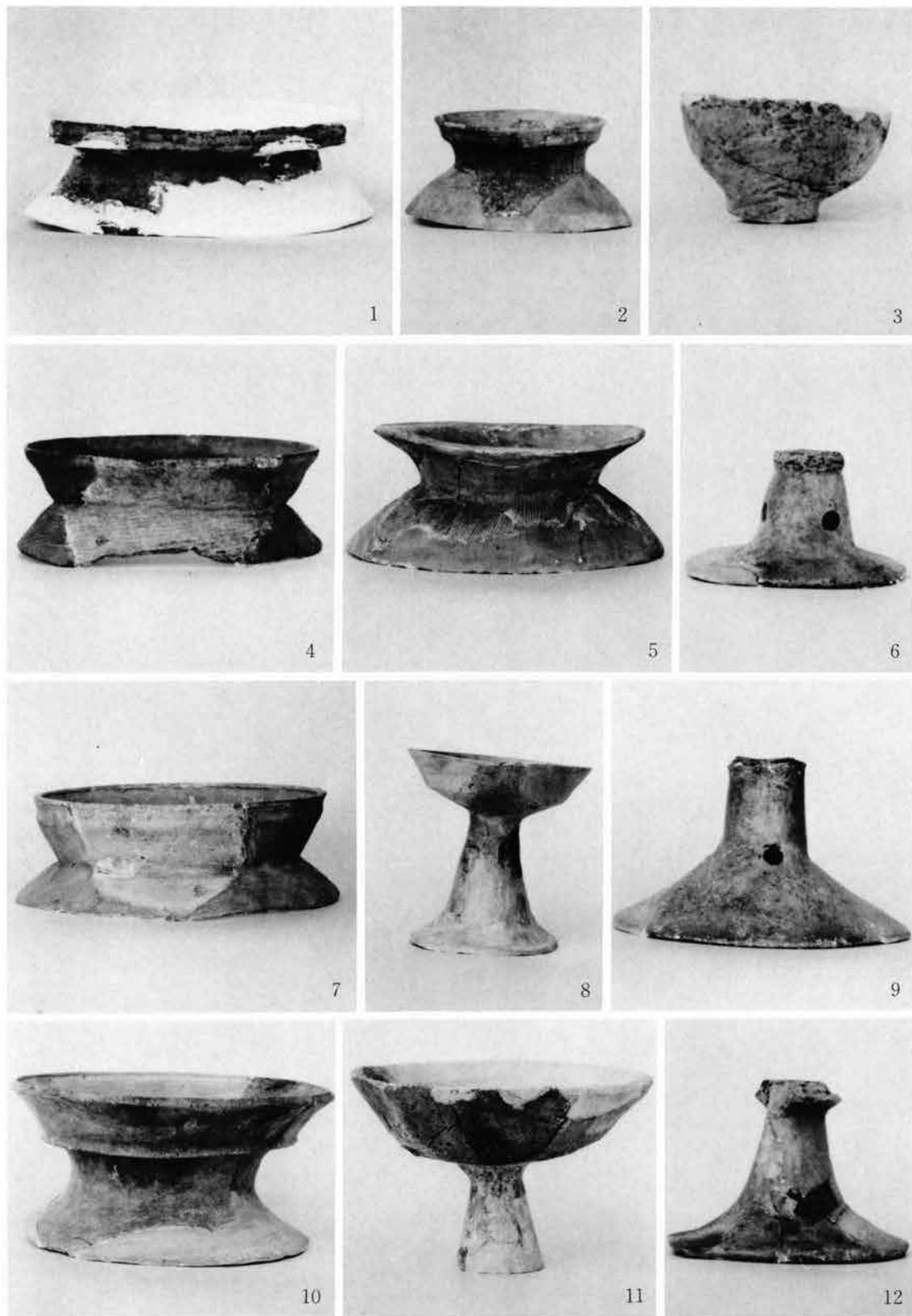
(1) 千代川遺跡出土遺物(2) (縄文式土器・弥生式土器)



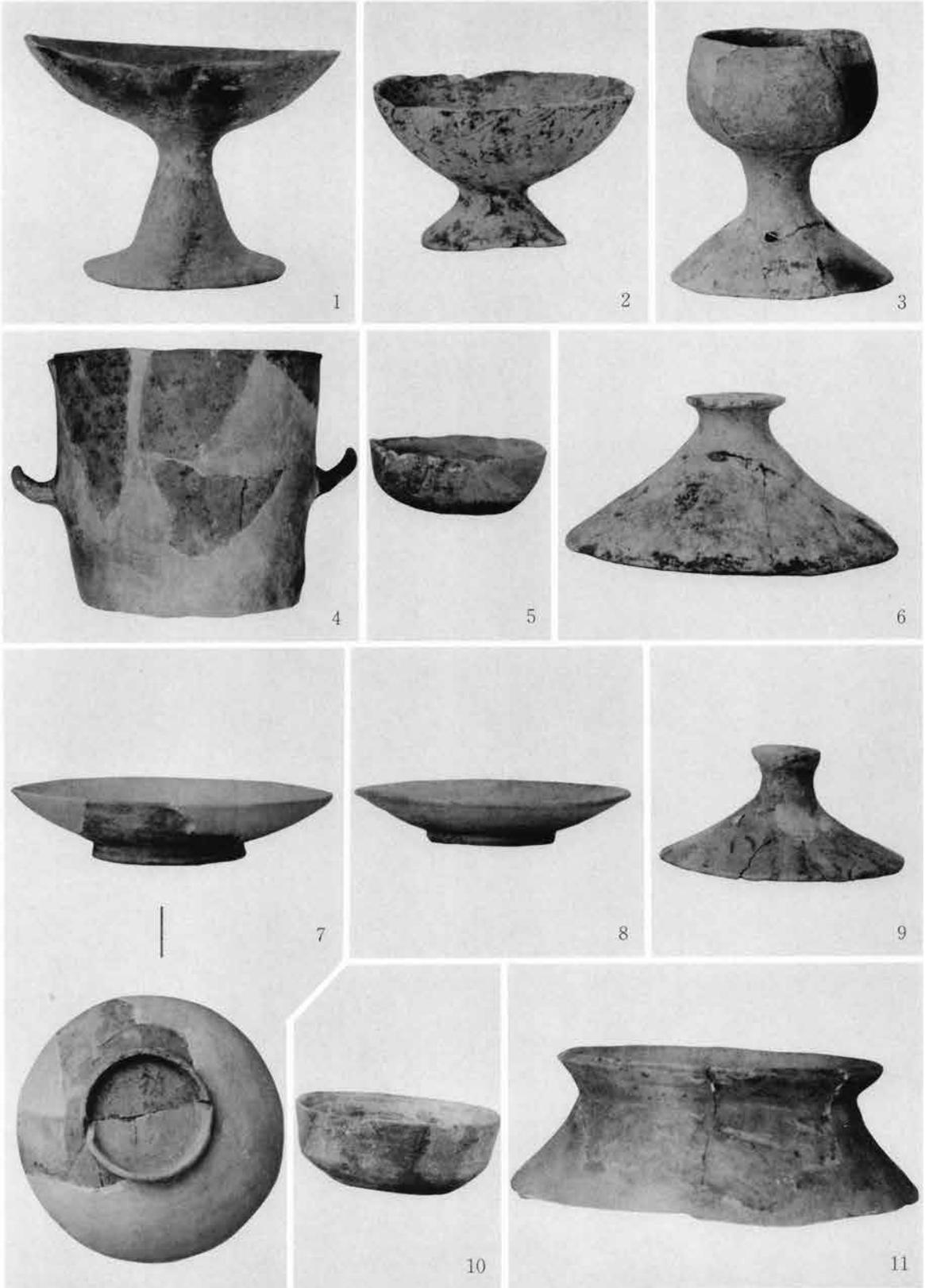
(2) 千代川遺跡出土遺物(3) (須恵器)



千代川遺跡出土遺物(4)



千代川遺跡出土遺物(5)



千代川遺跡出土遺物(6)



(1) 南金岐遺跡付近航空写真(南東から)



(2) 南金岐遺跡発掘区域航空写真



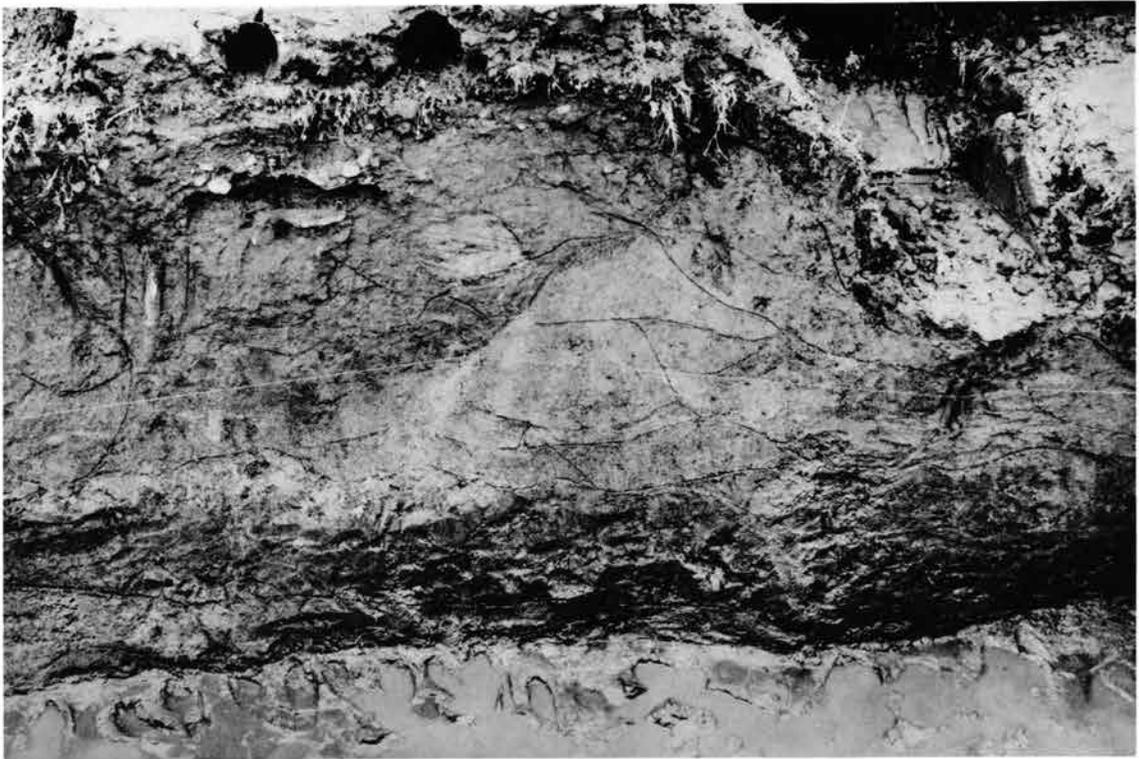
(1) 亀岡盆地条里制航空写真



(2) 南金岐遺跡全景 (北西から)



(1) 4トレンチ西壁断面



(2) 5トレンチ西壁断面



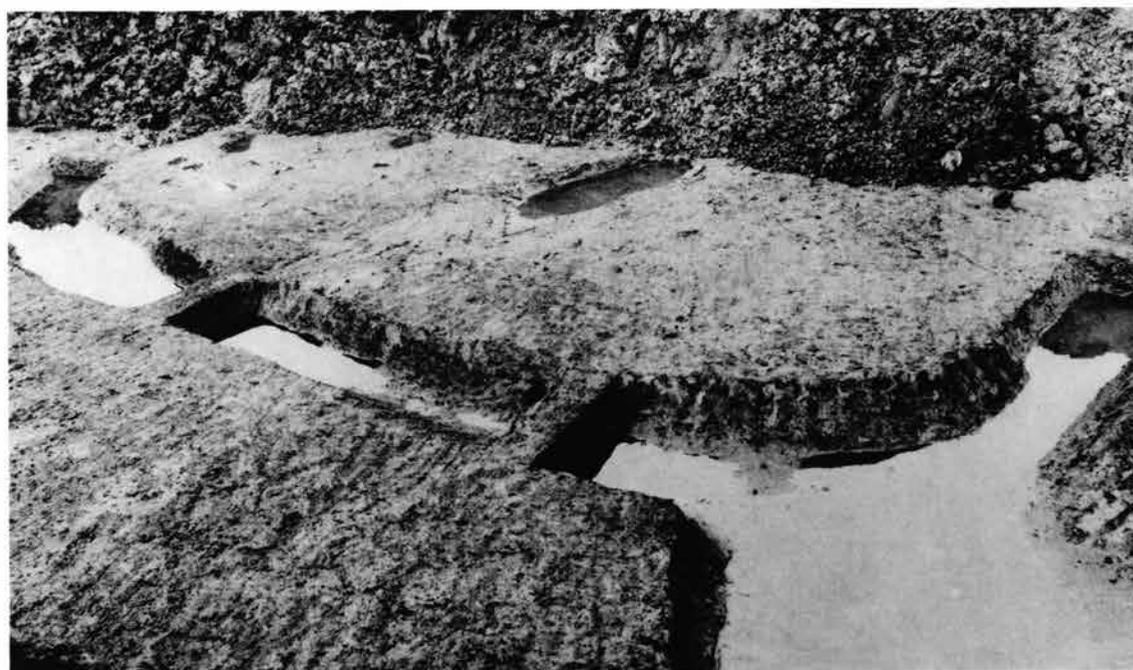
(1) 南金岐遺跡調査地全景



(2) 方形周溝墓3号北側溝(南から)



(1) 方形周溝墓3号 (南から)



(2) 方形周溝墓3号 (東から)



(1) 方形周溝墓1号 (北西から)



(2) 方形周溝墓全景 (北から)



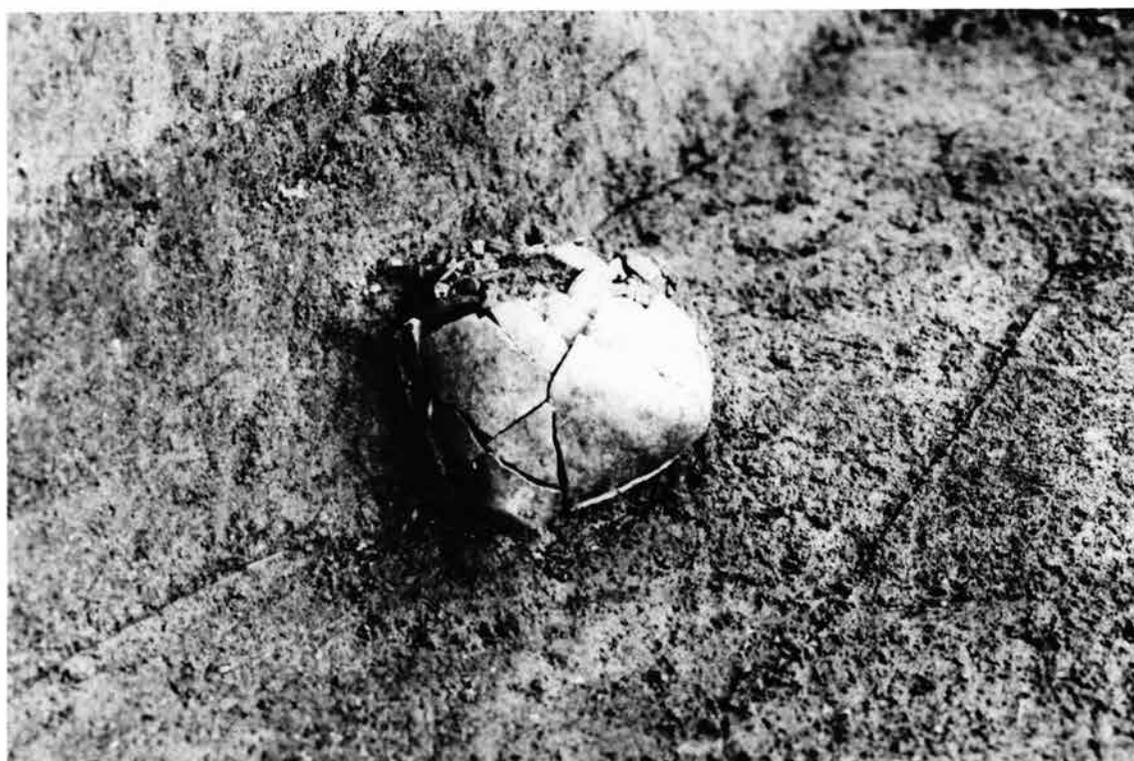
(1) SD0102・0103・0104溝 (南から)



(2) SD0103・0104溝 (北から)



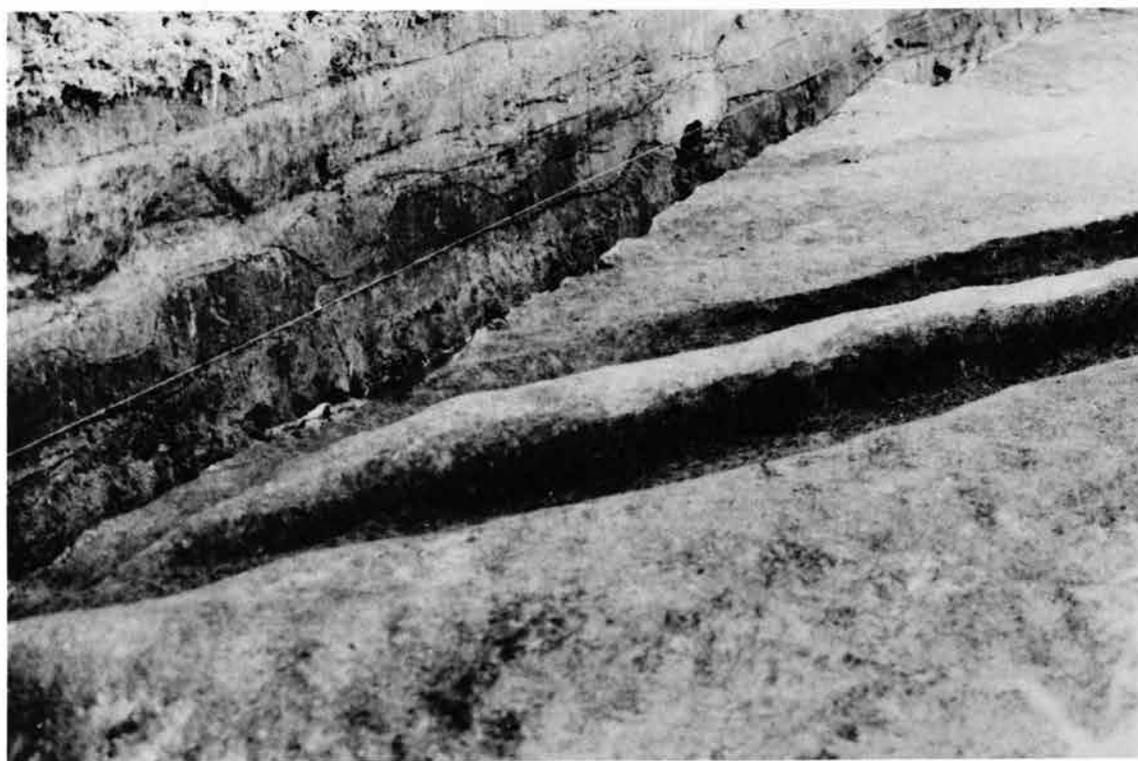
(1) SD0104溝南肩土器出土状況



(2) A地区土器出土状況



(1) SD0110溝 (南から)



(2) SD0110溝 (東から)



(1) SD0104溝 (南から)



(2) SD0103溝 (北西から)



(1) SD0104溝 (北から)



(2) SD0103溝 (北西から)



(1) SD0104溝(南から)



(2) SD0104溝北壁断面(南から)



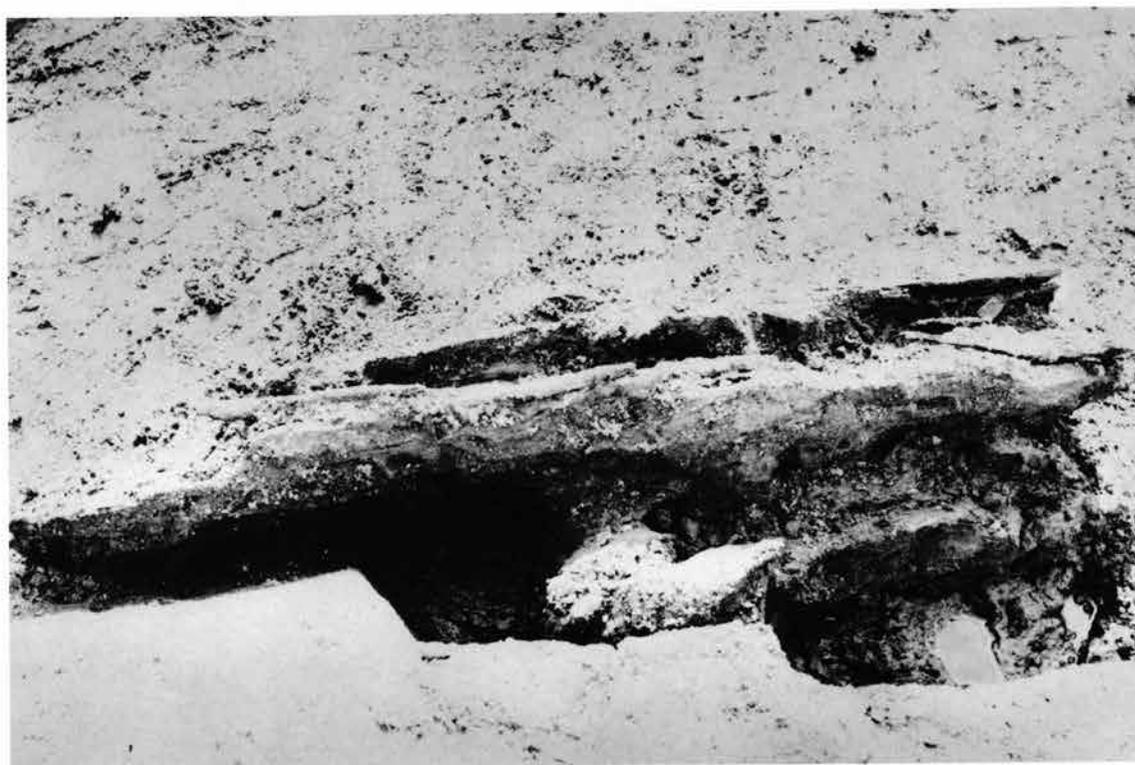
(1) SD0103溝 (東から)



(2) SD0103溝内流木出土状況 (東から)



(1) SD0103溝 (東から)



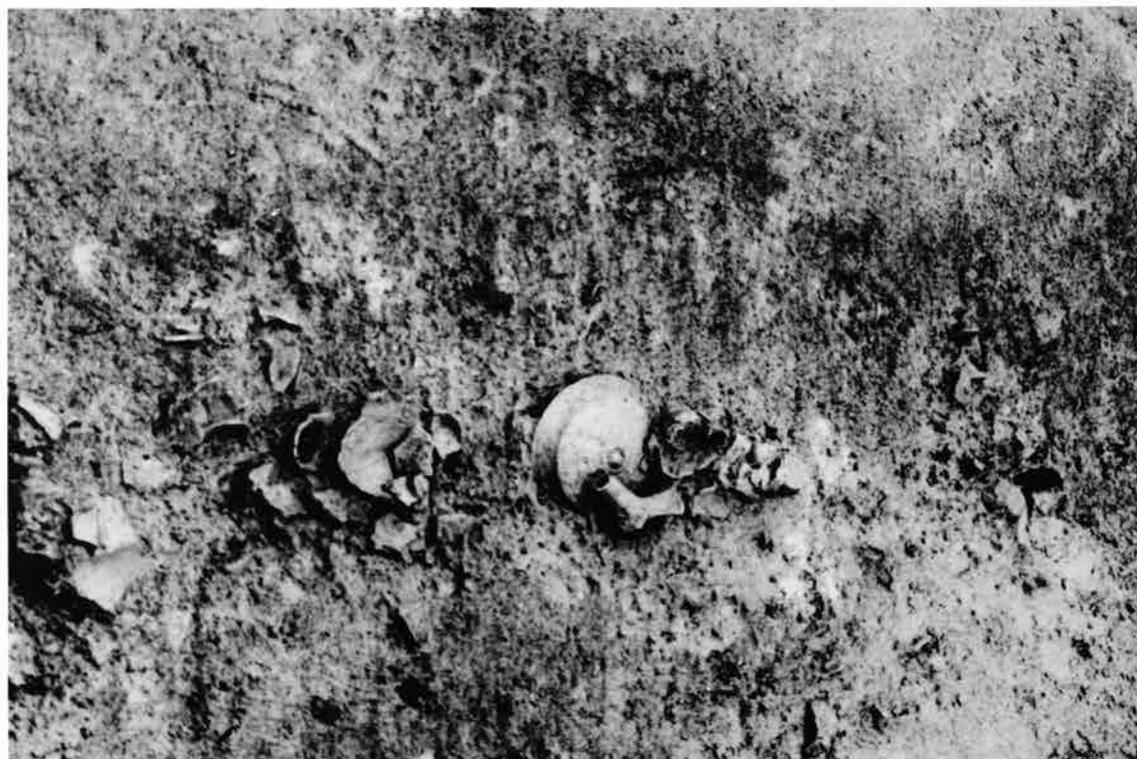
(2) SD0103溝内流木出土状況 (北から)



(1) SD0103溝内遺物出土状況



(2) SD0103溝内遺物出土状況



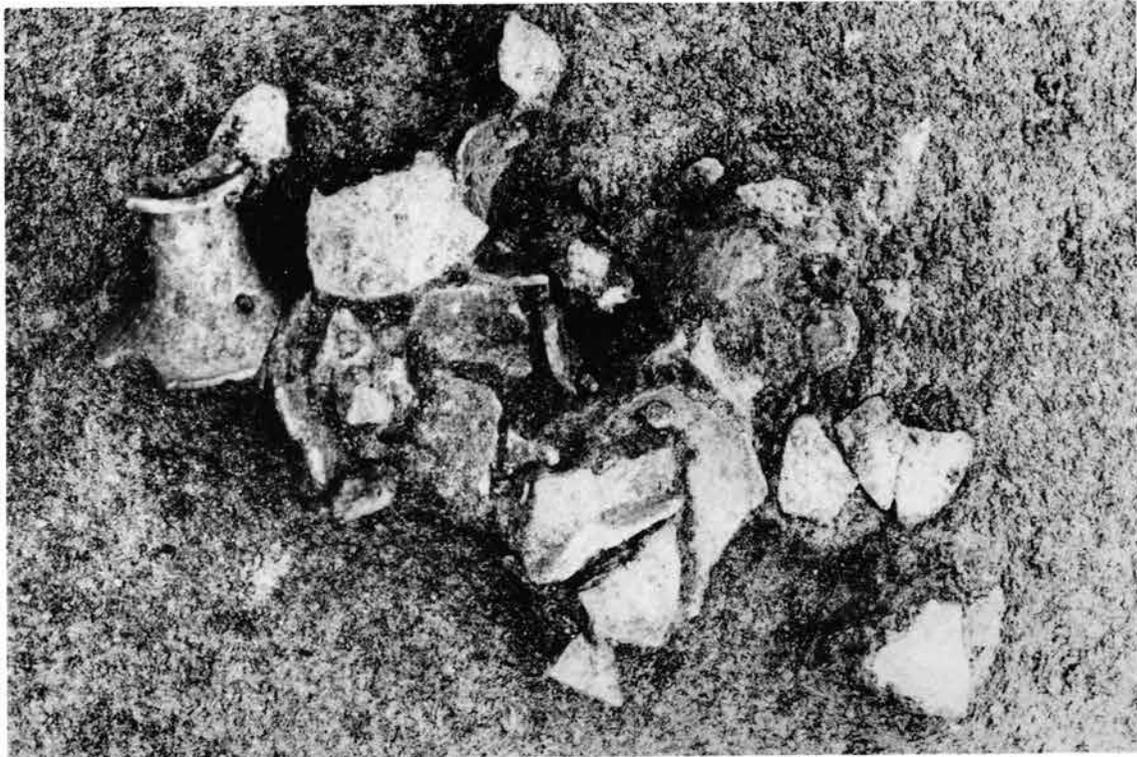
(1) SD0103溝内遺物出土状況



(2) SD0103溝内遺物出土状況



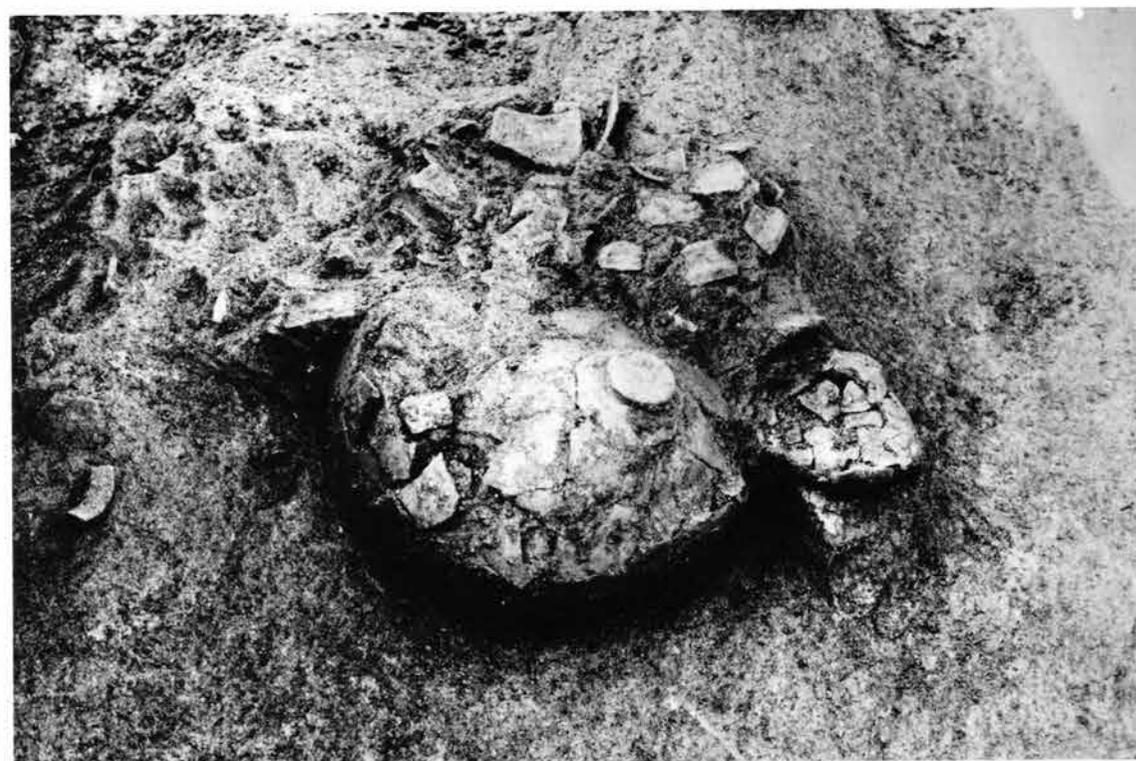
(1) SD0103溝北肩遺物出土状況



(2) SD0103溝北肩遺物出土状況



(1) SD0103溝北肩遺物出土状況



(2) SD0103溝東肩遺物出土状況



(1) SD0103溝北肩遺物出土状況



(2) SD0103溝北肩遺物出土状況



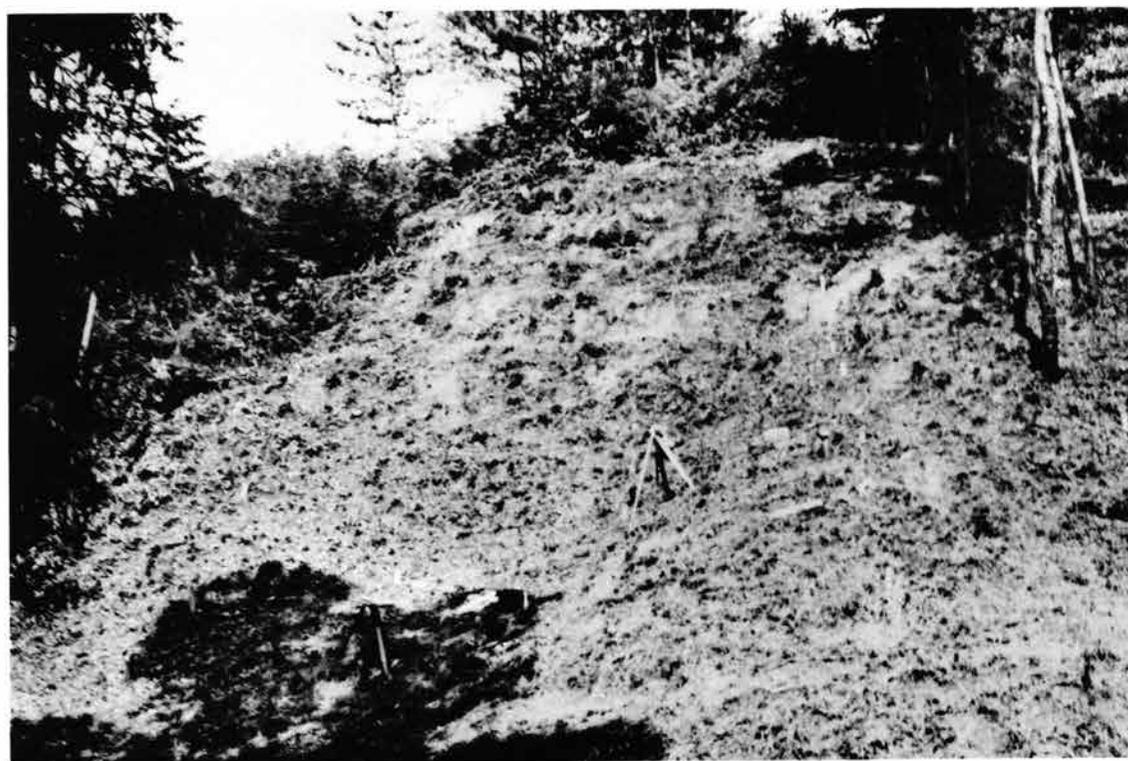
(1) 西長尾窯跡全景 (北西から)



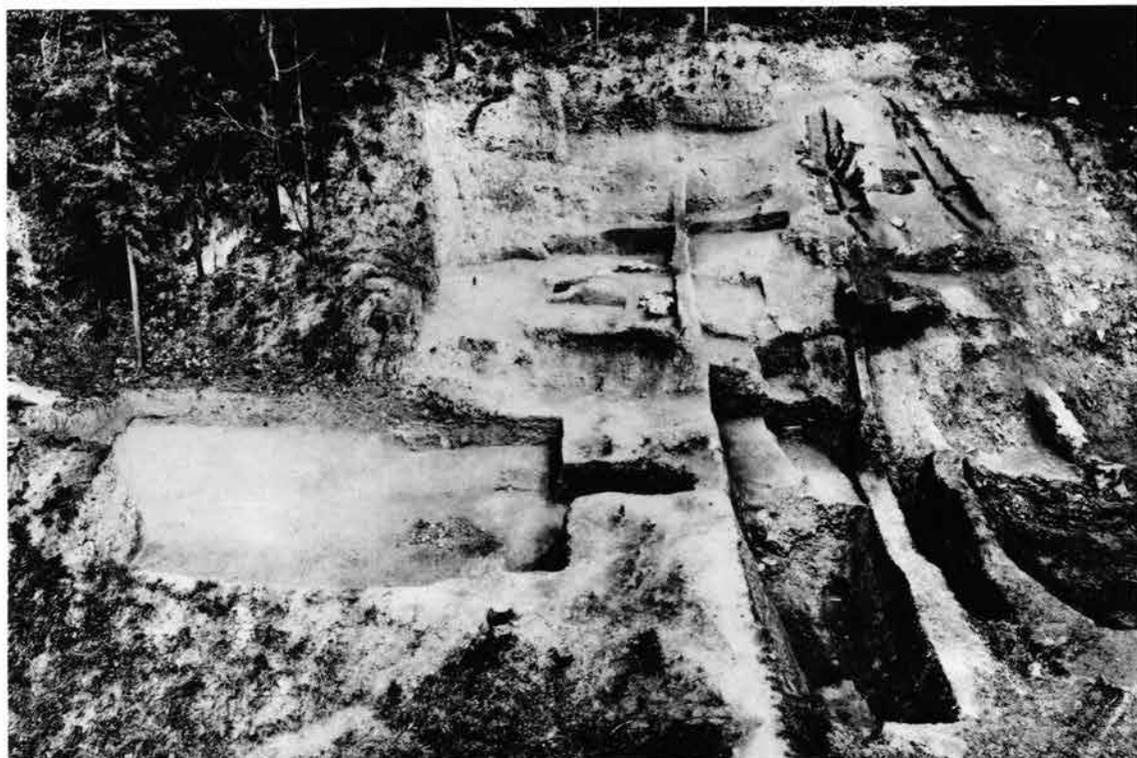
(2) 西長尾窯跡全景 (北西から)



(1) 西長尾1・4号窯調査前全景(北西から)



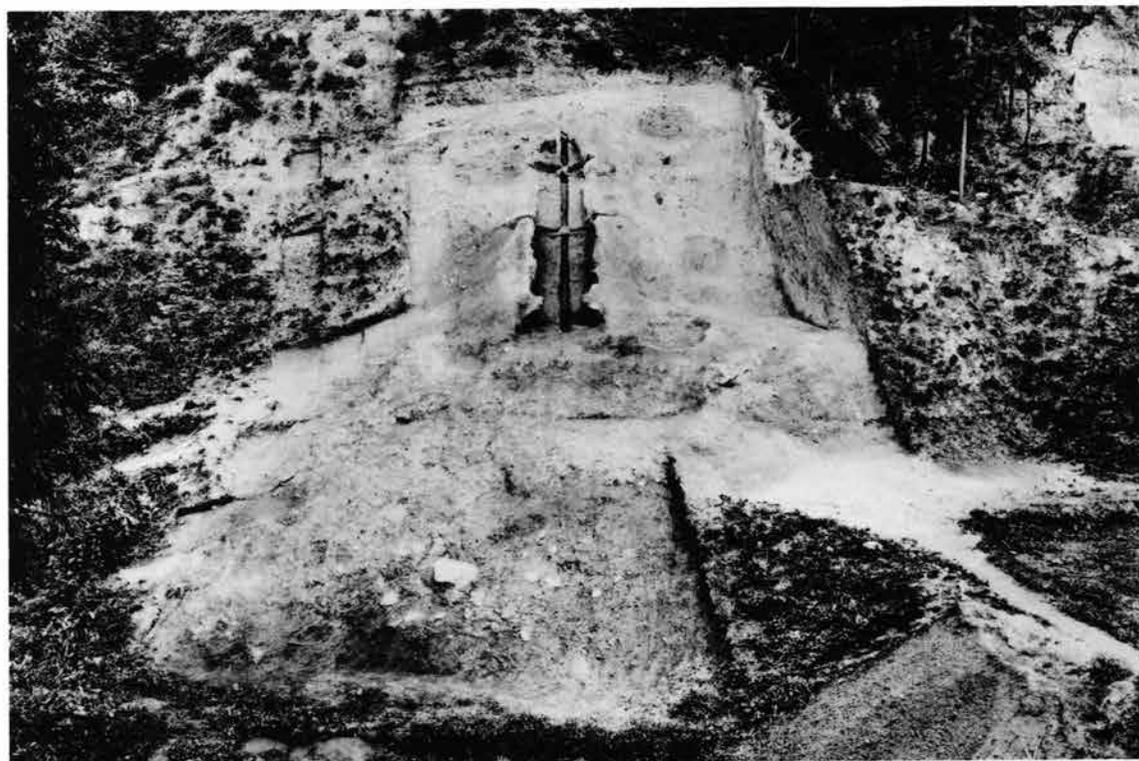
(2) 西長尾3号窯調査前全景(南西から)



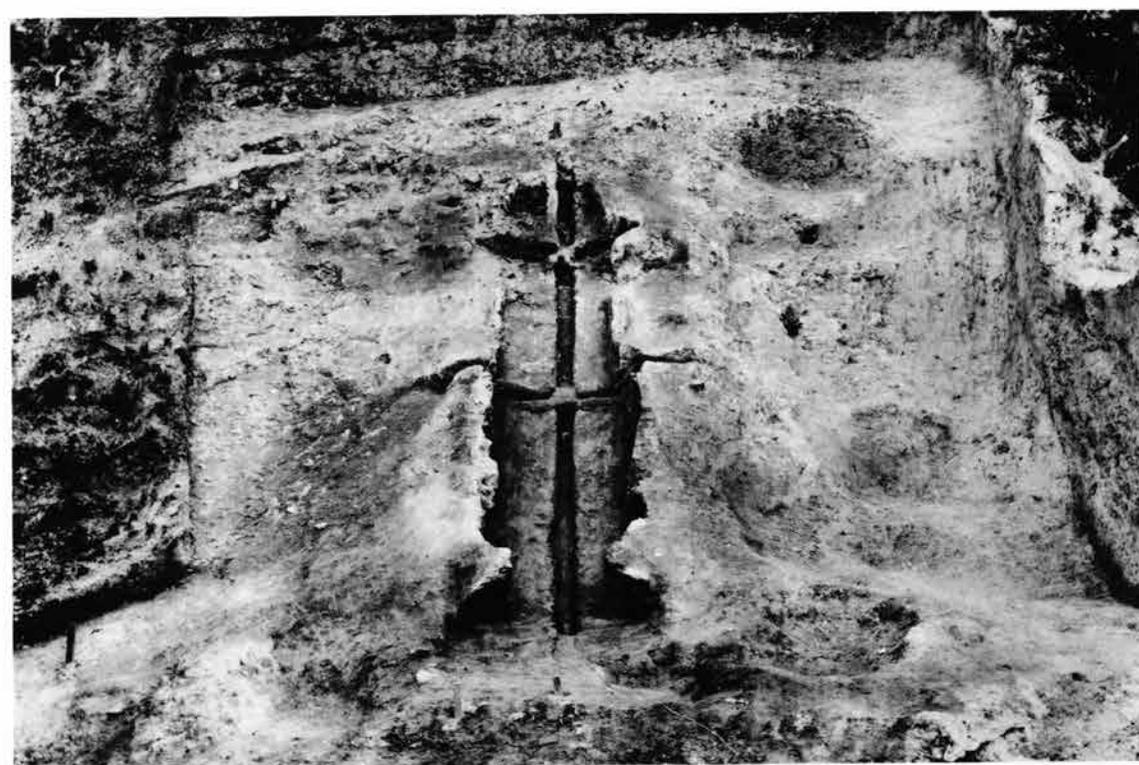
(1) 西長尾1・2・4号窯完掘状態(西から)



(2) 西長尾1・4号窯完掘状態(西から)



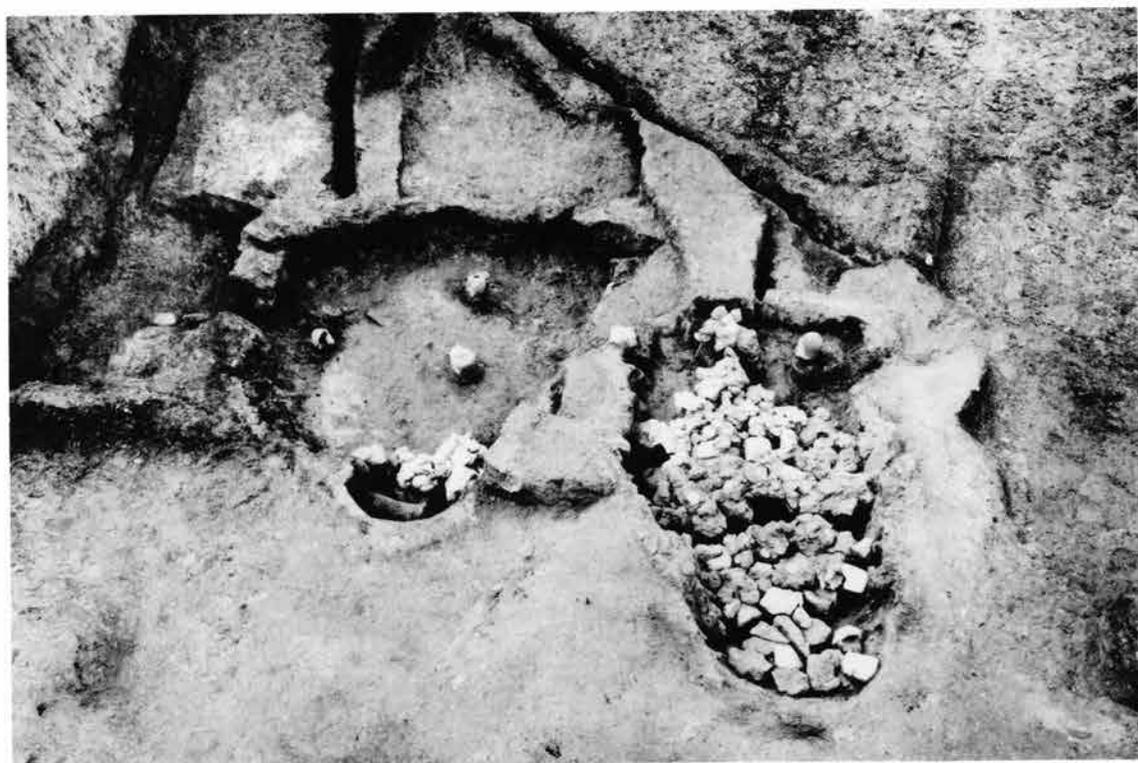
(1) 西長尾3号窯完掘状態（西から）



(2) 西長尾3号窯完掘状態（西から）



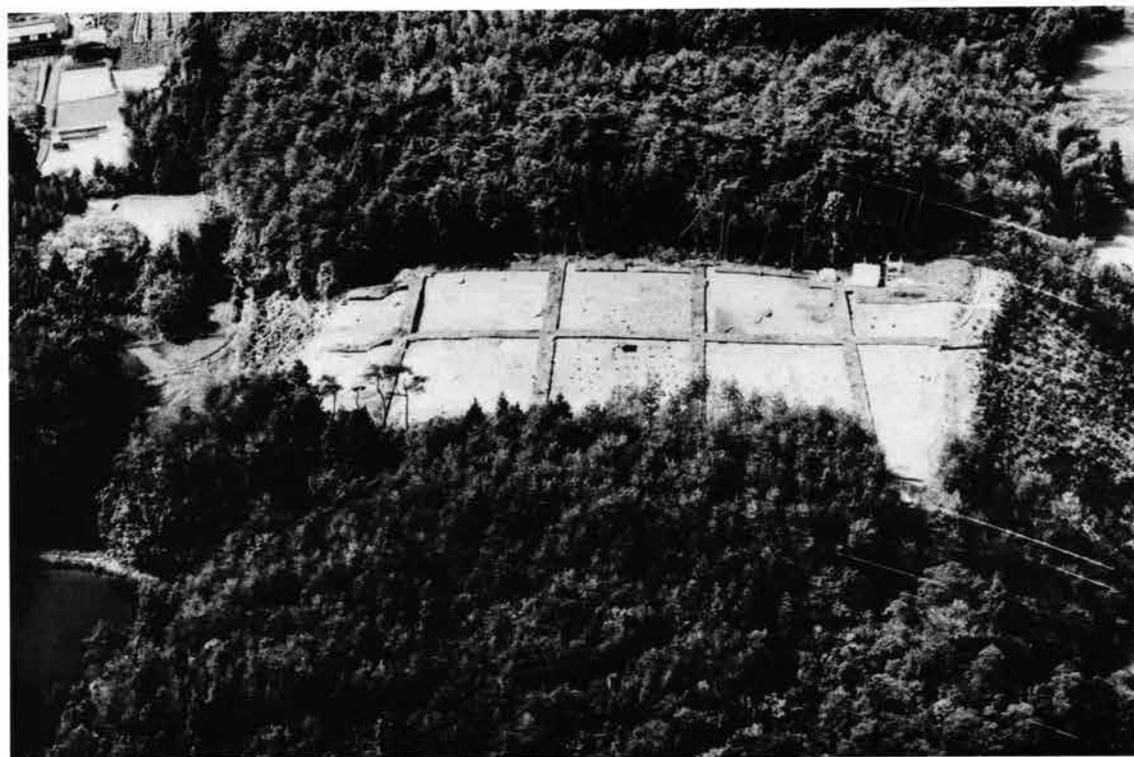
(1) 西長尾5・6号窯完掘状態（西から）



(2) 西長尾5・6号窯完掘状態（東から）



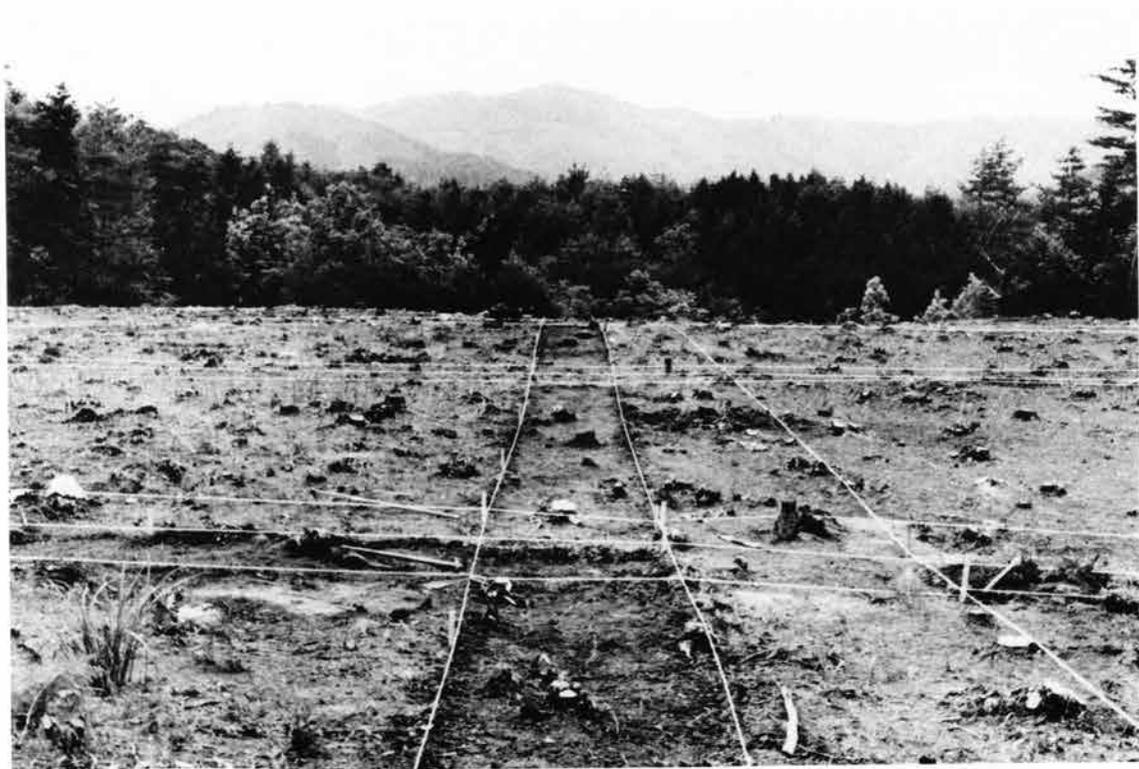
(1) 大内集落と調査地（北西から）



(2) 調査地全景（東から）



(1) 調査地北斜面（北から）



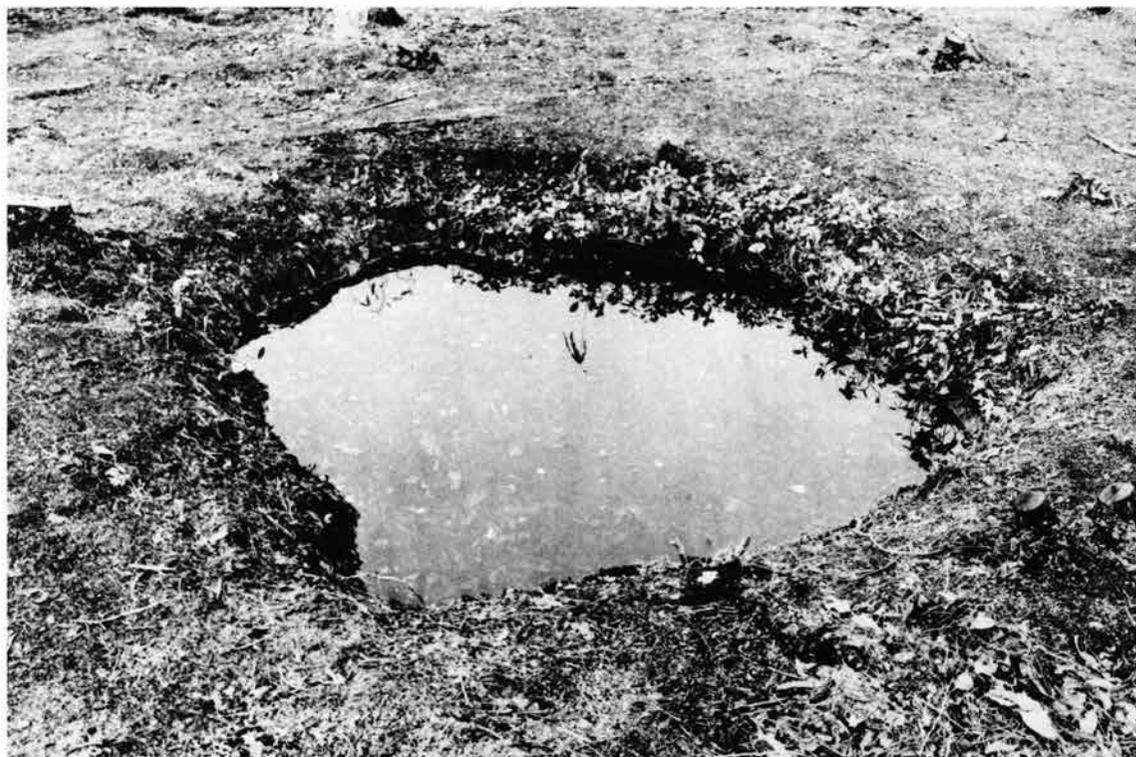
(2) トレンチ設定状態（北から）



(1) 帯ぐるわ発掘前（東から）



(2) 帯ぐるわ発掘後（東から）



(1) 井戸1発掘前(北から)



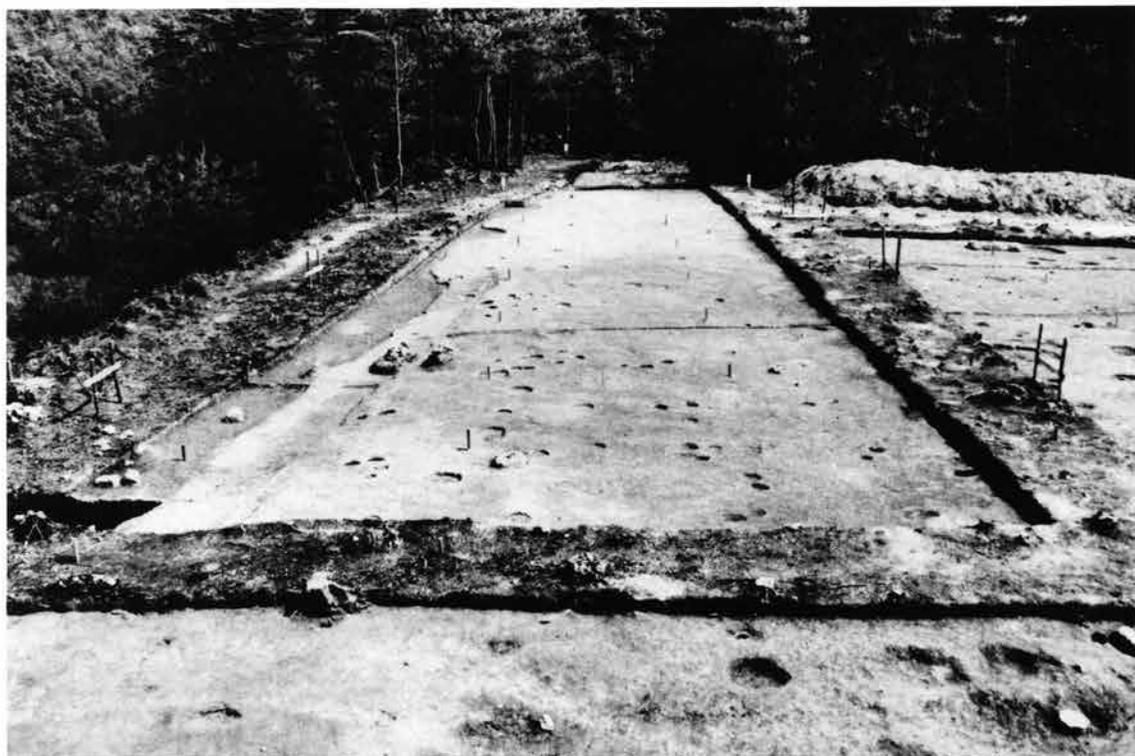
(2) 井戸1発掘後(南から)



(1) 調査地北部発掘状態 (東南から)



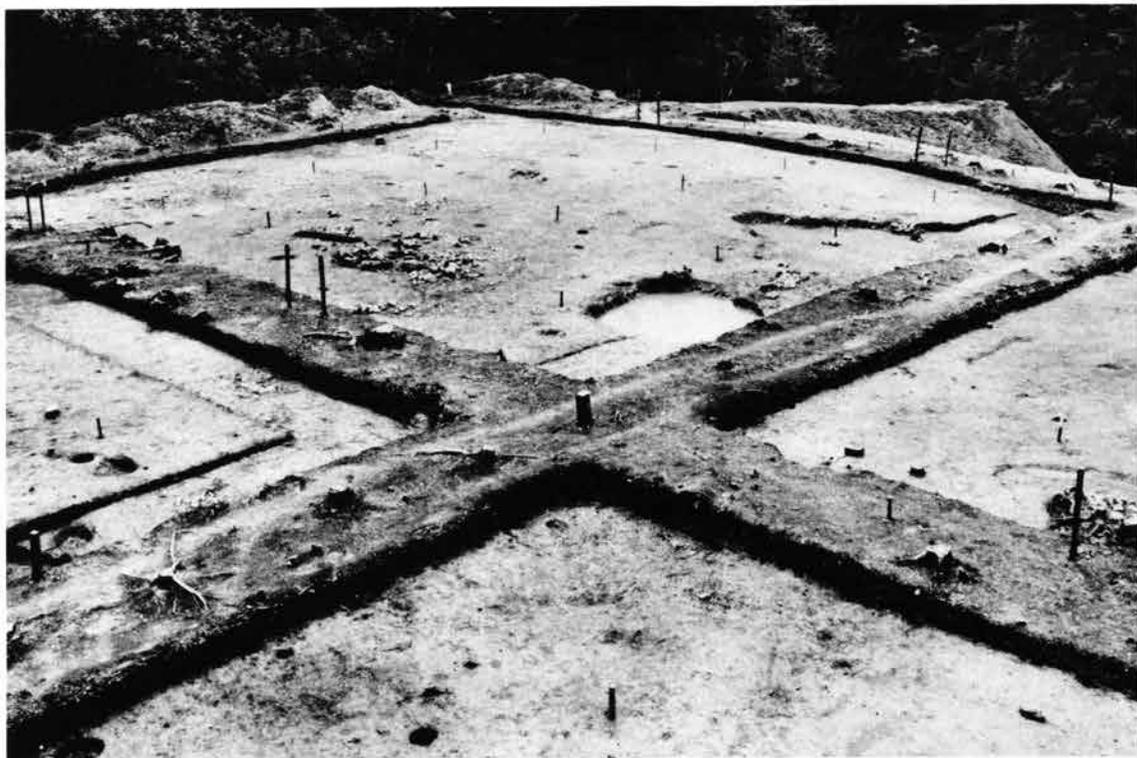
(2) 土塁・空堀断面 (西南から)



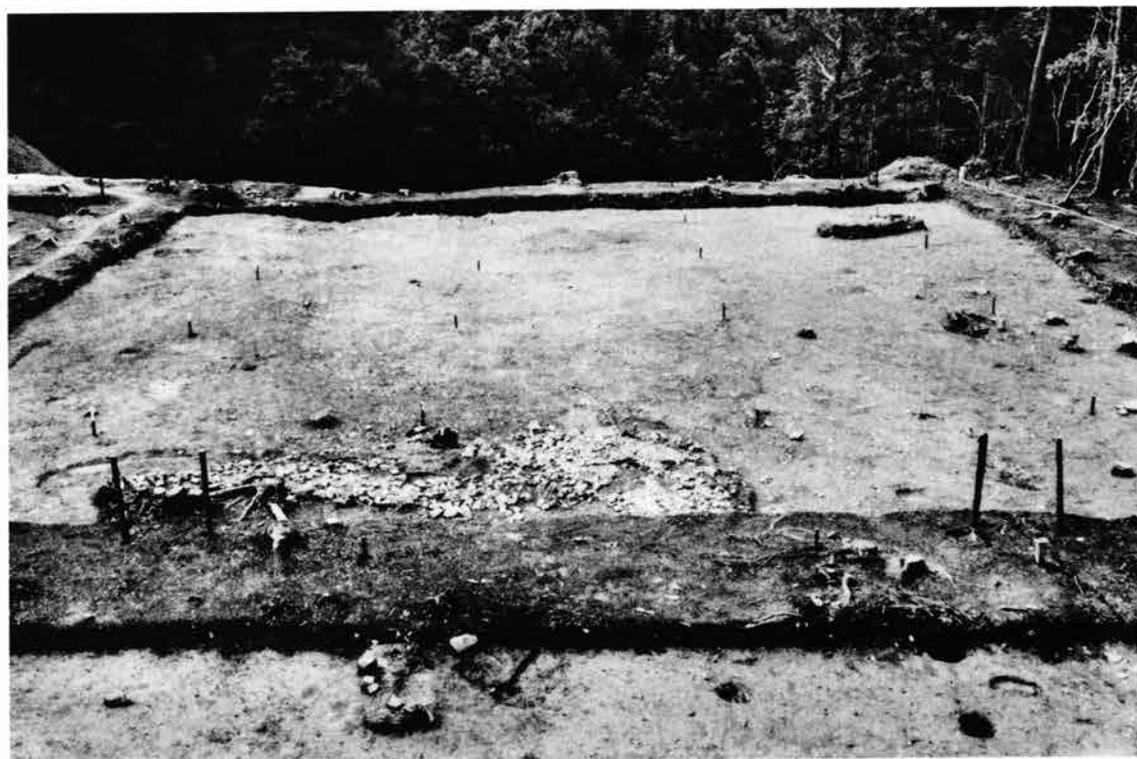
(1) 建物6 検出状態 (西から)



(2) 建物3・溝1 検出状態 (北から)



(1) 井戸1・集石遺構検出状態(北西から)



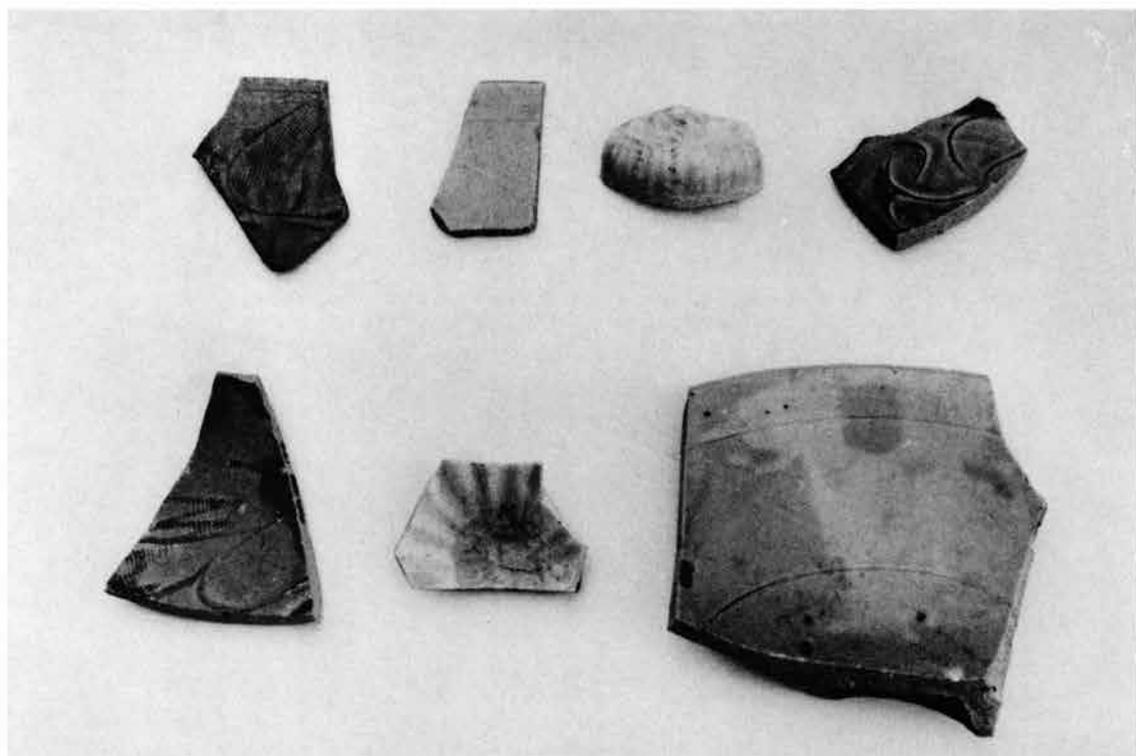
(2) 集石遺構検出状態(北から)



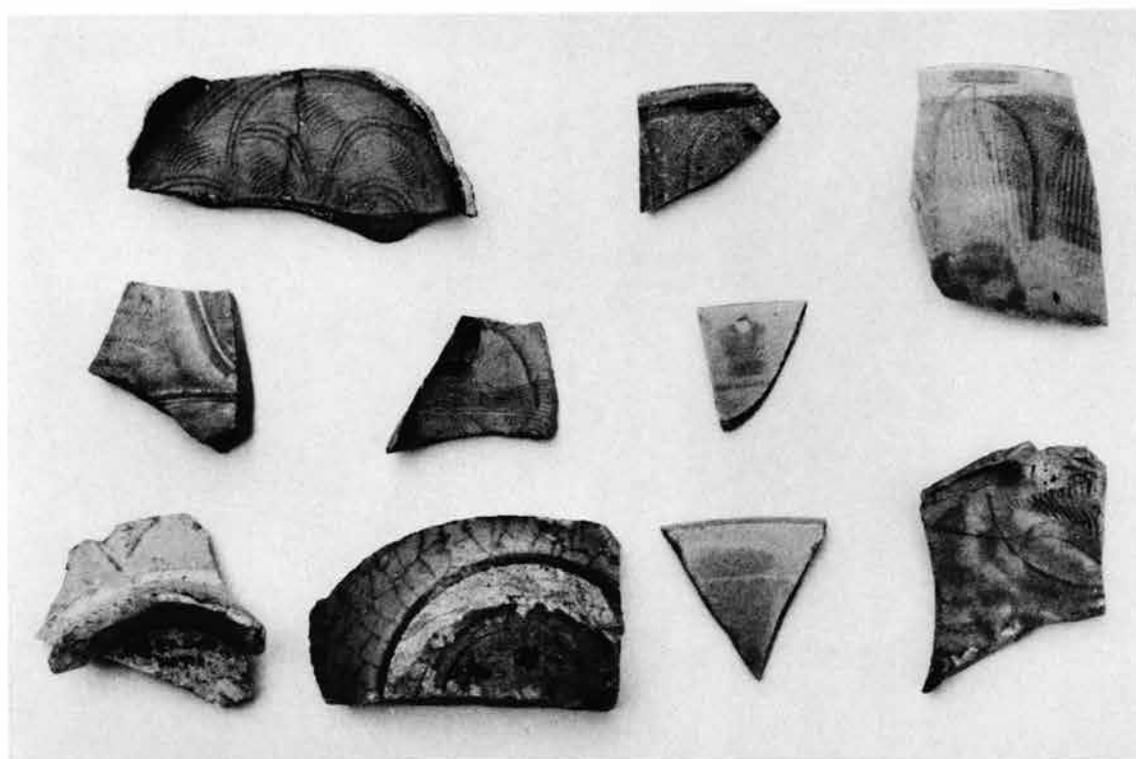
(1) 土壇 I 土器出土状態 (東から)



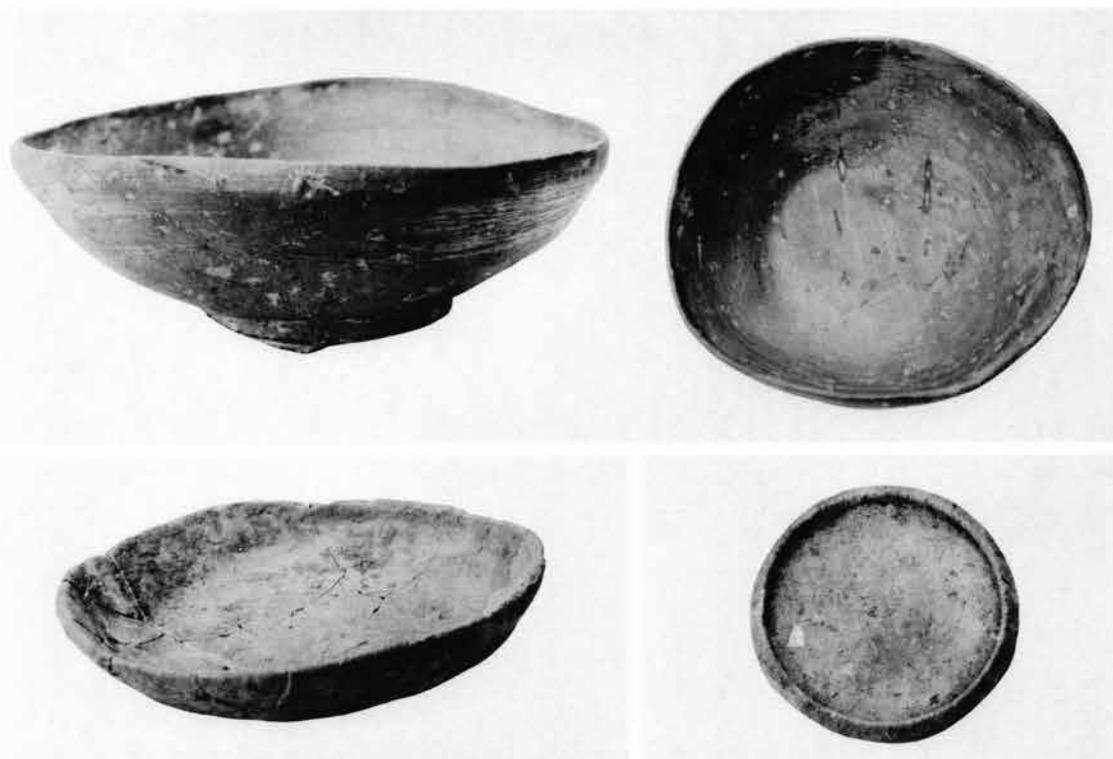
(2) 土壇 I 土器出土状態 (西から)



(1) 輸入陶磁器 (第2期整地層内)



(2) 輸入陶磁器 (第2期整地層内)



(1) 瓦器碗, 土師器大皿・小皿



(2) 古瀬戸鉄釉瓶子片



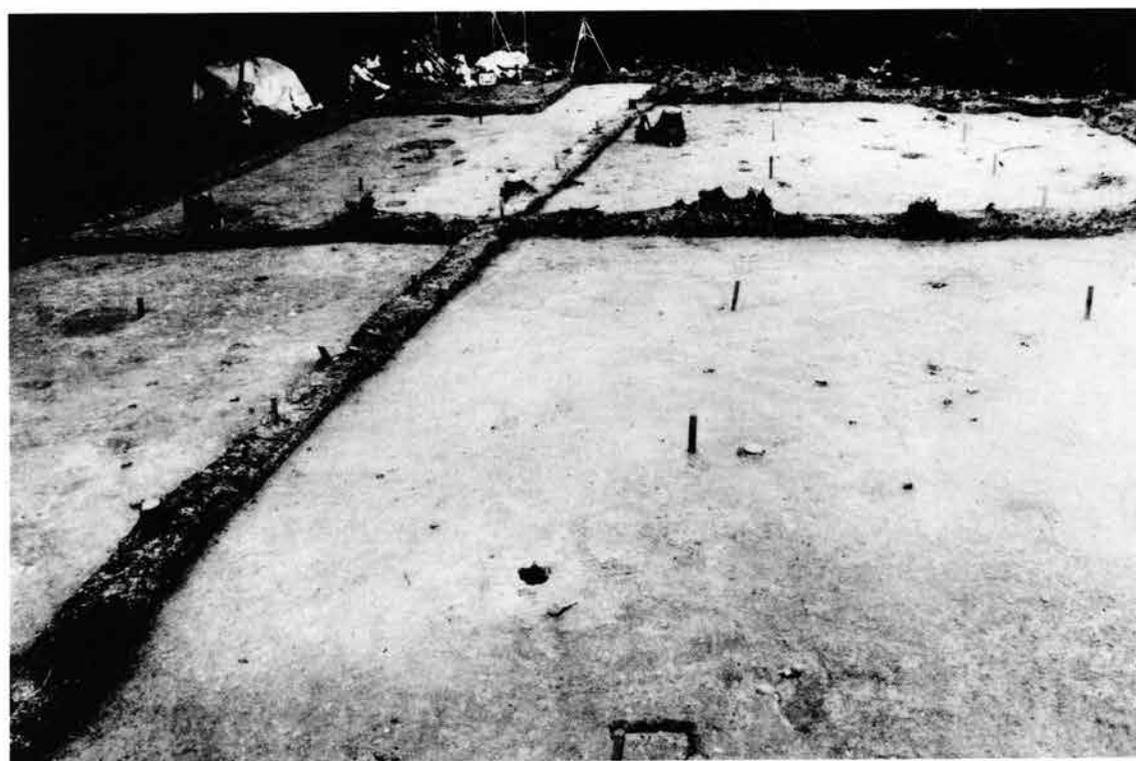
(1) 調査地近景と南辺の土塁 (南から)



(2) 西地区調査前状況 (北から)



(1) 西地区調査地全景（北から）



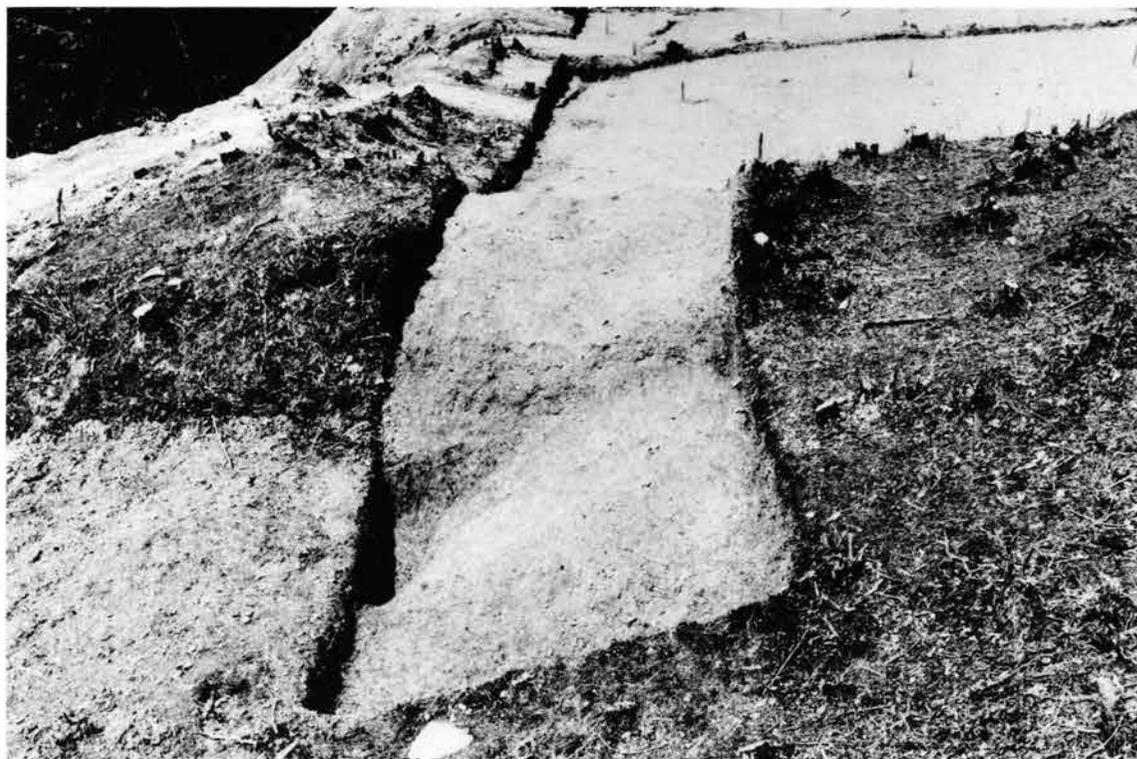
(2) 西地区調査地全景（南から）



(1) 南辺土塁調査状況
(東から)



(2) 南辺土塁調査状況
(南から)



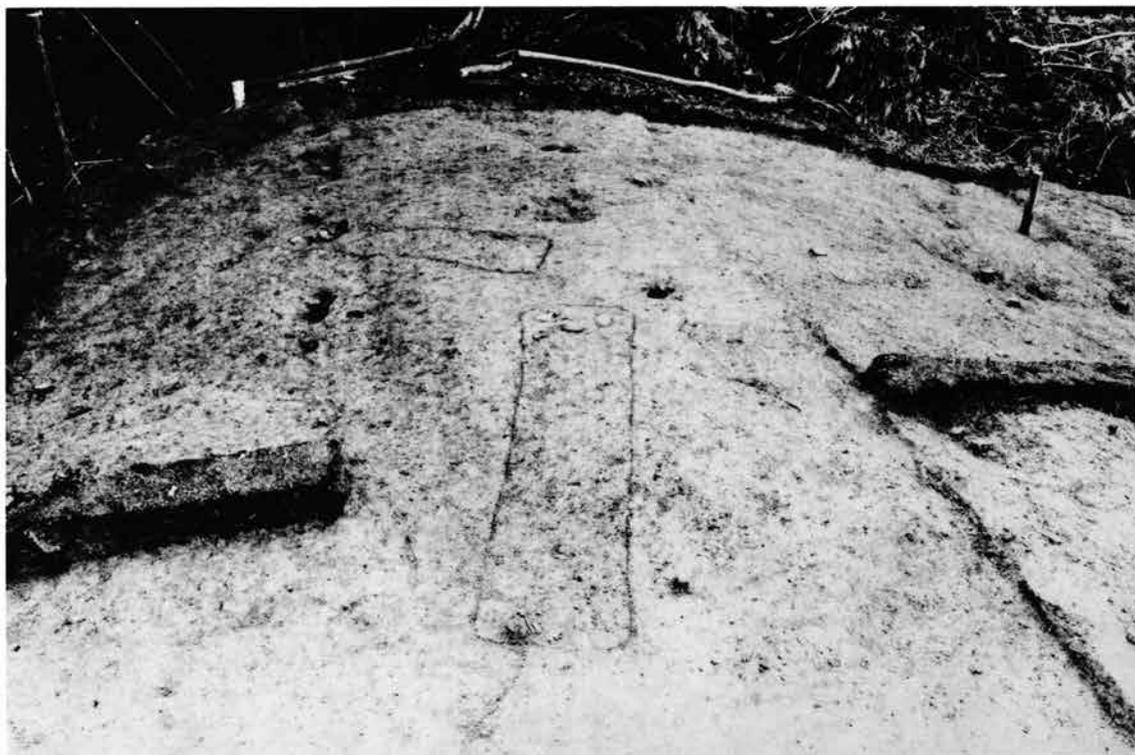
(1) 東辺土塁調査状況（東から）



(2) 東辺土塁断面



(1) 調査地全景 (西から)



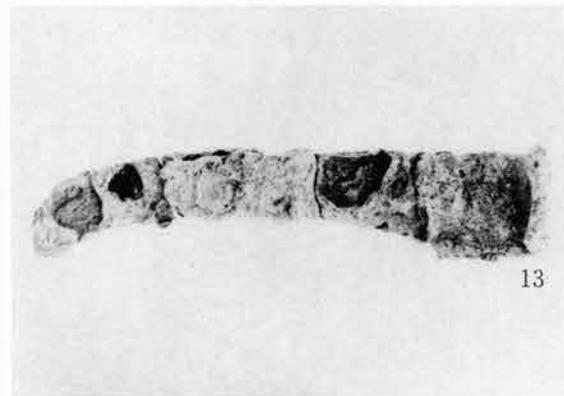
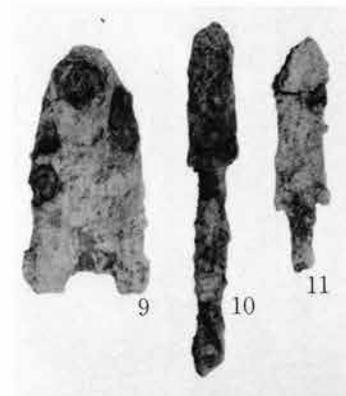
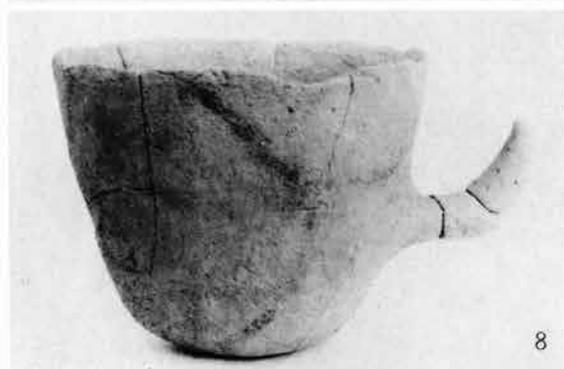
(2) 主体部上面検出状況 (西から)



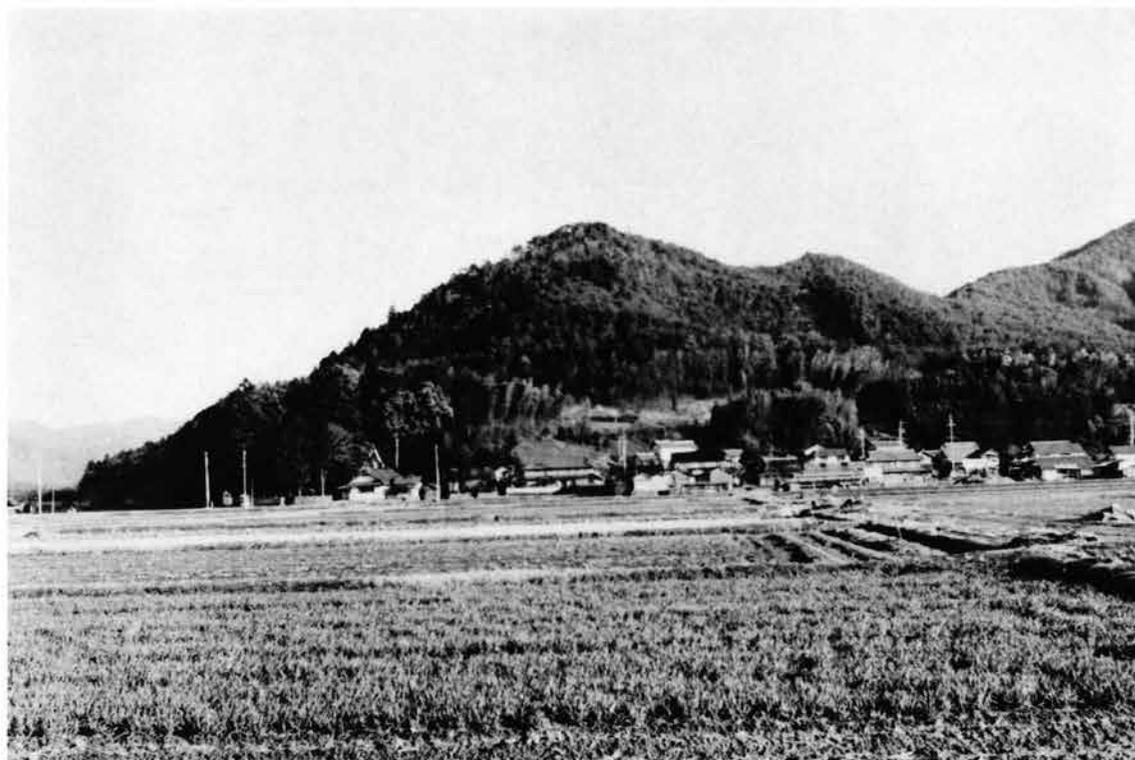
(2) 第1主体部（東から）



(1) 主体部検出状況（西から）



出土遺物（8を除く他、第1主体部出土）



(1) 調査地遠景 (北西から)



(2) 調査地近景 (北から)



(1) B地点調査状況（東から）



(2) C地点調査状況（南東から）



(1) D地点調査状況
(南から)



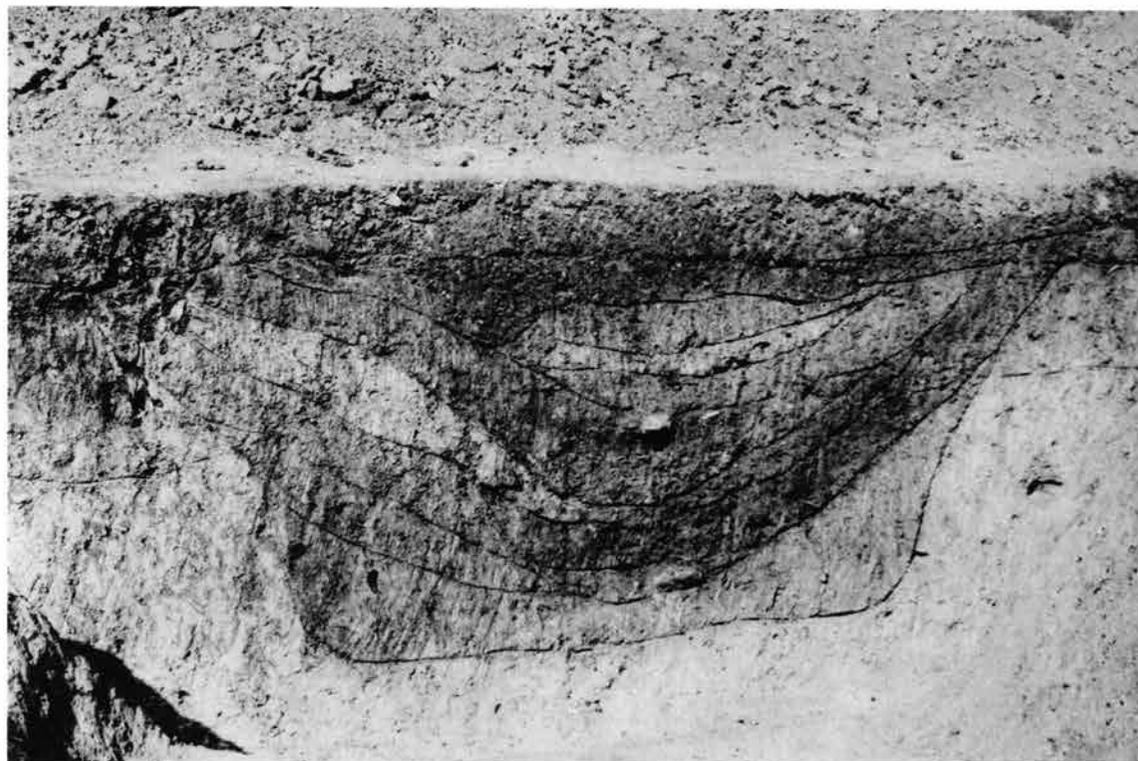
(2) D地点南側遺構検出状況
(北西から)



(1) 1号住居跡 (南から)



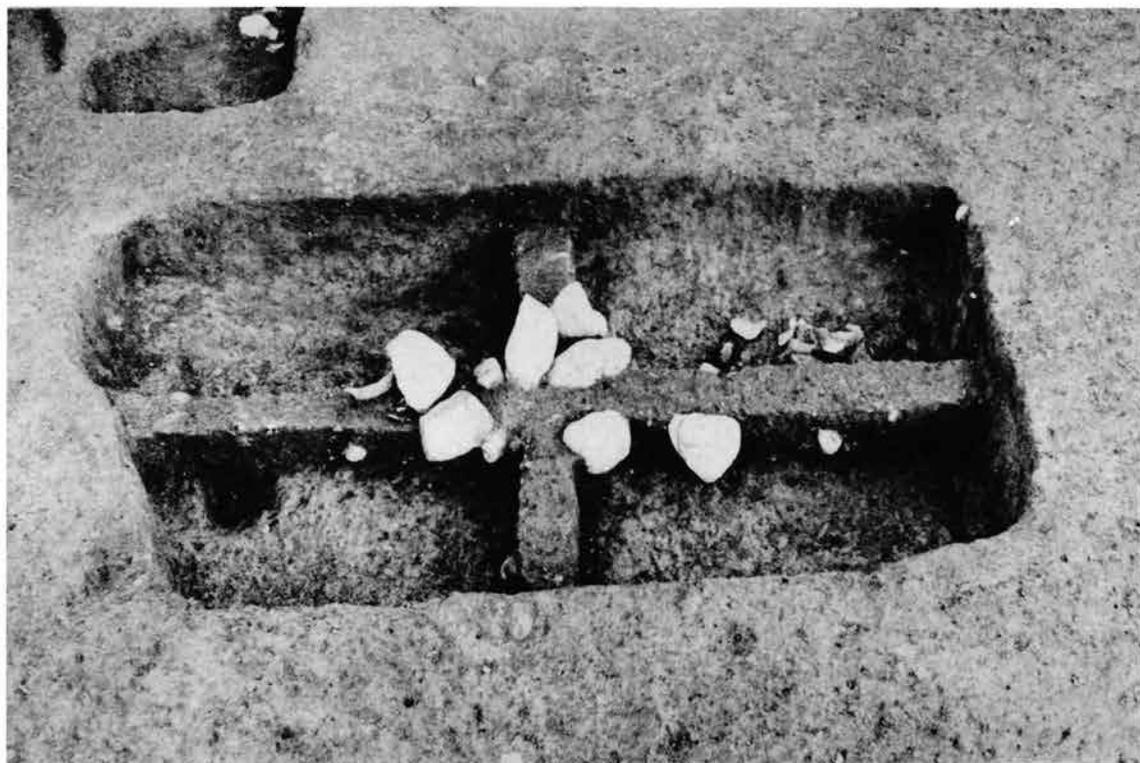
(2) 2号住居跡と彌生溝 (北東から)



(1) D地点弥生溝土層断面



(2) 同 溝南端部検出状況



(1) D地点弥生土壙（南から）



(2) 同上 完掘状況（南から）



(1) 調査地全景 (南から)



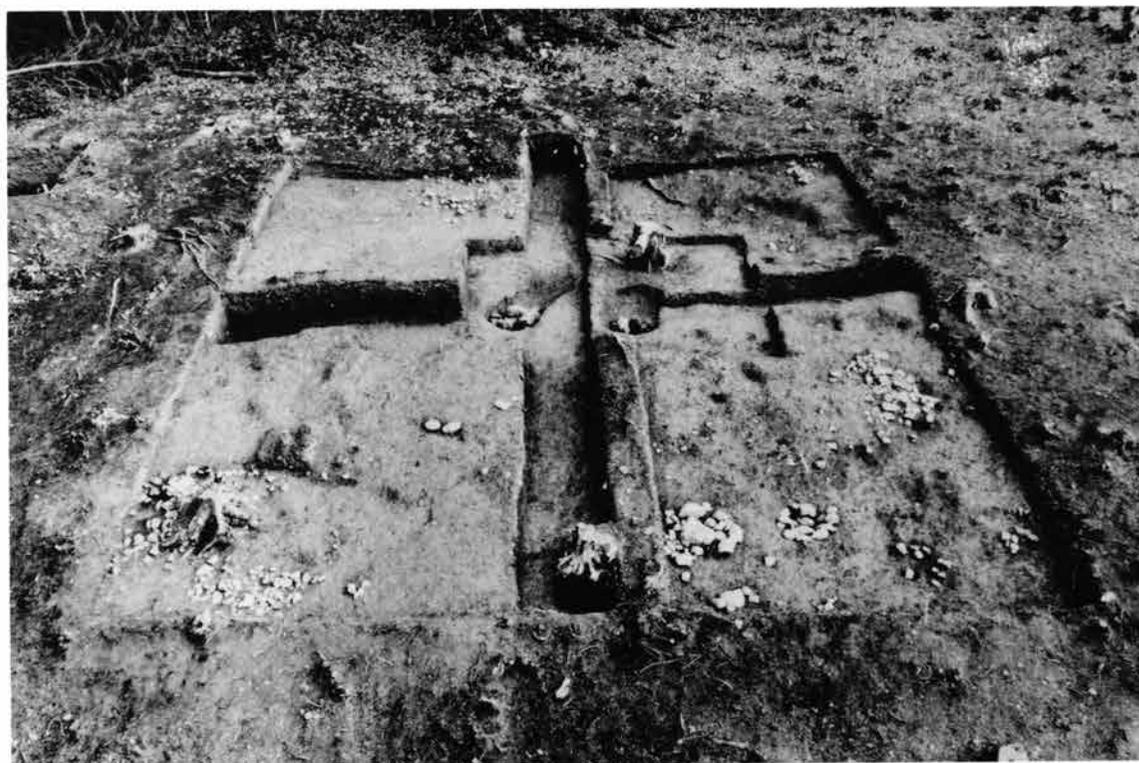
(2) 試掘調査の状況 (南西から)



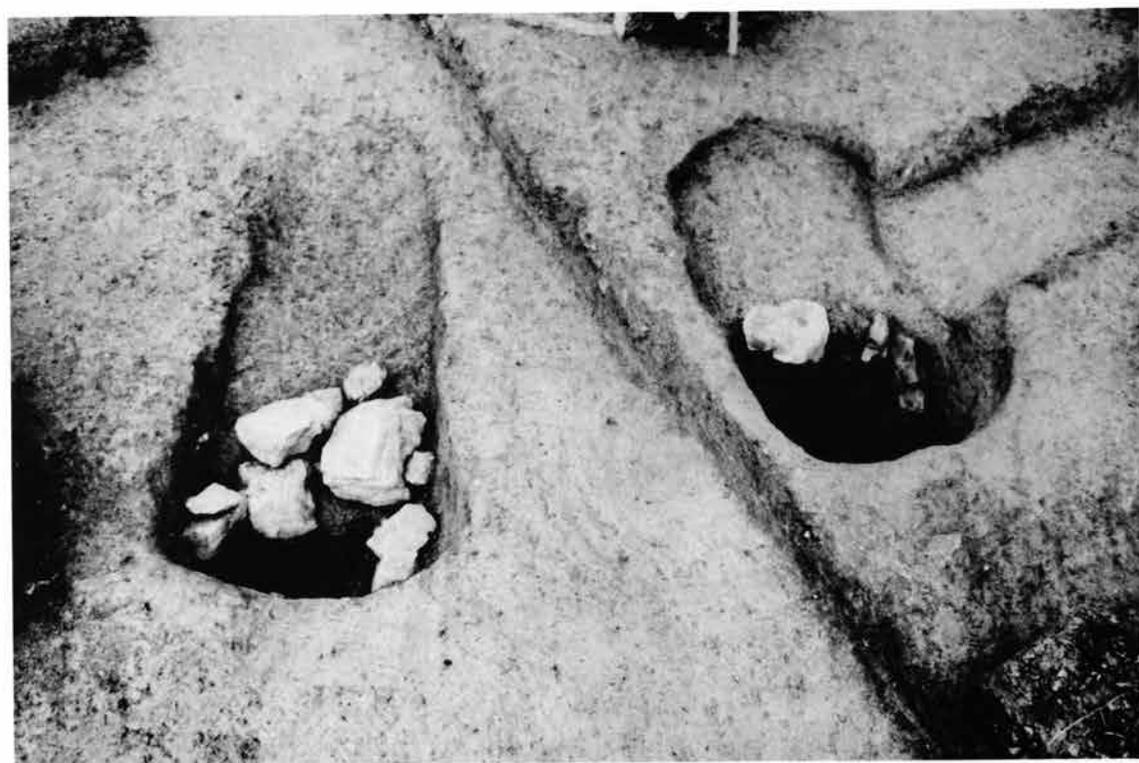
(1) 礎石建物跡全景（東から）



(2) 中世墳墓群（西から）



(1) 1号墓全景（西から）



(2) 同上 埋葬施設（西から）



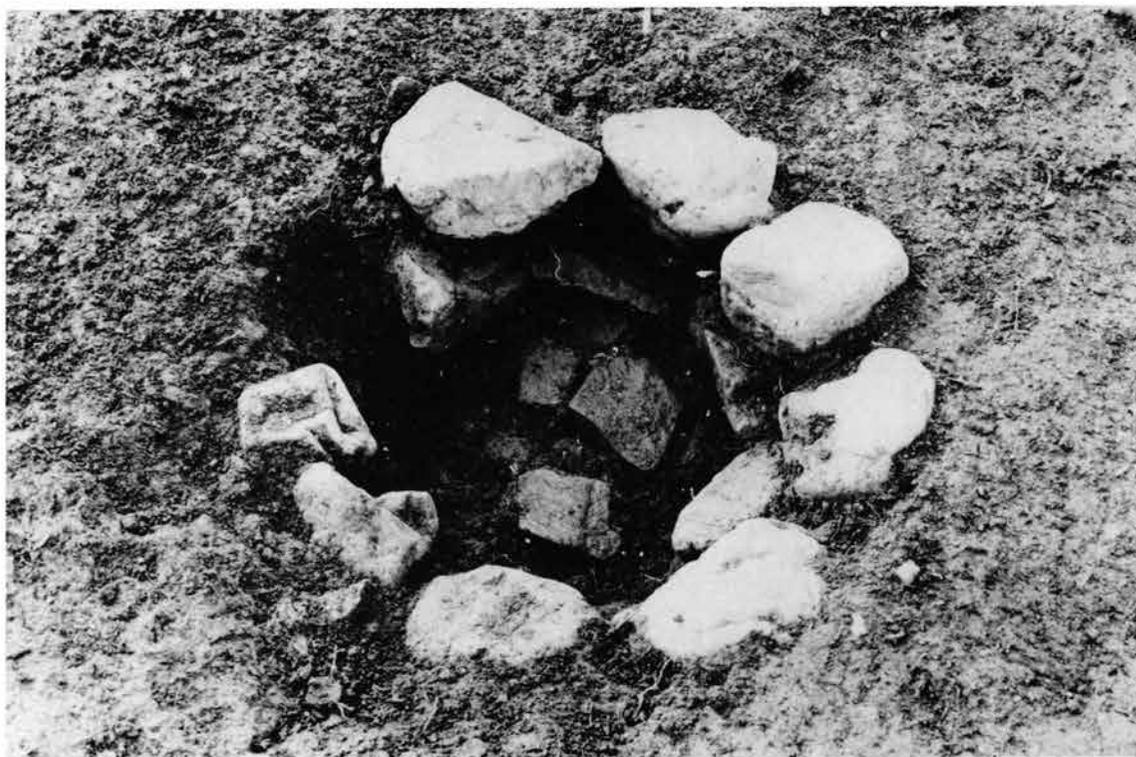
(2) 同 完掘状況 (西から)



(1) 1号墓北側土壌上面検出状況 (東から)



(1) 石組遺構検出状況（西から）



(2) 同上 石組内部（西から）



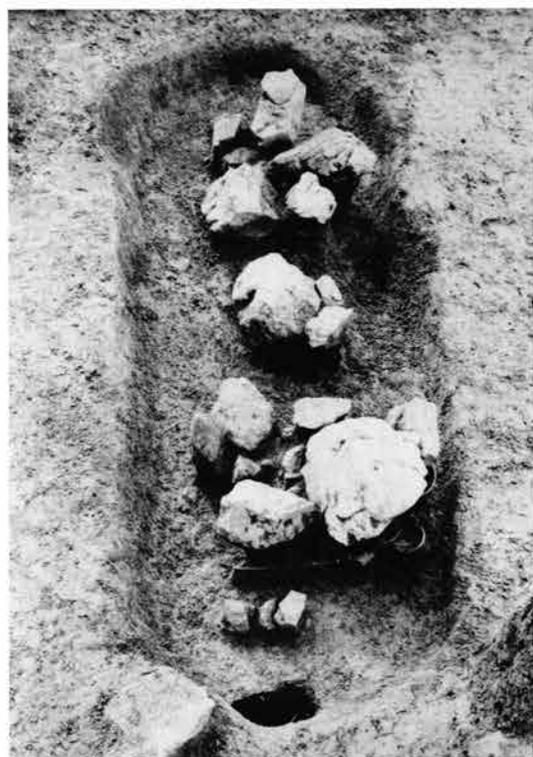
(1) 2号墓全景(東から)



(2) 同上 骨蔵器埋設状況(東から)



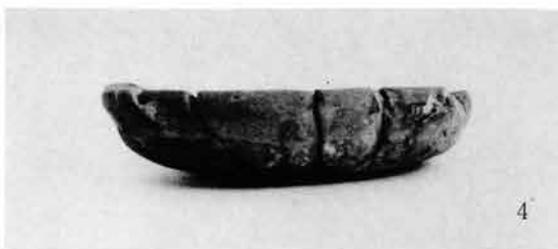
(1) 3号墓全景 (西から)



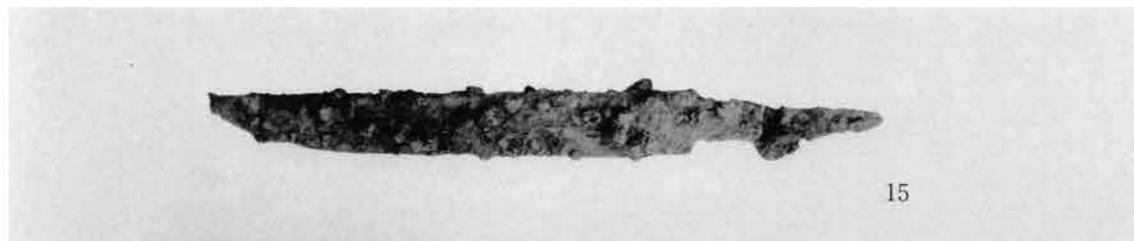
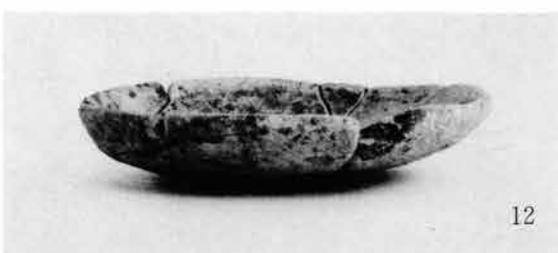
(2) 同上 埋葬土壙 (北から)



(3) 同左 完掘状況 (南から)



(1) 1号墓出土遺物



(2) 3号墓出土遺物



(1) 遺跡全景航空写真(東南方より)



(2) II区航空写真(東南方より)



(1) II区遺跡遠景(西方より)



(2) 狸谷17号墳(北東方より)



(1) 狸谷3号墳(南西方より)



(2) 狸谷17号墳鏡出土状況(北方より)



(3) 大道寺跡No.1遺物出土状況(北西方より)



(1) 大道寺跡A地区全景（東方より）



(2) 大道寺跡B地区全景（東方より）



(1) 大道寺跡3号墓 (北方より)



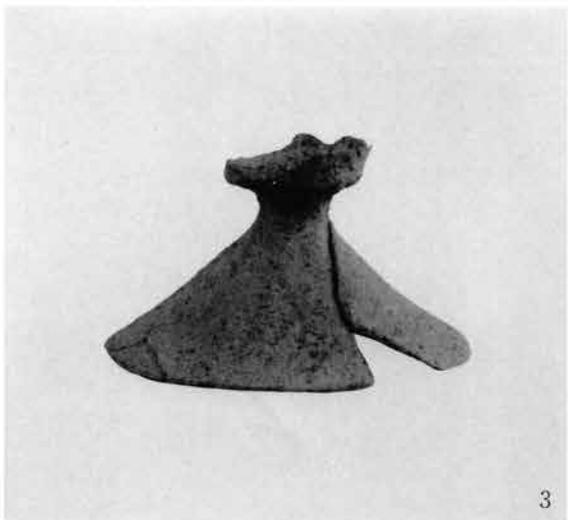
(2) 大道寺跡6号墓 (北西方より)



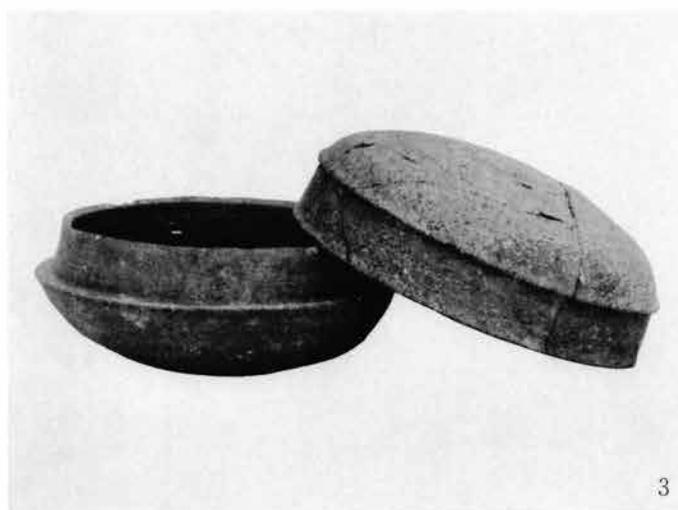
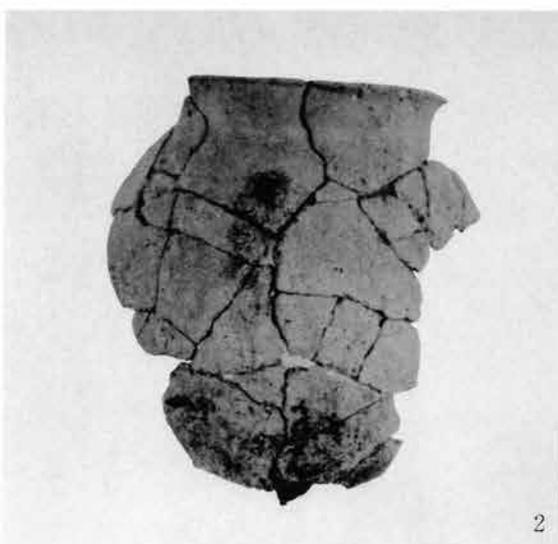
(1) 大道寺跡経塚全景 (北方より)



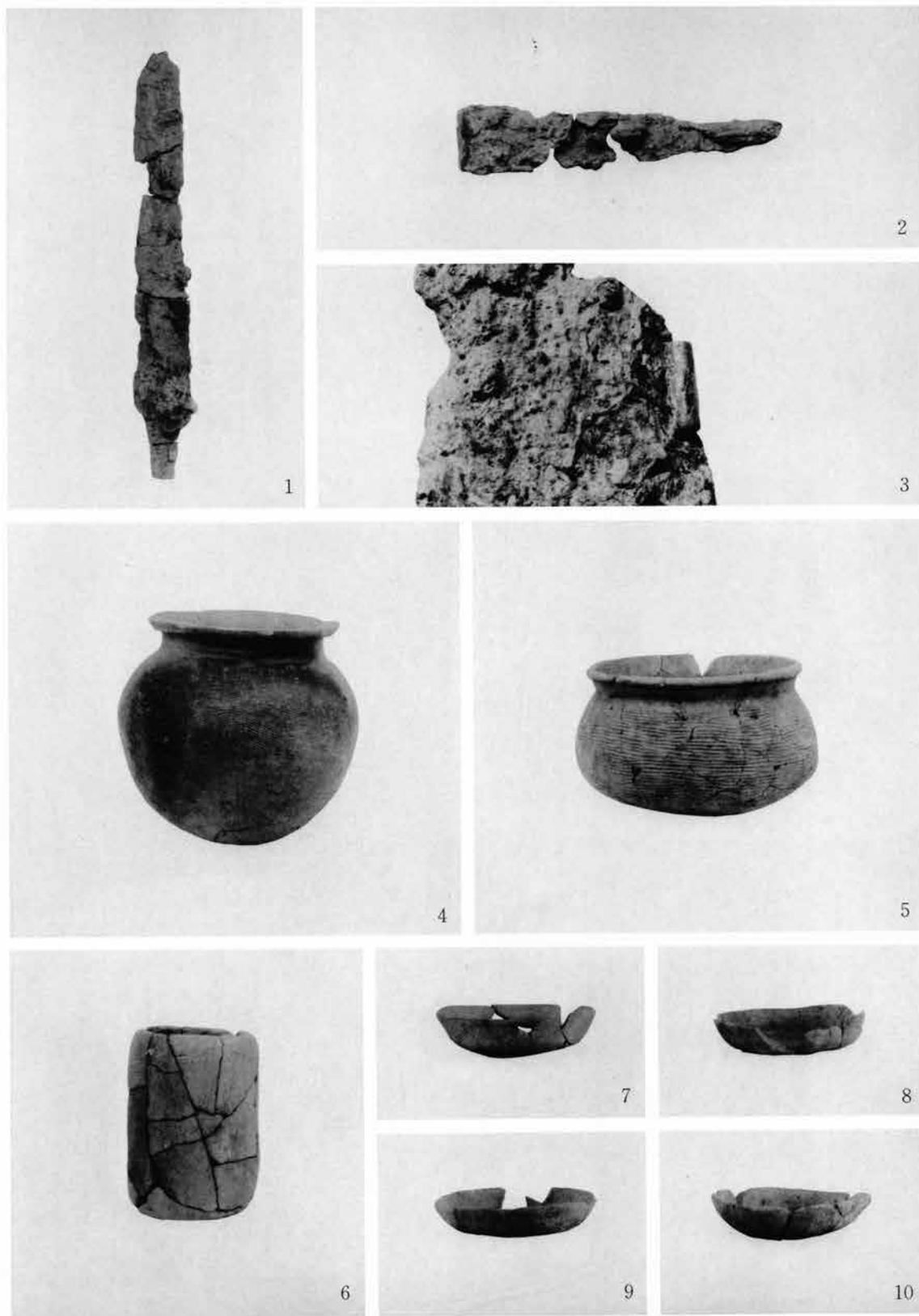
(2) 大道寺経塚経筒埋納状況 (北方より)



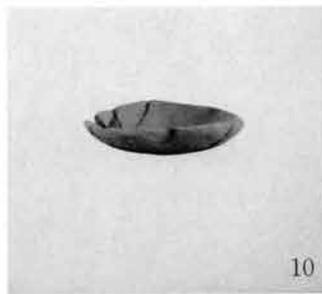
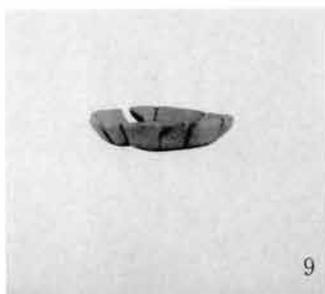
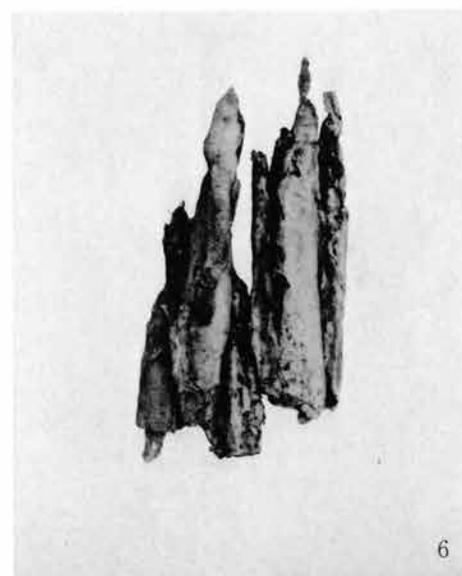
出土遺物(1) (1~5: 狸谷18号墳, 6: 狸谷17号墳)



出土遺物(2) (1: 狸谷3号墳, 2: 狸谷18号墳, 3・4: 大道寺跡, 5・6: 狸谷17号墳)



出土遺物(3) (1: 狸谷16号墳, 2・3: 狸谷18号墳, 4~10: 大道寺跡)



出土遺物(4)(大道寺跡経塚)

京都府遺跡調査概報 第1冊

昭和57年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075) 441-3155 (代)